博士学位申請論文

20 世紀初頭中国における幼稚園教育の成立とその特質に関する研究

―欧米キリスト教団体及び日本からの影響を中心に―

2023 年度提出

聶　晶晶

（早稲田大学大学院　教育学研究科博士後期課程　教育基礎学専攻）

目　　次

図・表一覧……V

序　章
1　ねらいと課題……1
2　先行研究と本研究の位置……3
3　本研究の研究課題と構成……6
4　本研究で用いる資料……9

第１章　中国の伝統的幼児観と幼児教育
第１節　中国の伝統的幼児観……11
１．儒教における子ども像……11
２．明・清家族制度における家を継承する男児……13
（１）勉強によって立身出世する子ども（上層階級の男児）
（２）労働力としての子ども（下層階級の男児）
３．儒教社会における女児……16
第２節　中国の蒙養教育……16
１．中国の伝統的な幼児教育としての蒙養教育……16
２．伝統的幼児教育の教育内容……17
（１）儒教社会における道徳教育
（２）知識教育
（３）詩礼教教育
３．幼児期の教育の行われた場と教育方法……24
４．女児への教育……26

第２章　清朝末期キリスト教宣教団体による幼児教育の創始
第１節　宣教師の中国における伝道・出版活動と中国認識……30
１．宣教師の伝道・出版活動……30
（１）宣教師の伝道活動
（２）宣教師の出版活動
２．宣教師の中国認識……34
（１）宗教としての中国の伝統社会に対する認識
（２）儒教社会においての幼児への認識
第２節　近代中国におけるキリスト教系学校の設立……37
１．全体と女子教育の概況　……37

（1）各時期のキリスト教系学校
（2）女子教育
2．幼児教育の芽生え……42
第3節　幼児教育に貢献した女性宣教師……44
1．女性宣教師の活動と中国への派遣理由……44
2．キリスト教女性宣教師訪中以前の学習歴……48
第4節　キリスト教宣教師によるフレーベル幼児教育思想の受容……50
1．幼稚園の保育内容について……51
2．フレーベルの遊びの理論について……54
3．幼稚園の創設目的について……57
4．幼稚園の教育方法と教師の資質について……60
5．フレーベルの神思想について……63

第3章　清朝末期における「日本型」幼稚園の成立
第1節　清末中国官員と実業家の日本での教育視察……71
1．清朝末期における日本モデルの教育改革……72
（1）清政府による教育改革
（2）資産階級維新派による教育改革
2.清末中国官員による日本での視察日記……76
（1）清末中国官員の日本視察
（2）東京の幼稚園における教育実態の記録
（3）関西の幼稚園の教育実態の記録
3．実業家張謇の視察日記……81
4.大阪愛珠幼稚園に関する記録……82
第2節　日本で幼児教育を学ぶ中国人留学生……85
1．20世紀初期における日本留学ブーム……85
2．実践女学校清国女子留学生部……86
（1）日本への女子留学
（2）実践女学校と中国の女子教育
（3）実践女学校清国女子留学生部における幼稚園保姆養成教育
3．清国女子留学生の中国幼児教育への影響……92
第3節　中国の幼稚園における日本人教習の活動とその影響……93
1．中国へ派遣された日本人教習……94
2．日本人教習の学習歴……97
第4節　中国におけるフレーベル幼児教育思想の導入と受け止め方……100
1．明治初期日本における幼稚園教育のフレーベル主義……100
（1）東京女子師範学校附属幼稚園におけるフレーベル教育法及び恩物の導入

（２）明治日本における幼稚園教育の発展と改革
２．中国でのフレーベルの幼児教育思想の受け止め方……103
第５節　幼児教育制度の発足……106
１．近代教育制度の一環として導入された幼稚園……107
２．「蒙養院及び家庭教育法章程」（1904 年）と日本の幼児教育制度の比較……108

第４章　20 世紀初頭中国の幼稚園の実態
第１節　キリスト教系幼稚園の実態……118
１．保育の長期的計画及び短期的計画……118
２．保育内容……122
（１）遊具・作業具による遊戯と作業
（２）運動遊戯
（３）自然との関わり
３．キリスト教系幼稚園の数と展開の過程……127
第２節　「日本型」幼稚園の実態……130
１．官立蒙養院の教育実践……130
２．地方民間（私立）幼稚園の教育実践……136
（１）天津厳修の厳氏蒙養院
（２）江蘇張謇の幼児教育機関
第３節　キリスト宣教師の見た中国の「日本型」幼稚園の特徴とその影響……140
１．宣教師の見た中国の「日本型」幼稚園の特徴……140
（１）保育形態と内容
（２）教科書
（３）園児の社会階層
２．キリスト教系幼稚園への影響……143

第５章　幼稚園教員養成機関の創設と普及
第１節　キリスト教系保育者養成機関……149
１．キリスト教保育者養成機関の開設……149
（１）概況
（２）教育目的
２．キリスト教保育者養成機関の実態……152
（１）入学資格と修業年限
（２）学費などの費用
（３）卒業生
３．キリスト教保育者養成機関の教育内容とその特徴……155
（１）蘇州幼稚園養成学校

（２）福州協和幼稚師範学校
（３）教育内容の特徴と女性宣教師らの専門的知見との関連
第 2 節　幼稚園協会のキリスト教系保育者養成に果たした役割……161
１．幼稚園協会の設立と保育者養成への取り組み……161
２．国際幼稚園連盟との連携……165
第 3 節　中国の保姆養成機関の創設……168
１．中国の伝統的女性観……168
２．「蒙養院及び家庭教育法章程」（1904 年）の女子教育に関する内容……170
３．「蒙養院及び家庭教育法章程」（1904 年）の保姆養成に関する内容……172
４．保姆養成機関の創設と実態……173
（１）官立保姆養成機関―幼稚園の中に附設された保育科
（２）民間保姆養成機関
第 4 節　中国の保姆養成制度の成立と養成機関の内容……177
１．中国における近代女子教育の成立……177
２．「女子師範学堂章程」（1907 年）の保姆養成に関する内容……178
３．女子師範学堂用教科書……185

終章……193

引用・参考文献一覧……206

20 世紀初頭中国における幼児教育史年表（1840 年～1918 年）……214

謝辞……217

図・表一覧

第 2 章

表 2-1　1850－1912 年福州における教会女学校……40
表 2-2　清末（民初）の幼稚園の運営と教員養成に関わった女性宣教師……45

第 3 章

表 3-1　洋務運動時期輸入された西洋学問に関する本（上位 6 位まで）……72
表 3-2　日本の幼児教育を紹介した中国官員の視察記録……76
表 3-3　東京の幼稚園での視察内容……78
表 3-4　愛珠幼稚園での視察内容……82
表 3-5　在東京女子学校清国留学生数(1907 年）……87
表 3-6　実践女学校師範速成科課程表（1905 年）……90
表 3-7　実践女学校工芸速成科課程表（1905 年）……90
表 3-8　女子高等師範学校の保姆練習科の学科課程（1898 年）……91
表 3-9　実践女学校における清国留学生の卒業生数……92
表 3-10　1909 年中国における日本人教習の分布状況（学校段階別）……94
表 3-11　清末期幼稚園教育に関係した日本人教習（1903～1910 年）……95
表 3-12　1878 年東京女子師範学校の保姆練習科の学科課程表（修業年限 1 年）……98
図 3-1　日本『幼稚園法二十遊嬉』（1879 年）……103
図 3-2　中国「幼稚園恩物図説」『教育世界』（1903 年）……104
表 3-13　日本学制に関する法規の中で中国語に訳されたもの……106
図 3-3　「奏定学堂章程」における学校系統図……107
表 3-14　「蒙養院及び家庭教育法章程」と「小学校令施行規則」の対比表…110

第 4 章

表 4-1　キリスト教系幼稚園保育の長期的計画……119
図 4-1　第 4 恩物によって作られたベッド……123
図 4-2　起床の歌の楽譜……123
図 4-3　第 4 恩物によって作れられる蜜蜂の巣箱……124
表 4-2　中国福建省における初期キリスト教幼稚園一覧……128
表 4-3　「湖南蒙養院教課説略」と「蒙養院及び家庭教育法章程」の保育内容についての比較……130
表 4-4　中国の官立幼稚園の保育項目……135
表 4-5　扶海垞家塾第一学年第一学期時間割……138
図 4-4　『最新国文教科書』（第二册）第三課……141

第 5 章

表 5-1　中国における初期キリスト教保育者養成機関一覧……149
表 5-2　キリスト教保育者養成機関の費用一覧……153
表 5-3　蘇州幼稚園養成学校卒業式のプログラム……156
図 5-1　蘇州幼稚園養成学校の卒業生の写真……158
表 5-4　蘇州幼稚園養成学校と福州協和幼稚師範学校の学科目の比較……160
表 5-5　国際幼稚園連盟と華中幼稚園協会の設立目的の対比……166
図 5-2　日本人教習と中国の子どもの写真……174
表5-6　女子師範学堂の学科課程表（1907年）……179
表5-7　「女子師範学堂章程」と「高等女学校令施行規則」の対比表……180
表5-8　『女子師範教育学』と『新編女子用教育学』の目次対比表……185

終章

表終1　キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園の対比表……204

序章

1　ねらいと課題

本研究は、20 世紀初頭中国における幼稚園教育の成立について、その背景と過程、制度的枠組み、さらには教育の実態の一端を中心にして総合的に究明するものである。その際、中国の幼児教育の近代化過程において、欧米キリスト教団体及び日本からの影響、さらには中国の伝統的幼児教育観の継承の側面を踏まえながら、中国における近代的幼稚園教育の成立とその特質を総合的に究明するものである。また、フレーベルの幼児教育思想について、一方ではキリスト教宣教師の理解、もう一方では日本からの受容、といった両者の受容内容についても着目する。合わせて保育者養成機関の成立についても考察する。

本研究の課題を提示する前提として、中国における近代幼児教育の始まりを概観しておきたい。1842 年に清朝はアヘン戦争に敗れ、イギリスと南京条約を結び、広州、福州、厦門、寧波、上海の五つの港が開港場に定められた。その頃より、欧米諸国のキリスト教宣教会は中国の開港された都市で宣教を始めた。宣教師はまず、貧しい家庭の子どもを受け入れ、幼児を対象とする慈善事業を始めたが、やがて教育機関としての幼稚園教育に力を入れるようになっていった。すなわち、布教目的でミッション系学校が続々と創設され、それと同時に附属や独立した形でキリスト教系幼稚園が開港地福州、厦門などに設けられたのであった。これは中国の幼児教育の黎明期とされている。

一方、中国における近代幼児教育の始まりは、このようなミッションスクールを通しての浸透のほか、日本の教育モデルの導入というルートがあった[1]。1894 年の日清戦争に敗北した清朝政府において、康有為ら変法（改革）派と張之洞ら一部の地方官僚は、日本の勝利の要因は明治政府が西洋近代教育やその制度を導入したことにあったと考えた。その中で、湖広総督[2]張之洞[3]は 1898 年に『勧学篇』を出版し、近代学制の導入、海外（特に日本）への留学生派遣を奨励している。また、張之洞と両江総督[4]劉坤一は 1901 年に、清政府に上奏し、「人材の早期育成」を訴え、「そのための近代教育制度の導入、科挙制度の改廃、西書の翻訳、日本への留学生派遣の奨励等を献策した」[5]とされている。清朝政府は、張之洞らの建議を基に、各省選抜による日本への留学の奨励政策を採用した[6]。

このようにして 1898 年から 1908 年にかけ、日本を視察する知識人が続出した。項文瑞の『遊日本学校筆記』のような視察報告書（『東遊日記』）が二十数編出版され、幼稚園を含めて日本の教育制度を紹介している。そして、その日本を視察した知識人の呉汝綸の視察結果を元に、1904 年に中国初の近代教育制度である「奏定学堂章程」が施行された。「章程」の中で幼児教育に関して規定したものが「蒙養院章程及家庭教育法章程」である。また、その 3 年後の 1907 年には、正式な女子教育制度に関する章程「女子師範学堂章程」が頒布された。この 2 つの章程は中国史上初めての公的な幼児教育制度を規定したもので、これにより中国の近代幼児教育が制度的に成立することとなった。

このような近代中国における幼児教育の成立期の歴史を踏まえ、本研究では中国における幼稚園の導入過程の解明から、清末中国の幼稚園政策の策定、各地のキリスト教系幼稚園及び「日本型」幼稚園とその教員養成機関の設立についての実証的な検討を通して、中国の幼稚園教育とその特質がどのようにして形成されたのかを明らかにすることを課題とする。以下に筆者の研究関心を 4 点にまとめる形で示す。

第一に、幼稚園が設立される以前の中国の伝統的幼児教育に着目したい。中国での近代幼稚園・幼児教育は、日本と欧米からの影響が大きかったが、それまでの幼児教育の伝統と深く関わり、伝統的幼児教育と融合しつつ、独自の内容を含んだものとして形成された。そこで、幼稚園が中国に導入される以前、儒教社会という中国（主に清朝期）における子ども観はどのようなものなのかを明らかにすることが必要となる。筆者は、この子ども観に基づいて清朝末期における子どもはどのような形態でどのような内容を学んでいたのか、幼児に対する教育の特徴を把握したいと考える。その際、階層別や男女の別にも着目したい。

第二に、欧米キリスト教団体の影響と日本からの影響はどのようなものであったのだろうか。そしてそれを通して、中国における幼稚園の創設の経緯とその教育理念を明らかにしたい。

前者、欧米からの影響については、中国本土においてキリスト教団体はどのような目的で、幼稚園を設立したのか。さらにはキリスト教団体の中で、女性宣教師らは中国の幼稚園の設立にどのような貢献を果たしたのだろうか。また、キリスト教と深い関係があるフレーベルの幼児教育思想の中国における受容を探りたい。

後者、すなわち日本からの影響としては、幼稚園が中国に導入される以前、中国官員及び実業家は日本で視察活動を行い、その結果が報告書にまとめられたことが確認できる。報告書では、日本の近代的幼稚園教育やその特徴が中国人の視察でどのように捉えられていたのだろうか。そして、日本で幼児教育を学ぶ中国人留学生たちはどのような保育内容・方法を学んだのか。さらに、中国に派遣された日本人の幼稚園教員はどのような幼児教育を中国の幼稚園にもたらしたのだろうか。同時に、日本経由の西洋幼児教育思想の導入と受け止め方も探りたい。

第三に、清末の幼稚園の保育内容・方法、すなわち幼児教育の実態、その特徴はどのような点にあったのだろうか。この点についても、キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園の共通点や相違点に着目したい。

前者の場合、当時のキリスト教系幼稚園ではどのような保育計画が立案されていたのだろうか。そして、保育内容について筆者の関心は、①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯、③自然との関わり、などにあり、その教育活動の特徴を把握したい。その際、フレーベルの幼児教育思想の影響に着目する。

一方、中国での「日本型」幼稚園を官立蒙養院と私立幼稚園の間に、保育内容の共通点や相違点はあったのだろうか。中国ではどのように、日本の幼稚園教育を取り入れていたのか

を把握したい。

第四に、保育者養成機関の実態の一端と特質を明らかにしたい。幼稚園の成立にともなって、保育者養成機関も漸増し、保育者は幼児教育の専門的な担い手となった。このようなことから、保育者の受けた教育内容、すなわち保育者が備えた専門性、技能を探ることにより、当時の幼稚園の教育内容・方法を推量することができ、中国近代幼稚園教育の実際的側面の一端を明らかにできると考える。そのため、保育者はどのような養成課程を学んでいたのか、当時の保育者養成機関のカリキュラムに注目する。

以上のように筆者の関心は、①中国の伝統的な幼児教育、②中国における幼稚園の創設の経緯とその理念についての欧米からの影響と日本からの影響、③清末の幼稚園の実態、④保育者養成機関の実態にあり、20 世紀初頭における中国の近代幼稚園の成立について、数量・実態・機関、幼児教育思想・内容・方法、保姆養成を中心に解明することにある。その際、欧米キリスト教団体、日本の中国における近代幼稚園教育への影響、さらには儒教に基づく伝統的幼児教育との融合にも着目する。そして、終章では考察結果全体をまとめるとともに、プロテスタント宣教師によるキリスト教系幼稚園の成立の流れと、清末政府と中国人資産階級（実業家）による「日本型」幼稚園の成立の流れを比較する。なお、本研究では日本の形式的・画一的な恩物中心主義の幼稚園をモデルにした中国の幼稚園を、「日本型」幼稚園と定義する。これらを踏まえ、中国の近代幼稚園教育の成立について、総合的な究明を目指すことが本研究のテーマである。

2　先行研究と本研究の位置

本研究に関連する先行研究を、①中国の近代教育と外国から受けた影響に関する研究、②中国の幼稚園の実態に関する研究、③中国の保育者養成史に関する研究に分類して、その到達点と課題を検討する。

（1）中国の近代教育と外国から受けた影響に関する研究

まず、20 世紀初頭近代中国の幼児教育が欧米キリスト教からの影響についての研究として、佐藤尚子の『米中教育交流史研究序説－中国ミッションスクールの研究－』(龍渓書舎、1990 年）があげられる。佐藤は、欧米列強の中国進出が進む清朝末期から民国期までを考察の対象時期に設定し、中国の近代教育におけるキリスト教学校の発展過程を明らかにした。しかし、佐藤は 1920 年代の中国におけるナショナリズム運動とキリスト教系高等学校との葛藤を中心に考察しており、キリスト教系幼稚園については論究していない。

そのほか、斎藤秋男は「アジア諸国の子どもと幼児教育」[7]の中で、中国の幼稚園の歴史について言及している。そこでは、20世紀初めの中国幼児教育について、富裕層の子弟のための私立幼稚園が設置されていたことなどが紹介されている。しかし、斎藤の研究はどのような理念に基づいて幼稚園が作られたのかについては言及していない。

中国の幼稚園創設時の幼児教育思想の受容についての蓄積はまだ少ない。唯一あげられ

る研究は孫邦華の「『萬國公報』對西方近代教育理論的介紹」[8]である。孫は『万国公報』[9]の中でのペスタロッチとフレーベルに関する二本の記事を取り上げ、記事の内容を分析している。しかし、孫はフレーベルの幼児教育思想が中国の幼稚園の成立に与えた影響については明らかにしていない。

日本から受けた影響については、主に清末の日本への教育視察、中国人留学史、日本人教習の派遣という観点に基づいて研究が行われている。清末の日本への教育視察についての研究として汪婉の『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院、1998 年）があげられる。同書では、中国人が行った日本の教育視察について、歴史的な展開過程を考察している。しかし、汪の研究は義務教育制度の実施を対象とするものであり、幼児教育についての詳細な論究には及んでいない。

また、清末中国人の日本留学について、さねとう・けいしゅうは『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960 年）の中で、中国の女子学生が 1901 年から日本の実践女学校に留学したことに言及している。さらに、日本が清末の中国に派遣した教員に関する研究については、主に汪向栄『清国お雇い日本人』（朝日新聞社、1991 年）、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990 年）の二冊の著書があげられる。そこでは、中国の幼稚園へ派遣された日本人教員が、中国の幼稚園の成立に大きな役割を果たしたことを論じている。しかし、これらの著書は彼女らが学習したカリキュラムなどについてはほぼ言及していない。

以上のように、欧米キリスト教団体と日本からの影響、特に中国における幼稚園の創設への影響、そして、フレーベルの幼児教育思想といった理念の導入についての考察は未開拓である。そのため、本研究では、中国本土においてキリスト教団体はどのような目的で幼稚園を設立したのか、そして日本から受けた影響について、主に清末の日本への教育視察、中国人留学史、日本人教員の派遣という観点に基づいて、幼稚園の創設経緯を解明することを試みたい。特に、フレーベルの幼児教育思想の中国における受容とその導入過程についても、重要なテーマとしたい。

（2）中国の幼児教育史に関する研究

まず、中国で行われた研究として、乔衛平と程培杰の『中国古代幼児教育史』（安徽教育出版社、1989 年）、何晓夏編『簡明中国学前教育』（北京師範大学出版社、1990 年）、易慧清の『中国近現代学前教育史』（東北師範大学出版社、1994 年）、杜成憲と王倫信の『中国幼儿教育史』（上海教育出版社、1998 年）、熊秉真の『童年憶往－中国孩子的歴史』（麦田出版、2000 年）、唐淑と钟昭华編の『中国学前教育史』（人民教育出版社、2015 年）があげられる。しかし、これらの著作は、古代から現代まで広く年代を追って幼児教育史を記しており、中国の幼稚園の成立期（20 世紀初頭）には重点が置かれていない。そのため、成立期については概況しか記されていない。そして、佐藤尚子・大林正昭編の『日中比較教育史』（春風社、2002 年）では、1900 年から 1930 年までの中国の就学前教育の理念や内容についても記述されているが、同書は当時の日中教育の比較を中心にしていることから、中国の

幼児教育については通史的な内容しか述べていない。このように、中国の幼児教育史に関する研究は通史的なものが多く存在するが、20 世紀初頭、幼稚園の成立期に焦点をあてる研究は少ない。

しかし、蓄積が薄い中、幼稚園の成立期を含む代表的な研究として 3 点あげることができる。まず、阿部洋は『世界の幼児教育１　アジア』（日本らいぶらり、1983 年）において、制度内容を中心に幼稚園の行政に関して論述している。しかし、幼稚園の教育内容については詳しく言及されていない。

次に、清末から中華民国期までの 20 世紀前半の幼稚園教育の歴史について詳細に分析した、楊玉珍の博士論文「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」[10]がある。楊は幼稚園教育の導入の経緯とその後の低迷と不振の状態、それを打開し克服する試みと運動を経て、次第に幼稚園教育が普及し整備されていく状況を明らかにしている。しかし、この研究は中央政府の活動（例えば、初めての官立幼稚園「湖北幼稚園」）を中心に考察している。そのため、民間幼稚園やキリスト教系幼稚園の実態は未だ明らかにされていない。

そして、3 点目の潘静の論文「近代中国におけるキリスト教宣教会の幼児教育活動―上海地区を中心に―」[11]は、キリスト教宣教会が 1869 年から 1929 年まで上海地域で行っていた幼児教育を取り上げ、その発展過程を創始、展開、衰退期に時期区分した上で、それぞれの時期における幼稚園の実態と中国社会に及ぼした影響を究明した。潘の研究の中で展開期と呼ばれる時期は本研究が扱う時期と重なるが、潘は上海地区を中心とした分析に限定された感がある。そのため、ほかの地域の幼稚園の実態が把握できていない。

以上のような先行研究の状況からみて、上海地域以外の地方、及びキリスト教系の幼稚園実態の考察は不十分である。本研究では、政府、民間幼稚園、及びキリスト教系の幼稚園の実態を全体的に捉えることにしたい。

（３）中国の保育者養成史に関する先行研究

中国の保育者養成史に関する先行研究としては、何京玉の「清朝末期における幼稚園教員養成制度―『奏定学堂章程』及び『奏定女子師範学堂章程』の検討を中心に―」[12]と、前述した楊玉珍の博士論文があげられる。何は 1904 年の「奏定学堂章程」及び 1907 年の「奏定女子師範学堂章程」を対象にし、制度面から中国の保育者養成史を解明している。しかし、何は制度面に焦点を当てており、保育者養成の実態面までは言及していない。

また、楊は当時の南満洲鉄道のまとめた資料『支那ニ於ケル外国人経営ノ教育施設』（1916 年）と日本政府外務省による『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』（1929 年）を用い、当時のキリスト教宣教団体により創立された保育者養成機関は「少なくとも 4 ケ所」あって、これらの保育者養成機関が「幼稚園の創立に一定の役割を果たした」[13]と結論づけている。しかし、養成機関の数の把握については不十分である。加えて、楊は「これらのキリスト教宣教団体により創立された保姆養成機関について、その教育の実態、及び当時の幼稚園教育

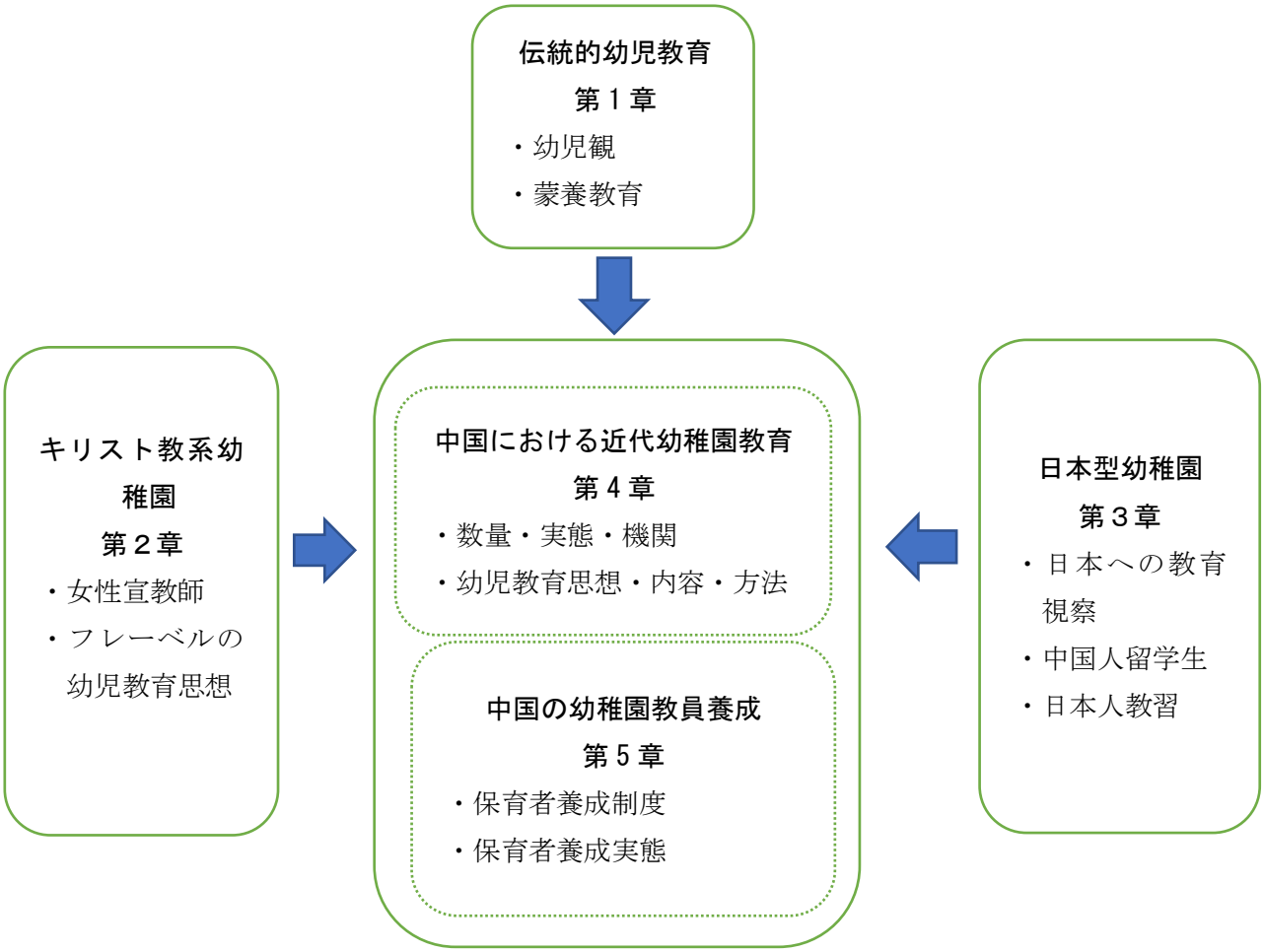
界にどのような影響を与えたかについて考察することは、史料の限界により現在のところ困難である」[14]としており、養成校の実態面については未解明の状況にある。

以上のように、実態的側面の考察はほとんど行われていないことが明らかであり、政策・制度面だけではなく、保育者養成校の実態面に着目した研究が必要である。

3　本研究の研究課題と構成

筆者の研究関心の概要は記したが、先行研究の分析結果を踏まえて、改めて本研究の検討課題をやや詳細に記してみたい。それぞれの背景や研究の意義、さらには分析課題を記す。それは中国の幼稚園の成立史について、①中国の伝統的な幼児教育、②中国における幼稚園の創設の経緯とその理念についての欧米キリスト教からの影響、日本からの影響、③清末の幼稚園の実態、④保育者養成機関の実態などを分析し、これらを全体的に捉え、成立した幼稚園の全体像とその特質を究明することにある。以下に、4 項目を中心として、それぞれの背景、分析課題を示したい。なお、本研究の課題と構成を図としてまとめると、以下のようになる。

【本研究の課題と構成】



（1）中国の伝統的な幼児教育

20 世紀初頭中国に幼児教育制度は成立した。中国にはそれまで幼児のための教育施設は存在していなかったため、外国からの影響の下で幼稚園が導入された。幼稚園が導入される際、それまでの幼児教育の伝統と深く関わり、伝統的幼児教育と融合しつつ、独自の教育を作りあげていったのである。中国史上最初の幼児教育に関する法規、「蒙養院及び家庭教育法章程」には伝統的幼児教育の内容が残っている。また、中国の最初の公立幼児教育機関「湖北幼稚園」の教育内容にも儒教的内容が反映していた。このため、中国における幼児教育の近代化及び外国の影響を考察する前提として、伝統的な幼児教育、特に清代の幼児教育の特徴を把握する必要がある。

清朝末期における中国の幼児教育の性格的特徴を明らかにするため、以下の検討課題を設定する。第一に、幼稚園が中国に導入される前、儒教社会という中国（主に清朝期）における子ども観を明確にする。第二に、幼稚園が導入される前に、子どもがどのような教育を受けていたのかを検討する。その際、上層・下層階級の別、さらには男女の別に分けて考察する。

以上の課題の究明については、「中国の伝統的幼児観と幼児教育」と題して第 1 章で行う。

（２）中国における幼稚園の創設の経緯とその理念：欧米キリスト教の影響、日本の影響

フレーベルが 1840 年にドイツで幼稚園を創設し、その後、幼稚園は欧米諸国に広がり、1856 年にはアメリカで幼稚園が開園された。アメリカを経由し、1876 年に日本で最初の官立幼稚園（東京女子師範学校付属幼稚園）が設けられた。一方、中国では 1880 年代に、キリスト教団体によって幼稚園が作られ、そして、1904 年に最初の官立幼稚園である湖北幼稚園が日本の影響を受けて設立された。このように幼稚園は世界に広まっていったが、受け入れた国の事情によって、それぞれ独自の変容を遂げた。

本研究では、キリスト教の影響と日本の影響に分けて、キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園の、それぞれの創設経緯とその理念を明らかにする。

まず、キリスト教系幼稚園の導入について、以下の検討課題を設定する。第一に、キリスト教系幼稚園の設立背景として宣教師の中国における伝道・出版活動、そして宣教師たちの中国認識について明らかにする。第二に、その認識に基づき、幼稚園を含むキリスト教系学校の設立経緯にも着目する。第三に、キリスト教系幼稚園が設立される際、女性宣教師が果たした役割を解明する。

次に、「日本型」幼稚園の導入について、以下の検討課題を設定する。第一に、清朝末期の中国官員と実業家による日本での視察記録を分析し、彼らが日本でどのような幼児教育を視察し、それをどのように認識したのかを明らかにする。第二に、清朝末期中国の女子留学生に注目し、彼女たちが日本で受けた幼稚園保姆養成教育の実態と中国の幼児教育への影響を検討する。第三に、中国の幼稚園に派遣された日本人女性教員の活動の実態とその影

響を確認する。

さらに、フレーベル思想の受容についても、キリスト教の影響と日本の影響に分けて解明する。

以上の課題の究明については、第 2 章「清朝末期キリスト教宣教団体による幼児教育の創始」と、第 3 章「清朝末期における『日本型』幼稚園の成立」で行う。

（３）清末の幼稚園の実態

本研究では、清末の幼稚園の実態について、キリスト教系幼稚園の実態と「日本型」幼稚園の実態を分けて考察し、以下の検討課題を設定する。第一に、各地に設置されたキリスト教系幼稚園の事例をもとに、保育計画・保育内容・方法等を分析することによって、キリスト教系幼稚園の性格を考察することとしたい。特に保育内容について、①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯（歌を伴うもの、歌なしの競争、ボール遊び)、③自然との関わり、作業のひとつとしての栽培活動、を取り上げて、その保育活動の特徴を明らかにしたい。第二に、もう 1 種類の幼稚園、中国での「日本型」幼稚園の特徴を究明する。その際、官立幼稚園と私立幼稚園を取り上げ、それぞれの設立趣旨や教育内容を分析する。しかし、中国人にとって幼稚園教育は外国の文化であり、それを理解し、中国の土壌に根付かせるのは容易なことではなかった。幼稚園が導入された際、中国の伝統的な幼児教育との相克、結合の在り方についても検討したい。第三に、キリスト教宣教師が書いた中国の「日本型」幼稚園の実態についての記録を分析する。この分析によって、中国の幼稚園の特徴をキリスト教宣教師の角度から明らかにする。また、この特徴がキリスト教系幼稚園へ与えた影響についても考察する。

以上の課題の究明については、「20 世紀初頭中国の幼稚園の実態」と題して第 4 章で行う。

（４）保育者養成機関

中国における保育者養成については、幼稚園の導入と共に開始されている。また、幼稚園と同様に、前述したキリスト教系保育者養成機関と「日本型」の保育者養成機関の 2 種類が存在していたのであった。

中国での近代保育者養成教育の発展においては、民国中期まではキリスト教の浸透ルートが主流であり、「主にキリスト教会によって作られた幼稚師範学校と師範学校に付設された幼稚師範科」[15]が保育者養成を担っていた。換言すれば、当時はキリスト教系機関が中国の保育者養成教育を主導していたのである。本研究では以下の検討課題を設定する。第一に、キリスト教布教の先進地域であった福建省と江蘇省での保育者養成に着目し、その実態の一側面について、教育内容を中心にその特徴を明らかにする。特に、保育者に必要とされる資質能力、およびその獲得のために設定されたカリキュラムなどに着目する。第二に、（キリスト教）幼稚園協会の設立の経緯や活動内容について分析し、保育者養成に対して協会が

どのような役割を果たしたかについて考察する。

また、第三に、日本の浸透ルートについて、中国清朝政府によって制定された保育者養成に関する法規を分析することを通して、日本からの影響を明らかにする。特に 1904 年に出された「蒙養院章程及家庭教育法章程」と 1907 年に発布された「女子師範学堂章程」を扱う。第四に、それらの章程に基づき、保姆養成機関はどのような教育が展開されたのかについても着目する。

以上の課題の究明については、「幼稚園教員養成機関の創設と普及」と題して第 5 章で行う。

さらに終章では、主に上記 4 つの課題に即して研究全体を総括することにしたい。

以上のように、本研究は、20 世紀初頭中国における幼稚園教育の成立について、その背景と過程、制度的枠組み、さらには教育の実態の一端を中心にして総合的に究明するものであるが、幼稚園で「遊び」を重視するか、「学習」を重視するかといった幼稚園教育の在り方をめぐる現代的課題の検討の際に 1 つの歴史的素材を提供することになると考える。

4　本研究で用いる資料

最後に、本研究で用いる主な資料について記しておきたい。本研究は、中国の幼稚園の成立について、国の行政レベルだけではなく、地方の各幼稚園の実態などの検討に及ぶことになる。そして、キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園両方の成立まで考察したため、英語、日本語、中国語の 3 言語の資料について調査、翻訳を行った。

本研究で用いる資料を列挙すると、キリスト教系幼稚園について、西洋の宣教師たちによって発行された雑誌①*Educational Review*（中国語名：『教育季報』）、②*The Chinese Recorder and Missionary Journal*（中国語名：『教務雑誌』）、③*The Chinese Globe Magazine*（中国語名：『万国公報』）、そして日本人によって調査された④『支那ニ於ケル外国人経営ノ教育施設』と『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』があげられる。そして、「日本型」幼稚園について、⑤王寶平編『晩清中国人日本考察記集成 教育考察記』、⑥中国学前教育史を網羅した『中国学前教育資料選』、⑦地方教育史料、福建省の『文史資料選編　第五巻』、⑧中国の行政法令を収録した『近代中国教育史資料・清末編』などである。なお、①*Educational Review* と②*The Chinese Recorder and Missionary Journal* はデータ化され、Gale primary sources に所蔵されている。

注

[1] 一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」『国立教育研究所研究集録』25、1992 年、辻本雅史 監修、湯川嘉津美・荒川智 編著『論集現代日本の教育史 第 3 巻 幼児教育・障害児教育』所収、日本図書センター、2013

年、97 頁。
[2] 湖広は湖北と湖南を指し、湖広総督は清朝の九大地方大臣の一人であり、これらの地域の軍事・民政を統括した。
[3] 張之洞、清末の政治家。洋務派官僚として重要な役割を果たした。
[4] 両江は江蘇省、安徽省、江西省を指し、両江総督はこれらの地域の軍政・民政を統括した。
[5] 清水稔「中国人留学生と日本の近代」『佛教大学総合研究所紀要』(1)、1995 年、123-124 頁。
[6] 光緒 27 年 8 月丁酉<1901 年 9 月 16 日>の条。『大清徳宗景(光緒)皇帝実録』華文書局、1970 年、再版。
[7] 斎藤秋男「アジア諸国の子どもと幼児教育」梅根悟監修、世界教育史研究会編集『世界教育史大系 22 幼児教育史Ⅱ』講談社、1975 年、272-304 頁。
[8] 孫邦華「『萬國公報』對西方近代教育理論的介紹」『澳門理工學報』総第 13 期第 7 巻第 1 期、103-110 頁。
[9] 原名は『教会新報』である。1868 年 9 月 5 日にアメリカ宣教師ヤング・アレン（林楽知）によって上海で創刊された。最初は宗教出版物であったが、1874 年 9 月 5 日に『万国公報』と改名され、西洋を中心とする内容を含む総合刊行物となった。
[10] 楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」筑波大学博士学位論文、1992 年。
[11] 潘静「近代中国におけるキリスト教宣教会の幼児教育活動―上海地区を中心に―」『日本の教育史学』第 48 集、2005 年、72-82 頁。
[12] 何京玉「清朝末期における幼稚園教員養成制度―『奏定学堂章程』及び『奏定女子師範学堂章程』の検討を中心に―」『教育学研究紀要』51(1)、 中国四国教育学会、2005、42-47 頁。
[13] 楊玉珍、前掲、151 頁。
[14] 同上。
[15] 何京玉「中華民国期における保育者養成制度」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』第 55 号、2006 年、193 頁。

第１章　中国の伝統的幼児観と幼児教育

20 世紀初頭の清朝末期における幼児教育制度は、欧米キリスト教と日本の影響の下に成立した。中国にはそれまで幼児教育施設は存在しなかったため、幼稚園を設けようとした際、外国の幼稚園から多くのことを学んだ。しかし、実際、単に外国の幼児教育の在り方を直輸入したわけではなく、それまでの幼児教育の伝統と深く関わり、伝統的幼児教育と融合しつつ、独自の教育を作りあげていった。例えば、中国史上最初の幼児教育に関する法規「蒙養院及び家庭教育法章程」には、伝統的幼児教育の内容が残っている。また、中国の最初の公立幼児教育機関「湖北幼稚園」の教育内容にも儒教的内容が反映されていた。以上のような事実を踏まえると、中国における幼児教育の近代化及び外国からの影響を考察する前提として、伝統的な幼児教育、特に清代の幼児教育の特徴を把握する必要がある。さらには、それが近代幼児教育にいかなる影響を及ぼしたのかも明らかにしたい。

本章の検討課題は、第一に、幼稚園が中国に導入される以前、儒教社会という中国（主に清朝期）における子ども観はどのようなものなのかを明らかにすることにある。第二に、この子ども観に基づいて当時の子どもはどのような幼児教育を受けていたのかを検討する。以上の検討によって、清朝末期における中国の幼児教育の特徴を把握できると考える。

第１節　中国の伝統的幼児観

１．儒教における祖先を祭る子ども

近代以前の中国は儒教を国教としていたとされている[1]。清朝も含め歴代の王朝は社会の規範を儒教に求め、特に漢の時代に儒教が国教化されて以降、その権威は強固となった[2]。この点に関連して加地伸行は、「最も中国的な宗教として儒教がある」[3]と評している。

儒教文化において子どもに最も求められたものは「孝」である。『論語』[4]の中では、「弟子、入りては則（すなわ）ち孝、出ては則ち悌」[5]と述べられている。このように、子どもは家庭にあっては父母に孝養を尽くし、世間に出ては長上に従順であることが、まず何よりも重んじられた。すなわち、全玟楽が指摘しているように、子どもは「主に『孝』といった縦の人倫を重んじる人間関係のなかに位置づけられた存在」[6]であった。

では、儒教はなぜ「孝」を強調するのであろうか。それは、「孝」が儒教を宗教として成立させる根拠の１つだからである。この点について、龔書森は「儒家は祖先崇拝を、倫理の主要項目たる『孝』の延長として、宗教化を助長した」[7]と説明している。加地伸行も同様に、「儒教は祖先崇拝を根本とする。＜中略＝筆者＞宗教とは、死の不安に対して安心させる説明を与えうるものと理解できる。そして、その人に対して最も説得力ある説明をなし得たとき、その人へ入信の道を開く。同じく、その民族に対して最も説得力ある説明をなし得たとき、その民族に共通する幅広い国民的な宗教となる」[8]と指摘している。以上のように、

儒教の「孝」の概念、あるいはその延長としての「祖先崇拝」が、死の不安を和らげるという点で儒教を宗教たらしめている、と説明されているのである。ではなぜ、「孝」が死の不安を和らげるのであろうか。

以下、儒教においての「孝」について説明する。儒教の祖、孔子は、「(親の) 生けるには之に事 (つか) うるに礼を以てし、死せるときは之を葬るに礼を以てし、(その後の命日に) 之を祭るに礼を以てすべし」[9]という。孔子の言葉に従えば、子は親が生きている間だけではなく、死後も埋葬と奉祀によって親孝行を継続しなければならない。換言すれば、親の霊を祭るのも「孝」である、と主張しているのである。また、龔によれば、「祖先崇拝は、祖先の永生であると同時に、それはまた『孝』の継続でもある。それは『倫理化した宗教』であり、『宗教化した倫理』である」とされている[10]。

古代中国では、精神を司る「魂」と肉体を司る「魄」が存在し、現世で生きる人間の姿は両者の一致により顕現したものだという考えがある。儒教経典の 1 つである儀礼の書物『礼記』[11]のなかに、「魂気は天に戻り、形魄は地に戻る」[12]とある。肉体の消滅とともに魂は天上に魄は地下に分離していくが、「魂と魄を呼びもどして一致させるならば、再びこの世に生きてもどることができるのである」[13]とされている。人が亡くなるとすぐに、「復」即ち「たまよばい」(「招魂」) という儀礼を行う。この儀礼について、余英時の「中国人の死生観―儒教の伝統を中心に―」には以下のように記されている[14]。

> たまよばいを行う者「復者」が、亡くなった人の衣服を持って屋根の棟にのぼる。通常は親族がたまよばいをおこなう。復者はその服を振って、「ああ、(亡くなった人の名前) よ、戻ってくるのだ」と声をあげて、亡くなった人に向けてその名前をよびかける。三度、よびかけを繰り返した後で、復者は服を投げ下ろし、地上にいる人がこれを受け取って、遺体にかける。その後で、復者は屋根からおりる。「復」の儀礼が目的を達しえなくなったときになってはじめて、その人の死亡が宣言され、その後、寝台の上の遺体は埋葬用の布で覆われる。

先に亡くなった親族 (祖先) の中で、最も親しいのは自分の親である。そこで、「礼」に基づいて葬儀を行い、かつ親を祭ることが「孝」の概念の中に取り入れられたのである。加地伸行によれば、「これは『招魂』の理論化であり、祖先崇拝の理論化である。この理論で行けば、自分がこの世に再び帰ってくることができるには、まず、自分の死後、自分の魂・魄を呼びもどしてくれる招魂を行う子孫が存在することである」[15]とされている。そのため、子孫を生み、その子孫が祖先を祭り、再生の儀を行うこと、その行為全体が「孝」となる。こうして、このような孝が行われることによって、親は死後の安心を得ることができ、子は自己の死の恐怖や不安を超越し、解消してくれる存在となる。

そして、子の肉体は自分の血を分け与えたものであるから、子どもの存在は自己の存在の証し、さらには父母や祖先の存在の証しともなる。『礼記』の中で、曾子の言葉によると、

「身は父母の遺体なり。父母の遺体を行うに、敢えて敬せざらんや」[16]となる。以上のように、儒教においての子ども、もしくは子孫は「父母の遺体」（父母が残した身体）[17]であるように、この世にいない親の存続の証と認識され、非常に大切な存在だと考えられる。

2. 明・清家族制度における家を継承する男児

儒教は基本的な人間関係を君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友に分け、これを五倫とよび、この関係を正しくすることこそが修養の目的であり、政治の中心課題であるとした。そして、五倫のうちでも重要な君臣・父子・夫婦の開係を三綱(君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱)とし、国君・父親・夫の絶対的権威を保証した。この三綱五倫思想は人々の生活や意識に大きな影響を及ぼした。加地は「封建体制の清朝では、家父長が一切の実権をにぎることになる。清代の家族制度では、家族のもの一人一人が生活規範としての礼を守ると共に、家父長は召使いをも含んだ家族全員の行動に対して、絶対的支配権をもつ存在として君臨した」[18]と述べている。つまり、清代において、儒教の三綱五倫思想は、家父長が権力を独占する家族制度を成立させる大きな根拠となったのである。

では、家族制度を中心とする儒教文化では子どもをどのように扱っていたのか。一見真理子は「儒教社会においての『子』とは、一般的に息子だけを指すのである。娘は将来嫁となって他家に入るため、一家の子どもの数に入らなかった。中国は男系相続制社会だったので、男性は家を相続でき、いつも重視される」[19]と述べている。「家」とは、固有の「家名」「家産」「家業」をもち、それを代々受け継いでいくことを目的とした組織である。家を永遠に維持するためには、子どもの存在が不可欠である。このため、中国では「多子多福」ということわざがある。家に繁栄をもたらす可能性のある男児が大切にされ、その数が多いほど幸福であるとされた。子どもの最大の役目の１つは、家を継ぎ、家系を永続させることにあった。

しかし、上層階級と下層階級の子どもは、それぞれ別の家業を継がなければならないため、全く異なった役目を担っていた。ここでは上層階級の男児、下層階級の男児に分け、それぞれの子ども観を分析する。

（1）学ぶことによって立身出世する子ども（上層階級の男児）

中国では科挙という人材選抜制度があった。科挙に合格すると役人となり、経済的に富裕な地位を得て、一族の名声もあげることができる。

子ども史研究者熊秉真は、親の子どもへの期待、そして子どもの役割について、「明・清の家庭が子どもに期待したのは、個人の興味の追求や自らの才能の開発ではなく、また社会や国家全体の福祉の増進ということでもなく、家族の繁栄というような限定され成就あった。子どもたちは、学問や出世によって家門の地位と繁栄を図ることに人生を費やしていた」[20]と述べている。

こうした子どもへの期待がよく表れた成語として「光宗耀祖（先祖の名を揚げる）」という表現がある。そのため、この成語を子どもの名前に反映させる例もあった。以下、清の官吏、歴史学者汪輝祖という人物の自伝から引用する[21]。

> 乾隆元年〔1736〕丙辰。七歳。祖父君が淇県の官舎に来られた。そして余に（輝祖）と命名された。輝祖の生まれたとき祖父君は齢すでに五十九、はじめて孫を抱いて大変に喜び、幼名を垃圾〔ごみ〕と呼ぶことにした。ごみが賤にして多くしかも農作に役立つことにあやかったものである。五歳のとき師に就くと、名をかえて鰲〔うみがめ〕と呼ばれた。今ここに至って、余がよく字義を理解し読書の素質があるのを見て、今の〔輝祖という〕名を決めてくれたのである。

つまり、祖父は、汪輝祖が文字を読み、言葉の意味を理解できることを見て、将来有望な人になれると思い、それまでの「ゴミ」という幼名を捨て、「輝祖」という新しい名前をつけることにした。「輝祖」は「光宗耀祖（先祖の名を揚げる）」という意味であり、読み書きのできる子どもは、一族の期待を負わなければならないという。さらに、汪輝祖の父親は、「何のために勉強するのか」と聞いてくると、汪は「役人になるため」と答えた。子ども自身も何のために勉強するのかを、もうすでに認識している。科挙への合格は一族の栄枯盛衰のカギになる。そのため、子どもは早い段階から勉学に励むことを余儀なくされた。

このように、子どもは小さい頃から両親や家族から大きな期待を受けて、科挙試験のための教育を強いられた。当時は、7、8 歳で読み書きを教え、2,000 字程度読めるようになってから本を読むのが一般的な基準であった。しかし、明清時代、上層階級の子弟は 6 歳で正式な教育を受けることが珍しくなく、中には 4、5 歳で学校に入れられ、教師のもとで勉強する者もいた[22]。例えば、清末の詩人王独清（1898～1940）は 4 歳を迎えたばかりで勉強し始めた。王独清は自伝『長安城中の少年　清末封建家庭に生れて』の中で、自分の家庭を「わたくしの家庭はこのように封建の高い土塀でわたくしをとり囲んでいた」[23]と回顧している。上級階層に生まれ、父親から教育を受け、父親の教育観を「早期教育を主張していたのであろう」[24]と評していた。自分が受けた教育について、王独清は「父はわたくしの教育について、いわゆる『経学』方面を偏重した」[25]と述べている。「経学」とは、四書五経（『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書と『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五経）のことである。この四書五経はいずれも人間生活の規範として仰ぐべき儒学の経典で、そして科挙の試験範囲内のものであった。つまり、前述したように、子どもは早い時期から科挙のために勉強していた。実際、清代の科挙試験には、10 歳以下の子どもを対象とした「童子科」[26]も設けられる。

この中で、特に成績が優秀な子どもたちは、「神童」と呼ばれ、将来役人になれる特別な存在とされ、年長者や教師からの偏愛や称賛を得ることが多かった。しかし、「時に並

はずれた神童が出現して一世を風靡することもあったが、その多くは結局大成するに至らなかったという。彼らもまた子どもの発達課題を顧慮せず、詩文暗記の才能ばかりを求めた旧教育の犠牲者であった」[27]という評価もあった。

以上のように、上層階級の男児は幼い頃から教育をほどこされ、科挙試験という官吏登用試験に参加させられた。これは清代家族制度における学ぶことによって立身出世を目指す子ども像である。

（２）労働力としての子ども（下層階級の男児）

一部の上層階級の子どもを除いて、ほとんどの中国の子どもたちは、幼い頃から家族の生産活動に参加し、働いたり家事を手伝ったりしていた。中国は伝統的な農業社会で、農民が大多数を占めていた。前近代の農業は一定面積の土地に多量の労働力を投入して、土地を高度に利用する農業経営であって、生産量が労働力の数と直結している。したがって、農作業をする人が多ければ生産にとって有利となる。下層階級の子どもは家を継承する存在であるとともに、労働力としてもみなされていた。

下層階級の男児についてみると、上層階級の子どもと違って、早くから労働の担い手となって一家の生計を支えることが重要であった。木山徹哉によれば「当時の子どもの仕事としては朝の掃除や作物の見廻り、拾糞や拾草などが課せられるほか、雇農として働きに出て家計を助けることもあった」[28]という。また、「男の人は農作業をするのが普通であるので、庶民の男児出生願望にも根強いものがあった。男児は小さい頃から、畑に出て牛の世話をしたり草を刈ったりして大人の仕事の補助を始める」[29]という記載もあった。

このように、農村における下層階級の男児は基本的に労働力として育てられ、家族と一緒に働き、読書や識字とは無縁であった。一見真理子は「勉強する子ども像、文字文化に触れる子ども像は、上層の男児の専有物であった」[30]と指摘している。当然、下層階級の子どもは幼稚園のような幼児教育機関で教育を受ける機会もなかった。しかし、中国には「士農工商」という概念があり、当時の民衆は学校で教育されていなくても、「士は四民の首であること」を意識しているので、士（学者や官吏）への憧れをもっていたため、「村民は余力があれば子弟を私塾に入門させたというように、農民が『士』となることを私塾教育に期待していた」[31]とされている。このように、一部の余力のある下層階級も子どもを入学させ、科挙を受けて出世させるという願望をもっていた。その原因について、胡学亮は「これは、庶民の中に抜き難い富貴への欲望があり、この欲望が裏返しにされて科挙の『宗教的』な肯定となったと推定される。実際に、『官吏』となることは庶民にとっても永久に見果てぬ夢であった」[32]と記している。そのため、下層階級の子どもも私塾といった学校で教育を受けることがあった。こうした学校の種類と教育内容については次節で分析する。

３．儒教社会における女児

伝統的儒教社会では男尊女卑の思想は根強いため、子ども観を考察する際、男児と女児を分けて分析しなければならない。次に、女児について検討するが、同じく上層階級と下層階級分けて分析する。

上層階級の女児は、纏足の慣習によって家の内に閉じ込もり、自由がない生活をしていた。『女訓』『女戒』などの女訓書に基づき、儒教の「三従」の教えがほどこされる。「三従」とは、結婚前には父に、結婚後は夫に、夫の死後は子に従うということである。また、「才能がない女は徳がある」という言葉があるように、一般的に女児は文字を教えられなかった。この点について一見真理子は「身体と頭脳を使うことからは最も無縁な子どもたちが彼女らである」[33]と述べている。通常、女児は知識世界から隔絶されていたと言えよう。

最後に、下層階級の女児について検討する。子どもの中で最も悲惨なのが下層の女児である。一見真理子によれば、「貧困のなかで労働を担うことは無論、売買され、状況次第で口減らしのために、間引きされることも広くみられた事実であった」[34]という。伝統的な中国社会では、貧しい家庭がきわめて多く、娘を「もの」として売ることが金銭を得る手段の1つでもあった。売られた女児は富裕層の家で下女として使役させられる。残酷なことに、女児を出産後、親が嬰児を窒息死や溺死させるという習俗も存在していた。このように、下層階級の女児は「人」として扱われていなかった。

以上のように、儒教社会の封建中国において、上層階級の男児、下層階級の男児、上層階級の女児、下層階級の女児の 4 類型の子どものうち、上層階級の男児と一部の下層階級の男児だけが学校教育を受けていた。それ以外の子どもたちは基本家事に従事したり、「親の所有物」として使われ、学校に通う機会がなかった。こうした当時の実態を踏まえて、学校教育を中心に、当時の中国の子どもが受けた教育について分析する。

第 2 節　中国の蒙養教育

１．中国の伝統的な幼児教育としての蒙養教育

清末以前の中国には幼児の発達に合わせて考案された特別な教育機関、つまり幼稚園に相当するものはなかった。子どもは主に家庭で教育をうけていた。そのため、当時中国の「幼児教育」の主な形態は家庭教育であった。しかし、家庭教育が主流である中で、「蒙学」と呼ばれる私立教育機関（塾）があった。そこで当時の「幼児教育」が行われていた。このように、家庭教育と私立教育機関（塾）教育は当時の幼児教育の 2 つの形態である。この 2 形態は互いに影響し合いながら、交錯していた。例えば、ほとんど家庭で教育を受けていた子どもが、時々「冬学」[35]という学校に行って教育を受けることがある。また、教育内容や教

材の面でも両者は影響し合い、学校で使われる教材の多くは家庭教育でも広く使われていた。このような古代中国の特色のある伝統的な幼児教育は「蒙養教育」と名付けられた[36]。

「蒙養」は小さい子どもに対する初期の啓蒙教育を意味する。「蒙養」という言葉が最初に記されたのは、『易経・蒙卦』の中の「蒙以養正、聖功也」[37]とされている。これは、「童蒙のときからその本有の正しい心を養い育てるのは、童蒙をして将来聖人に達せしむべき仕方である」[38]という意味である。つまり、蒙養教育は子どもを小さい時から、正しく教育することである。この点について、『中国教育史研究・宋元分卷』の中では「蒙養教育とは、7、8 歳から 15、16 歳までの子どもの教育を指すが、4、5 歳、5、6 歳の子どもの教育を指すこともある。古代中国では、初等教育の基本的な理論的基礎と指導方針は『蒙以養正』であるため、初等教育は『蒙養』教育とも呼ばれた。つまり、子どもが知的に目覚める時期に適切な教育を行うべきである」[39]という記述がある。

また、何暁夏によると、蒙養教育の具体的な目的と課題は大きく 3 つに分類することができる。以下、その要点を記す[40]。

> 1 つ目は、道徳的な資質を養い、完成させることで、将来の人生の基礎を築くことである。「徳が正しければ、行いが正しく、聖人の基礎は徳育からであり、将来の修身、治国、平天下もここからである」という。
> 2 つ目は、教養の基礎を固め、政治、経済、歴史、文学、道徳、生活儀礼などの基礎知識と仕事の初歩的技術を身につけ、将来の生活に備えることである。
> 3 つ目は、「保養性真（性質の真の維持）」である。この「性質の真の維持」は、孟子の性善説に基づいた教育の目的論である。つまり、子どもは善の本能をもち、学ばずに知るという「良知」と、学ばずにできるという「良能」をもって生まれてくると考えられる。蒙養教育の目的は、この生来の善を保ち、外の物質的欲望に汚されないようにすることである。もちろん、この善は、子どもの自然で無邪気な性質とも考えられ、この自然な性質を守ることも教育の課題である。

つまり、道徳的な資質を養う、教養の基礎を固める、子どもの性質を守るということが蒙養教育の目的であり、特に道徳と教養に関する目的は、それぞれ前述の祖先を祭る子ども像と、勉学によって立身出世する子ども像と対応する。以上の目的を実現するために、蒙養教育は道徳教育、知識教育、詩礼楽教育が実施されていた。以下、その具体的内容について分析する。

２．伝統的幼児教育の教育内容

前節で述べたように、子ども（男児）は①先祖を祭る存在と、②家を継承する存在とみなされ、期待されてきた。そして、蒙養教育の目的は道徳的な資質を養う、教養の基礎を固める、子どもの性質を守るということである。この期待と目的のもと、幼児期から道徳教育、

知識教育、詩礼楽教育が施された。以下、この三つの教育について分析する。

（１）儒教社会における道徳教育

儒教は当時社会の規範であったため、儒教における教育目標は、五倫に示された秩序を保つ、人間関係のあり方を身につけた従順な子を育てることにあった。儒教の礼教主義は、児童少年向きの儒教入門書として広く読まれた朱熹の『小学』と彼が幼児のために著したテキスト『童蒙須知』の中によく表れている。なお、『小学』や『童蒙須知』は南宋に出版された本であったが、清代に至っても読まれていた。以下、両書を中心に道徳教育の内容を分析する。

加地伸行は「『小学』は家訓書や道徳教育の例としての故事挿話集などの系統の初等教科書の集大成であり、しかも体系化し、それを四書・五経の学習につないでいるところに、初等教科書として画期的な意義を有する」[41]と『小学』を評価している。前節で分析した祖先を祭るという役目に基づいて、道徳教育の中でも「孝」が強調された。『小学』では親に対する「孝」と祖先に対する「孝」の両方について記載されている。

親に対する「孝」について、同書の「温公居家雑儀」の中で、以下のように記されている[42]。

> 司馬温公曰く、凡そ諸々の卑幼は事大小となく、専行することを得る毌かれ、必ず家長に咨稟せよ、と。凡そ子、父母の命を受くれば、必ず籍に記しこれを佩び、時に省みて速やかにこれを行ひ、事畢らば則ち返命せよ。若し父母の命を以て非となし、直ちに己の志を行はば、執る所皆是なりと雖も、猶ほ不順の子為り、況んや未だ必ずしも是ならざるをや、と。

親への「孝」は、父母の言うことに従うということを意味する。もし父母の要求に逆らうことがあれば、「不順の子」とみなされ、父母に従順でない子、不孝な子と批判される。このように、道徳教育の目的は、親に対する「孝」を行う従順な子を育てることにある。

また、祖先に対する「孝」は以下のように述べられる[43]。

> 家に必ず廟あり、廟に必ず主あり、月朔には必ず新を薦む。時祭は仲月を用ふ。冬至に始祖を祭り、立春に先祖を祭り、季秋に禰を祭る。凡そ死に事ふるの礼は、当に生に奉ずる者よりも厚かるべし。人家能く此等の事数件を存し得ば、幼者と雖も漸く礼儀を知らしむべし。

この家は大家族、宗族の可能性がある。中国の「家廟」は宗族において祖先を祀る施設を指している。家の廟に必ず先祖の位牌を安置し、毎月１日必ず新鮮な供物を用意する。冬至の時には始祖を、立春の時には先祖を、季秋の時には親を祭るなど、事細かな作法や礼式が

設定されている[44]。また、「生に奉ずる者よりも厚かるべし」というように、いま生きている親に対する「孝」よりも手厚く奉祀することが求められた。このように、祖先を祭る役割を担う子ども像に基づいて、先祖への「孝」を尽くすことが子どもに要求された。つまり、幼児期の教育は「孝」を中心とした道徳教育であった。

さらに、朱熹は『小学』だけでなく、より分かりやすく、幼児のためのテキスト『童蒙須知』を公刊した。『童蒙須知』は宋以降広く使われる幼児教育のマニュアルになった。その冒頭には当書の内容を示している[45]。

> 子どもの啓蒙の学習は、「衣服冠履〔衣服、帽子、靴〕」から始まり、「言語歩趨〔言い方や歩き方〕」に及び、次に「灑掃涓潔〔掃除や衛生〕」へ、そうして「読書写文字〔読み書き〕」に至るまで、知るべき雑多な事柄がある。今はそれを 1 つずつ挙げて、「『童蒙須知』いうタイトルにした。身を修め、心を治め、親族に仕え、他人と接すること、さらに万物の道理については、参考にすべき聖人の訓戒があり、はっきりと参考にできるが、徐々に順序よく理解することができるので、ここでは繰り返さない。

このように、子どもたちは、きちんとした服装、適切な言葉遣い、正しい歩き方、掃除や片付けから学び、その後初めて読み書きができるようになる。これは、識字や読書活動よりも、生活上の規律を育む教育が最優先される、当時の幼児教育のあり方を反映したものである。

そのうえ、幼児教育において使用されていたほかの教科書も「礼」と関係している。例えば、『論小学』の中では「子どもが五、六歳の時、礼経の中の『曲礼』、『幼儀』など子どもに関する「礼」の部分を使い、三字、五字の押韻がある簡単な文章を作って子どもに教える」[46]と書かれている。

しかし、以上の『小学』『童蒙須知』『論小学』などの古典は上層階級の子どもの読む本であって、庶民の子どもが読んでいたわけではない。例えば『童蒙須知』については、加地伸行は「日常の行動について細かい点にわたって注意を与えているが、読書人階層の幼児を対象としたものであって、一般家庭におけるしつけより、ずっと厳格なものとなっている」[47]と指摘している。

村塾に通った庶民の子どもは、より通俗化した『三字経』を読むことになっていた。しかし、『三字経』の内容は「あまりにも定型的な教訓ばかりであって、原始儒家たちが考えた宗教的孝、宗教的儒教からはほど遠く、倫理的な孝、倫理的な儒教の教科書」[48]となっていた。そもそも、『三字経』は識字教科書として使われたため、その内容は前述の儒教的古典と比べると、「倫理的」、あるいは通俗的なものになるのは当然であろう。次の（2）知識教育という項目で、『三字経』を含めた知識教育について論述する。

以上の道徳教育、所謂「礼」に関わる教育は、入「塾」の式典に最もよく表れていると思われる。私塾は当時中国の代表的な教育機関であり、第 3 項で詳しく検討する。後に「中国

の幼稚園の父」となった陳鶴琴は自伝の中で、入学時の光景を詳しく記録したので、ここで陳の自伝を要約して引用する[49]。

光緒二十五年（1899 年）正月十六日、私は入学した。塾では、守るべき儀式や儀礼があった。

（一）菩薩への奉納：学校に行く前に、まず学生を守ってくれる文昌帝という菩薩にお供え物をする。

（二）学校へ行く

1.書館に行く。次兄が果物お菓子 1 箱、線香 3 本、赤いろうそく 2 本を持ち、一緒に歩いて横街の星泉先生の書館に行った。

2.孔子への拝礼。孔子は最高の先生であり、最も神聖な先生と呼ばれているので、私たちはまず孔子を拝まなければならなかった。まず、兄は果物お菓子箱を置き、ろうそくに火をつけて燭台に挿し香炉に線香を立てた。孔子に向かって、両ひざをついて拝礼した。事前に家で習ったので、ひざまずきは間違えなかった。両ひざをついて拝礼する方法は、まず、直立して両手を合わせ、次に布団にひざまずき、また立ち上がって、再びひざまずく。これを「四跪四拝」という。

3.師匠への拝礼。孔子をお参りしたら、次に師匠にお参りする。孔子への拝礼のように 4 回もひざまづく必要はなく、ひざまづいたまま 4 回続けてお辞儀すればいい。

4.クラスメートに敬意を払う。これからはお互いに助け合う関係になるから、クラス中の生徒にもお辞儀をする。

5.師匠の奥さんへの拝礼。声をかけ、お辞儀をした。

6.お菓子を分ける。まず 3 分の 1 を先生の奥さんと先輩に残し、残りのお菓子は当日入学した生徒たちに 1 個ずつ配った。生徒たちは皆、大喜びで食べていた。私もお菓子をいただいた。

（三）先祖供養：学校から帰ると、先祖を供養しなければならなかった。

（四）先生を招いて食事をする：金持ちの家は先生を招待し、近所の人や友人を誘って同行させる。このように、学校教育は子どもの人生において最も重要なイベントのひとつであり、人生において非常に興味深く、記憶に残る出来事だったのである。

このように、入学の日に、儀式と儀礼があり、家では、菩薩への奉納と先祖への供養をしなければならない。学校では、孔子、師匠、師匠の奥さん、クラスメート全員を敬わなければならない。これらの儀礼は子どもの道徳を培うために定められていた。当時、道徳教育がいかに重視されていたかがことがわかる。

（２）知識教育

知識教育は基本、識字教育から始まる。清朝の教育学者唐彪は『父師善誘法』においては

「子どもが三、四歳になると、話すことができ、勉強することもできる。このときに、『千字文』を書いた板を使って漢字を教える。毎日十字、あるいは五字を教えたほうがいい。（文字が多く分かれば、奨励を出す。）そして、文字を使って文章をつくる。賢い子なら、百日で『千字文』の中の文字が全部読める。『三字経』などの本を加え、一年で一、二千字が読めるはず。その後、塾に入ることができる」[50]と記されている。このように、子どもは 3、4 歳の時から、毎日 5、10 文字を学ぶことになり、その際使われる識字教科書は『千字文』と『三字経』であった。実際、当時頻用された教科書は『三字経』『百家姓』『千字文』であった。これらは「三、百、千」と呼ばれ、「蒙学の始まり」[51]と位置付けられている。以下、時代順にこれらの 3 書を取り上げ、加地伸行の『世界子どもの歴史９　中国』を参考にして、知識教育の内容を検討する。

『千字文』は、子どもたちに漢字を教えるときの手引きとして使われる漢詩集である。4 字で一句、全 250 句で構成された。そのうち、韻を踏んだり、1000 の文字が重複しないような工夫などが施されて編纂された[52]。「天地玄黄，宇宙洪荒」で始まり、「謂語助者，焉哉乎也」で終わる。『千字文』の内容は天文、地理、歴史、修身、農業、儀式、園芸、食物、生活などあらゆる面を紹介している。さまざまな知識や教訓、韻とリズムは子どもが暗唱するのに適していることから、数千年にわたり子どもの教育のための教科書として使われた[53]。特に、千字文の第二部では、人間修養の基準や原理、すなわち「修身」に焦点を当てている。儒教の基本的概念の孝について、「恭惟鞠养、岂敢毁伤〔敬いながらも育て、あえて壊さない〕」と記されている。つまり親に孝行し、親から受け継いだ体を大切にしなければならない。その内容は、文字を教える知育教育だけではなく、同時に道徳教育をも反映したものとなっている。

次に、『百家姓』について見ると、同書は中国の代表的な漢姓を記載する作品である。姓の順番は人口の数ではなく、政治的な地位の高さを基準にしている。また、4 字を 1 句として偶数句末で韻を踏んでいる。前述したように、中国は家族、宗族の意識が強く、父系血縁を重んじる。例えば、漢民族には「同姓不婚、異姓不養」の習慣があり、夫婦が同じ姓の場合は結婚できず、逆に養子を迎える場合は同じ姓の人に限定しなければならないとされている[54]。『百家姓』は、この習慣のために作られたものではないが、「姓」の重要さを子どもにも認識させるため、識字教科書として使用されてきた。

最後に、『三字経』は同じく初心者向けの伝統的な中国語学習書である。文字通り 3 文字で 1 句とし、そして偶数句の最後に韻を踏んでいる。子どもたちは「三字文」を暗唱し、言葉や理屈を学んでいた。その内容は、学問の大切さ、儒教の基本的な徳目、経典の概説、一般常識、中国の歴史などが書かれている。しかも、経典や歴史など理解しにくい内容を平易な俗語で解説したもので、大衆的である[55]。

例えば、「為学者、必有初、小学終、至四書〔学問をするには必ず初めがある。『小学』が終了してから四書に至るのである〕」[56]という文言から、学びの順について学習でき、「稲粱菽、麦黍稷、此六穀、人所食〔稲粱菽麦黍稷、この六穀は、人が食べるものである〕」[57]から

は、日常生活の常識、穀物の種類について知ることができ、「始春秋、終戦国、五霸強、七雄出〔春秋時代から始まり戦国時代まで、五人の霸者がつぎつぎに威を振い、七つの強国が出現した〕」[58]から、歴史について学ぶことができる。『三字経』は「中国文化のあらゆる基本的なことがもちこまれていて、この『三字経』を熟習するだけでも、相当の知識を得ることができる」[59]と評された。

以上のように、『千字文』『百家姓』『三字経』は子どもに文字を教える教科書と使われると同時に、常識、文化なども教えられていた。また、『千字文』、『百家姓』、『三字経』の文章は全部韻を踏むということが特徴である。韻を踏むというのは、読みやすいように編纂されたと考えられる。

(3) 詩礼楽教育

また、子どもに詩礼楽教育が課せられた。詩礼楽教育について、『論語』「泰伯第八」では「子曰わく、詩に興こり、礼に立ち、楽に成る」[60]と記されている。そして、吉川幸次郎はこれを以下のように説明する[61]。

> この条は、人間の教養の順序をいう。道徳的興奮の出発点となるのは、詩経である。何となればそれは、正しい感情の高揚であるから。つぎに教養の骨格を定立するのは、礼を学ぶことである。なんとなればそれは、人間の秩序の法則であるから。最後に、教養の完成は、音楽を学ぶことにある。なんとなればそれは、感情を法則によって整理し、人間性の包括的な表現であるから。

つまり、人間の教育は、詩、礼、音楽という順序で進められていく。また、詩礼楽教育は「人間の基本の形成にかかわる」[62]とされている。このように、よりよい人間形成のため、子どもには、詩礼楽教育が行われていた。その中の詩教育について、中国明代の儒学者王陽明は以下のように提唱した[63]。

> 今日、児童を教えるには、まさに、孝悌・忠信・礼義・廉恥をもっぱらにすべきで、それを育成涵養する方法としては、彼らを詩歌に導いてその志意（スピリット）を発露させ、＜中略＝筆者＞必ず、その志向するところを鼓舞してやり、心に愉悦をもたらしてやれば、彼らは放っておいてもみずからの力で伸びていく。＜中略＝筆者＞だから、およそ彼らを詩歌に導くのは、決して単にその志意を発露させるにとどまらず、彼らの跳びはね叫び上げたい衝動を吟詠に託させ、内部に抑制され鬱結したものをメロディにのせて発散させてやることにもなる。

このように、幼児教育の中で、詩歌に導くという方法があげられている。その原因は、詩歌を吟詠することは子どもを鼓舞することができ、心に愉悦をもたらすことがで

きるためである。ここでの吟詠は大きな声を出して詩歌をうたうことである。その具体的な在り方について、続けて王陽明は以下のように説明している[64]。

> およそ詩歌を吟詠させるには、姿勢を正し精神を落ち着かせ、その音声を清朗にし、韻律を正確にととのえさせねばならない。いやしくも、噪いで動きまわったり、だらけておしゃべりにふけったり、或いはおじおじと畏縮したりすることがないようにしなくてはならない。このようなことを続けていると、やがて精神はのびやかになり気分も平安になる。
> また詩を吟詠する練習のたびごとに、生徒の数をしらべ、これを四班に分け、毎日一班ずつ輪番で吟詠させ、他はみな席につかせ、姿勢を正して静粛に耳を傾けさせる。五日目ごとに四班全員に本学舎でこどもに吟詠させ、一日と十五日には各学舎が合同して、書院で斉唱するようにさせる。

このように、詩歌を吟詠させる際の注意点が書かれている。また、「クラス」全体一緒に吟詠するという習慣がある。こうした習慣の定着は、将来の幼稚園の導入の際、子どもが共に合唱する教育形態の受容を促進する方向へと働いたと考えられる。

詩歌は歌の一種であり、清朝の理学家張伯行も歌の重要性を主張している。彼は『養正類編· 陸桴亭論小学』の中で、以下のように記している[65]。

> 歌や踊りを好まない子どもはいない、これは人間の本性であり、歌や踊りは礼楽の始まりである。賢者たちは、子どもたちの歌や踊りへの興味から、礼楽を教えたのである。いわゆる状況に応じて、有利になるように判断すること。現在の人は自分の子どもに教える時、子どもに甘い人は好きにさせる、子どもに厳しい人は子どもの天性を抑制する。聖人の礼楽の意図を知らないまま蒙養教育を行うことは難しい。

しかし、ここで述べられた歌は詩歌ではなく、礼楽の始まりを意味している。礼楽は、古代中国の特徴で、封建的な階層秩序を維持するために礼楽制度が制定されていた。そのため、当時は階層によって、どのような音楽を聴くことができ、楽舞は何人使えるかなどが厳格に規定されていた。張伯行は次のように礼と楽を解説している[66]。

> 古来、人々は幼い頃から礼楽を教えられ、その徳や気質を容易に身につけることができた。現在の人は読書ばかりして、礼楽の何たるかを知らないから、幼い頃から怠けて甘やかされている。冠、婚、祭、郷飲、射礼などを礼とし、そして、文廟楽舞、饗宴、歌などの儀式を楽とする。十歳になると四書やほかの書物を読み、暇な時には歌や礼、例えば古代の舞勺舞象を教えて、豊かで洗練された気質や道徳心を養うように、おそらく無理のない範囲で行うべきだろう。

つまり、蒙養教育を行う際、知識を教えるだけではなく、礼楽について教えることも大切だとされている。ただ、礼楽制度はあくまでも封建社会を維持する制度であり、人々の身分を厳格に階層化するために用いられていた。したがって、礼楽についての教育は、本質的に、儒教社会の秩序維持を目的とする徳育的な側面をも有するものであった、と結論づけることができる。

３．幼児期の教育の行われた場と教育方法

では、以上の幼児教育はどこで実施されたのか。古代中国には幼児のための教育機関、つまり幼稚園に相当するものが存在しないことについては、これまで繰り返し述べてきた。しかし、前述したように、子ども（特に男児）は勉学することでしか立身出世することができないことから、子どもたちは早期から学びを始めた。そして学校において幼児教育を受けていた。以下、『中国教育史研究・明清分巻』を参照し、明・清の幼児期の教育の行われた場について解説を加える[67]。

(1)私塾。私塾は明・清時期の主な幼児期の教育の行われた場であり、広く民間で成立していた。塾は、古代中国の社会で、家族や一族に開設された学校である。明・清時代の私塾は、3 つのタイプに分類される。1 つ目は「教館」、あるいは「坐館」、「家館」と呼ばれるものである。これは裕福な家庭のための学校であり、教師を招いて自分の子どもや友人・親戚の子どもを教えるため、家庭学校とも呼ばれた[68]。2 つ目は、「門館」あるいは「学館」と呼ばれる学校である。これは、先生が自分の家に学校を作ったり、神社やお寺を借りたり、近所の子どもを募集したりする教育形態をとった[69]。3 つ目は「族塾」である。これは、族ごとの学校で、同族集団によって作られた一族子弟を教育するために設けられた教育機関である[70]。教師を雇って学校をつくり、同族の子どもたちに教えるというものである。小川嘉子によれば、族塾は「啓蒙識字の為の『蒙塾』と経書の学習する上級の『経塾』」[71]に区分される。この中での「蒙塾」が幼児期の教育を担っていた。

(2)社学。社学は民衆の子弟の教化のために公費で設けられた教育機関であり、元・明・清３代にわたって存在した[72]。明代の初めには早くも太祖朱元璋が社学の提唱に力を入れ、これにより社学が大きく発展した。社学は町や村に広く定着し、田舎では最も大きな割合を占めた。そのため、課業の時期は 10 月から 12 月までとし、農閑期に子弟を集めて教育する[73]ことに、その特徴があった。これが前掲の「冬学」である。しかし、清朝康熙年間（1661 年～1722 年）には義学が盛んになり、社学は次第に義学に取って代わられるようになった[74]。

(3)義学。義学は義塾とも呼ばれる。古代中国社会で、国や地方の資金や個人からの寄付金で設立された学校であった。(1)で示した私塾とは対照的に、民衆の貧しい子どもたちのための特別な学校であり、授業料も徴収されなかった。明代から清代にかけて、義塾はかなり発展し、特に清代は政府の推進により広く設立されたため、官立義塾と私立義塾が存在し

ていた[75]。官立の学校では、学校の資金（主に教師の給料）が国庫から支出されていた。私立学校は、民衆が土地や銀、家屋などを寄付して設立したものであり、その特徴は学校の経営者と教育者との分離であった。つまり、経営者の出資により、教員を招聘して教育を行っていた[76]。

最後に、当時の教育の方法について述べると、読み上げ、そして暗唱する場合が多かった。「毎日、新しい文章を百回読む」ぐらい、ひたすら読むことで暗誦することができるようになるとされていた。中華民国期の代表的教育史研究者・舒新城は「私塾の課業は読書で、読書の目的は暗唱ができるようになることのみだった。先生は文字の書きい方・綴り方も、文の意味も教えてくれなかった」[77]と自身の幼児期の教育を回顧している。その他、王陽明もこのような教育方法が子どもの発達を無視していたことを認識し、以下のように批判を加えている[78]。

> 近世の童蒙の訓育をみると、毎日ただ、句読のきりかたや科挙の模擬作文を課し、いたずらに動作をしばるばかりで礼儀に導くことを知らず、知識の聡明を求めるばかりで善を心に養うことを知らず、鞭でうったり縄で縛ったり、まるで囚人を扱うようにするので、かれらは学舎を監獄のように思ってなかなか行こうとせず、先生が仇敵のように思えて、会うことさえいやがる。そこでかれらは、先生の目を逃れて陰で遊興心を満足させ、嘘をつきごまかして、ひそかにその低俗な意図をほしいままにし、挙句に、その性情は日に浅薄卑俗となって堕落するばかりとなる。これは、人を悪に追いたてながら、しかもそれに善をなすよう求めるようなもので、そんなことがどうしてできよう。

以上のように、知識の習得だけではなく、善心を養うことも大事であることが指摘されている。また、厳しく勉強させ、叱るのは逆効果である。それを認識できるのは、王が子どもの特性を理解していたからである。王陽明は「おおよそ、児童というものは、遊戯を楽しみ拘束をきらい、いわば草木の新芽が萌えでるときのようなもので、自由にのびやかにしてやれば、すくすくと四方にのびるが、くじいたり押しまげたりたりすれば、なえ衰えてしまう」[79]と論じた。王によれば、子どもは遊びを好む傾向性があり、自由に伸び伸びと遊びに親しませることこそが、その傾向に相応しい育て方である。このように、厳罰を課し、子どもを監視する伝統的な教育に反して、子どもの傾向性に基づいた「自由な」教育のあり方が模索され始めていた。

もちろん、私塾の教育の質は教師と大きな関係がある。陳鶴琴も、清末に 4 人の塾師の下で蒙養教育を受けた経験があるが、教師の中には、アヘンを吸って朝よく寝坊していて、なにも講義してくれない教師もいれば、一人ひとりの児童のために、熱心に個別指導を行った教師もいた、と語っている。しかしその一方で、彼は私塾の教育方法の中のメリットに着目して、以下のように記している[80]。

私塾には教師が 1 人しかいなかった。生徒の数は 3、5 人から 40、50 人とさまざまであった。今の学校のように、40 人、50 人が同じことを同じように教えられるのではなく、それぞれが自分の学習内容があった。当時、先生は本当に「生徒の能力に合わせて教える」ことができている。優秀な生徒にはより多くのことを教え、回転が遅い生徒にはより少ないことを教えていた。不必要な競争を招くような、画一的な共通試験もなかった。その代わり、個々の指導と試験によって、志向を促進させる。これは、学問の習得だけでなく、人格の訓練にも言える。実際、私塾の教師の目から見ると、学業成績は道徳の培いほど重要ではない。

上記の長所である、能力に応じた個別指導というのは、まさに今、欧米の新教育が提唱していることである。しかし、新しい教育がこれだけ進んでいるときに、私塾教育を提唱しているわけではない。私塾教育は、中国では数千年の歴史があり、その長所は取り入れられ、継承されるべきだが、その短所はあまりにも多く、その組織や教育内容は現代の状況には不向きである。

以上のように、私塾教育において、能力別指導、個別指導といった長所があった。また、学問の習得というより、人格の訓練が重視されている。その一方で、その教育内容は古文中心となり、すでに現代の状況には不向きになっている。陳鶴琴がその後、幼稚園に「活教育」、つまり児童中心主義教育を導入した背景には、おそらくこうした自身の経験と関わりがあると考えられる。

４．女児への教育

前節の考察を踏まえて、儒教社会において女性は「三従」しなければならない存在であったため、「女徳」が求められている。女児にも或る種独自の「女徳」教育が行われていた。伝統的な幼児教育の特徴は、男女を区別して教育することである。『礼記・内則篇』には礼儀を教える手立てが、次のように説明されている[81]。

子が物を食べられるようになると、右手を用いることを教える。ものが言えるようになると、男は『はい』といい、女は『はあい』という。男は革の袋、女は絹の袋を腰に下げて、手ぬぐいを入れる。子が生まれて六歳になると、数と方角の名まえとを教える。七歳になると、男女は同じ席に座らない。いっしょに食事をしない。八歳になると、門を出入りするとき、席について飲食するときは、必ず年長者のあとに従って行う。はじめて人に譲ることを教える。

これによれば、男女の言葉の使い方、装飾品の付け方などが異なっている。また、7 歳になると、男女同席することを許容しないことからもわかるように、「男女の別」を設けようとしていた。

さらに『礼記・内則』には「九歳になると、暦を見て日を数えることを教える。十歳になると、男子は外に出て教師につき、外宿して、読み書きと算数とを学ぶ」[82]と、10 歳になるまでは、家庭において教育を受けたことがわかる。これに対して、女子の場合は「十歳になると、常に家にいて出ない。乳母はことばを穏やかにし顔色を和らげ、年長者の言うことをよく聞いてすなおに従うことを教える。麻を紡ぎ、蚕の繭から絹糸を作り、絹布を織りひもを編む。女の仕事を学んで衣服を供給する」[83]と記述されている。このように、男児は 10 歳になると外で師を得、教育を受ける機会があるのに対して、女児は乳母からの家庭教育に限定されていた。また、女児は「女徳」や裁縫などのいわゆる「女性的な」教育を受け、男女において教育内容の違いが明確に存在していたことがわかる。

以上、清朝末期における中国の幼児教育の理念、実態、特徴を考察してきたが、第 2 章では、中国の伝統的な幼児教育と完全に異なる、キリスト教宣教団体による近代的な幼稚園の導入について考察する。

注

1 儒教は社会の支配層を中心として制度化されたが、本論文では信仰・宗教としての儒教は貴族だけではなく、庶民にまで浸透していたという立場をとる。また、混乱を避けるため道教・仏教というその他の民間信仰については言及しない。
2 土田健次郎『儒教入門』東京大学出版会、2011 年、ⅳ頁。
3 加地伸行『世界子どもの歴史９　中国』第一法規、1984 年、7 頁。
4『論語』は孔子と弟子たちによる言行を収めた書物であり、儒教の経典である。
5 貝塚茂樹訳注『論語』、中央公論社、1995 年、14 頁。原文：弟子入則孝、出則弟。
6 全玟楽「子ども観に関する比較教育文化的考察 ： 近世（李朝，江戸時代）儒者の子どもの遊びに対する見解を中心に」『大阪市立大学教育学論集』16 号、1990 年、27 頁。
7 龔書森「中国的宗教・儒教・道教」『関西学院大学神学研究』40 号、1993 年、306 頁。
8 加地伸行、前掲書、 7 頁。
9 貝塚茂樹訳注、前掲書、35 頁。原文：生事之以禮；死葬之以禮，祭之以禮。
10 龔書森「前掲」、307 頁。
11 中国儒教の経書で五経の 1 つ。主に礼の倫理的意義について解説した古説を集めたもの。
12 今井清、鈴木隆一編『礼記　下』集英社、1977 年、126 頁。原文：魂気帰于天、形魄帰于地（魂気は天に戻り、形魄は地に戻る）。
13 加地伸行、前掲書、10 頁。
14 余英時「中国人の死生観―儒教の伝統を中心に―」『死生学研究』9 号、2008 年、21 頁。
15 加地伸行、前掲書、10 頁。
16 今井清、鈴木隆一編、前掲、107 頁。原文：身也者、父母之遺体也。行父母之遺体、敢不敬乎。
17 土田健次郎、前掲書、82 頁。
18 加地伸行、前掲書、145 頁。
19 一見真理子「中国における子ども，子ども観，子どもの権利」シンポジウム「世界にお

ける子ども文化の位置づけ」『比較教育学研究』19、1993 年、171-172 頁。
[20] 熊秉真『童年憶往：中国孩子的歴史』麦田出版、2000 年、84 頁。
[21] 原文：乾隆元年丙辰。七歳。先大父至淇署。命余曰（輝祖）。（輝祖）之生也，先大父年已五十有九，甫抱孫甚喜。咳名曰垃圾。取其賤且多，而有資於農也。五歳就傅，更名曰鰲。至是見余能解字義可讀書，爲定今名。
汪輝祖 『病榻夢痕録』翻訳稿（滋賀秀三先生遺稿）http://www.terada.law.kyoto-u.ac.jp/sonota/siga_mukonroku.htm(2023 年 6 月 7 日閲覧)
[22] 熊秉真、前掲書、89 頁。
[23] 王独清著、田中謙二訳『長安城中の少年　清末封建家庭に生れて』平凡社、1965 年、21 頁。
[24] 同上、25 頁。
[25] 同上。
[26] 10 歳以下の子どもで、五経のうちの 1 つと孝経と論語の三分野に詳しく、一巻ずつ暗唱し、十巻まで行った者には役職を与える。
[27] 一見真理子「中国の子どもと遊び」、下山田裕彦,結城敏也 編著『遊びの思想 ： 遊び理解と人間形成 』川島書店、1991 年、94 頁。
[28] 木山徹哉「『解放』前中国における子ども観とその変革過程―1920 年代を中心にして―」『日本の教育史学』第 27 集、1984 年、71 頁。
[29] 加地伸行、前掲書、13 頁。
[30] 一見真理子「中国における子ども，子ども観，子どもの権利」前掲、171 頁。
[31] 胡学亮『近世中日両国の民衆教育に関する比較研究―両国民衆教育普及の相違とその要因の考察を中心に―』早稲田大学出版部、2010 年、333 頁。
[32] 同上、334 頁。
[33] 一見真理子「中国の子どもと遊び」前掲、95 頁。
[34] 一見真理子「中国における子ども，子ども観，子どもの権利」前掲、171 頁。
[35] 「冬学」とは、農民の子どものために、10 月から 12 月までの農閑期に子弟を集めて教育する機関である。
[36] 何暁夏『簡明中国学前教育史』北京師範大学出版社、2014 年、44 頁。
[37] 鈴木由次郎編『全訳漢文大系第九巻　易経　上』集英社、1974 年、144 頁。
[38] 同上。
[39] 陈学恂編『中国教育史研究・宋元分卷』華東師範大学出版社、2009 年、375 頁。
[40] 何暁夏、前掲書、44 頁。
[41] 加地伸行、前掲書、47 頁。
[42] 宇野精一編『新釈漢文大系 3　小学』明治書院、1965 年、269-270 頁。
[43] 同上、275 頁。
[44] 同上、275-276 頁。
[45] 原文：夫童蒙之學、始於衣服冠履、次及言語歩趨、次及灑掃涓潔、次及讀書寫文字、及有雑細事宜、皆所當知、今逐條列名、曰『童蒙須知』。若其修身治心、事親接物、與夫窮理盡性之要、自有聖賢典訓、昭然可考、當次第曉達、茲不復詳著云。朱熹『童蒙須知』、朱傑人、嚴佐之、劉永翔編『朱子全書』第 13 冊、上海古籍出版社、安徽教育出版社、2002 年、371 頁。
[46] 陸世儀『論小学』、王雪梅編『蒙学要義』、山西教育出版社、1991 年、5-6 頁。
[47] 加地伸行、前掲書、48 頁。
[48] 全玟楽「前掲」、28 頁。
[49] 陳鶴琴『我的半生』1941 年、陳秀雲編『陳鶴琴全集（第六巻）』江蘇教育出版社、2008 年、500-501 頁。
[50] 唐彪『父師善誘法』、王雪梅編『蒙学要義』山西教育出版社、1991 年、200 頁

[51] 陳学恂編『中国教育史研究・明清分巻』華東師範大学出版社、2009 年、173 頁。
[52] 加地伸行、前掲書、43 頁。
[53] 同上。
[54] 同上、45 頁。
[55] 同上、44 頁。
[56] 加藤敏訳『三字経』、https://kanjibunka.com/download/sanjikyo.html（2023 年 6 月 12 日閲覧）
[57] 同上。
[58] 同上。
[59] 加地伸行、前掲書、44 頁。
[60] 原文：子曰、興於詩、立於礼、成於楽。吉川幸次郎訳『論語』筑摩書房、1971 年、124 頁。
[61] 同上。
[62] 平岡武夫編『全釈漢文大系　第 1 巻　論語』集英社、1980 年、220 頁。
[63] 荒木見悟編『世界の名著　続 4 朱子・王陽明』中央公論社、1974 年、495 頁。
[64] 同上、497 頁。
[65] 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、76 頁。
原文：人少小时，未有不好歌舞者，盖天籁之发，天机之功，歌舞即礼乐之渐也。圣人因其歌舞，而教之以礼乐，所谓因其势而利导之。今人教子，宽者或流放荡，严者或并遏其天机，皆不识圣人礼乐之意，欲蒙养之端，难以。
[66] 同上。原文：礼乐不可斯须去身,古人教人,自幼便教他礼乐,所以德性气质,易于成就。今人自读书之外,一无所事,不知礼乐为何物,身子从幼便骄惰坏了。愚意自《节韵幼仪》外,更欲参酌古今之制,辑冠、婚、祭、及乡饮乡射诸礼为礼书;文庙乐舞,及宴饮升歌诸仪,为乐书。俾童子十数岁时,仍读四书,兼习书数,暇日则序于一处,教歌习礼,如古人舞勺舞象之类,务使之郁郁彬彬,则涵养气质,薰陶德性,或可不劳而致。
[67] 陳学恂編、『中国教育史研究・明清分巻』、前掲、158-159 頁。
[68] 同上、158 頁。
[69] 同上。
[70] 胡学亮、前掲書、196 頁。
[71] 小川嘉子「中国近世の族塾について」石川謙博士還暦記念論文集編纂委員会編『石川謙博士還暦記念論文集 教育の史的展開』大日本雄弁会講談社、1952 年、542 頁。
[72] 胡学亮、前掲書、43 頁。
[73] 同上、44 頁。
[74] 陳学恂編、『中国教育史研究・明清分巻』、前掲、158 頁。
[75] 同上、159 頁。
[76] 胡学亮、前掲書、85 頁。
[77] 舒新城『我和教育：三十五年教育生活史（1893-1928)』中華書局出版、1945 年、18 頁。
[78] 荒木見悟責任編集『世界の名著. 続 4 朱子・王陽明』中央公論社、1974 年、496 頁。
[79] 同上、495 頁。
[80] 陳鶴琴、前掲書、499 頁。
[81] 今井清、鈴木隆一『礼記　中』集英社、1977 年、197 頁。
[82] 同上、198 頁。
[83] 同上。

第２章　清朝末期キリスト教宣教団体による幼児教育の創始

本章では、まず、キリスト教系幼稚園の設立背景として宣教師の中国における伝道・出版活動、そして宣教師たちの中国認識について明らかにする。次に、その認識に基づく幼稚園を含むキリスト教系学校の設立経緯を検討し、さらに幼稚園が設立される際、女性宣教師が果たした役割を解明する。最後に、キリスト教宣教師を通じたフレーベル幼児教育思想の受容について考察する。以上により、清朝末期のキリスト教宣教団体による幼児教育の創始期の実状の一端を明らかにする。

第１節　宣教師の中国における伝道・出版活動と中国認識

１．宣教師の伝道・出版活動

（１）宣教師の伝道活動

まず、キリスト教系幼稚園の設立背景について、キリスト教伝道活動を踏まえながら明示する。中国でのキリスト教宣教団体はカトリックとプロテスタントに大別することができるが、その中で幼稚園を中国に導入したのはプロテスタントであった。では、なぜプロテスタントは幼児教育を含む教育事業を中国で展開したのか。この課題に応えるために、その前提として、カトリックとプロテスタントの中国での伝道史を整理する。

中国にカトリックが伝わったのは 13 世紀（唐代）であったが、元朝の崩壊後、中国ではカトリックはほとんど消滅した[1]。しかし、16 世紀になると、植民地拡張とともに、ポルトガル人により、再びカトリックが中国へ伝道するようになった。その際、イエズス会は中国の文化に適応した形で宣教活動を行う適応主義的宣教[2]を行った。ここでいう中国の文化とは、主に儒教を指している。イエズス会の適応主義的宣教について、『はじめての中国キリスト教史』に書かれている以下の例で説明することができる[3]。

> 宣教師は「西僧」と自称し、仏僧にならって剃髪して袈裟を着用した。これは日本における禅宗僧侶の社会的な地位や発言力を勘案した結果であったが、中国の上層社会が重視したのは仏教ではなく儒教であった。1594 年以降、今度は髪と髭を蓄えて儒服を着用し、儒教経典の研究に勤しみ、「士大夫」と呼ばれる儒教の素養を持つ官僚及び官僚志願者と交流する方針へ転換した。

このように、イエズス会の宣教師は中国の儒教に適応しながら宣教を続けた。さらに、清の時代に入ると、外交上の貢献をすることで康熙帝の承認を受け、1692 年には清朝領土内におけるカトリック宣教が公許された[4]。

しかし、適応主義に基づく宣教活動が、中国人に歓迎され続けていたわけではない。都合上、イエズス会の宣教師は儒教の上帝[5]とキリスト教の神「天主」を一致させて宣教してきた。このため、カトリックの信者は、祖先祭祀や孔子崇拝、天地祭祀に参列することが許容されたが、1631 年以降、他のカトリック宣教団体であるドミニコ会とフランシスコ会は、祖先祭祀や孔子を祭る儀式が全面的に迷信的なものであると主張した。その結果、中国のキリスト教信徒はこれらの儀式への参加が禁止された[6]。吉田寅は「典礼論争の本質は、このような理論的な問題の他に、イエズス会がポルトガルの布教保護を受けつつ独占的な布教体制をとっていたことに対する反発が考えられる」[7]と指摘している。このように、典礼をめぐる問題はカトリックの内部権力闘争とも考えられる。やがて、ローマ教皇の決裁によって、典礼否認の基本方針が決定された。

一方、中国側にも変化が見られた。渡辺裕子によれば、中国の知識人層は、宣教師の主張や教義、特に「天主」の実質が明らかにされるにつれて、「その態度を次第に『共感から反感』へと変えていった」[8]という。例えば、「『明朝破邪宗』にまとめられているように、彼らは宣教師が孔子の教えを都合のいいように解釈していること」[9]、さらには中国の君主をキリスト教の天主の下位に置き、天主に奉仕することを父母への孝行よりも優先させることを批判した。このように、カトリック教会は、伝統的な秩序を脅かす宗教的組織として見なされた。また、この批判は後の「清末の反キリスト教運動（教案）において、理論的な根拠」[10]となったのである。このように、儒教への信仰とキリスト教への信仰が基本的な部分で矛盾することになった。何千年も中国社会を支配してきた儒教と衝突する場合、影響力が少ないキリスト教は中国社会に浸透するには別の方法を考えなければならないことになる。結局、中国の雍正帝は 1723 年にキリスト教禁止の命令を発し、再びキリスト教（カトリック）が中国で禁止される時代になった。

カトリックとは異なる宣教路線をとったプロテスタントは 19 世紀初期に登場し、まず「文書伝道、教育伝道を中心とする」[11]伝道路線をとり、「学校」を宣教の道具として利用し、影響力を獲得してきた。

19 世紀初め、対外貿易や政治干渉の活発化に伴い、工業化の進んだ英米両国を中心に、プロテスタント系宣教会の中国進出が開始された[12]。山本澄子の研究によれば、プロテスタント宣教史は概ね 4 期に分けることができる[13]。中国におけるプロテスタント・キリスト教史は、1807 年にロバート・モリソン（Robert Morrison 馬礼遜）が到来して始まり、第 1 期は 1807 年から 1860 年の北京条約までの準備期であり、1842 年の南京条約によって前半と後半に分かれる。第 2 期は 1860 年から 1900 年の北清事変までの教会建設期である。第 3 期は 1900 年から 1949 年の中華人民共和国成立までの教勢発展期である。第 3 期の初期は、外国宣教師によって伝道が行われ、教会の規模が拡大した時代であった。中国人が主体的に活動するのは 1910 年代からとなる。そして、第 4 期は 1949 年以降現在に至るまで、である。

幼稚園に関する内容は主として第 3 期の初期を扱うが、その成立過程として第 1 、第 2 の時期についても概観しておきたい。第 1 期の前半は、聖書の中国語訳が中心であった。第 1 期後半から宣教活動が活発化し、キリスト教の学校や病院も盛んに設立されるようになった。1842 年に、清朝はアヘン戦争に敗れ、イギリスと南京条約を結び、広州、福州、厦門、寧波、上海の 5 つの港が開港場に定められた。5 港開港の頃より、欧米諸国のプロテスタント系宣教会は中国への伝道活動を次々と始めた。開港地へのプロテスタントの進出について、倉田明子は以下のように説明している[14]。

> 植民地として安全が確保されていた香港にはアメリカン・ボード（American Board of Commissioners）やバプテスト・ボード（Baptist Board of Foreign Missions in the United States）、ロンドン伝道会（London Missionary Society）などが 1842 年後半から 1843 年初めにかけて次々と拠点を置いた。また厦門にはアメリカン・ボードの宣教師がやはり 1842 年のうちに拠点を開き、その後ロンドン伝道会（1844 年）、イギリス長老教会（Presbyterian Church of England,1850）も拠点を置いた。上海には 1843 年の年末にロンドン伝道会のメドハーストが拠点を置き、その後アメリカ聖公会（Protestant Episcopal Church of United States,1845）や南部バプテスト連盟（Southern Baptist Convention,1847）も活動を開始する。寧波でも 1843 年にバプテスト・ボードが拠点を開いたのを皮切りにアメリカ北長老教会（Presbyterian Church in the United States of America,North,1844）、英国教会伝道協会（Church Missionary Society,1848）が拠点を起き、福州でも 1847 年にアメリカン・ボードとアメリカ・メソジスト監督教会（The Methodist Episcopal Church）が活動を開始した。広州ではバプテスト・ボート、アメリカン・ボード、ロンドン伝道会が拠点の設置を試みた。

以上のように、各宣教会は 1842 年後に内地の 5 つの港都市へ進出し始めた。吉田寅は「中国大陸におけるキリスト教の伝道は、開港場に設置された租界においてキリスト教会建設の権利を獲得したことにより新しい段階に入った」[15]と述べている。

第 2 期において、中国はイギリスやフランス、ロシアと北京条約（1860 年）を締結し、軍艦や領事官を開港地に駐留させる権利を与え、関税の自主権も失った。北京条約により、上述の 5 つの港以外に、中国内地への伝道の自由も認められた[16]。その後、キリスト教団体は、福音伝道以外にも、学校教育、出版、医療などを通して宣教活動を行った。しかし、宣教活動の活発化につれて、民衆からの抵抗も激化した。山本澄子は、北京条約直後から、大小さまざまな反キリスト教・排外運動が発生したと指摘している[17]。この中には、1868 年の揚州教案、1870 年の天津教案、そして 1900 年の義和団事件が含まれる。これらの一連の運動は、「アヘン戦争以来の外国勢力の圧迫や外国宣教師の条約上の特権等に対する中国民衆の反感、北京条約以後の教会用地問題、その他教会や信徒と一般民衆との間に生じた紛争、儒教道徳によるキリスト教会習俗批判、民間信仰・迷信や民衆の無知による誤解等々、

種々の問題が背景となっている」[18]。もちろん、種々の問題の中でも、キリスト教への反発の根本的な要因は、儒教への信仰とキリスト教への信仰の衝突であった。これについては、本節の第２項宣教師の中国認識で詳しく分析する。

（２）宣教師の出版活動

宣教師による教育活動について検討する前提として、出版事業について触れておく。その理由は、このような出版物に宣教師の教育活動が掲載されているからである。

プロテスタント宣教師が文書伝道を重視したことはよく知られており、東アジア地域は宣教師が出版した書物を通じて、キリスト教のみならず欧米の学問・文化を摂取した[19]。

19 世紀後半、宣教師たちが発行した出版物の中で、特に重要なものは英文と漢文の両方で発行された『万国公報』であった。前者は超教派の月刊宣教雑誌で、中国内外のキリスト教関係者向けに 1867 年に発刊され、1941 年まで刊行が続いた。一方、漢文の方はアメリカ南部メソジスト教会（Methodist Episcopal Church South）のヤング・アレン（Young John Allen, 林楽知）が 1868 年に『教会新報』として発刊し、当初は純粋にキリスト教徒を対象にしていた宗教出版物であったが、1874 年以降は『万国公報』と改題された。そこでは、中国のキリスト教徒が自国とキリスト教について書いた記事が募集され、儒教とキリスト教を比較した記事や、中国の教育制度、纏足などの話題が紹介されることが多くなった。また、自然科学や技術、国際政治、中国と諸外国との関係など、様々なテーマが取りあげられ、非キリスト教徒の知識人を含む広範な読者層に向けて発信された。渡辺裕子は「アレンは『万国公報』の編集を通して、出版事業の「世俗化」にも積極的にかかわっている。＜中略＝筆者＞彼らの目的はヨーロッパ近代文明の教授を通して、中国知識人を間接的にキリスト教に導くことにあった」[20]と宣教師の出版活動の目的を指摘している。結果として、『万国公報』を通して「キリスト教への改宗を求める読者はほとんどいなかった」が、当時「その記事やコメントは、中国の悪化する状況に対する反省や疑問を引き起こしたに違いない」[21]と評価された。漢文の『万国公報』では、フレーベルについて紹介した記事も載せられ、中国へフレーベル思想の波及に際して大きな役割を果たしていた。

次に、宣教師向けの雑誌、清朝末期刊行された *The Chinese Recorder and Missionary Journal*（中国語の表記に従い以下『教務雑誌』と記す）を簡単に説明する。

『教務雑誌』の前身は、1867 年 1 月に福州でアメリカの宣教師ウィーラー（裴来尔 L.N.Wheeler）によって発刊された *Missionary Recorder* である。前身を含めて 1942 年までの 75 年間にわたって、当時において最も長く刊行された中国の英文雑誌である。ここには、布教活動の実態が記されているほか、当時の中国の経済、政治、社会、文化、教育についての記事も数多く収録されている。その中には中国の幼稚園についても記載されている。現在、『教務雑誌』はデータ化され、Gale Primary Sources に所蔵されている。

『教務雑誌』は中国宣教団体の主催するプロテスタント各宗派の共同出版物であり、主な読者は在中国の宣教師であり、その目的は「異教の領域における福音主義の働きのメンバー

間のつながりを強化すること」[22]と記載されている。そして、その発行の意図は「キリスト教に限定する」ものではなく、「中国と近隣諸国に関するさまざまな情報を提供できるように、中国の人々、国の歴史をよりよく理解する」[23]ことにあった。つまり、『教務雑誌』は在中国の宣教師に対し、当時の中国の事情を紹介する雑誌と見ることができる。そのため、本雑誌の内容は宣教師の注目点が反映されていると言えよう。

最後に、西洋の宣教師たちを中心とした The China Christian Educational Association（中華教育会、中国教育会、中華基督教教育会などの中国語名がある）により発行された雑誌 *Educational Review*（中国語名：『教育季報』）について述べる。*Educational Review* は 1907 年、上海で創刊された英文雑誌である。中国における教会学校の活動（言語教育・医学院・婦人教育・成人教育など）を幅広く報道している。その中でも、中国の幼稚園の様子が描かれている。これらの雑誌を用いて、当時の幼稚園の実態を探ることができると考えられる。

２．宣教師の中国認識

（１）宗教としての中国の伝統社会に対する認識

では、プロテスタント宣教師はなぜ教育伝道を始めたのか。以下、宣教師の中国認識を分析することで、その理由を探る。まずプロテスタント宣教師の中国認識を検討する前に、カトリック宣教師の中国文化に対する認識について、特に中国人の宗教に対する理解を明らかにする。

前述したように、1631 年以降スペインのドミニコ会とフランシスコ会は、イエズス会の伝道方法を批判し、特に儒教的な儀式である祭天（天を祀る儀式）、崇祖（祖先を崇拝の儀式）、祀孔（孔子を祀る儀式）の内容が迷信的であると主張した。そして、中国のキリスト教信徒はこれらの儒教的典礼儀式への参加が禁止された。

このように、カトリック教会の宣教師は、中国の儒教を迷信的なものと捉えている。それでは、プロテスタント宣教師は儒教をどのように認識していたのであろうか。

中国の最初のプロテスタント宣教師モリソンはロンドン学会への報告で、「彼ら＜＝中国の民間信仰の信者、儒教をはじめひろく仏教・道教ほかを含む＞は、街中で、常に悪魔（demon）を華麗に装飾している。偶像の前で演劇や演奏をし、果物、ワイン、ケーキ、鳥、焼き豚などを供える。ろうそくを灯し、香をたき、紙を燃やし、爆竹を鳴らすのである。また、私は、彼らが満月にひれ伏し、酒を注ぎ、果物を捧げるのを見たことがある」[24]と中国の祭祀活動を記録している。そして、「中国人の宗教的儀式などは滑稽で面倒なものである」[25]と評価している。このように、プロテスタント宣教師も中国の宗教の典礼儀式を低く評価していた。

プロテスタント宣教師のこうした宗教観の背景には、キリスト教の教義に対する遵奉意識が存在している。以下、呉義雄が指摘したキリストの教義と中国文化の衝突の原理を引用する[26]。

プロテスタントの宣教師たちが「真の宗教」すなわち純粋なキリスト教を「異教」と区別すると考えたのは、「唯一の神」を信仰するかどうかであり、言い換えれば「偶像崇拝」するかどうかであった。「偶像崇拝」とは、キリスト教から見ると、「唯一の真の神」以外のもの、例えば、有形の像や物などを崇拝することである。このように考えると、唯一神を知らない中国は、確かに「異教徒」の国である。

つまり、キリスト教を信仰する場合、「唯一の神」を信じなければならない。プロテスタント宣教師も儒教を否定し、純粋なキリスト伝道を進めたかったものの、それは18世紀の中国において、カトリックだけではなくプロテスタントに対しても禁止されていた。そのため、プロテスタント宣教師は「まず聖書の中国訳の完成までを、中国伝道に於ける第一段階の目標」[27]とするような、漸進的な伝道方針をとっていた。つまり、文書伝道と教育伝道はプロテスタント宣教師が最初に取った対応策であった。

イギリス勢力の中国国内における進出につれ、前述したいくつかの不平等条約の締結に基づいて、教会の勢力も拡張していた。内地伝道解禁によって教会と中国の民衆が頻繁に接触し、キリスト教の布教をめぐる問題も増加していった。そうした中で、反キリスト教運動とそれを支える反キリスト教感情も高まっていった。中国におけるキリスト教について通史的に叙述した『はじめての中国キリスト教史』では、発生した事案が地方レベルでの処理が困難となった場合、領事や地方総督、そして公使や総理衙門など、外交レベルの問題にまで発展することがあった、とされている。そして、これはしばしば列強が軍艦を派遣して清朝政府に圧力をかける「砲艦外交」として知られるような事態を招くことになった。このような事態は、「キリスト教伝道と帝国主義との結びつきを示す好例となった」[28]。このように、外国人による伝道活動は列強の侵略行為と認識され、中国側からの抵抗を受けた。こうした状況を受け、教育活動を通しての伝道が改めて重視されるようになった。この点について、平塚益徳は、「教育そのものを第一義としたものといふよりも寧ろ反基督教的雰囲気を緩和するための、謂はば伝道上の一景品として、非公式に設立・維持され、それらの機関を利用した者も極めて局限された、而も社会的には寧ろ最下層の者達が主であったといふ、謂はば第二義的存在に過ぎなかったことは否定し得べくもない」[29]と説明している。

その結果として、佐藤尚子が「欧米キリスト教宣教会は、アジアにおいて宣教事業の傍ら、教育・出版・医療事業に進出したが、この中で教育事業の影響が最も大きかったと言える」[30]と述べたように、学校教育はキリスト教の布教にとって最も重要な手段の１つになっていった。

（２）儒教社会においての幼児への認識

では、宣教師は儒教社会における幼児に対してどのような認識を有していたのであろうか。本研究の第１章では、中国の子どもは階級、性別によって、違う生活を暮らしていたことを指摘したが、宣教師は特にその中の下層階級の女児について注目している。

特に目を引くのは、子どもの命について多くの記載が残されていることである。例えば、郭士力の航海記には、厦門の海岸で見た光景が次のように描かれている。「浜辺で、殺されたばかりの赤ん坊を発見して驚いた。この地域では、生まれたばかりの女の子どもを溺死させるのが一般的な風習である」[31]と。また、聖書の中国語訳を参加したプロテスタント宣教師ミレンは、1819 年にこの「恐ろしい犯罪」[32]を読者に警告している。第 1 章で述べられたように、下層階級の女児は家庭にとって負担であり、その子たちを間引きするのは古くから行われていた行為であった。

女児の間引きについて最も多く語ったのはアビール（Abeel）である。アビールは 1843 年の『中国叢報』に、厦門での活動中の日記の一部を掲載し、厦門や泉州、同安、安溪、恵安、南安などの近郊での間引き現象について詳しく説明している。彼は、これらの場所の 40 の村や町を訪問して統計をとった結果、「嬰児殺しの割合は場所によって異なり、10%から極端な 70～80%まであるが、すべての場所の平均割合は 2/5、より正確には 39%に達する」[33]と述べた。また、彼は具体的な例も挙げ、「厦門から 10 マイル離れたアウナイという村では、女性の赤ん坊の約 1/3 が殺されたと聞いた。この情報をくれた人は、4 人の子どものうち 2 人を殺したと言っていた。また、村の赤ん坊の女の子の半分しか生き残らなかった」[34]と綴っている。もう 1 つの記事でも、子どもの悲惨な境遇を記録している[35]。

> 「今日の子どもは明日の教会である」と言われている。＜中略＝筆者＞中国の街を歩くと、そこで見かける中国の子どもたちの苦しい環境に心を痛めずにはいられない。私たちは、暗く湿った部屋で夏は息苦しく、冬は寒いといったような不健康な環境にいる子どもたちを目にしたことがある。彼らにとって、狭く汚れた街が唯一の遊び場となってしまっている。当然、この環境は幼稚園の明るく魅力的な部屋や楽しく遊べる遊具施設とは比較にならないものである。

つまり、宣教師たちはこうした惨状を目にする中で、同情の気持ちをもって、中国人の子どもを困窮した状況から救うために、子どもに福祉、さらに教育を提供しようと考えた。つまり、慈愛の観点から子どものために幼稚園を作ることが構想された。

もちろん、単に慈愛のためだけではなく、伝道のために子どもを教育することも宣教師たちの共通の認識であったことは言うまでもない。前述したように、中国はアメリカやフランス、ロシアと不平等条約を締結した後、宣教活動は列強の侵略行為のひとつとしてと認識され、中国人に抵抗された。宣教師は、このような中国の民衆に抵抗されたことで、まず遺棄された子どもたちを引き取り、食事を与え、住居を与え、教育することで、少なくとも将来的に福音の信者を確保することができることに気づいたのである。

このような宣教師の中国の儒教、子どもへの認識に基づき、中国にミッションスクール、女子教育、さらに幼児教育が発展した。すなわち、こうした認識が中国のキリスト教系幼稚園の下地を作ったのである。

第 2 節　近代中国におけるキリスト教系学校の設立

1．全体と女子教育の概況

（1）各時期のキリスト教系学校

19 世紀に、中国にはプロテスタント系のキリスト教の代表的な教派が欧米から集結し、それらは「会衆派（コングリゲーション）、長老派（プレスビテリアン）、信義派（福音ルーテル／ルター）、浸礼派（バプテスト）、監理派（メソジスト）、聖公会（英国国教会）、内地会の 7 つの教派に分けることができる」[36]とされている。これら 7 つの教派は最初連合した形で中国の各地域で布教活動を展開した。例えば、最初に中国にプロテスタント宣教師を派遣した「ロンドン伝道会」は聖公会、会衆派と長老派から成っている。その後、各教派は細分化し、「美南浸信会」、「美北長老会」、「英国長老会」、「信義会」、「美北浸礼会」などの活動拠点が各省に置かれた。

近代中国におけるキリスト教団体による教育活動は、1807 年「ロンドン伝道会」宣教師として派遣されたロバート・モリソン（Robert Morrison, 馬礼遜）により始まると言われている[37]。彼は 1818 年に華人向けの教会学校「英華学堂」（Anglo−Chinese College）をマレーシアのマラッカに設立した。さらに、モリソンは最初に聖書を中国語に翻訳し、最初の中国語・英語辞典を出版した人物でもある。しかし、初期のキリスト教の中国大陸への布教は、清朝の厳しい禁教政策下ではあまり進まなかった。そのため、彼らの活動場所は香港、マカオ等の植民地に限られていた。1839 年、中国の最初の教会学校モリソン学校（Morrison Education Society school）は、ブラウン（Samuel Brown, 1810～1880）によってマカオに創設された[38]。「海禁国としての当時の中国」[39]では、各キリスト教団体はまだ内陸に学校を作ることができなかったのである。

1840 年から 1900 年までの中国におけるキリスト教系学校は、顧長声によると、「1840 年から 1860 年までの第 1 期、1860 年から 1875 年頃までの第 2 期、1875 年から 1899 年までの第 3 期に大別される」[40]。

第 1 期は、アヘン戦争から北京条約までの 20 年間である[41]。前述した 1842 年に清朝はアヘン戦争に敗れ、五港開港の頃より、欧米諸国のキリスト教宣教会は中国への伝道活動を次々と始め、それらの港都市でキリスト教学校を設立し始めた。学校の設立の目的は福音を広めることを主としていたため、これらの学校は学費をとらず、衣食などを支給して、貧困な信徒の子弟、孤児を集めた[42]。最初の段階では、教会が運営する外国人学校は約 50 校、生徒数は約 1000 人だったと推定されている[43]。

しかし、当時のキリスト教学校は極めて小規模で、初等教育のみを施す程度であった。例えば、1844 年にはロンドン会が厦門に英華男子学校を開校し、1845 年にはアメリカ長老教会が寧波に、1846 年にはアメリカ聖公会が上海に男子学校を開校した[44]。そして、アメリカ監理派のコリンズ（Judson Dwight Collins）は 1847 年に福州で男子のために学校を開設した。この福州の男子学校が 1856 年に最初の寄宿学校になったが、生徒数はわずか 4 人

であった[45]。このように、当時のキリスト教学校は生徒を集めるにも苦労を強いられていた。1842 年の不平等条約の締結以降の 20 年間、キリスト教学校の発展は遅かったといわれている[46]。

第 2 期では、1860 年の不平等条約によって宣教師が中国大陸の奥深くまで進出できるようになると、教会学校の数は急速に増加した。1875 年頃には、教会学校の総数（カトリック、プロテスタント系両方の学校）は約 800 校、生徒数は約 20,000 人にまで増えていた。この段階では、まだ初等学校が多数であったが、少数の教会中等学校（全体の約 7%）が設立された。この時期に開校された有名な教会学校には、1863 年に上海に開校された聖フランシスコ書院（聖芳済書院）、1864 年にアメリカ長老派宣教師カルヴィン・マティア(Calvin Mateer、狄考文、 1836-1908)によって開校された山東省登州の蒙養学堂（1876 年に文会館と改称）、1865 年にアメリカ宣教師によって開校された北京の崇実館、同年アメリカ聖公会によって開校された上海の培雅学堂などがある[47]。

第 3 期は 1875 年から 1899 年まで、教会学校（カトリック、プロテスタント系両方の学校）の総数は約 2,000 校、生徒数は 40,000 人以上に増加した。中等学校は全体の約 10%を占めた。この頃から「大学」が登場し始めたが、実際には中等学校に大学の授業が加わったもので、生徒数も 200 人に達していなかった。有名な学校は 1879 年に設立された培雅書院と度恩書院から統合された上海ヨハネ学院である。後に上海聖ヨハネ大学となった。1881 年、ヤング・アレンは上海に中西学院（後の蘇州東呉大学）を設立した。1889 年に、広州に格致学院（後の嶺南大学）が開校された[48]。

第 3 期の特徴の 1 つは、教育対象が変わったことである。特に沿海部の都市では、ほとんどの教会学校が貧しい子どもたちを無料で受け入れず、裕福な家庭の子どもたちを受け入れようとし、高い授業料を徴収した。

次に、これらのキリスト教系学校教育内容について検討する。各学校段階にそれぞれ設けられた教科以外、共通の教育内容があった。それは宗教教育であった。当初、学校の目的が伝道のため、宗教が主な教科となった。そこで、創世記、贖罪、イエスの生涯の教義を中心とした宗教内容が教えられ、また、聖書を読むことが求められる。仮に宗教の科目を落とすようなことになれば、進級は認められなかった。さらに、ミサや礼拝、その他さまざまな宗教的な集まりに出席することが求められ、一定期間の訓練と試験を経てから、洗礼を受けなければならない[49]。

宗教的な内容だけではなく、中国の経典も教育内容に含まれている。中国人は科挙の影響で、古くから学問を重んずる伝統があるため、教会学校もこのニーズに応えていた。特に 1870 年代以降、キリスト教はその教義と、教会発展に資する儒教の要素を融合させる傾向にあった[50]。平塚益徳は高等教育機関の教科内容について、「礼拝の強制出席、聖書講義の必須なる点は従来の通りであり、之に中国学として中国の哲学、文学及び歴史が課せられた」[51]と記し、中国の古典が高等教育機関で教えられたことを指摘している。また、高等教育機関だけではなく、後にキリスト教系幼稚園も中国の伝統的教育内容を教える傾向が見られ

ている。この点に関しては第 4 章、キリスト教系幼稚園の実態の章で詳しく検討する。

最後に、近代的学科も設置された。特に 1900 年以降、中国の近代化が進んでいる中で、西洋の習慣に精通し、外国語に通じ、近代的な工業や商業の基礎知識を持つ人材が必要とされた。キリスト教系学校も聖書の比重を下げ、世俗化を進め、地理、数学などの近代的学科の比重を高くした[52]。1900 年から 1910 年までの高等教育機関の教科内容において、「中国並に西洋の両部門の教科を有し、技術乃至一般職業のための専門的学科を設置」[53]されたことがわかる。

（２）女子教育

女子に対する学校教育は前述した第 1 期から始まった。その理由について、佐藤尚子は、「中国に到着した宣教師の妻や女性宣教師達は中国人との接触の場を求め、すぐに女子のための学校を設立・運営した」[54]と述べている。最初の女子学校は、1844 年アルダーシー（Mary Ann Aldersey, 1797～1868）によって、寧波に設立された英国聖公会の学校である。その後長老派、浸礼派などは、1847 年から 1860 年まで、前述した 5 つの開港都市で女性のため 11 校の学校を開設した[55]。

以下、福州の女子教育の初期状況を例にして当時の女子教育を考察する。このような教会学校による女子教育は、第 5 章で論じる幼稚園教員養成教育の前提となっている。

アヘン戦争後、福州は開港地の 1 つとして確立された。宣教師は 1846 年に福州に入り、福州や近隣の町に礼拝堂を建て、当地の人を礼拝に参加させたのである。その後、宣教師は教義を広めるには礼拝堂だけでは十分ではないと考え、教会学校を設立し、教育を手段として中国の子どもたちに幼い頃からキリスト教に入信させようとしていた。そのために、キリスト教総会は、福州に 3 つの大きな教会組織を設立し、学校運営や宣教活動を行うための資金や宣教師を送り込んだ[56]。その 3 大教会の 1 つ目はアメリカンボードである。後に会衆派教会（公理会）となり、最後に中華基督教会閩中協会と呼ばれた。2 つ目はメソジスト教会であり、衛理公会とも呼ばれる。3 つ目は英国聖公会であり、英国にあるキリストの教会で、安立間会とも呼ばれる[57]。3 つの教会は、いずれもアメリカやイギリスの教会の直轄で、そこから直接資金を調達していた。

これらの教会によって、英華、格致、三一、文山、毓英、華南、尋珍、陶淑などに多くの男子校、女子校が設立された。キリスト教家庭の子どもを学校に集め、信徒の育成と組織の拡大を図った。もちろん、学校の設立目的は伝道であったが、結果として英語、数学、物理、化学、生物などの科学的知識を中国に普及し、人材を多数生み出すことになったのである[58]。

福州における女子教育のスタートは、1850 年にアメリカンボードの宣教師麦利和（英語名不明、以下同様）夫妻が倉前山に女学校を設立したことから始まる。その後、福州においてさまざまな宣教会が次々と女学校を設立していった。よく知られているのは、1854 年にアメリカ公理会の宣教師が南台鋪前頂に設立した文山女学校、1859 年にアメリカメソジスト派の宣教師蝸标礼と蝸西利姉妹が倉山に設立した毓英女学校、1864 年に英国聖公会の宣

教師胡約翰夫人が烏石山に設立した安日間女学校、そして、1894 年に同じく英国聖公会の宣教師が設立した倉前山に女子塾である[59]。また、華英女学堂は 1908 年に設立された。これらの教会が運営した女学校はどれも小学校レベルであり、教派と女学校の対応をまとめると、表 2－1 の通りになる。

表 2－1　1850－1912 年福州における教会女学校

校名	創立時間	所属教派	創立者	備考
不明	1850 年	アメリカンボード	麦利和夫婦	
文山女学校	1854 年	アメリカ公理会	杜立徳	文山女中の前身
毓英女学校	1859 年	アメリカメソジスト派	蝸標礼と蝸西利姉妹	毓英女中の前身
安日間女学校	1864 年	英国聖公会	胡约翰夫人	陶淑女中の前身
女子塾	1894 年	英国聖公会	張光旭、鄭珍珠	尋珍女中の前身
華英女学堂	1908 年	アメリカメソジスト派	程呂亜底	華南附中の前身

出典：劉海峯『福建教育史』、福建教育出版社、1996 年、295-296 頁より筆者作成。

表 2－1 から、これらの女学校はいずれもその後中学校レベルの学校へと発展したことがわかる。例えば、陶淑女子中学の前身は、1864 年設立の福州市内の安日間女学校であり、1900 年には初等教育段階から中学校段階への学校に発展している[60]。そして、中学校レベルになった学校においては、教員養成の教育が行われた。もう 1 つの特徴はアメリカに所属する教会の女学校が多かったことである。特にメソジスト派は 6 校の内 2 校を占めており、メソジスト派は教育に力を入れていることがわかる。この点について、平塚益徳は、「メソヂスト派」は「比較的教育事業に熱心」[61]であったことを指摘している。

この時期のキリスト教系女学校が作られた目的は 2 つあった。第 1 に、女性信者の養成である。1847 年、アメリカの教会が初めて福州に入ったが、直接の布教活動はほとんど成功しなかった。そこで宣教師たちは、教育を通じて信徒を育成しようと、学校を設立するようになった。「文山女学校の創設の目的は伝道である」[62]という記載がある。また、福州での伝道と学校運営に携わったアメリカ人牧師プラマーは以下のように述べている[63]。

> 学校は特に福音の働きに適している。深く根付いた異端や迷信的な考えを排除し、イエス・キリストの宗教に置き換える役割を担っているのである。神は全人類の父であり、イエスは全人類の救い主であることを教え、その結果、宣教機関としての役割が十分果たしている。多くの学生が神のもとに来て、私たちの最も強く賢いクリスチャンや伝道者になっている。

このように、女学校は「福音」を伝え、また伝道者を育てる必要性から設立されたことがわかる。

第 2 に、女性の劣等感を取り除き、その地位を向上させることである。宣教師たちが福州に到着した時、現地の女性は学校教育から完全に排除されているだけでなく、恵まれない状況にあることがわかった。女子校の設立は、女性にも学問をする能力があることを証明するものであった。福州の最初の女学校を設立した宣教師麦利和は、「この女学校の設立は、女性の魂は男性の魂と同様に高貴であるという我々の信念を伝播するものである」[64]と述べたとされている。

しかし、当時の中国はまだ女性が教育を受けることのできない時代であった。10 歳をこえた女子の外出禁止と、早婚の風習がある中での生徒募集は困難を極めた[65]。教会女子校の設立当初は、貧困な家庭の女児が入学の主な対象であった。当時のある教会女子校の教員の回顧録には「彼女たちは学費を払わずに登校し、学校から日用品や、時にはそら豆、ピーナッツ、軽いケーキ、塩漬けオリーブなどのおやつを支給されたという。また、厳格な制度がなく、退学者が多かった。その後、教会は生徒の親との契約を採用した。親が生徒を引き取ろうとすれば、衣食住の費用を負担しなければならず、それは一定の効果があった」[66]という記載がある。

このような状況があるため、各学校とも生徒数は僅かであった。例えば、毓英女学校は 1859 年開設の数カ月後、女子 1 名を確保したが、1 年後でも 8 名の在籍者を見るに留まった[67]。また、1881 年、聖公会は上海聖マリア書院を創設したが、女子生徒を確保できなかったため、1883 年 St. Mary's Orphanage（中国語名未詳）という女児を収容する施設を新設した[68]。この施設において養育され、後に女子生徒として書院に入学させることで、一定数の女子生徒を確保することが可能となった。つまり、初期の女子教育もあまり発展できず、男子学校と同様に生徒を集めることに苦労していた。

当時の女子教育の内容に関しては、上海聖マリア書院の授業科目授業科目には聖経、キリスト教の原理の他、中国の儒学教典である「四書五経」や地理、歴史などが含まれており、さらに算術、体育なども教育の内容となっていた。また、宣教師によって編纂された『科学入門』も教材として取り入れられた。言語面では英語、中国標準語、上海方言が使用された。さらに、刺繍、裁縫、編物、織物などの手芸を学ぶ機会が提供された[69]。これらの授業内容からみると、聖マリア書院は中国の伝統文化を重視しながら西洋文化を取り入れつつあったことがわかる。これも前述したキリスト教系学校の全体像と一致している。

19 世紀中盤以降になると、プロテスタントの宣教活動がようやく活発化し、中国本土でのキリスト教の教育事業はピークを迎えた。1876 年、キリスト教系女子学校は 82 校、生徒数 1,304 人、寄宿女子学校は 39 校、生徒数は 794 人となっている[70]。学校の全体数が増える中で、幼児教育はようやく芽吹きの時期を迎えることとなる。

２．幼児教育の芽生え

このように、初等から中等教育の学校、および女子学校が急速に普及していった。しかし、19 世紀前半、宣教師が設立した学校は、幼児教育までは及んでいなかった。では、宣教師たちはどのように中国の幼児教育へ注目し始めたのだろうか。

前述したように、キリスト教の伝道のために子どもを教育する必要性が宣教師たちの共通の認識であった。さらには、中国人の子どもを困窮した状況から救うことも宣教師たちの目的の 1 つであった。特に、宣教師たちは間引きされた女児を目にする中で、同情の気持ちをもって、中国人の子どもを困窮した状況から救うために、子どもに福祉、さらに教育を提供しようと考えた。つまり、慈愛の観点から子どものために幼児教育機関を作ることが構想された。

このように、宣教師たちは、孤児や貧しい子どもたちを受け入れ、養育、教育する施設として児童養護施設を設立した。この点について、潘静は「これらの子どもを集めて洗礼を受けさせ、信徒数を増やすには慈善施設が最も効果的な手段であった。しかし、孤児を忠誠な信徒にするためには、幼いころからの教育が欠かせない。孤児の年齢に応じて幼児教育を行う教会が多かったのはこうした理由によると見られる」[71]と述べている。つまり、宣教師は信徒を増やすために、児童養護施設で孤児や貧しい子どもたちに食事や住居、さらに幼児教育を提供した。これがキリスト教幼児教育の萌芽となった。

フランス系カトリックの大規模な孤児院は、上海、天津、南昌、青島、武漢、重慶、貴陽、長沙、広州にあった。その中で、上海でのフランス人カトリック宣教師が運営する児童養護施設は 3 ヶ所があり、それぞれ土山湾孤児院、圣母院育嬰堂、聾唖学校であった。一番早く設立されたのは 1855 年にイエズス会の土山湾孤児院であった。そして、最も規模が大きかったのは聖母院育嬰堂で、1935 年までに 17,000 人以上の乳児を受け入れた。また、イギリスのカトリック宣教団体により、漢陽、建昌（江西省）、威海偉（山東省）の 3 つの児童養護施設で、100 人以上の孤児が収容されていた[72]。

プロテスタント宣教団体が運営する児童養護施設は、カトリックよりも遥かに少なかった。イギリスプロテスタント宣教団体が運営した児童養護施設の主な場所は、太原、長沙、保寧（四川省）、新安（河南省）、宜昌であった。これらの学校はいずれも非常に小規模で、数十人の孤児しかいない。そして、アメリカ系教会によって運営された児童養護施設は、広州、上海、寧波、福州、武昌、長沙、興化、煙台にあり、同じくいずれも小規模であった[73]。

これらの児童養護施設はキリスト教系幼稚園の誕生に大きく貢献している。例えば、聖母院育嬰堂（孤児院にあたる）の子どもたちは、6 歳になると、「聖母院幼稚院」に 1 年間預けられることになる。この時期から、女児は刺繍、レース編み、裁縫を教えられ、雑用も与えられる。男児は印刷、大工、鉄工、その他の雑用を教えられ、さらに宗教的な教化と必要な文字も教えられた[74]。このように、孤児たちに教育を施すため、キリスト教幼児教育機関が誕生したのであった。しかし、この時期のキリスト教幼児教育機関は、独立の教育機関として存在していなかった。むしろ、これらの機関は貧困層への援助活動の一環として、教会

内の慈善組織の下に設立された機関にすぎなかった。子どもの教育事業として正式に幼稚園が作られるようになるのは、宣教活動が活発化し、中国本土の教育事業がピークを迎えた、19 世紀後半に入ってからである。

次に、キリスト教幼稚園の教育の目的の変遷について検討する。

前述した各幼稚園の設立状況をみると、最初の幼稚園の対象は貧しい信者の子どもや捨てられた女児であった。これらの貧しい子どもや孤児に幼児教育を提供するのは、将来のキリスト教信者を確保するためである。そして、宣教師は「日曜日のみの教会や日曜学校とは異なり、母と子どもの両者を通して伝道できることや毎日接することができるという点から、たいへん有効な宣教手段」[75]と考えていた。つまり、幼稚園もまた伝道の場としてみなされていたのである。また、「朝のお祈り、聖書のお話、食前の祈りを覗いてみれば、この子たちを通して、どれだけキリスト教の教えが家庭に届いているかがわかると思う」[76]と述べた宣教師もいた。子どもを通して、家庭にもキリスト教の影響を広めようとしている宣教師の思惑がうかがえる。このように、キリスト教の布教活動と合わせて幼稚園教育が行われていたというのが、当時の実情であった[77]。以上から、幼稚園の設立の 1 つの大きな目的は伝道であったことがわかる。

しかし、このような動向は、1877 年の第 1 回中国プロテスタント宣教師総会（the First General Conference of the Protestant Missionaries in China）を機に変わっていく。当会では、教育と宣教の関係を中心に議論が行われた。そこで、前述した山東省登州で学校を設立したマティア（Calvin Mateer）は、「今まで教育は布教活動の道具に過ぎなかったが、これからは宗教的知識だけではなく、中国人へ西洋の文化、科学を教えよう」[78]と提案した。この会議の後、教会教育の世俗化が進み、幼稚園の目的も単純に宗教教育を施すことから、子どもの成長のために、その心身の発達を助長することに移り変わった。

例えば、大会後、1898 年の福建省厦門の懐徳幼稚園の創立時の目的は、「子どもの成長を促進し、健康な体を作らせ、よい習慣を養わせ、家庭教育に協力する」[79]と規定されている。この点について、陳明霞は「厦門懐徳幼稚園は最初の本格的な幼稚園である」[80]と指摘している。このように、幼稚園は伝道の場所ではなくて、子どもの成長のための場所として設立された。

こうした流れの中で、キリスト教幼稚園もいくつかつくられ、1902 年当時、キリスト教幼稚園はすでに 6 園あることが確認できる[81]。教育対象も上層階級の家庭の子どもになった。その具体的な保育内容などは第 4 章で検討する。そして、中国の全体的な教員養成制度が確立する以前にもかかわらず、キリスト教幼稚園の普及につれて教員の需要も増加し、各地のキリスト教幼稚園が自分たちの手でそれぞれ教員を養成しようとし始めたのであった。この点について、何暁夏は「教会が幼稚園を運営すると同時に、教員養成も行っている。そして多くの教会女子学校も幼稚園の教員養成の機能」[82]をもっていたと評価している。そのため、幼稚園を運営する人物も、幼稚園の教員養成の担い手も、女性宣教師であった。以下、これら幼児教育に貢献した女性宣教師について分析する。

第 3 節　幼児教育に貢献した女性宣教師

1．女性宣教師の活動と中国への派遣理由

本節では、まず、女性宣教師の活動に焦点を当て、それらの活動がどのように幼児教育に貢献したのかを明らかにする。そして、女性宣教師らはなぜ中国に派遣されたのかについて探る。最後に、これらの女性宣教師はどのような専門性を備えた人物であったのかを明確にする。

“A Partial Report of the Kindergarten Work in Fubkien Province”（1909 年）と“A Kindergarten Survey in China”（1911 年）、2 通の報告書を概観することを通して、女性宣教師たちが行った幼児教育に関わる活動内容を整理する。以下は報告書に記載された各地の女性宣教師の活動内容である。

厦門のウェールズ（Mrs. Wales）は、1900 年に始まった幼稚園の責任者である。その幼稚園では 1909 年に 145 人の園児がいた。12 のクラスがあり、14 人の教師がいた[83]。

福州の幼稚園は、1896 年にアリス・リナム（Miss Alice Linam）によってメソジスト伝道（Methodist Mission）と関連して初めて開設された。報告当時の 1909 年に至るまで、幼稚園は着実に人数を伸ばしていた。福州のアメリカンボード・ミッション（American Board Mission）の幼稚園は、1894 年にウッドホール（Miss Woodhall）によってごく小規模に始められたが、1899 年にブラウン（Miss Brown）が来る頃には、広くて美しいデイビス記念ホール（Davis Memorial Hall）ができた。この時から 1905 年に帰国するまでの間に、ブラウンは数冊の教科書を翻訳し、福州幼稚園の歌集 *Foochow Kindergarten Song Book* を出版した。健康上の理由で帰国を余儀なくされる少し前に、ブラウンは 4 人の卒業生を送り出した。

卒業生の内の一人、フー（Miss Hu）は M.E.ミッションに所属し、自分のミッションの幼稚園で 2 年間教えた。1909 年、ストロー（Miss Strow）は学校を運営し続け、46 人の子どもたちを育てた。そして、リー（Miss Li）は、ブラウンのもとで 3 学期間学んだことがあり、この学校を手伝い、同時に公立幼稚園でも教えていた。残りの 3 人の卒業生、フー姉妹（Misses Hu）とロイ（Miss Loi）は美部会（A.B. mission）に所属し、卒業後はそれぞれのミッションで働いていた。ロイは、市内の幼稚園と女子デイスクールで声楽と器楽を含めた音楽授業を担当しているほか、ポナサン女子中学[84]で音楽を教えていた。またフー姉妹は、1907 年から 1909 年までの 2 年間、午後に政府立の学校で子どもを指導していた[85]。

以上、厦門のウェールズ、福州のアリス・リナム、アメリカンボード・ミッションのウッドホールがそれぞれ幼稚園を開設したことがわかる。そして、ブラウンは、ウッドホールの設立した幼稚園の規模を拡大した。さらに、ブラウンは幼稚園の運営だけではなく、幼稚園の教員養成事業にも携わった。ブラウンの生徒、フー、リー、フー姉妹とロイも卒業後、幼稚園で働き、中国の幼稚園教育へ貢献していた。つまり、ブラウンは自身で子どもを教育するだけではなく、教員を養成することを通して広く、幼児教育に影響を与えていたと言える。

また、1911 年に、福州に連合幼稚園訓練学校（Union Kindergarten Training School）を設立する計画が開始された。M.E.ミッションのエマ・アイヘンバーガー（Miss Emma Eichenberger）が責任者となった。すでに、1 つのクラスがアメリカで 3 年間勉強したメリー・シーア（Miss Mary Sia）による訓練中で、理論だけでなく実践も行っており、その仕事ぶりは高いレベルに達していた。このクラスは、福州の大きなクリスチャン・ヘラルド孤児院（Christian Herald Orphanage）に幼稚園を設立し、約 30 人の子どもたちが通っていた[86]。

蘇州には 4 つの幼稚園が運営されていた。この事業は西蘇州メソジスト伝道団（West Soochow Methodist Mission）が約 3 年前[87]に開始した。アトキンソン（Miss Atkinson）の指導の下、日本で訓練を受け、1911 年にさらなる研究のために、アメリカに渡っているウー（Miss Wu）の力を借りて開設された。その後、幼稚園はヨーク（Miss Yok）、現在はヴァン（Mrs. Van）によって引き継がれた。この秋には無料の幼稚園が開設され、幼稚園訓練学校の校長であるマーティン（Miss Martin）がその責任者を務めた[88]。

上海には、訓練を受けた幼稚園教員が直接管理する幼稚園が 4 つあり、そのほかにアシスタントが管理する幼稚園もいくつかあった。1 つは商務印書館（Commercial Press）[89]の後援の下、日本で研修を受けた呉夫人（Mrs. Wu）によって運営されていた。もう、1 つは南門長老宣教会（South Gate Presbyterian Mission）に所属し、イ（Miss Yi）が担当していた。1911 年に、アメリカから新しく到着したランマン（Miss Lanman）に引き継がれた。また、レオン（Miss Leung）は駅の近くに新しい幼稚園を開いた[90]。

南昌では、アメリカから来た卒業した幼稚園教員のタン（Miss Tang）が幼稚園を設立し、そして少人数のアシスタントを訓練していた。しかし、同地のメソジスト女子学校が全焼した火災により仕事が中断された中断されたが、状況が許せば年明けに作業を再開する予定、とある[91]。

南京では、リーマン（Miss Leaman）が大規模な幼稚園を経営しており、長老派の少人数の若い女性たちを助手として訓練していた[92]。

以上の内容を整理すること、表 2－2 にまとめることができる。

表 2－2　清末（民初）の幼稚園の運営と教員養成に関わった女性宣教師

地域	時期	宣教師	所属教会	勤務している幼稚園	教員養成事業
厦門	1900 年	ウェールズ Mrs. Wales	未詳	幼稚園の名称は未詳。145 人の園児が在籍	
福州	1896 年	アリス・リナム Miss Alice	メソジスト伝道 Methodist Mission	幼稚園の名称未詳。メソジスト伝道の幼稚	

		Linam		園	
福州	1894年	ウッドホール Miss Woodhall	アメリカン・ボード・ミッション American Board Mission	幼稚園の名称未詳。アメリカン・ボード・ミッションの幼稚園	
福州	1899年	ブラウン Miss Brown	同上	同上	4人の卒業生を送った。Miss Hu, Misses Hu, Miss Loi
福州	未詳	エマ・アイヘンバーガー Miss Emma Eichenberger	M.E. Mission		連合幼稚園訓練学校 Union Kindergarten Training School
蘇州	1908年	アトキンソン Miss Atkinson	西蘇州メソジスト伝道団 West Soochow Methodist Mission	幼稚園の名称未詳。ヨーク Miss Yok、ヴァン夫人 Mrs. Van によって継承	
蘇州	1911年	マーティン Miss Martin		幼稚園の名称未詳。無料の幼稚園	幼稚園訓練学校の校長
上海	未詳	イ Miss Yi	南門長老宣教会 South Gate Presbyterian Mission	幼稚園の名称未詳。ランマン Miss Lanman によって継承	少人数のアシスタントを訓練
南昌	未詳	タン Miss Tang		幼稚園の名称未詳。	
南京	未詳	リーマン Miss Leaman		幼稚園の名称未詳。大規模	長老派の少人数の若い女性たちを助手として訓練

出典：“A Kindergarten Survey in China” *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.2. Hannah C. Woodhull, “A Partial Report of the Kindergarten Work in Fubkien Province,” *Educational Review*, Vol.2, Aug, 1909, p.40.

このように、全国各地、厦門、福州、蘇州、上海、南昌、南京のキリスト教系幼稚園の教員は最初ほとんど女性宣教師であった[93]。女性宣教師らは幼稚園を開設し、幼稚園で勤務をしていた。前述したように、福州のブラウン（Miss Brown）はアメリカン・ボード・ミッションの幼稚園を運営しながら、4 人の卒業生を育てた。そして、上海のイ（Miss Yi）、南京のリーマン（Miss Leaman）も、幼稚園を運営しながら、幼稚園教員の養成事業に携わっていた。唯一幼稚園を運営せず、教員養成事業に集中する宣教師は、福州の連合幼稚園訓練学校の設立準備に携わったエマ・アイヘンバーガー（Miss Emma Eichenberger）であった。

以上から女性宣教師たちは、以下の 3 種類の方式で中国の幼児教育に貢献した、と結論づけることができる。1 つ目は幼稚園だけを運営すること、2 つ目は幼稚園教員養成校を設立・運営すること、3 つ目は幼稚園を運営すると同時に幼稚園教員を養成することである。このように、各宣教団体は、中国の幼稚園教育が始まった当初の時期に、各地に独自の幼稚園を設置し始めた。そして、こうしたキリスト教幼稚園の普及に伴って保育者の需要も増加し、各地のキリスト教幼稚園が自分たちの手でそれぞれ保育者を養成しようとし始めることとなる。

では、なぜこれらの女性宣教師は中国に派遣されたのであろうか。

中国への女性宣教師の派遣は 3 つの原因が考えられる。第 1 に、男性宣教師の家族として共に中国へ渡ったことである。石井紀子は、「海外伝道が始まった 19 世紀前半、女性たちはまずは宣教師の妻として海外伝道に赴いた」[94]と述べている。1904 年の『万国公報』によると、「1903 年、東洋で宣教するキリスト教の男女は 2,950 人で、男性は 1,233 人、妻は 868 人、未婚の女性は 849 人」[95]である。つまり、中国における女性宣教師の総数は男性よりも多く、その約半分は男性宣教師の配偶者として中国へ赴いたわけである。

第 2 に、欧米の独身女性は自己実現のため海外で宣教を行なっていた。19 世紀半ば、欧米ではフェミニズム運動が本格化し、女子大学が誕生するなど、教育を受ける権利を獲得するための闘いにおいて、女性はすでに大きな成果を上げていたのである。しかし、女性宣教師が長い間、男性宣教師より低い報酬を受けてきたことはよく知られている。そのような女性宣教師にとって、中国への渡航は、女性の自立と社会的地位の向上という、西洋では実現できない理想を実現するチャンスであった[96]。

第 3 に、中国の一般女性への伝道という観点から見た場合、女性宣教師の方が男性宣教師よりも、その任を遂行し易い環境下にあった、ということがあげられる。特に「男女は直接接触してはならない」という風習を重んじていた中国では、女性宣教師が中国の一般女性に伝道するには好都合であった。実際、1834 年当時、中国にいた男性宣教師は、中国伝道が成果をあげられない理由として、中国女性に男性宣教師が接触できないことを挙げ、そのため、独身の女性宣教師の派遣が急務であると訴えた[97]。こうした背景から、中国に女性宣教師を派遣し、女性伝道所を設置して宣教活動を推進することとなったのである。

以上の 3 つのきっかけによって、女性宣教師たちは海を渡って、欧米と全く違う文化をもっている国で宣教し始めた。そして、彼女たちが最初に見たのは清末の女性と子どもが置か

れた悲惨な状況であった。彼女たちの目には、現地の女性と子どもは哀れで、尊厳を踏みにじられた存在に映った。福州の協和幼稚女子学校の教師の回顧録には、「当時、中国の女性はまだ保守的な纏足の時代で、教育熱心な家庭の女性は古い私塾の先生のもとで四書五経を読むことはできても、娘を外国の学校に勉強させようとする家庭はなかったのである。労働者階級の家庭では、女の子は一人しか残さず、残りは『童養媳』[98]やメイドとして手放されるのが普通で、赤ん坊の女の子が溺死することも珍しくなかった」[99]と記載されている。その結果、女性宣教師たちは「中国女性の平等な権利のための聖戦に参加する」[100]ことを決意し、中国の女性と子どもに教育の機会を与えようとしたのである。

２．キリスト教女性宣教師訪中以前の学習歴

本項では、二人の女性宣教師のライフストーリーから、キリスト教女性宣教師訪中以前の学習歴を検討する。

まず、1 人目はビューラ・ウルストン（Beulah Woolston,1828-1886）である。ビューラ・ウルストンと妹サラ・H・ウルストン(Sarah H. Woolston, ?-1910)は、アジアで最初のアメリカ・メソジスト女学校の創立者であり、毓英幼稚園の創設者である。

ビューラは 1828 年 8 月 3 日、ニュージャージー州ビンセントタウン近郊で生まれ、1886 年 10 月 24 日、ニュージャージー州マウント・ホリーで死去した。生まれ故郷で予備教育を受けた後、妹であり、家庭や仕事での生涯の仲間であったサラ・H・ウルストンとともに、デリー州ウィルミントンのウェスリアン女子カレッジ（Wesleyan Female College, at Wilmington）に進み、英語と古典の両学科を優秀な成績で卒業した。その後、同女子カレッジで数年間教員として勤めた。メソジスト・エピスコパル教会（Methodist Episcopal Church）の宣教委員会から、中国で「女性の仕事」を始めるようにとの呼びかけに応え、1858 年に中国に向けて出航した。1859 年 2 月 27 日に上海に上陸し、3 月 19 日に福州に到着した[101]。彼女たちを支援したのは、1848 年にアメリカで最も早く設立された女性宣教師協会のひとつであるボルチモア婦人中国宣教師協会（Ladies' China Missionary Society of Baltimore）であった。1859 年、ウルストン姉妹は教師養成のための女子寄宿学校と児童養護施設（乳児院）を福州に設立した。児童養護施設は捨てられた女児を引き取り、女学校と協力関係を結んでいる。毓英（Uk Ing）として知られるこの学校は国民党時代まで続き、多くの医師、教師、牧師の妻を輩出した[102]。

1868 年に休暇でアメリカに帰国した姉妹は、アメリカでの公立幼稚園の隆盛を目の当たりにし、1872 年に中国に幼稚園の設立計画を立て始めた。こうして 1875 年から 1881 年の間に、「乳児を育てるために乳母を雇うべきであり、幼児には女性教師を雇って教えるべきである。年長児と年少児が互いに助け合い、秩序を保つ」ことを目的に、幼稚園が児童養護施設（乳児院）に併設された。ウルストン姉妹は、国内のデイ・スクールを巡回・監督し、中国語で『子どものための絵入り新聞』（*Child's Illustrated Paper*）も編集した[103]。

もう一人の女性宣教師は福州協和女子幼稚師範学校の初代校長アレン（Bertha H. Allen）

である。アレンはカリフォルニア州パサデナで生まれ育ち、ポモナ大学（Pomona College）とロサンゼルス州師範学校（Los Angeles State Normal）の幼稚園コースを卒業した。太平洋女性宣教委員会（Woman's Board of Missions for the Pacific）によって中国に派遣された彼女は、福州に 1918 年に設立された協和女子幼稚師範学校の校長となり、8 つの幼稚園を監督し、卒業生の幼稚園を可能な限り頻繁に訪問し、毎年恒例の卒業生研究会を発足した[104]。

以上のように、ウルストン姉妹は、ウェスリアン女子カレッジ（Wesleyan Female College）の英語と古典の両学科を卒業、アレンはポモナカレッジ（Pomona College）とロサンゼルス州師範学校（Los Angeles State Normal）の幼稚園コースを卒業した。つまり、女性宣教師が中国に派遣される前に、カレッジで学習したことが確認できる。この点について、何暁夏によれば、「ヨーロッパでは古くから聖職者が教師であるという伝統があったため、宣教師が中国に入る前の訓練には、さまざまな知的要素が含まれていることが多かった」[105]という。

そして、ウルストン姉妹は、卒業後、同女子カレッジで数年間教員として勤めた。本国で教職をとることについて、ジェーン・ハンターによれば、特にアメリカの宣教師の場合、「中国で宣教する以前に教職に就いていた女性の割合は、アメリカンボードでは 75%、メソジスト派では 72%」[106]であった。ウルストン姉妹もメソジスト派に所属していたことから、この指摘を裏書きしていると言える。

このように、アメリカの女性宣教師は本国で教育を受けたことがある場合が多く、アメリカで教職についた割合も多かったのである。当然、幼児教育に貢献した女性宣教師もその例外ではなかった。

では、女性宣教師はアメリカでどのような教育を受けていたのであろうか。以下、アレンを例にして分析する。前述したように、アレンはロサンゼルス州立師範学校の幼稚園科を修了した。同師範学校幼稚園科の幼稚園教員養成コースは年限 2 年の課程であり、アレンが 1915 年 12 月に卒業している[107]ことから、彼女は 1914 年に入学したことがわかる。同校の 1914 年の学科課程は以下のようになっている[108]。第 1 学年は 3 期に分かれ、学科目は科学、美術、理論、遊戯、手工、物語、ピアノ、心理学、音楽、観察である。そして、第 2 学年も同じく 3 期に分かれ、学科目は教育、教授法（Teaching）、保育内容編制（Program）、衛生で、選択科目は理論、遊戯、補足科目から構成されている。その中でも特に、理論という科目では、フレーベルの著作『母の歌と愛撫の歌』と『人間の教育』が学習の主題として取りあげられている。また、手工という科目にもフレーベルの「恩物」についての学習が組み込まれている[109]。ここから、フレーベルの教育思想と恩物教授法の両方が教えられていたことが明らかになる。

アレンが受けた保育者養成教育は、当時のアメリカの一般的な養成コースであった。阿部真美子も指摘するように、19 世紀末から 20 年間にわたり、特に 20 世紀の初めの 10 年代において、「初期養成型（私立の養成校）は充実への努力が目立つようになり、二年制養成

が主流を占める」[110]ようになってきた。同時期に、各州では資格制度が整備されていた。保育者養成は、2 年間のカリキュラムが標準的とされ、1 年目では科目履修と観察、2 年目では教育実習が行われる形式が確立されていた。科目には「教育の原理と方法、音楽、算数、芸術、倫理学、文学、描画」[111]など多岐にわたる講義科目が含まれていた。これらの養成校の中でも、一部の学校は特にフレーベルの幼稚園教育思想を重視し、恩物の原理とその使用方法について学ばせることに力を入れていた。具体的には、「子どもの本性や探究心等を満たしつつ恩物の形をどう学習をさせたかという方法を具体的に学ばせた。又恩物の基本として基礎的な幾何学を学んだ上で、それらを用いて創造的デザインについて学ばせられ、相当時間を費やして恩物の多様なパターンを記すノート制作を行わせた」[112]といった学習内容が含まれている。

以上のように、アレンと同じ時代の女性宣教師たちがアメリカで受けた保育者養成課程は、フレーベルの幼稚園教育思想を重視したものであり、恩物の原理とその使用方法も教育内容に含まれていった。その後、こうした教育を受けた女性宣教師たちは中国へ渡り、自分の学習した知識を活かし、中国の幼児教育に影響を与えたのである。なお、本論文の第 4 章では、女性宣教師によって行われていた幼稚園の実践の特徴を分析するが、その際も、彼女たちの学習歴と関連付けながら分析する。

第 4 節　キリスト教宣教師によるフレーベル幼児教育思想の受容

周知のように、フレーベルが 1840 年にドイツで幼稚園を創設し、その後欧米諸国に広がって、1856 年にはアメリカで最初の幼稚園が開園された。アメリカを経由し、1876 年に日本で最初の官立幼稚園（東京女子師範学校附属幼稚園）が設けられた。そして、中国でも 1904 年に最初の官立幼稚園である湖北幼稚園が日本の影響を受けて設立された。先行研究では、中国の幼稚園は日本のフレーベル主義幼稚園をモデルとして出発したとされる。日本の幼稚園では恩物が教育遊具として用いられる傾向が強かったことから、日本を経由して中国に導入されたフレーベルの教育思想もまた、恩物を中心として受容されたと言われている。こうした背景から、楊玉珍は清朝末期中国におけるフレーベルの幼稚園教育理論の導入と受容の特徴を、「その時期中国に伝わったものはフレーベルの恩物が主要な内容であって、それと関連するフレーベルの幼児教育思想、例えば、自己活動の原理、遊戯、活動の価値の強調、幼児教育者の養成論など」であり、さらには「フレーベルの幼稚園教育の根本となる彼の教育哲学思想及び宗教思想はほとんど伝わっていなかった」[113]と指摘している。このように、先行研究では、フレーベルの教育思想における恩物以外の側面やその根幹をなす彼の教育哲学思想及び宗教思想についてはほとんど受容されていなかった、ということが通説とされている。

しかし、先行研究では日本モデルの受容しか検討していない。他方で、幼稚園の制度化以前にミッション団体が中国で幼稚園を経営しており、その際キリスト教宣教師によりフレーベルの教育哲学思想及び宗教思想に関する情報も紹介されていた。そのため、中国へのフレーベルの導入において、恩物以外の側面や宗教思想について触れられていなかったという通説とは裏腹に、宣教師たちのフレーベル思想の受容は恩物だけに焦点化されていたわけではない。すなわち、当時の中国には恩物の操作方法に注目しているフレーベル理解と、恩物の奥に神の摂理を見出すフレーベル理解という 2 種類の違う角度からの理解が存在していたのである。

こうした観点を踏まえ、本節では、4 人の宣教師、フランシス・ジェームズ（Francis Huberty James，秀耀春,1851-1900,男性）、ヤング・アレン（Young John Allen,林楽知, 1836– 1907,男性）、パール・ボッグス（L. Pearl Boggs, 1873–1931,女性）、マリー・シーア（Mary Sia,女性）のフレーベルに関する *Educational Review*、『万国公報』での紹介記事を取り上げ、当時の宣教師がフレーベルの教育哲学思想及び宗教思想のどのような側面を受容していたのかを、恩物以外の受容にも焦点を当てながら明らかにする。その際、フレーベルの著書と対照しながら考察していく。

1. 幼稚園の保育内容について

まず、幼稚園の保育内容について考察する。ボッグス（L. Pearl Boggs、1873–1931）は「フレーベルの教育理論の現代的解釈」(A Modem Interpretation of Froebel's Educational Theory）という論文の中で、フレーベルの考案した幼稚園の保育内容について論述している。ボッグスは教育者、心理学者、女性問題を研究する学者でもあった。彼女は 1910 年 10 月 24 日、メソジスト監督教会（Methodist Episcopal Mission）によって南京に派遣された[114]。1911 年に華中幼稚園協会（Central China Kindergarten Association）の文芸委員会の一員になり[115]、中国の幼稚園事業に携わった。同論文は、フレーベルの哲学の主要な信条を可能な限りフレーベル自身の言葉で簡潔に述べ、それが当時の心理学に照らして、どのように解釈されるかを明らかにしようとしたものである。ボッグスは幼稚園の保育内容について以下のように述べている[116]。

> 彼＜フレーベル＝筆者注＞は、ボール、ブロック、板、棒といった恩物のシステム(system of gifts)を考案し、子どもの心に最大の活動範囲と創意工夫を可能にした。また、作業具（occupation）も考案した。これは、行動計画を立て、自分の意志で行動することを規制するための一歩である。
>
> 彼は、魅力的な物語、自由な会話、歌、ドラマチックな遊びなど、朝の会（morning circle）を計画した。また、リズミカルな行進やランニング、スキップを教室に導入し、子どもの豊かな活動を身体全体で表現するという要求に応えた。
>
> 最後に、季節や時間、天候によって変化する自然の様子を観察し、森や草原を長く歩き、

石や植物、動物を集めて学校の教室に持ち込み、生きた動物を飼育し、花や野菜を栽培して幼稚園生活の一部にすることで、自然と親しむ方法を紹介した。

以上、ボッグスによれば、フレーベルの幼稚園の保育内容は①恩物、作業物による遊びと、②物語、歌などを含む朝の会、③体を動かす活動、④自然との関わりなどから構成されている。この点に関連して、白川蓉子の研究によると、フレーベルによるオリジナルなキンダーガルテン、つまりフレーベルの考案した幼稚園の保育内容は「①遊具・作業具による遊戯（spiel）と作業（beschäftigung）、②運動遊戯（bewegungsspiele）(歌を伴うもの、歌なしの競争、ボール遊び)、③自然との関わり、作業のひとつとしての栽培活動、④言葉、お話、読み書き」[117]とされている。白川の指摘と対比すると、ボッグスの理解した幼稚園の保育内容はフレーベルのオリジナルなキンダーガルテンの保育内容と一致していると言えよう。

以下、自然、言葉、遊びの 3 つの領域に分けて、宣教師の理解したフレーベル考案の保育内容について検討する。なお、遊びはフレーベルの幼児教育思想の中核であることから、最後に項目を改めて論ずる。

まず、自然について分析すると、ボッグスは以下のようにフレーベルの子どもと自然の関わりについての考えを説明している[118]。

> フレーベルは、子どもたちが自然に親しむことを望んだ。彼は、子どもたちが見たり聞いたりするものすべてに興味を持つことをよく理解しており、自然の出来事や物を観察することによって、子どもたち自身の経験を豊かにできると考えた。そのため、1 年の季節、太陽と月、種まきと収穫、小川と風、花と鳥、これらすべてが 1 日のプログラムの中心的なテーマとなっている。このプログラムは、心理学的に最も重要な法則、すなわち「観念の連関」に基づいている。子どもが自分の周りで見ているもの、一日の生活の一部であるものを幼稚園のテーマとして取り上げ、これを中心にゲーム、物語、手作業を行う。心理学の法則によれば、心の中にあるすべての観念は、何らかの筋肉活動で表現される傾向がある。そのため、小さな手がブロックや紙、粘土や木で忙しく動き、現実の世界で見たものをミニチュアで作ろうとしている。また、庭があれば、太陽や雨、土がもたらす恩恵や、霜や害虫がもたらす悪い影響を観察することができる。

このように、フレーベルは子どもたちが自然に親しむことを望み、自然をテーマとしたプログラムで心と体の発達を促すことを目指している、とボッグスは認識していた。また、ボッグスは心理学の専門の立場からフレーベルを評価していた。フレーベルの方法論は、心理学的な法則である「観念の連関」に基づいており、子どもたちが自分の周りで見たものを中心に学ぶことで、学びを深めることができる。子どもの持つ自然を表現する衝動ということが心理学から解釈しても成立することは、フレーベルの思想の科学性を示すことに等しい、とボッグスは再評価している。

次に、言葉といった保育内容について、ボッグスは次のように論述している[119]。

> フレーベルは、体や手足の筋肉を使った運動表現に加えて、他人と関わりたいという内なる欲求を満たすために、子どもは言葉で自分を表現する必要があると考えた。そこでフレーベルは、子どもの想像力に合った物語を聞かせ、それを理解し、自分の言葉で繰り返すことができるような、シンプルで重要な物語を作ることを計画した。これらの物語は、道徳的な真理を、子どもが両親や兄弟姉妹との家庭の輪の中で交わす際に、魅力的で役に立つ形で扱うものであった。フレーベルは、このような物語を通して、感情を教育することを望んでいたのである。そして、フレーベルは、道徳的な行動への真の衝動は、心や感情から生まれると信じていたからである。フレーベルのいう「感情」とは、単に複雑な感情のことではなく、パンや住居を得るための闘い、食事や暖かさを楽しむこと、敵を追い、敵から逃れること、家族生活の優しい結びつき、宇宙や人間、自然の中の神への畏敬と尊敬といった、人類の基本的な体験に根ざした人生の深い底流を意味している。もし、これらの経験を幼い子どもに伝え、その行為の善悪を真摯に判断させることができれば、子どもは同じような経験をしたときに、自分で判断するための最初の訓練を受けることができる。文明が複雑になった今日、社会がその構成員に要求するすべてのことの善悪を子どもに教えることは望めない。しかし、食事の節制、家族の愛と保護、すべての贈り主への感謝など、全人類の共通体験の善悪を子どもが知っていれば、様々な状況に対して基本的に正しい態度をとることができるようになると信じられる。

このように、ボッグスによれば、フレーベルは、言葉は他人との関わりとの衝動から生まれたものであり、子どもが自分を表現するために言葉が必要だと考えた。また、フレーベルは言語能力を育成するために、子どもの想像力に合ったシンプルで重要な物語を作り、道徳的な真理を教育することを計画した。実際、フレーベルは『人間の教育』において、「お話」は「日々の出来事、季節季節の出来事、および生活上の出来事とむすびつけてする、歴史物語や伝説に関するお話し、寓話・童話を話すこと」[120]と定義している。つまり、ボッグスが理解した「子どもの想像力に合った物語」はこの「お話」と近似している。

また、ボッグスによれば、フレーベルは、物語を通して、感情を教育することができ、行為の善悪を真摯に判断する訓練を受けることができると考えている。つまり、ボッグスは、直接善悪を子どもに教えるのではなく、物語を通して、子どもに考えさせることの重要性を理解していたと言えよう。この点に関しては、フレーベル自身も、物語が少年の心に深い影響を与える力を持っているため、特別に教訓や道徳的な価値を加える必要はないと考えている[121]。

２．フレーベルの遊びの理論について

前述したように、フレーベルの幼児教育思想の中核になっているのは遊びについての理論である。遊びについてのフレーベルの言葉を見ると、「この時期の子どもの遊びには大変深い意味がある。遊びはこの期における子どもの最も純粋な精神的生産である。遊びはそれ自身において喜びであり、自由であり満足である。子どものどのような遊びも、全生涯のいわば子葉である。遊びの中には、全人の最も清らかな素質やその最内奥の精神が発揮され示されている」[122]との記述から、その重要性を読み取ることができる。また、フレーベル研究者の荘司雅子は「フレーベルは、幼児教育の根本はまず幼児を遊ばせながら導くことであり、遊びを指導することである」[123]と述べている。

宣教師たちも、遊びの重要性に気付き、フレーベルの遊び理論について各自の理解を述べていた。まず、その重要性に着目した一人、アメリカ人宣教師のヤング・アレンを取り上げる。彼は、1905 年に「論中国亟需設立幼稚園〔中国の幼稚園設立の喫緊の要を論ず〕」[124]と題する文書を発表し、遊びについて以下のように記している[125]。

> しかし、これは絶対に書物から教えられるものではない。児童の年齢は 7 歳以下ならば、書物からその能力を引き出すことはできない。7 歳以上でも難しい。子どもを教えるのは、子どもの性質に合わせなければならない。それは何か？遊戯である。子どもにとって、遊戯は食物のようなものに見える。宗教も、世界も、あらゆる事物はそれを中心とする。それゆえ、遊戯は児童の仕事である。

アレンは子どもの発達にとって遊戯が飲食と同様に不可欠であると主張し、遊びの重要性を強調している。遊びはフレーベルの思想の中で非常に重要な位置を占めている。つまり、遊びの重要性を強調した点は、フレーベル思想の要点を的確に捉えているといえる。

また、ボッグスは、遊びの基本構造やメカニズムについて説明している[126]。

> 自己活動（self-activity）という基本的な考え方は、心理学者のいう本能的な活動である。本能とは、若者が受け継ぐ行動様式のことで、目的を達成することよりも、むしろ活動そのものに満足感を見出すものである。私たちは皆、幼い子どもが筋肉を動かすことを純粋に楽しむために、手や足を様々に動かすのを見たことがある。また、幼い子どもは様々な指遊びを楽しんでいる。年長児になると、行進、スキップ、ランニングなどのリズミカルな動作が大好きになる。創造的な活動はその後の発達で、自分の周りの環境に反応したい、つまり、自分の活動が自分の周りの人や物に何らかの結果を与えたいという子どもの欲求を表している。したがって、自分の活動の結果を示す簡単な玩具やプラスチック素材、また砂、粘土、土などを欲しがることがわかる。このような活動様式は、フレーベルのいう「内的なものを外的なものにする」（internal external）。＜中略＝引用者＞自己表現はさらに一歩進んで、活動を始める前に子どもが観念を心に抱

いていることを示すが、それでもまだ結果よりも活動への愛のほうが優位を占める。その後、目的や結果が優先されるようになると、子どもの外側にある興味について、子どもが理解しようとし、自分のものにしようとする。これがフレーベルのいう「外的なものを内的なものにする」である。

ボッグスは具体的には、自己活動という基本的な考え方や、本能的な活動の存在、創造的な活動への欲求、そして自己表現という概念などを取り上げ、遊びは自発的な活動や自己表現を通じて、子どもたちが自己実現を目指すための重要な手段であるとしている。フレーベルの考え方によれば、遊びは「内面的なものの自主的な表現、内面的なものそのものの表現」[127]である。フレーベルの遊び論については、荘司雅子の『フレーベルの教育学』に、それが「内と外の関係による世界の解釈」を具体化したものであるとされている[128]。すなわち、遊びの本質が、「内的なもの」と「外的なもの」との相互関係に基づいていることが明示されている。

さらに、ボッグスは遊びが幼稚園の一日を構成すると理解し、次のように述べている[129]。

これらの遊びは、子どもが自由に活動できるようにする以上の重大な目的がないため、私たちはこれを遊びと呼んでいる。すべての遊びが純粋に本能的なものであるわけではないので、私たちは生涯を通じて遊びの要素があるとしている。やがて、感覚や運動による芸術的な楽しみが始まり、音楽、絵、演劇、リトミックなどの遊びが、幼稚園の楽しい一日の中で大きな役割を果たすようになる。

遊びとその意義について、詳しく紹介したのは福州の幼稚園の園長シーア（Mary Sia）であった。この紹介は、“Play and its Meaning”という記事に見られる。管見の限りでは、これが当時の中国で、フレーベルの遊びの理論に関してまとめられた最初の記事である。マリーはまず、フレーベルの原文から以下の部分を引用している[130]。

「遊びは、幼年期の人間の最も純粋で霊的な活動であり、同時に、精神生活全体、すなわち、人間や万物の内側に隠された自然界の生活の典型である。それゆえ、喜び、自由、満足、内外の休息、世界との平和を与えてくれる」−フレーベル。

こうした引用文は、シーアがフレーベルの原文を直に読み、その経験に基づいてフレーベルの思想について解説を加えようとしていることを物語るものである。そして、シーアは、「フレーベルは、遊びを教育システムの有機的な一部とし、単にレクリエーションやリラクゼーションのためだけでなく、子どもの身体的、精神的、道徳的な性質を発達させる最も効果的なものとして位置づけている」[131]とフレーベルの遊びの位置づけを明らかにした。

次に、彼女は子どもの遊びの教育的意義を紹介している[132]。

身体の活動は、脳そのものの成長に直接的な影響を与える。心と身体は、有機的な全体の一部であり、その間に最も密接な相互関係があるように思われる。もし小指が力強く、優雅に、多彩に動くように訓練されていなかったら、脳のある部分は最高の発達に達していないと言われている。もしそうだとしたら、遊びのように、心と身体の両方に働きかける何らかの手段で訓練することが、いかに重要であるかということになる。
子どもは遊んでいるとき、喜びをもたらす活動を探し、見つけている。活動や喜びは、宗教において非常に重要な要素である。なぜなら、それらは魂の完全な成長を示すものであり、子ども時代の魂の完全な成長は、成熟した魂の完全な成長の唯一の確かな基盤である。そこでフレーベルは、すべての子どもたちに、遊びの自己表現と道徳的発達を通じて、喜びと活動の機会を最大限に与えることを切望したのである。

このように、彼女は遊びの意義を、①心と身体の発達を助長すること、②精神、道徳の発達を促すことと捉えている。①について、『人間の教育』では、「感覚の発達につれて、同時に、またそれとつりあうように、身体の、特に四肢の使用が、幼児のなかに発達してくる」[133]と、心と身体の平衡的な発達が説かれている。また、②については、「道徳的、宗教的に立つということが、人間発達の最後の段階にとって、重要な意味を持っている」[134]とあるように、道徳と発達の関係が述べられている。
さらに、シーアは、遊びの種類について紹介している[135]。

遊びは 2 種類に分けられ、1 つは自由遊びと呼ばれる本能的な活動で、もう 1 つは指示遊びと呼ばれる指導の下で行われる活動である。自由遊びには、屋内外を問わず、すべての子どもが自分自身で、その遊びのルール以外の規制を受けずに行う遊びが含まれる。例えば、「かくれんぼ」「かっこうかっこう」「目隠し鬼」、学校、教会、家庭での模倣遊び、飼育されている動物との遊びなどがある。指示遊びでは、大人が子どもをより高い次元の遊びに導こうとする。このように、母親は赤ん坊の偶発的な手の動きを見て、歌や手本を見せたり、自分の手を使ったりして、赤ん坊の活動にリズムの要素を取り入れ、遊びの目的を持たせようとする。教師は、砂場で子どもに丘や道を作り、森を植えることを提案し、思慮深い計画を喚起する。このような遊びは、後にライフワークとして発展し、同じような喜びと満足感を得ることができる。

このように、シーアは、遊びを自由遊びと指示遊び、2 種類に分けた。注意すべきなのは、ここでいう指示遊びは、大人が方向づける遊びを指しており、「恩物主義」と批判されるような、恩物を予め定められた手順に従って形式的な教え方による遊びではなかった、ということである。
その後、シーアは仕事と遊びの関係、また違いを次のように、詳しく説明している[136]。

仕事と遊びの違いは何だろうか。仕事では、個人は社会の個々の欲求に身を委ねることになる。自分の特別な好みや欲望を捨てなければならないかもしれない。自分の快楽を犠牲にしなければならないかもしれない。自分の仕事が終わるまでは、リラックスすることができない。一方、遊びでは、彼の活動は完全に自分の即時的な満足に向けられる。幼年期の遊びは、その後の人生のすべての芽となる葉であり、芽吹きの段階で損なわれることのないよう、どれほど注意深く育てなければならないことか。遊びは、内面的な生活の自己活動的な表現であり、善なるものの源泉を握っているのである。だから、小さな子どもたちには、健康な小さな体を作るために、走ったり、スキップしたり、スイングしたりさせ、精神力を鍛えるために、鍛冶屋や車夫や商人をさせ、家庭生活の甘さを学ぶために、母と子のゲームをさせ、愛国心を持つために、国のゲームをさせる。

子どもの頃の遊びは、その後の人生のすべての芽になるとシーアは理解している。このように、遊びは将来の仕事に発展させることができるという論調から、シーアは遊びの重要性を主張したいとの意図が読み取れる。

最後に、シーアは、改めて遊びの重要性を強調し、次のように文章を締めくくっている[137]。

フレーベルは、「自分の意志で徹底的に遊び、くたくたになるまで根気よく遊ぶ子どもは、必ずや自分と他人の福祉の増進のために自己犠牲ができる、徹底的な意志を持った人間になるだろう」と言っている。

これは人生の高い目標である。だからこそ、父、母、そして先生たちが、幼少期に子どもの遊び心を育み、導き、育てることで、子どもの人生が片寄ったものにならず、肉体的にも精神的にも完全に発達し、その結果、子どもは完璧な万能人 perfect all-round man に成長するだろう。

このように、シーアはフレーベルの理論に従って、幼少期の遊びが、子どもの人生にとって、肉体的にも精神的にも非常に重要な位置を占めていると認識していた。また、この受容に基づいて、シーアは中国で幼稚園教員を養成していた。実際、1911 年に福州に連合幼稚園訓練学校 Union Kindergarten Training School の計画が開始された頃、シーアはすでに、1 つのクラスを訓練している[138]。つまり、遊びを重視した理論は、シーアを通して将来の中国の幼稚園教員へ伝わっていったのである。

３．幼稚園の創設目的について

次に、フレーベルの幼稚園理論の中での幼稚園の目的について検討する。ここで、フランシス・ジェームズとヤング・アレンの述べる受容を中心に検討する。ジェームズは China Inland Mission（CIM）の一員として 1876 年に中国に渡ったイギリス人宣教師である。彼

は、1899 年 2 月に、「養蒙正軌　下　福若伯訓蒙法〔幼児教育の正道　下　フレーベルの幼児教育法〕」という文章を『万国公報』に載せた。この文章は中国最初のフレーベル紹介文であると言われる。ジェームズはフレーベルが幼稚園を創設した目的について、以下のようにまとめている[139]。

> 子どもは家にいる時、母から教育を受けているが、母の才能と徳が限られているから、十分に教えることはできない。普通の人たちは子どもが小さい頃家庭でしつけるだけで十分だと思うのに対して、フレーベルは子どもの成長は親のみと関係するわけではなく、もし将来立派な大人になれば、すべての地元の人たちは「徳」を受け、もし出世できない（原文：不肖）なら、すべての地元の人たちは害を受ける。

つまり、ジェームズによると、フレーベルが幼稚園を創立した意図の 1 つは家庭教育において、親の教育能力が不十分であることにある。幼稚園は、その家庭教育を補完し、支援する施設である。幼児教育を受けた子どもは「親のみと関係するわけではなく」、地域社会とも関係をもつ。

フレーベルは「1840 年の幼稚園創設計画ならびに 1843 年の弁明書」において、幼稚園の重要な意図について、次のように指摘している[140]。

> ドイツ幼稚園は、就学前の子どもたちの適切な保育に対する切実な要求から、1840 年にドイツ人の共同の教育事業として設立された。それは、全体として現在あるごとき、また現在の状況のもとであり得るごとき、家庭での就学前児童の個別教育は、もはや現代の諸要求にとって十分ではないという確信にもとづいている。したがってこの幼稚園の意図は、家庭及び社会全体にそのために必要な援助の手をさしのべることを目的としている。

つまり、フレーベルにとって幼稚園の目的の 1 つは、子どもに対する適切な教育方法によって、家庭教育と社会を支援しようとするものであった。幼稚園の家庭教育の支援の機能というジェームズのフレーベル理解は、実際のフレーベルの主張と一致していると考えられる。

そして、幼稚園のもう 1 つの目的について、ジェームズは以下のように理解している[141]。

> 子どもは活動する本性があり、親の強制により、子どもの本性が抑圧される。子どもは好奇心をもち、聞いたことがないものを聞く時は必ず質問する。見たことがないものを見る時は必ず触る。これは全部自覚がない行動である。この時子どもがいたずらっ子と思って叱るのは大間違いである。フレーベルがなぜ幼稚園を創設するのかといえば、子どもはよく動くから、その本性に従って、前に向かって少しずつ誘導することにより子

どもを有用な人材に育てることができるからである。

ジェームズのフレーベル理解によれば、子どもは自由な活動の衝動があり、その衝動を確保し、正しい方向に誘導するために、幼稚園が創設されている。この理解について、フレーベルは実際、「このように人間の本質および人間の形成衝動や活動衝動に基礎をおき、またこれらの衝動をはぐくむことに結びついているこの学園（幼稚園）は、まさに 1 つの生きた全体であること、それ自身いわば一本の樹木のようなものになることを目指している」[142]と述べている。とりわけ幼稚園は子どもの本質に基づく自由な活動を保障し育むための施設である。「子どもの自由な活動の保障」という点でジェームズとフレーベルは一致している。

以上のように、幼稚園の家庭教育の支援と子どもの自由な活動の保障という 2 つの目的に関して、ジェームズはフレーベルの思想をしっかり理解していたと言えよう。

そして、ヤング・アレンは幼稚園を設立する目的を伝道と結びつけている。アレンは以下のようにいう[143]。

> 中国で早く幼稚園を設置する必要がある。我々宣教師は、中国人に伝道する際に、幼稚園の効果が最も大きいと知っている。そのため、幼稚園の設置を最優先任務にするのは過言ではない。幼稚園を設置することによって、道徳教育で子どもを救うわけである。〈中略＝引用者〉子どもを救うのは現代の急務というべき大事業である。我々（教会）は子どもの能力が始まる時から子どもを養成する。

以上の文言を見ると、アレンは明らかに宣教師という立場から幼稚園の意義を捉えている。幼稚園は伝道のための機関として見なされている。一方、フレーベルは 1840 年 6 月 28 日に、ドイツ・キンダーガルテンの創立祝賀会で、次のように述べている[144]。

> それゆえわたしたちの学園もまた、幼児の幸福のための、わが国民の幸せのための、人類の救済のための施設でなくてはならない。なぜならば、この学園は神の生命と活動に一致して、また神の人類教育と一致して、そしてあらゆる存在や事物における聖なる高き神の精神の創造と活動と導きと一致して企てられるものなのだから。

ここでは、フレーベルは幼稚園を「幼児の幸福のための、わが国民のしあわせのための、人類の救済のための施設」と捉えている。つまり、神と幼稚園は密接に関係し、神の意志や精神を理解し、それに沿った教育を行う必要があるとされている。しかし、フレーベルは本来宣教のために幼稚園を作ったわけではない。そのため、この問題についてアレンの理解はフレーベルと異なっている。

さらに、アレンは子どもを教育する重要性を国家レベルで語っている[145]。

子どもは国の至宝であり、栄光である。時には国の大敵にもなりうる。したがって、我々は偉大な国家を作るには、必ず子どもを救わなければならない。中国の将来は子どもに頼るしかない。

アレンは子どもを「国の至宝」とみなし、教育するのは「偉大な国家を作る」ためであると認識している。実際、フレーベルも国民の教育を重視する。この点について、岩崎次男は「フレーベルは幼稚園を国民教育制度全体の中に位置づけて考えていた」[146]と主張している。また、小玉亮子は「フレーベルの教育思想において、幼稚園は国民教育の一部にあるものとみなしている。フレーベルがいかにドイツを意識していたのかについては、1840 年に開設された彼の幼稚園の名称に象徴的に表れているということができよう。フレーベルは彼の最初の幼稚園に『一般ドイツ幼稚園』と命名したのであるが、統一ドイツが実現していない時代にあって、フレーベルが自らの幼稚園の名前にあえて『ドイツ』を冠したことを見逃すことはできない」[147]と幼稚園と国家の関係を明らかにしている。

４．幼稚園の教育方法と教師の資質について

教師の質は幼稚園の質を左右すると言えよう。以上の幼稚園の目的を達成するには、どのような教員の資質能力が必要とされたのか。フレーベルは「1840 年の幼稚園創設計画ならびに 1843 年の弁明書」の中で、教師の資質について、「男女の指導者が、子どもの本質を尊重し、この本質を愛情をもって全面的に発達させるこの精神と心において養成されることであろう」[148]と語り、さらに「男女の教育者は、子どもの本質と発達過程を知らされ、子どもに対する尊敬と愛にまで魂を高められ、子どもたちの生命の諸要求と、それらを適切な保育や教育を通じてみたしてやることとに習熟させられ、彼らの活動分野の範囲内での自然の知識と生命の観察にまで導かれ、そして、それにしたがって子どもを指導し取り扱う能力を付与されるであろう」[149]と述べている。この中で、教師が「子どもの本質を尊重」することが強調されている。そして、フレーベルの言葉からは、子ども個人の発達段階に合わせて「適切な保育」をすべきとの主張も読み取れる。

そこでジェームズは、教育方法と教師の資質に関して、「フレーベルの教習新法要義八条」とまとめている[150]。

一、子どもの学習には自分のペースがあり、それは子ども自身の理解としか関係ない。教師は子どもを誘導することしかできない。
二、強制的に覚えさせてはいけない。
三、子どもはそれぞれの長所と短所があり、将来の学習目標を聞かずに、今できることを導き、能力に応じた指導を行うこと。
四、まず子どもに万物の形と変化を探求させること。

五、知識だけを教えるのではなく、体を大事にして健康を保つように教えること。体の鍛え方を教え、体を丈夫にさせる。

六、在学している子どもは、富貴や貧賤を問わない。

七、将来子どもを教えるため女学堂の教師は必ず学問がある人を選ばなければならない。

八、教師になるには長い努力が必要である。

上記の第一と第三項目において、ジェームズは教師に求められる資質について説明している。そこでは、教師は子どもを理解し、子どもの能力を尊重し、子どもの個人の発達段階に合わせて誘導すべきである、と指摘されている。前述したように、フレーベルは子ども個人の発達段階に合わせて「適切な保育」をすべきと主張していたため、ジェームズはこの点について、フレーベルの考えを理解していたと捉えることができる。

そして、第七と第八項目においても教師の能力について解釈している。つまり、教師になるまでには、努力して学問を身につけなければならない。フレーベルの言葉を参照すると、「この目的のために、この施設の大きさに応じて、最も洞察力があり、最も知識の豊富な、そして全体の根本思想を自己自身の人生思想として認識し実践する人びとが訓育的教師として任用されるであろう」[151]とある。

また、第二項目で述べたように、子どもへの強制に対して、ジェームズは否定的に捉えている。フレーベルは『人間の教育』「教育方法の原理」の中で、「積極的、命令的、規定的、干渉的な教訓、教育、教授はすべて、必然的に、否定的、妨害的、破壊的に作用するに相違ない」[152]と述べている。それゆえ、ジェームズはフレーベルの考えを的確に把握していたと評価できよう。

もちろん、教師として、子どもを教育するには、子どもの発達に対する理解も欠かすことができない。ジェームズは、フレーベルが主張した幼児の発達を次のように概論している[153]。

一、乳児は生まれた時、知識はないが、母親の喜びや怒りがわかる。乳児がもし泣いたら、無視してはいけない。母親は必ずしつけをしなければならない。その際、適切な教育方法を取るべきである。幼児期の教育は重要で、もし女性は教育されるならば、男性に勝ることができる。

二、最初の教育は将来に関係する。そのため、8 歳以前の教育が最も重要である。

三、人は精神と身体と 2 つに分けることができない。身体の成長に伴い、その精神も明らかになる、両者が互いに影響する。

四、人間には五官があり、見ること、聞くこと、動くことなどができる。しかし、外界のものを認知する場合、心から理解しなければならない。幼児を教育するには、その感覚活動において思考を促すようにさせなければならない。

五、子どもの知識は五官に頼るが、その中には実は良知良能があり、如何にそれが発

露するのかを見極め、その発露によって啓発しなければならない。

六、子どもの良知良能がその本性に宿り、身体を通して現れる。その本性と身体を完成させるなら、その時から良知良能が十分に備わっていることになる。

七、子どもの良知良能が身体を通して現れる時、いかに練習で勤労させるかが大切である。

以上の一、二項目に示したように人間の最初の段階である乳幼児期は、それ以降の発達の基礎であるとした点は、フレーベルの幼児観に一致したものである。

フレーベルは「幼児の発達」の時期について、「この世からふたたび去るまでの人間の未来の全生活は、人生のこの時期に源泉を持っている」[154]と記している。

また、三、四項目の中で、ジェームズは幼児教育が幼児の精神と身体の調和的発達を目指すものであることについては、フレーベルの主張に従って理解している。

フレーベルは「幼児期の段階、すなわち内的なものを外的なものにおいて、また外的なものを通して、目に見えるものにし、さらに両者の合一を、両者を結合する統一を求める。この段階から、人間の本来の教育、すなわち身体の保育や保護という面は減少するが、精神の保育や保護の面は増大するところの教育が始まる」[155]と述べている。ここから、確かにジェームズのいうように、フレーベルの幼児教育では身心の調和、統一することが重視されている点を読み取ることができる。しかし、フレーベルのこの文章からは、身体の保育や保護の重視から、精神の保育や保護の重視への変化もまた読み取れる。そして、ジェームズはこの身体と精神の変化に言及しておらず、フレーベルの教育思想の心身の関係についての理解が不十分だと言える。

にもかかわらず、ここで注目すべきなのは、五項目で、「良知良能」という中国哲学用語が使われていることである。「良知良能」は人が生れながらに備わっている善なる能力を指している。ここでは、中国古来の言葉「良知良能」が用いられており、中国人でも理解しやすくなっている。この点に対して、フレーベルは「人間の本質は、それ自体において善であり、人間の中には、なるほどそれ自身において善い性質や傾向が存在する」と主張している。つまり、フレーベルも人が生まれながら善をもっていると考えている。

最後に、ジェームズはフレーベルの幼児教育思想だけではなく、フレーベルの「格致の方法」[156]についても論じている。その内容として以下の三点があげられている[157]。

一、人間は必ず自分のことを理解してから、自分の本性を完全にすることができる。

二、万物と人々が互いに妨害しないことを知り、そして物事の本性に従ってそれを利用すれば、助けを得ることができる。

三、「天人合一」を知れ。すなわち、人の心と天の意志は相互に一体となっている。人々がこの真実を理解することができれば、彼らは物事を適切に行い、心も落ち着くことになる。

ここでジェームズは、万物と人間の関係について説明している。自然と人間との調和・統一が説かれている。その冒頭には「すべてのものの中に、永遠の法則が宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるもの、すなわち自然の中にも、内なるもの、すなわち精神の中にも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命の中にも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現われてきたし、またげんに現われている」[158]と記されている。すべてのものは永遠の法則の働きによって成り立っている。この法則の中から「自然と精神を統一する」とも読み取れる。したがって、ジェームズの自然と人間の関係に対する理解もフレーベルの主張と一致している。また、ジェームズは「良知良能」の場面と同じく、中国人に理解しやすいように「天人合一」という中国古来の哲学用語を使用していた。「天人合一」は天と人は対立したものではなく、本来それは一体のものであるという意味をしている。ジェームズはフレーベルの思想を理解した上で中国化したのである。

5. フレーベルの神思想について

最後に、フレーベル教育思想の基礎原理、神に対する理解を考察する。これまで論じてきたフレーベルの幼児教育思想は神思想によって統一することができる。神はフレーベルの教育思想の中で最も重要な概念の１つであるとも言えよう。この点について、フレーベルの著書『人間の教育』を参照したい。すでに述べたように、『人間の教育』はフレーベルの主著であり、そこからフレーベルの教育思想の核心を読み取ることができる。『人間の教育』の冒頭で神について、「神はすべてのものを動かし、それ自身において明白である、生きた自己自身を知る、それゆえに永遠に存在する統一者が、必然的に存在している。＜中略＝引用者＞この統一者が、神である。すべてのものは、神的なものから、神から生じ、神的なものによってのみ、神によってのみ制約される」[159]と述べている。このように、すべてのものは神から作られ、神に制約されることから、神の重要性が説かれている。

宣教師ボッグスの場合も、神の重要性を意識しており、彼女自身の論文も『人間の教育』の抜粋から始まっている[160]。

> このすべてを支配する法則は、必然的に、すべてを貫き、生きていて、自意識があり、それゆえに永遠の統一体（eternal Unity）に基づいている。
> この統一体は神である。万物は神の統一体、神から来たものであり、その起源は神の統一体、神のみである。それぞれのものに宿る神性の流出こそが、それぞれのものの本質である。
> 万物の運命とライフワークは、その本質、すなわち、その神的存在、したがって、神的統一そのものを解き明かすことであり、その外的ではかない存在に神を再認識することである。自分の本質と自分のライフワークを完全に、鮮明に、明確に意識することは、知的で理性的な存在である人間の特別な運命でありライフワークである。これを達成

するためには、自己決定と自由をもって自分の本質を活動させ、自分の生活の中でそれを明らかにしなければならない。
教育によって、人間の神聖な本質が解き明かされ、引き出され、意識に引きあげられ、人間自身も、自分の中に住んでいる神聖な原理への自由で意識的な従順と、この原理を自分の生活の中で自由に表現することにまで引きあげられるはずである。

すなわち、フレーベルによれば、神は存在し、すべてを支配する法則の源であるとされている。そして、人間の本質もまた神聖であり、教育によって引き出すことができる。ボッグスは、神と教育の相互関係をこのように認識したうえで、神性を引き出す教育について以下のように解釈し、子どもへの教育の内容を説明している[161]。

この短い文章の中に、自己活動、創造的活動、本質的に善である子どもの本性の開発を通じて教育を行うという教義がどこから生まれたのかがわかる。また、乳幼児期が最も重要であるという教えは、この時期に人生の内的源泉が最も強く、最も明確な指針を与えるからである。遊びは最も自由な自発的活動の形態であるため、教育の最良の方法の1つである。運動と会話は教育に必要な要素であり、そうすることによってのみ、子どもは自分の中に湧き上がる活動を表現できるからである。自然の研究は不可欠である。なぜなら、神の本質は、人間と同じ法則に従って、自然の中で自らを実現し、現しているからである。このような教育理念を実現するために、フレーベルは、乳幼児期の子どもを世話する母親の指導のために『母の歌と愛撫の歌』を書いた。

つまり、ボッグスは神が教育の基盤であり、教育が人間の神性を引き出すための手段であると認識していた。また、神性と子どもの遊び、運動、自然との関係を明らかにした。実際、フレーベルは「意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺激し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粋かつ完全に表現させようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である」[162]と述べている。つまり、人間に内在する神性を引き出し、表すことを促すことが、フレーベルの教育の根本的な目的である。こうしたフレーベルの根本原理、神に基づく幼児教育思想は、ボッグスによって中国に紹介されたと言えよう。宣教師というボッグスの身分と関係があると思われるが、管見の限り、彼女はフレーベルの神に関する理論をそのまま引用し、中国の読者へ紹介した最初の人物であった。

本節の冒頭部分で述べたように、先行研究では、明治末期の日本からの幼児教育の移入の際、神を含むフレーベルの宗教思想は中国に導入されなかったとされている。しかし、本研究で宣教師の認識を分析した結果、当時の宣教師たちの間では、フレーベルの宗教思想に基づいて彼の教育思想を理解しようという試みがなされていたことが明らかになる。

次に、アレンは宣教師として、教会の伝道のため幼稚園の重要性を主張している。「神」

について以下のように言及している[163]。

> 我々（教会＝筆者注）は教育に関する責任を有している。中国の子どもを助け、自立させ、依存心を取り除かせることが必要である。このようにして国民は自由になれる。つまり、人間は先に自分の能力を知り、それから神のことを知るようになる。なぜならば、全ての自由は神から生ずるからである。

アレンは子どもを含めてすべて人間の自由は神から生じるとしている。フレーベルの『人間の教育』でも「神の中にこそ、すべてのものの唯一の根源がある」[164]と記されている。すなわち、神はすべてのものの根源とフレーベルは主張している。そのため、アレンが理解している自由が神から生じるというのはある意味フレーベルの主張と合致している。しかし、アレンは神と遊びといった幼児教育の関係を明らかにしていなかった。

以上のように、キリスト教宣教師は、フレーベルの幼児教育理論について、①幼稚園の保育内容、②幼稚園の創設目的、③幼稚園の教師の資質と子ども理解、④神思想、を中心に受容していた。特段、その保育内容については、恩物、作業物による遊びと、物語、歌などを含む朝の会、体を動かす活動、自然との関わりから構成されるものとして受容された。フレーベルの幼児教育思想の中核をなす遊びについても、意義、種類、仕事との違いの側面から、その重要性について理解されている。しかし、ボッグス以外、恩物についてふれている宣教師はいなかった。したがって、清朝末期中国におけるフレーベルの幼稚園教育理論の導入の際、中国に伝わったものはフレーベルの恩物が主要な内容であったとする楊の見解とは異なって、実際には宣教師たちは遊び論全体を受容していた、と結論付けることができる。この結果のように、恩物はあくまでも遊び論の一部に過ぎないという理解に基づく場合、中国での宣教師による幼稚園での実践においても、形骸化した恩物中心主義に陥ることのない保育が行われていたと推測できるのではないだろうか。

何よりも、神に対する理解は当時の中国政府側のフレーベル幼児教育思想受容には見られなかった（あるいは政府側が意図的に受容しなかった）。中国政府側の受容については第3章で改めて詳しく検討する。一方、宣教師たちはフレーベルの神思想を受容していたことがわかる。その要因を探ると、当然のことながらフレーベルの幼児教育思想は「キリスト教的万有在神論」[165]を基礎としており、これらの宣教師は宣教師であるからこそ、フレーベル幼児教育思想をその根幹たる彼の神思想に基づいて受容することができたと言えよう。しかし、同時に宣教師はフレーベルの思想の中の神の側面を利用して、自分自身の使命、宣教と結び付けようとしていた側面もあった。したがって、宣教師たちはフレーベルの本質を理解しようとしたというより、神概念を利用しようとしたともいえる。いずれにせよ、日本からのフレーベルの教育思想の移入のほか、キリスト教宣教師を通じた移入も存在し、それが伏流として中国の初期幼稚園へ流れ込んでいたのであった。その受容の内容は、キリスト教の要素が付加されつつ、実践にも影響を与えたと考えられる。

次章では、日本からのフレーベルの教育思想の移入を含めた中国幼稚園への影響について検討する。

注

[1] 吉田寅「中国」日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本キリスト教団出版局、1991 年、128-129 頁。
[2] 石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷曄介・渡辺祐子『はじめての中国キリスト教史』かんよう出版、2021 年、40 頁。
[3] 同上、41 頁。
[4] 同上、56 頁。
[5] 上帝は最高神「天」の人格的側面である。
[6] 徐亦猛「儒教とキリスト教 :孝行観念についての考察」『アジア・キリスト教・多元性』第 9 号、現代キリスト教思想研究会、2011 年、115 頁。
[7] 吉田寅、前掲書、137 頁。
[8] 渡辺祐子『近代中国におけるプロテスタント伝道 ：「反発」と「受容」の諸相』東京外国語大学博士論文、2006 年、13 頁。
[9] 同上。
[10] 同上。
[11] 吉田寅、前掲書、147 頁。
[12] 佐藤尚子『中国ミッションスクールの研究』龍渓書舎、2010 年、18 頁。
[13] 山本澄子『中国キリスト教史研究』東京大学出版社、1972 年、16 頁。
[14] 石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷曄介・渡辺祐子、前掲書、70 頁。
[15] 吉田寅、前掲書、149 頁。
[16] 山本澄子、前掲書、14 頁。
[17] 同上、18 頁。
[18] 同上。
[19] 宮坂弥代生「東洋におけるプロテスタント伝道と印刷―美華書館(アメリカ長老会印刷所)を中心に―」『中国 21』第 28 巻、愛知大学現代中国学会、2007 年、179 頁。
[20] 渡辺祐子、前掲、112 頁。
[21] George B. Pruden, “American Protestant Missions in Nineteenth-Century China,” *Education About Asia: Asian Intercultural Contacts*, Vol.14, No.2, 2009, p.5. https://www.asianstudies.org/publications/eaa/archives/american-protestant-missions-in-nineteenth-century-china/(2023 年 3 月 15 日最終閲覧)
[22] Editor, “Introductory,” *The Chinese Recorder*, Jan-Feb, 1874, p.2.
[23] *Ibid*.
[24] Eliza a Robert Morrison, *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, Vol.1, 2018, pp.163-164.
[25] *Ibid.,* p.163.
[26] 吴義雄『在宗教与世俗之间―新教传教士在华南沿海的早期活动（1807～1851）―』社会科学文献出版社、2022 年、366 頁。
[27] 吉田寅、前掲書、143 頁。
[28] 石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷曄介・渡辺祐子、前掲書、97 頁。
[29] 平塚益徳著、平塚博士記念事業会『平塚益徳著作集Ⅱ中国近代教育史』、教育開発研究

所、1985 年、35 頁。
[30] 佐藤尚子、前掲書、246 頁。
[31] F. Westley and A. H. Davis, *Journal of Three Voyages Along the Coast of China,* in 1831, 1832, & 1833: with notices of Siam, Corea, and the Loo-Choo islands / by Charles Gutzlaff; to which is prefixed an introductory essay on the policy, religion, etc., of China, by W. Ellis.1834, 2nd ed. p.157.
[32] Milne, A Retrospect of the First Ten Years of the Protestant Mission to China, p.39.
[33] Rev David Abeel, "Notices of infanticide collected from the people of Fukien," *The Chinese Repository*, Vol.12,1843, pp.544-545.
[34] *Ibid.*
[35] "Kindergarten Work," *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Aug, 1911, p.439.
[36] 劉雯「東アジアにおける華人社会とキリスト教ネットワークに関する研究」兵庫県立大学博士論文、2017 年、9 頁。
[37] 平塚益徳、前掲書、25 頁。
[38] 同上、29 頁。
[39] 同上、26 頁。
[40] 顧長声『伝教師与近代中国』上海人民出版社、1981 年、211 頁。
[41] 同上、212 頁。
[42] 佐藤尚子、前掲書、19 頁。
[43] 顧長声、前掲書、212 頁。
[44] 同上。
[45] 陳明霞『近代福建教会学校教育研究』人民出版社、2012 年、24 頁。
[46] 佐藤尚子、前掲書、19 頁。
[47] 顧長声、前掲書、213 頁。
[48] 同上、213-214 頁。
[49] 同上、214 頁。
[50] 同上。
[51] 平塚益徳、前掲書、126 頁。
[52] 陳明霞、前掲書、22 頁。
[53] 平塚益徳、前掲書、126 頁。
[54] 佐藤尚子、前掲書、21 頁。
[55] 平塚益徳、前掲書、56 頁。
[56] 福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編　第五巻』福建人民出版社、2003 年、393 頁。
[57] 同上。
[58] 同上。
[59] 劉海峯『福建教育史』福建教育出版社、1996 年、295-296 頁。
[60] 福建省政協文史資料委員会編、前掲書、411 頁。
[61] 平塚益徳、前掲書、72 頁。
[62] 福建省政協文史資料委員会編、前掲書、404 頁。
[63] 朱有瓛編『中国近代学制史料　第四辑』華東師範大学出版社、1993 年、120 頁。
[64] 朱峰『基督教与近代中国女子高等教育』福建教育出版社、2002 年、49 頁。
[65] 佐藤尚子、前掲書、22 頁。
[66] 福建省政協文史資料委員会編、前掲書、536 頁。
[67] 佐藤尚子、前掲書、22 頁。
[68] 崔淑芬「近代中国における教会女子学校」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』3、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要編集委員会、2008、77 頁。
[69] 同上。
[70] Kenneth Latourette, *A History of Christian Missions in China*, Gorgias Press, 2009,

p.338.
[71] 潘静「近代中国におけるキリスト教宣教会の幼児教育活動―上海地区を中心に―」『日本の教育史学』第 48 集、2005 年、73 頁。
[72] 顧長声、前掲書、285 頁。
[73] 同上、286 頁。
[74] 同上、288 頁。
[75] 志賀智江「明治・大正期におけるキリスト教主義保育者養成」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第 4 巻、1996 年、69 頁。
[76] Bertha H. Allen, "Union Work in Foochow Kindergarten and Training Class," *Life and Light for Woman,* Vol.149*,* Woman's Board of Missions, 1919, p.84.
[77] 日本で活躍した宣教師たちも同様で、このような方法で布教と保育が一体的になされていた。この点について、小林恵子は「日本での布教はこの国の文化に順応しつつ、無学であった庶民層にまず初歩的な教理を平易な解説で教えるという漸進的な布教方針をとった。布教事業の基礎となる聖職者の養成と幼少期からの子どもの教育に力を注ぎ、（中略＝引用者）キリスト教を基盤とした男女児童の初等中等教育を行った」と述べている。（小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師　上巻』キリスト新聞社、2003 年、13 頁。）
[78] Mateer, "The Relation of Protestant Missions to Education," *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China*, Presbyterian Mission Press, 1878, p.171.
[79] 『日光幼稚園園史』（未出版）、5 頁。
[80] 陳明霞、前掲書、46 頁。
[81] ヤング・アレン（林楽知）『五大洲女塾通考』第十集下巻、美華書局、1903 年、35 頁。
[82] 何暁夏、史静寰『教会学校与中国教育近代化』、広東教育出版社、1996 年、93 頁。
[83] Hannah C. Woodhull, "A Partial Report of the Kindergarten Work in Fubkien Province," *Educational Review*, Vol.2, Aug, 1909, p.40.
[84] 「私立文山女子中学（Ponasang Girls' College）は、1853 年にアメリカ人信徒によって福州に設立された市立教会中学校である。福州の最初の女子学校であった。
[85] Hannah C. Woodhull, *op.cit*., p.40.
[86] "A Kindergarten Survey in China," *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.2.
[87] 当報告書は 1911 年のものであるため、3 年前は 1908 年である。
[88] "A Kindergarten Survey in China," *op.cit*., p.3.
[89] 商務印書館は現在、中華人民共和国の代表的な出版社。1897 年に上海にあったアメリカ長老教会の印刷所美華書館（American Presbyterian Mission Press）の職員であった夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、高鳳池の 4 人が、長老教会の G・F・フィッチ（George Field Fitch,費啓鴻,1845-1923）の援助を受けて設立した出版社である。
[90] "A Kindergarten Survey in China," *op.cit*., p.3.
[91] *Ibid.*
[92] *Ibid.*
[93] 少数ながら、ヤング・アレンなどの男性の宣教師も幼児教育に関与した。
[94] 石井紀子「女性宣教師と女子教育」『立教アメリカン・スタディーズ』 2017 年、110 頁。
[95] 史偉明「晩清女伝教士在華差伝与中国女性啓蒙」『江西師範大学学報』（哲学社会科学版） 第 49 巻第 2 期、2016 年、2 頁。
[96] 同上。
[97] 石井紀子、前掲、112 頁。
[98] 童養媳とは、息子をもつ家庭で、将来息子の嫁にするために幼い時から引き取って育てる女児を指す。
[99] 福建省政協文史資料委員会編、前掲書、536 頁。

[100] 費正清『剣橋中国晩清史（1800-1911 年上巻)』中国社会科学出版社、1993 年、627 頁。
[101] Annie Ryder Gracey, *Eminent Missionary Women,* Eaton & Mains, 1898, p.202.
[102] *Ibid*., p.203.
[103] Gerald H. Anderson, *Biographical Dictionary of Christian Missions*, Macmillan Reference USA, 1998, p.748.
[104] "Personnel of the boards," *The Missionary Herald*, July, 1938, p.330.
[105] 何暁夏、史静寰、前掲書、279 頁。
[106] ジェーン・ハンター著、李娟訳『優雅的福音』三聯書店、2014 年、47 頁。
[107] *State Normal School Los Angeles Bulletin of Information*, California State Printing Office, 1916, p.68.
[108] *Los Angeles State Normal School Bulletin*, California State Printing Office, 1914, p.68.
[109] *Ibid*.
[110] 阿部真美子「アメリカ保育者養成史―幼稚園教師養成の発生及び変化の過程―」岩崎次男『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部、1995 年、230-231 頁。
[111] 同上、231 頁。
[112] 同上。
[113] 楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」筑波大学博士学位論文、1992 年、190 頁。
[114] "Arrivals," *The Chinese Recorder*, Vol.41, Issue12, Dec, 1910, p.815.
[115] "Constitution of the Central China Kindergarten Association" *Educational Review,* Vol.4, Oct, 1911, p.21.
[116] L. Pearl Boggs, "A Modem Interpretation of Froebel's Educational Theory," *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.14.
[117] 白川蓉子『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究―「遊び」と「作業」をとおしての学び―』風間書房、2014 年、53 頁。
[118] L. Pearl Boggs, *op.cit*., p.16.
[119] *Ibid*.
[120] フレーベル著、岩崎次男訳『人間の教育 2』明治図書、1960 年、111 頁。
[121] 同上。
[122] 同上、71 頁。
[123] 荘司雅子『フレーベル「人間教育」入門』明治図書、1983 年、61 頁。
[124] ヤング・アレン「論中国亟需設立幼稚園」『帝国主義侵華教育史資料―教会教育―』教育科学出版社、1987 年、215 頁。
[125] 同上、214 頁。
[126] L. Pearl Boggs, *op.cit*., p.15.
[127] フレーベル著、岩崎次男訳『人間の教育 1』明治図書、1960 年、50 頁。
[128] 荘司雅子『フレーベルの教育学』玉川大学出版部、1984 年、205 頁。
[129] L. Pearl Boggs, *op.cit*., p.16.
[130] Mary Sia "Play And its Meaning," *Educational Review,* Vol. 4, Oct, 1911, p.11.
[131] *Ibid*.
[132] *Ibid*.
[133] フレーベル、荒井武訳『人間の教育』岩波書店、1964 年、63 頁。
[134] 同上、64 頁。
[135] Mary Sia*, op.cit.,* p.11.
[136] *Ibid.,* p.12.
[137] *Ibid*.
[138] "A Kindergarten Survey in China," *Educational Review,* Vol.4, Oct, 1911, p.2.
[139] フランシス・ジェームズ「養蒙正軌下　福若伯訓蒙法」『万国公報』122 巻、上海墨海書局、1899 年、9 頁。

[140] 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集 第五巻』玉川大学出版部、1981 年、118-119 頁。
[141] フランシス・ジェームズ、前掲、9 頁。
[142] 小原國芳・荘司雅子監修、前掲書、29-30 頁。
[143] ヤング・アレン、「論中国亟需設立幼稚園」前掲、215 頁。
[144] 小原國芳・荘司雅子監修、前掲書、84 頁。
[145] ヤング・アレン、前掲、215 頁。
[146] 岩崎次男「幼稚園成立期のドイツの幼児学校に関する若干の研究」『埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）』第 23 集、1974 年、247 頁。
[147] 小玉亮子「幼児教育をめぐるポリティクス: 国民国家・階層・ジェンダー」『教育社会学研究 88(0)』、2011 年、11 頁。
[148] 小原國芳・荘司雅子監修、前掲書、107 頁。
[149] 同上。
[150] フランシス・ジェームズ、前掲、9 頁。
[151] 小原國芳・荘司雅子監修、前掲書、107 頁。
[152] フレーベル、荒井武訳、前掲書、20 頁。
[153] フランシス・ジェームズ、前掲、9 頁。
[154] フレーベル、荒井武訳、前掲書、72 頁。
[155] 同上、67 頁。
[156] 格致は格物致知の略記、物事の道理や本質を追求すると意味している。
[157] フランシス・ジェームズ、前掲、8 頁。
[158] フレーベル、荒井武訳、前掲書、11 頁。
[159] フレーベル、荒井武訳、前掲書、11-12 頁。
[160] L. Pearl Boggs, *op.cit.,* p.13.
[161] *Ibid*., p.14.
[162] フレーベル、荒井武訳、前掲書、13 頁。
[163] ヤング・アレン、前掲、215 頁。
[164] フレーベル、荒井武訳、前掲書、11-12 頁。
[165] 荘司雅子『フレーベル研究』玉川大学出版部、1984 年、73 頁。

第 3 章　清朝末期における「日本型」幼稚園の成立

本章では、清朝末期日本型幼稚園の成立について考察する。日本型幼稚園が中国に創設される際、中国の視察官員、実業家、留学生、そして日本人の女性教員が大きな役割を果たした。そのため、以下まず、清朝末期の中国視察官員と実業家による日本での視察記録を分析し、彼らが日本の幼稚園をどのように認識したのかを明らかにする。そして、清朝末期中国の女子留学生に注目し、彼女たちが日本で受けた幼稚園保姆養成教育の実態と中国の幼児教育への影響を検討する。また、中国の幼稚園に派遣された日本人女性教員の活動の実態とその影響を確認する。なお、フレーベル思想の受容についても着目する。さらに、中国教育史上初の幼児教育に関する法令である「蒙養院及び家庭教育法章程」の特徴と、日本からの影響を明らかにする。

第 1 節　清末中国官員と実業家の日本での教育視察

本節では清朝末期の中国官員と実業家による日本での視察記録を分析し、彼らが日本でどのような幼児教育を視察し、それをどのように認識したのかを明らかにする。

現在確認できる日本の近代教育に関する報告書は 39 通あり、その中で幼稚園について記録したのは 14 通である[1]。これらの幼稚園の視察記録の中から清末官員の項文瑞の『遊日本学校筆記』（1902 年）と王景禧の『日遊筆記』（1903 年）、さらに実業家張謇[2]の『癸卯東游日記』（1903 年）を取り上げて分析する。なお、本節で官員と実業家という二類型に分けて分析する理由は、それぞれの視察目的が異なっていたためである。

主に、官員は中国学校体系全体の整備を目指し、その一部として幼稚園を視察した。一方、実業家の張は、後述するように「教育救国」の観点から自ら幼稚園を設ける目的で視察したのであった。このような両者の視察目的の相違により、視察内容と幼児教育への認識が異なることになる。なお、項と王、さらには張の視察記録を本研究で取り上げる理由は、他の視察記録と比較して、当時の日本の幼児教育について最も具体的に記しているためである。また、張謇は視察後、中国で幼稚園を創設したのであり、彼の視察記録は地方で幼稚園が創設される際の模範的な事例となった点で、特に重要である。

本節の研究課題は、第 1 に中国はなぜ日本の幼児教育を参考としたのかを明らかにすること、第 2 に日本の近代的幼児教育の実態やその特徴が中国人の視察ではどのように捉えられていたのかを解明することにある。ここでは、幼稚園の教員、施設設備、遊具、保育内容などに分けて考察する。第 3 に、中国官員と実業家の報告書の内容を分析することにより、幼稚園を視察する際に官員と実業家が関心を持った点及びその相違を明確にすることにある。

１．清朝末期における日本モデルの教育改革

清末中国は列強によって侵略されたが、国を滅亡の危機から救うために、清政府と資産階級（実業家を含む）[3]はそれぞれ別々の改革を志向した。清政府は政権維持を目的としていたのに対し、資産階級は民主政治を導入しようとしていた。しかし、教育改革においては、両方とも日本をモデルとして、教育の近代化を行おうとしていた[4]。では、なぜ清政府と資産階級は同時に日本をモデルとして選んだのか。また、清政府と資産階級はそれぞれの目的を持つため、両者が行った教育改革は同じく日本を参考にしても、異なっていた。以下、清政府と資産階級、それぞれが行った教育改革を分析する。

（１）清政府による教育改革

清末の中国は、1840 年の第一次アヘン戦争と 1856 年の第二次アヘン戦争により、国土を列強により分割され、巨額の賠償金を課された。敗戦について反省した曾国藩や李鴻章などの清政府洋務派官僚によって、1860 年から 90 年代にかけて洋務運動が展開された。洋務運動は富国強兵といった目的を中心とした近代化を目指した改革であった。経済、教育などに西洋の近代的技術が取り入れられ、軍事工場が建設され、新式「洋学堂」[5]も開設された。

1862 年に開設された京師同文館は、中国の最初の新式「洋学堂」であった。当初は外交事務の人材育成を目的とした外国語学校であったが、後に総合的な学校になった。また、1863 年には上海方言館や広州同文館など、通訳の養成を目的とした学校が設立された。1866 年には福建船政学堂、1873 年には天津水師学堂など、海軍を育成するための学校も設けられた。さらに、1867 年の上海機械学堂や 1872 年の天津電報学堂など、近代化を促進するための工科系学校も設立された。しかし、これらの学堂はいずれも専門的技術者の育成を重視した機関であり、国民一般の教育を目的とした機関ではなかった。そのため、西洋の近代的学問も取り入れていたが、科学や技術面に偏っていた。当時翻訳された著書の種類をまとめると、表 3－1 のようになる。

表 3-1　洋務運動時期輸入された西洋学問に関する本（上位 6 位まで）

順位	種類	数量
1 位	兵政	55
2 位	医学	39
3 位	工政	38
4 位	算術	22
5 位	法律	13
6 位	化学	12

出典：梁啓超『西学書目表』1896 年より作成。

以上のように、翻訳された各種類の著書の数をもって順位を付けたが、第1位は軍事に関するもので、第2位は医学、第3位は工政、いずれも近代科学を代表する学問である。これにより、当時の政府は積極的近代科学技術を取り入れようとしていた姿勢がわかる。しかし、輸入された法律に関する著作の数は僅かの13冊であり、西洋の近代教育や民主政治に関する本はあまり紹介されていなかったことにも注目したい。それは、洋務派官僚は清政府の高級官僚から構成されており、彼らによって行われた洋務運動は、現行の中央集権的な政治を変革するようなものではなかったことに起因している。実際、洋務運動は、太平天国の乱[6]を鎮圧する過程で洋式兵器の優秀さを痛感した洋務派が中心となって、「中体西用」を基本思想とする運動であり、中国の体制を維持しつつ、西洋の科学・技術だけを導入する改革にとどまるものであった。そのため、洋務運動の目的は中央集権的な政治を向上するための人材養成にあったのであり、このことが民主政治や近代教育に関する図書が少なかった要因になっている。

このように、洋務運動において中国は軍事工業に力を入れていたが、日清戦争（1894－1895）で敗戦した。日清戦争における敗北は、清朝の国力の低下を露呈する結果となった。この敗北を目の当たりにした欧米諸国や日本は、中国への野心を示し、租借地の拡大や鉱山の開発、鉄道建設などの権利を求めて自らの勢力圏を拡大する競争を展開した。こうして1890年代後半から、列強による中国侵略はますます激化し、最終的に、「北清事変」（「義和団の乱」）が起こった。北清事変は、義和団[7]という民間結社が外国勢力に対して武力行使を行ったことから始まった。義和団は列強による中国への侵略に不満をもち、排外運動、すなわち外国人宣教師やキリスト教徒、外国の使節団などを攻撃し、鉄道や電線をはじめ西洋人がもたらした近代的施設を次々と破壊していった。途中から清政府の黙認、さらに支持を受け、1900年6月に義和団は列強の使館が集まっていた区域を包囲した。この事態に対して、列強の八ヶ国連合軍が派遣され、清朝政府と義和団を鎮圧するために行動した。清政府は、八ヶ国連合軍の侵略を受けて敗北した。

「北清事変」とその戦後処理である「辛丑条約」によって、清朝は苦境に追いやられた。1901年に義和団事変最終議定書とも呼ばれる『辛丑条約』[8]が11か国と締結されると、4億5,000万両の賠償金を払うことが規定され、財政的に中国は列強への服従を余儀なくされた。こうして、中国の半植民地化は深刻なものとなった。

清政府は失敗を受け、1901年以降、近代学校制度の導入や科挙の廃止などの教育改革を含めた「清末新政」を行った。教育改革を主導したのは、清朝政府の高官、張之洞であった。張は1898 年に、『勧学篇』を出版しており、この『勧学篇』の中でも「中体西用」の考えを示していた。崔淑芬によると「それは理論上、最終的に洋務運動の支柱となったとともに、『新政』という改革の政策を踏み切った政府による近代教育の改革に理論的根拠を与えたものでもあった」、と位置づけられている。『勧学篇』で日本を近代化に成功した国として見習い、中国既存の王朝体制維持を前提として、日本を経由して西洋の学問を学ぶべきことを述べている。すなわち、日本が「洋学」により強国になったと考え、日本への留学を奨励し

たのである。なぜ日本をモデルにしたのか、『勧学篇』では、以下のように記している[9]。

> 遊学〔留学〕する国として、西洋は東洋とは比較にならない。その理由は、まず旅費が安く、大人数を派遣できること。また、中国に近いため、訪問しやすいという理由もある。また、東洋（日本）の文字は中国の文字と似ているので、理解しやすいこと。さらに、西洋書は非常に複雑であったが、日本人は西洋書の必要でない部分を取り除き、変更を加えていた。しかも、中国と日本の事情や習慣は似ているため、学びやすい。半分の努力で倍の結果が得られる点から、これに越したことはない。

つまり、日本は隣国であることから旅費などの経費も安価で済む点、日本では重要な西洋書がすでに日本語に訳されており、複雑な部分や「不必要な」部分は除かれているという点で、効果は高いとしている。また、日本語は中国人にとって学びやすい点も日本留学のメリットとされていた。そして、陶徳民は『勧学篇』を次のように評価している[10]。

> 本書は、張之洞の「中学為体、西学為用」〔中国の伝統的道徳と学問を基本とし、洋学も採用する〕という洋学受容の姿勢を示したものであり、光緒帝により価値あるものと認められて全国に配布された。このことは、清国において洋学受容が正当化された、ということを意味している。その洋学の受容は、日本を通じて学び取るという点に特徴がある。

つまり、この『勧学篇』は清末において、日本への留学を促す役割を果たした。洋務運動の時代は、ヨーロッパやアメリカに留学していたが、清政府の方針が日本留学へと変化したのである。

中国から日本への留学生の数は 1896 年には 13 人だったが、『勧学篇』が執筆された翌年の 1899 年には急速に増えて 200 名を越えた。そして清朝が新政を行うという政策が発表されて以後、つまり 1901 年後の 1903 年には 1,000 人、1906 年には 8,000 人とピークに達した[11]。

このようにして日本に留学、視察に訪れた人々は、視察記録や日記などを書き、当時の日本の状況を清末中国に紹介した。また彼らは帰国後には、日本人教習と共に清末中国の教育改革に重要な役割を果たした。さらに、1904 年に発布され、実施された中国最初の近代学制である「奏定学堂章程」は、日本の教育制度をモデルとした。「奏定学堂章程」には幼児教育に関する「蒙養院及び家庭教育法章程」も含まれている。

後に第 2 項で、中国人官員が具体的にどのように日本の幼児教育制度を中国に紹介したのかに関して検討する。

（２）資産階級維新派による教育改革

清末中国の資産階級は人民の啓蒙と国民の形成を教育目的として、様々な教育改革を試みた。先述したように、康有為、梁啓をはじめとする資産階級維新派（政府官僚と違う立場をとり、変法派とも呼ばれる）は、洋務運動の失敗から 1898 年に日本の明治維新を参考として「戊戌変法」[12]を開始した。具体的に、「戊戌変法」では、日本の明治維新を模範にして君主専制から立憲君主制に移行するといった改革案を示した。康有為は「欧米諸国の富強の理由は、単に機械や兵器が優れているからではなく、学問研究や教育の普及が進んでいるからだ」[13]と認識した上で教育改革をしようとした。そのため、康は光緒帝に対して、「日本の変法の経験を鑑み」、「変法」で改革すると建議した[14]。つまり、資産階級維新派による「変法」と「興学」の提唱によって、諸外国、特に日本を手本に近代学校体系を設立しようとした。当時、既に近代化に成功していた日本をモデルにした方が中国にとって「速成」効果があると考えたのである。

1898 年の「戊戌変法」の中での教育改革については、新学制の導入が計画された。そのため、日本への留学や日本語の書物を翻訳することが推奨された。8 月 2 日には日本留学を勧める諭旨が下された[15]。これにより、海外留学の高まりと同時に海外視察が盛んに行われることになった。清末中国人の日本遊歴の中で、とくに日本学事視察が中心となっていたのは、この時期のことである。

しかし、「戊戌変法」は資産階級の求める改革であったため、専制を維持しようとする保守派の利益を損なった。そして、近代化を目指した「戊戌変法」は西太后をはじめとした保守派の弾圧によって失敗に終わった。1899 年 9 月 26 日、「戊戌変法」に定められた諸諭の廃止が決定され、光緒帝は幽閉され、譚嗣同ら 6 人の革命家は処刑された。その結果、国政の総合的な近代化を目指した変法運動は、中国の封建制度を根本的に変えることはできなかったのである。

こうした状況の中、中国資産階級は近代化に向けた改革を続ける必要性を強く認識し、東アジアでいち早く近代化を遂げた日本をモデルとすることにした。多くの資産階級は日本を訪ね、その富強の道を学び、地方で引き続き教育改革を行おうとした[16]。その時期に自費で日本を訪れ、視察した資産階級の一人として実業家張謇があげられる。彼は「地方自治」から立憲運動へと政治改革を先導させながら、教育改革も並行させた。張は日本が明治維新後西洋に学び、速やかに富国強兵に成功したことに対して敬服していたのであった[17]。張が日本を視察した後、自分の郷里通州で、幼稚園、小学校から高校、師範学校、職業学校まで、総合的な学校体系を創設した。当時の民間資産階級による教育改革について、楊宏雨は「甲午後 5 年間（1895-1899 年）、官立と民間によって 107 校の新式学堂が建てられた。その中で多くの学校が私立学校である」[18]と述べている。

このように、清末は、半植民地化の危機に面した時代であると同時に、この危機を克服し、近代化の道を歩もうとする時代でもあった。この時期、清朝政府と資産階級が選んだ近代化のモデルは同じく日本であり、日本から産業技術・教育制度などを学ぼうとした。しかし、

清朝政府と資産階級の最終的な目標は異なり、清朝政府主導の近代化プロセスは挫折することとなった。一方、資産階級による教育分野においての近代化が進展していったと言えよう。

２．清末中国官員による日本での視察日記

（１）清末中国官員の日本視察

前述したように、1840 年のアヘン戦争後、清末中国は洋務運動[19]を行うことにより、近代化を図ろうとした。しかし、1895 年に日清戦争で中国は再び敗北した。中国は､敗北の原因を洋務運動において西洋の科学技術を表層的にしか取り入れなかった点にあると捉えた。

この認識に基づき、清朝政府は、当時湖広総督であった張之洞らの建議によって 1898 年に『勧学篇』が出版されたのを契機として、日本の教育近代化の方法を学び始めた。日本への留学奨励政策の下で、教育を視察した中国官員により、数多くの教育調査報告や遊学日記が書かれた。特に、1901 年以降の光緒帝による「清末新政」から 1911 年辛亥革命までの１０年間は日本視察が盛んになり、汪婉は「この時期は近代に入ってからの中国人の日本視察で最大のピークとなる時期である」[20]と指摘している。また、この時期の日本視察報告書の代表的なものとして、呉汝綸[21]『東遊叢録』(1902 年)、羅振玉[22]『扶桑両月記』(1902 年)、李宗棠『考察日本学校記』(1902 年) などがあげられる[23]。

このように、日本の教育の実態が報告される中で、幼児教育も近代教育制度の一環として中国に紹介された。幼児教育の内容を含む中国官員の視察記録をまとめると、表 3－2 のようになる。

表 3-2　日本の幼児教育を紹介した中国官員の視察記録　※は本文で扱う視察記録

視察記録名	著者	主な職務	主な視察対象園など	派遣者など	視察年
日本学校述略	姚錫光	湖北武備学堂稽察	訪問校なし（法規調査のみ）	湖広総督張之洞	1898 年 12 月
日本各学校紀略	張大鏞	浙江候補知県	日本小学校附属幼稚園	両江総督劉坤一	1899 年 3 月
東遊紀程	朱綬	候選塩大使	訪問校なし（法規調査のみ）	自費	1898 年 8 月
東遊日記	沈翎清	一等軽車都尉	女子高等師範学校及び附属幼稚園	四川総督奎俊	1899 年 9 月
※遊日本学校筆記	項文瑞	上海閔行鎮務敏学堂教師	女子高等師範学校附属幼稚園、小石川十善教育会幼稚園、東京富士見小学校附属幼	不明	1902 年 7 月

			稚園		
※瀛州観学記	方燕年	山東大学総辦	神戸市立幼稚園	山東巡撫周馥	1902年11月
日遊彙編	繆荃孫	江南高等師範学校総教習	訪問校なし（東京公立･私立幼稚園の数のみ調査）	両江総督張之洞	1903年2月
※日遊筆記	王景禧	普通教育処総辦	大阪愛珠幼稚園	直隷総督袁世凱	1903年11月
日本留学参観記	蕭瑞麟	留学生	常磐高等尋常男女学校附属幼稚園	不明	不明
東遊日記	郭鐘秀	湖北省井陘県知県	女子高等師範学校附属幼稚園	直隷総督袁世凱	1906年4月
東航紀遊	李文幹	江西広信府中学堂教員	女子高等師範学校附属幼稚園	江西巡撫呉重熹	1906年11月
東遊日記	黄黼	直隷州知州	豊明幼稚園	江蘇巡撫陳夔龍	1907年5月
東遊日記	定樸	吉林賓州県知県	豊明幼稚園､女子高等師範学校附属幼稚園	吉林巡撫朱家宝	不明

出典：『晩清中国人日本考察記集成 教育考察記』より作成。

表 3－2 の視察対象に注目すると、1890 年代に張之洞が派遣した姚錫光、繆荃孫などの上層官員は幼児教育についての法規や幼稚園の設立数といった制度面を中心に視察しているのに対して、1905 年以降、地方の学務官員は個別の幼稚園を見学している。すなわち、上層官員は帰国後幼児教育の法規の設定に関わるために幼稚園の全体的概況を確認し、一方地方の学務官員は実際に学校を設立するため、幼児教育の実態の視察に力を入れたものと推察される。この点については汪婉もほぼ同様の指摘をしている[24]。つまり、初期から後期にかけて、視察者の身分は上級官員から各地方の官員へと、視察の目的は中国の教育改革の参考、いわゆる学制の制定から地方の教育政策の実施へと変化していったのである。

（２）東京の幼稚園における教育実態の記録

これら日本の幼児教育に関する報告の中でも、項文瑞の『遊日本学校筆記』は幼稚園の教育実態について最も具体的に記したものである[25]。項文瑞は上海地域の学務官員であり、上海で近代学校を設立するため、日本に派遣され教育視察を行った[26]。彼は 1902 年８月 10 日と 12 日に東京小石川の十善教育会幼稚園、8 月 24 日に女子高等師範学校附属幼稚園、9 月 20 日に東京富士見小学校附属幼稚園を視察している。その中の東京小石川の十善教育会幼稚園と女子高等師範学校附属幼稚園の 2 園は視察内容が詳細に記載されている。その視察

内容を両園別に、また項目ごとにまとめると以下のようになる。

表 3-3　東京の幼稚園での視察内容

視察項目	小石川十善教育会幼稚園	女子高等師範学校附属幼稚園
園児数	4、5 歳前の子ども 50 名	4 歳児は 80 名；5、6 歳の子ども 44 名
教員	園主 1 名、女性教員 1 名、助教員 2 名	保姆 4 名
保育時間	9 時から 1 日 3 時間	暑い時 1 日 3 時間；涼しい時 1 日 5 時間
施設	2 つの教室 机の高さは 1 尺 7 寸（約 51 センチ）、横は 2 尺 5 寸。 椅子の高さは 8 寸、横の長さは机と同じ。	入り口の向こう側の壁のところに高さ 8 寸の低い椅子が並べられている。60、70 名の子どもが座ることができる。
保育費	月 1 元以上 2 元以下	上等部毎月 1 元；下等部徴収しない。
遊具	恩物	恩物
保育内容	訓話、行儀、手技、唱歌、遊戯	訓話、遊戯、唱歌、手技

出典：項文瑞『遊日本学校筆記』1903 年（王寶平編『晩清中国人日本考察記集成 教育考察記』、杭州大学出版社、1999 年）より作成。

表 3－3 に示したように、視察内容としては小石川十善教育会幼稚園と女子高等師範学校附属幼稚園のそれぞれの教育の対象、教員、保育時間、施設設備、保育費、遊具、保育内容などを記録している。彼は直接観察できるものを詳細に記録したと言えよう。周知のように中国最初の官立幼稚園の設置は 1904 年であり、それ以前の幼児教育は家庭で行われていたことから、幼稚園のような公的な幼児教育機関は中国人にとってまだ不案内なものであった。視察内容は、文字で国内にいる中国人に日本の幼稚園の詳細を提示するために記録したと考えられる。

例えば、遊具について、項は女子高等師範学校附属幼稚園で子どもたちが恩物で遊んでいる様子を記録した。一人の子どもが正方形と三角形の木の板それぞれ 8 枚をいじっている。これに対して、案内者の女子高等師範学校の助教授東基吉が、「これは恩物である。１枚や２枚の板を移動するたびに、違う形になる。そうすると、無限な可能性がある。板で遊ぶことによって、子どもの知的発達を促すことができる」[27]と恩物を紹介する様子が記されている。

さらに、保育内容の具体的な記録を見ると、項は「唱歌」について多く記述している。小石川十善教育会幼稚園の参観記録において、唱歌について以下のように記している[28]。

女性教員はオルガンのリズムに合わせて歌を教え、子どもたちは先生に従った。みんな揃えて、乱れなかった。歌が終わった後隣の部屋で園長が教える場面をみた。園長は細い竹の棒で黒板を指しながら、歌を教えていた。＜中略＝引用者＞歌詞の内容は修身に関するもので、礼儀を正しく、他人に優しく、自分に厳しくといったものである。

このように、子どもたちがオルガンのリズムに合わせて歌う様子が記されている。また、歌詞の内容は、礼儀に関するもので、項が特に「礼儀」に注目していたことがうかがえる。

また、女子高等師範学校附属幼稚園の参観記録で、項は「保姆はオルガンを弾きながら歌を教え、子どもはみんな立って歌っていた。歌うとき、両手を上げたり下ろしたり、曲げたり伸ばしたり、左で打ったり右で打ったり、みんなそろえて、乱れた子はなかった」[29]と唱歌をうたう際の様子を記している。

以上のように、唱歌は両幼稚園で行われており、項が詳細に書いている部分である。この中で項は、子どもたちが皆同じ動作を行っていることに着目している。その理由としては、彼が規律や統一性を重視していたためと推測される。つまり清朝の官員である項は特に幼稚園で行われるしつけ的な教育内容に注意を払っていたと言えよう。

彼が視察を通して一番驚いたのは、日本の子どもの礼儀正しさであった。十善教育会幼稚園での修身の教育に関して項は「小学校の基礎になるのは修身、唱歌、手工、図画の４課目である。その中で最も重要なのは修身である。＜中略＝引用者＞下校のとき子どもはみんなお辞儀をして、サヨナラを言った。みんな穏やかで、慌てなかった。4、5 歳の子どもがこのように礼儀正しくできるのは、愛すべきことで、なぜこのようにしつけできたのか知りたかった」[30]と記している。この記述からは、項が「修身」教育を重視していたことが窺われる。おそらく彼は、中国の伝統的幼児教育思想の中で「礼儀」や「道徳」が重んじられていたことから日本との共通点に着目したと考えられる。

また、女子高等師範学校附属幼稚園でも同様の記述が見られる。すなわち、同幼稚園の視察に関連して「ある 3 歳児が走っていたが、私たちを見て、お辞儀をしてあいさつした。他の子どもも倣ってみんなお辞儀をした」[31]と記している。このように、項文瑞は当時の日本の幼稚園教育では、礼儀や規律が非常に重んじられていることに注目している。

さらに、項は幼稚園の教育は小学校の基礎であることを認識し、「基礎があれば、他日入学してから自然に進歩することができる」[32]と記している。

（３）関西の幼稚園の教育実態の記録

多くの中国の官員が東京で視察を行ったが、東京以外の地域でも視察を行った官員も多数存在する。地方の幼稚園としては、方燕年が神戸市立幼稚園、王景禧が大阪愛珠幼稚園を視察している。そして、方燕年は 1903 年に『瀛州観学』を、王景禧は 1904 年に『日遊筆記』をまとめている。王景禧の視察内容は後述するため、ここでは、地方の幼稚園を視察した方燕年の視察内容を検討する。

方の記録によれば、神戸市立幼稚園には女性の園長が 1 人いて、他にも 5 人の保姆がいた。園児は男児と女児合わせて 100 人程度で、年齢は 4、5、6 歳である。

次に、施設についての記録を見ると、遊戯室と開誘室の 2 つの教室があるとされている。遊戯室の横は約 6、7 丈、縦は約 5 丈であり、50、60 の園児が入ることが出来る。保育内容に関しては、東京の幼稚園と同様、重点的に記述され、「唱歌」についても多く記述されている。神戸市立幼稚園の参観記録で、方は「唱歌」について以下のように記している[33]。

> 子どもは 2 つの円形のグループに分けられ、手を繋いで一緒に歌をうたっている。歌うとき、両手で上下、左右で打ったり、足を踏んだり、回ったりする。＜中略＝引用者＞みんな遊戯室を出た後も歩きながら歌っている。歌の内容は修身と関係していて、時には軍歌をうたっている。次に、保姆は子どもを開講室につれて行く。開講室にいくつかの遊具が置かれ、子どもたちは自分の好きな遊具を取って遊ぶ。遊んだ後、子どもは遊具を元の位置に戻す。

以上のように、神戸の幼稚園でも「唱歌」が保育内容の 1 つとして実施されていた。特に、方は東京の幼稚園を視察した官員項文瑞と同じように、唱歌の内容として「修身」に注目している。さらに、方は子どもが遊んだ後に遊具を片付けることに対して「秩序があり、少しも乱れがない」[34]と評価した。このように、方は「運動で子どもに元気を与え、歌で子どもの性質を柔らかにし、グループ活動で子どもが団結し、規律を守って礼儀を正す」[35]と保育内容を理解している。つまり、方は唱歌や体育といった活動が幼児の性格に肯定的な影響をもたらすと認識している。また、彼は礼儀を秩序の源泉とみなし、保育内容の規律的側面に注意を向けている。

このように、中国からの上層官員は幼稚園教育の全体像に関するものを中心として視察したのに対して、地方の学務官員は各幼稚園の具体的な教育を記録している。特に、官員達は「修身」といった規則を守る教育に注目し、彼らは実際幼稚園を作る際にどのようなものが必要なのか、それを念頭において視察したと言えよう。実際、1904 年の「奏定学堂章程」では、各段階の学校に修身科を必ず設置しなければならないとの規定があり、「修身」は徳育の機能を担い、中国の学校教育において重要な位置を示している。周知のように、「奏定学堂章程」の主な考案者は張之洞である。さらに、その「修身」を教育課程に入れることを提言したのは、張之洞が派遣した羅振玉である。羅振玉は 1901 年、張之洞の委託を受け、日本を視察し、日本の学制に関する情報を収集した。視察報告書「扶桑両月記」（1902 年）では、日本の教育制度が紹介され、さらに彼が創刊した雑誌『教育世界』には学制制定の必要性について述べられた文章や、日本の『幼稚園法二十遊嬉』の訳文「幼稚園恩物図説」が掲載されていた。また、羅振玉は張之洞と共に、「奏定学堂章程」の制定作業に直接的に関与していた[36]。汪婉も「張が主導して学制を制定した際に、羅振玉一行の日本視察の成果を大いに参照した」[37]と記し、羅振玉の視察結果の学制への影響を指摘している。羅の視察は

幼稚園を主対象としていないが、官員たちの「修身」に特別な注意を払った視察結果は、中国の初の幼稚園教育規程を含む学制の性格につながっていくと言えよう。次に、民間の実業家の視察について考察する。

３． 実業家張謇の視察日記

前述したように、官員だけではなく、民間の実業家も様々な教育改革に取り組んでいた。1898 年から 1908 年にかけ、日本の教育を視察する実業家が増加し、視察結果を日記としてまとめている。

その実業家の代表的な人物の 1 人である張謇も、1903 年に大阪博覧会を機に、大阪地域の幼稚園を視察した。張は将来、江蘇省の南通市に教育機関を設立するために日本で視察を行い、視察記録を『癸卯東游日記』（1903 年）として出版した。張は、日本の近代教育機関について、幼稚園から大学までを見学した。

張謇が日本での教育視察を行った理由は、「実業は教育を補助し、教育は実業を改良する」[38]との考え、つまり、実業で得た資金を教育に投入し、教育が実業に役に立つことを期待したためであった。また、張は「実業と教育は富強の本である。立国は人材により、人材がなければ国は興らない」[39]と述べ、教育の重要性を提唱した。彼は、実業救国・教育救国の道を進み、教育の発展と人材育成を通じて富国の目標を達成しようとした。例えば、彼は 1899 年に「大生紗廠」という紡織工場を開業し、1902 年に「大生紗廠からの所得 2 万元を資金とし、それに知人らの賛助を加えて」[40]通州師範学校を設立している。このように、教育を重視した張は、師範学校以外の学校を作るため、実際に日本の学校を視察したのである。

蔭山雅博の研究によれば、張謇の 70 日間の滞在期間の活動の大半は「１学校教育調査、２教育機器、教具・教材調査及びそれらの購入、３嘉納治五郎をはじめとする教育関係者との会談」[41]であったとされている。

張の教育視察で注目されることとして、5 月 6 日に会見した嘉納治五郎との談話のなかで、「学校の規模については、大きいものより、小さいものを見たい。大都市より市町村の学校を見たい」[42]と述べた点がある。つまり張は「小さいもの」「市町村の学校」を視察することによって、今後の南通という地方の開発にとっての実際に貢献する資料や情報を入手したいと考えたのであった。

張は、大阪の桃山にある女子師範学校＜京都府師範学校女子部＝筆者注＞附属幼稚園を見学した。幼稚園の施設について、「教室が少なくて、遊びの場所が多い。室内に机があって、長さは 38 寸で、高さは 19 寸、広さは 15 寸である。椅子の高さは 10 寸、広さは 8 寸である。机の上には方眼が引かれて、黒板にも方眼が引かれている」[43]と記録している。机や椅子の寸法などまで記録していることから、張は将来南通で幼稚園を開設する意図をもって施設を観察したことがうかがえる。さらに張は「遊びの場所が多い」と記しており、教育環境にも注目したことがわかる。また、桃山にある女子師範学校の附属幼稚園では、自由な遊びの中で、子どもが折り紙や積木で遊んでいた光景をみた張は、「子どもたちは皆晴れ

やかで、喜んでいる」[44]と感嘆した。このように、張は子どもの気持ちに注目し、自由な遊びの重要性を実感している。

４． 大阪愛珠幼稚園に関する記録

幼稚園視察記録の中で、唯一官員と実業家の両方が視察したのは、大阪愛珠幼稚園[45]であった。視察内容を分析する前に、中国の視察者がどのような点に着目したのかを明らかにするため、当時の大阪愛珠幼稚園の保育内容の変遷を概観しておきたい。

愛珠幼稚園は 1880 年に開設され、初期の保育内容は恩物を中心としていた。しかし、西小路勝子によると「1902 年からは『幼児の好みに依り』『都合により』といった理由で、計画されていた保育課目自体そのものが変更されることが多くなる。＜中略＝引用者＞変更された課目は、幼児が好んだ課目か、実施する必要感のあった課目と考えられ、状況に応じて柔軟に展開することが可能になってきている」[46]とされている。つまり、1902 年から、愛珠幼稚園の保育内容は恩物中心から自由遊びの方へ転換したことがわかる。では、官員王景禧と実業家張謇は当時愛珠幼稚園で行われていた保育のどのような点に着目したのだろうか。項目別に、2 人の視察記録を対比することによって、２人の認識した幼稚園の特徴を明らかにしたい。

表 3-4　愛珠幼稚園での視察内容

視察者	王景禧（官員）	張謇（実業家）
視察年	1903 年	1903 年
教員	園長１人、保姆２人	園長１人、保姆２人
施設	遊戯室と標本器具室(開誘室)	教室と運動場
経費	市からの補助金と寄付	記載なし
保育内容	唱歌、運動、恩物、本	唱歌、遊戯、積み木、折り紙

※『日遊筆記』と『癸卯東游日記』を参考に筆者作成。

表 3－4 を見ると、教員について王は「園長は高等女学校卒業生である。保姆は２人いる」[47]と記録しており、張も園長が 1 人おり、「2 人の保姆は子どもの遊戯をやらせる」[48]と 2 人の保姆についても言及している。そして施設と遊具について、王は「遊戯室と標本器具室（開誘室）がある。開誘室に植物標本が多く陳列されている。そして、保育用具、恩物という器具も備えている」[49]と室内の諸設備や教具に注目している。一方、張は「園内には教室が少なく、1 つの教室は 30 人程度しか入れない。教室の周りに藤の花の棚が設けられ、外に砂の運動場がある」[50]と室外の環境にも視線を向けている。

さらに、経費について、王は「大半の経営費は市の公費から出されている。富裕層の家からの寄付も受けている。保育料も取っているが、金額が安くて、一般の家でも負担できる。この幼稚園の建物および開園する際に必要な用具などの金額は約 8 万円だった」[51]と記してい

る。このように、王は幼稚園の経営費の構成を詳しく記録した。それに対して、実業家の張謇の日記には費用に関する情報が記載されていない。おそらく官員たちは財政のことを配慮して経費を詳しく記録したと考えられる。

最後に、保育内容に関して、王は以下のように詳細に記録している[52]。

> 園長はまず本を出した。内容は全て日本の歴史や児童の修身、倫理などに関するものである。次に、各種の恩物の使い方を紹介した。＜中略＝引用者＞一人の保姆はオルガンをひいて、もう一人の保姆は子どもを伴って唱歌をうたう。子どもたちはみんなリズムに合わせて踊って、楽しんでいる。途中で休憩もあり、その後ゲームをする。子どもを２つのチームに分けて、先頭の２人の子にそれぞれ赤と緑の旗を配っている。順番に走らせ、一周走って後ろの子に旗をわたす。

王の記録によって、大阪市立愛珠幼稚園の保育内容は読み聞かせ、恩物、唱歌、遊戯から構成されていたことがわかる。その中で最初に記述されたのは歴史、修身、倫理に関する本であった。他の官員と同じように[53]、王が修身教育に注目していたことがうかがえる。

また、東京や神戸の幼稚園と同様に唱歌が行われていた。唱歌はよく記録されている保育内容であり、直接観察しやすい活動である。さらに、リレーのような体を動かす遊びも実施されていた。しかし、王が記録した「唱歌」や体育のような活動はあくまでも幼児教育の実践であり、どのような幼児教育思想に基づいて行われたかは記録されていない。つまり、官員達は実践の記録にとどまり、幼児教育思想に対する認識は不足していたと言えよう。

それに対して、張は幼稚園の必要性、すなわち幼児教育の本質を捉えていた。張が愛珠幼稚園で見学した日に開園 23 年記念会が行われ、そこで張は保育の意義についての講演を聞いた。その後、愛珠幼稚園で実施されていた遊戯重視の保育を見学している。彼が自由遊びを日記に記録したことは遊戯に対する重視の現れと言えよう。前述した張の桃山の女子師範学校附属幼稚園での記録と合わせて見ると、張は幼稚園を子どもの心身の発達に影響を与える、自由に遊べる場所と認識していたと考えることができる。このように、張は幼稚園の重要性を理解し、教育の場として子どもが楽しく成長できる場所を作りたいと考えていた。そしてこの視察が、その後中国での日本の幼児教育内容を元にした幼稚園の設立につながっていく。

1903 年に日本を視察した張謇は帰国後、1904 年に自分の子息と親友の子ども 10 人のために、江蘇省海門常楽鎮に幼児教育機関扶海垞家塾を設立した。さらに、扶海垞家塾には日本人女性教師森田政子が招聘された。そして 1912 年の辛亥革命後、張は扶海垞家塾での教育を基盤として、南通市で「新育嬰堂第一幼稚園」を創立した。このように、張謇の日本視察は江蘇省南通市という地方の幼児教育の近代化に重要な役割を果たしたのであった。

以上、中国人の日本での教育視察報告書の内容について、官員と実業家の相違に着目しながら分析した。以下、本節の冒頭に提示した課題に即して分析内容をまとめる。

第 1 の課題、中国人の視察ではどのように日本の幼稚園教育を捉えられていたのかについては、まず、視察記録では、東京、神戸、大阪などの都市の幼稚園において、教員数、園児数、保育時間、施設設備、保育費、遊具、保育内容・活動など多岐にわたる事項が報告されている。幼稚園の施設などについて、視察者達は教室の広さ、机や椅子の寸法など施設設備の状況を記録し、教育環境に注目したことが分かった。そして、遊具の中でも特に恩物に着目し、恩物を通して保育していることを把握している。さらに、視察した保育項目は「訓話、行儀、手技、唱歌、遊戯」の 5 つにまとめることができ、その中で「唱歌」について多く記録されていることが明らかになった。視察者は唱歌の内容までを確認し、唱歌が幼児の性格に肯定的な影響をもたらすと理解した。

以上のように、彼らは、幼稚園の教育は直接的に知識を与えるのではなく、唱歌や遊戯という方法、すなわち幼児の活動を通して発達を促すものである、という特徴を理解していた。さらに、そのための教育施設、設備、教具、教員などが整備されていることも把握していたと言えよう。

第 2 の課題、幼稚園を視察する際に官員と実業家が関心を持った点及びその相違について記すと、官員と実業家の間では、視察の際に注目した部分が大きく異なっていたことが明らかになった。官員達は修身という規律や礼儀を教える教育内容に注目し、実業者達は自由な遊びを含んだ教育内容を重視していたと言える。官員達は、中国の伝統的幼児教育思想の中で礼儀や道徳が重んじられていたことから日本との共通点に着目したと考えられる。それは後に制定された中国の学制の性格につながっていく。

さらに言えば官員らには、幼稚園は小学校の基礎、いわゆる就学前の準備段階という認識があった。一方、実業家の張謇は、幼稚園は幼児の成長する場所、自由に遊べる場所という捉え方をした点が特徴であった。また、官員は財政を配慮して、幼稚園の経営費の構成及び保育料などの経費について詳しく記録した。それに対して実業家は費用に関して記録していなかった。

いずれにしても日本での視察は、幼児教育の理念、教育内容・方法、教具、教員の活動、施設など広範にわたっており、近代的幼児教育の本質と制度を理解する上で大いに役立ったものと考えられる。視察結果は後に中国において幼児教育の導入の基準となり、幼稚園を作る際のモデルになったと推察される。

次に日本の幼児教育について学習した清国女子留学生について考察する。女子留学生に着目するのは、その存在が、官員や実業家による視察と並んで、日本式幼稚園の中国への導入に大きな役割を果たしたためである。

第２節　日本で幼児教育を学ぶ清国女子留学生

前節では、清朝末期中国官員と実業家による日本での視察記録を分析し、彼らが日本で幼児教育の何に注目して視察したのか、また何を学んだのかを中心に考察してきた。本節は清朝末期中国の女子留学生に注目し、彼女たちが日本で受けた幼稚園保姆養成教育の実態と中国の幼児教育への影響を明らかにする。

本節では、検討課題を以下のように設定する。第一に、なぜ中国の女性が日本に留学したのかを考察する。第二に、日本に留学した女子留学生は日本で何を学んだのかを解明する。第三に、中国の幼児教育にどのような影響を与えたのかを明らかにする。これよりに、清朝末期における日本への女子留学生の学習歴と中国幼児教育への影響の一端を明らかにできると考える。

１．20 世紀初期における日本留学ブーム

20 世紀初頭、中国から大量の学生が日本へ留学し、日本留学ブームとなった。その原因としては二点ある。第一には前述した通り、中国側が近代化を進めるために、同じ東アジア圏である日本に学ぶのが効率的と考えたためである。

第二には、日本からの働きかけがあったという点である[54]。清水稔によると、当時「日本国内では、政治的には『支那保全』論が提起され、軍事的には満洲をめぐるロシアとの対決姿勢が顕在化していった。その便法として日中両国の政治的・軍事的・文化的な提携の必要性が強調され、そのためには中国人留学生の日本受け入れがもっとも有効であると考えられた」[55]という。また、「帝国の対清懐柔策は中央政府と好を訂し、誼を厚くする外、地方政府と結託することを必要とし、且地方に於いて郷紳豪族の歓心を収攬するを務むべし、収攬の方法は彼等を誘導して学校を設立し、工廠を創設し、彼等子弟を教育するを以て首務となすべし」[56]といった「二等書記官楢原陳政の意見」が外務省内に配布された[57]。さらに、「陸軍参謀本部の神尾光臣・相川重太郎・宇都宮太郎の三人は渡清し、張之洞・李鴻章らの洋務派から変法派の各派各層と面談し、日本軍人による指導訓練、留学生派遣等の問題を提案し、さかんに親日勢力を扶植しようとつとめていた」[58]とされている。つまり、中国人留学生の受け入れによって、中国との関係が密接になり、中国国内に親日勢力を育てることができるとも考えられたのであった。このように、日本の各界は中国人留学生の招致を重視し、中国人留学生を専門に受け入れる学校まで開設した。

中国から日本への留学生の数は、1896 年から 1906 年までの 10 年間で 1 万人以上に及んだ。前述したように、清朝が新政を行うという政策が発表されて以後、1903 年には 1000 人、1906 年には 8000 人とピークに達した。その後だんだん減少しつつあったが、1911 年にはまだ 3000 人が留学していた。

さねとうの研究によれば、「清末の留学教育には、2 つの特徴があった。1 つは、その教授内容が専門の学でなく普通学であったこと」[59]とされている。中国で初等教育を普及させるた

め、多くの学生は日本で留学の際中学程度の諸学科を学んだ。そして、男子留学生がほとんどであった。しかし、その中には、幼児教育を学ぶため女子師範科に入学した女子留学生も僅かながら存在した。もう 1 つの特徴は「正式の教育でなくて速成教育であったこと」[60]と指摘されている。実際、自費留学生の増加に伴い、学生の質は低下し、日本側は膨大な数の学生を吸収し、丁寧に対処することが難しくなった。官立学校への入学者はごく少ない数で、多くの留学生は私立学校に、特にその「速成コース」に入った。「速成コース」とは、その名の通り修業期間が概ね 3 ヶ月から 1 年まで、学習時間が非常に短いコースである。このような短期間では、教育の質が保証できにくいとも言えよう。とはいっても、留学生は日本から帰国後、教育関係の仕事に就くこともあり、その場合中国の近代教育の発展に重要な役割を果たしたのであった。

２． 実践女学校清国女子留学生部

（１）日本への女子留学

では、日本留学ブームの中での女子留学はどのように展開したのか。1898 年以降、湖広総督張之洞が留学生を日本に派遣し始めた。しかし、最初派遣された学生は男子のみであり、女子の留学は遅れていた。初めて日本にきた女子留学生は夏循蘭という 9 歳の子どもで、1899 年に華族女学校に入学した。彼女は父親と共に来日した[61]。

当時の上海で刊行した雑誌『大陸』[62]第一号には「中国女学生留学于日本者之声価」というタイトルの記事が掲載されており、同記事に中国女子留学生に対する日本人の意見が記されている[63]。

> 中国の女子数人、航海して日本にくるあり、日本教育大家、華族女学校学監下田歌子先生監督の下にありて業をならふ。中国女子の海外に留学する者は、これより発軔す。知るべし、中国人求学の心ようやく熟することを。＜中略=引用者＞留学生の中、その夫の東京に留学する者、その会面の時をみるに、応接の儀式、周旋の情誼、実に平等たり。昔聞く、中国は男尊女卑なりと。今よりこれをみるに、ことに然らざるなり。男子は女子に対してこのごとく慇懃鄭重なり、豈に奴隷をもって女子を待つものならんや。

このように、中国から日本に留学してきた女性たちは、堂々とした立ち居振る舞いでしかも社交的で人間関係を適切にこなし、パートナーとも対等である様子が評価されている。しかし、初期の女子留学生は、父兄や夫に付き添って家族として来日していた。

後に、政府の方針により、女子官費留学生と私費留学生が来日した。その受け皿となった日本の女学校は以下のようであった。

表 3-5 在東京女子学校清国留学生数(1907 年)

学校名	学生数
実践女学校	47
高等圭文美術女学校	19
女子美術学校	14
東京音楽院	12
女子音楽学校	4
東洋女芸学校	4
共立女子職業学校	4
女子学院	3

出典：『実践女学校 60 年史』118 頁。

表 3－5 から、1907 年当時女子留学生を受け入れる女学校は 8 校あり、その中で実践女学校の留学生数が最も多かったことがわかる。それは同校の創設者で当時校長だった下田歌子の教育理念と大きな関係があった。では、なぜ彼女が中国人女子留学生を積極的に受け入れたのか、その理由を次に分析する。

（２）実践女学校と中国の女子教育

まず、女子留学生の最も多かった実践女学校の受け入れ経緯について概観する。実践女学校では創立 3 年目の 1901 年に、最初の清国女子留学生を受け入れた。1905 年には留学生のために清国女子留学生部を創り、師範速成科（修業年限 2 年または 1 年）と工芸速成科（修業年限 1 年）を設置した。「清国女子速成科規定」では、第一条は「本校ハ教場及ビ教員ヲ繰合出来ル限りニ於テ清国女性ノ為メ速成科ヲ置テ別ニ教場ヲ設ケル事アルベシ」[64]となっている。そして同年、湖南省から派遣された官費留学生 20 人を受け入れた[65]。その 20 人の中で 13 名は師範速成科を選び、7 名は工芸速成科を選んだ。この 20 名の官費留学生が入学した前後に、他に私費留学生約 10 名が留学した。その中には息子と一緒に来日した譚蓮生と、49 歳の聶という姓の女性がいる[66]。同校では、その後も数多くの清国女子留学生を受け入れた。

では、なぜ同校では清国女子留学生の受け入れたのだろうか。下田歌子は 1904 年清国留学生第一回卒業記念講演の中で、以下のように述べている[67]。

> わが国が千有余年の昔から、思想に於いて学術に於いて、はたまた文化の各方面に於いて、貴嬢方のお国を師と仰ぎ、大いに啓発された事に対するご恩報じの一端とも考へた＜中略＝引用者＞冀わく航路つつがなく、壮健にて帰国され、あっぱれ御国の女子教育の為に、貴国の家庭及び社会進歩の為に、その貴き原動力とならん事を希望いたします。

つまり、中国の女子留学生を受け入れた理由は、日本と中国の文化交流は古くからあり、女子留学生に教育を施すことは、中国への恩返しの一端でもあると考えたのであった。また、下田歌子は「大凡一国ノ女学校優レタル者ハ其ノ男学必ズ優ル、何ゾヤ。母教ノ斯ク然ラシムルナリ」[68]と、母親教育や女性の母親の役割の観点から女性の教育の重要性を訴えた。速成師範科と工芸科を創設したのも、下田の教育理念の実践だと言える。「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科縁起」においては、下田は清国女子師範工芸速成科の設立理由について、以下のように記している[69]。

> 彼國女子之教養刻下為圖開明　尚未視為重要　故教養之方未能完善　女子之天職在内助之實務與家庭之教育　關於其國運之消長　今我等欲使彼邦女子以短少之時日得能盡其天職之技能　故為特設速成師範及工藝科　期以一年畢業使得為慈母與教師之教養　清國女子能陸續來此者則不獨其人之幸運　抑亦東亞之幸也。

つまり、下田は女性の天職は、表立たない位置から夫の働きを支える妻の役割と家庭教育にあると主張している。ここから下田歌子の「良妻賢母」の理念がうかがえる。女子教育は国家の運命とも関係していると捉えられ、下田歌子は中国でも女子教育を推し進めようとしている。ここでの女子教育の特徴は「慈母と教師の教養」が得られるということにあり、教師を育てるだけではなく、母親のあり方も教えることができると考えられている。

しかし、下田の女子教育構想を実現するには、中国側の協力が必要である。当時中国はまだ儒教的封建社会であったため、女性への教育や社会進出は認められなかった。その時、北京滞在中の服部宇之吉は下田の教育理念の実現を支援した。

服部宇之吉は、清国管学大臣張百熙の要請により文部省から派遣され、1902 年から 1908 年まで京師大学堂師範館の総教習を担当した。服部の夫人繁子は下田の弟子であり、夫と共に中国滞在中に実践女学校に中国人留学生を紹介するなど、下田と頻繁に書信を交わすほど親交が深かった。服部は、日本の文部省の委嘱を受けて、京師大学堂師範館で中国の教育事業の近代化を指導する立場にあったが、北京に滞在中に下田の教育構想の実現をも支援していたのである[70]。

服部によると、彼は清国で大きな権限を持つ西太后に下田歌子の構想を紹介し、その後、「女子教育を興すの道は、西太后の口から、女子教育の必要を仰せられるにある。それには皇太后の心を動かす人がなければならぬ。而してその人は女子であって、上流社会の女子教育に、経験を有する人でなければならぬ。下田先生ならば、この場合唯一の適任者である」[71]と述べている。

最後に、西太后は「清国の女子教育は一切を下田の指導にゆだねること」[72]と指示した。その結果、清政府は 1907 年 3 月、女子小学校と女子師範学校の制度、「学部奏定女子小学堂章程」と「学部奏定女子師範堂章程」を頒布した。「女子師範学堂章程」の「学科制度の女子師範学堂教育総要」では、その設置の目的については以下のように論じられている[73]。

中国では女徳は代々受け継がれる。女性としての道徳、主婦としての道徳、母親としての道徳については教典や儒学者の本の中に数多く書かれている。今、女子師範生は先ずそれを学び、常に貞静、順良、慈淑、節約などの美徳に従い、中国従来の礼教を忘れず、社会の風紀を維持する。＜中略＝引用者＞家庭と国家は密接に関連している。家政がよければ国風も自然に隆盛する。その家政を正すには、まず女子が教育を受け、礼法を守ることを知る必要がある。また、女子教育は国民教育の基本となる。なぜなら学堂の教育は最良の家庭教育によって補われることではじめて完璧なものとなるからである。そして、最良の家庭教育は賢母によるものであり、その賢母を求めるのは必ず完全な女学になる。女子師範教育者はこの主旨に基づき、教導に努めなければならない。

このように、清政府が女子学校を設ける目的は、儒教的な「礼法」に服従した良妻賢母的な女性を育成することだったことがわかる。これは、下田歌子が主張した「良妻賢母」的女子教育と一致している。女子教育は、儒教徳目を女子学生に学ばせ、「道徳」あるいは「女徳」を重視するものであった。そして「女子の徳操を教養するため必須の知識技能を教え、身体の発育を健全化すべきだ」[74]という女子学校を創立する方針の中に、その趣旨を盛り込んでいたのである。さらに、1904 年の「蒙養院及び家庭教育法章程」で論じられている女子教育の意義と同様に、女子教育は「国民教育の基本」である家庭教育のために存在し、家庭教育の質を向上させるためには「良妻賢母」を育成しなければならないと論じている。以上のように、この時期の中国での女子教育は下田歌子が考えたように家庭教育を奨励する存在として見られていたことがわかる。

また、1905 年『東方雑誌』[75]第 2 巻第 6 期は、「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則」を掲載し、文末に駐日公使楊枢の「附言」も載せ、楊は女子教育が家庭教育に緊密に関連していることを強調している。しかし、中国に女学校を設けようとしても女教師がいない、幼稚園を設立しようとしても保姆もいない、女教師・保姆の両方が不足している状態を述べている。楊は下田歌子に感銘を受け、中国女性の日本留学を呼びかけていた[76]。

（３）実践女学校清国女子留学生部における幼稚園保姆養成教育

続いて、実践女学校付属中国女子留学生部での幼稚園保姆養成教育がどのように実施されたのかを考察する。女子留学生は、実践女学校で幼稚園保姆養成教育を受けることができた。実際、「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則」の第 4 条は、「本科課程は師範と工芸二科に分けられるも、教師や幼稚園保姆になるに必要な各種科目共同に履修することができる」[77]と定められ、実践女学校が幼稚園保姆を志望する留学生のために、幼児教育に関する課程を開設したことがわかる。

以下、師範速成科と工芸速成科の学科課程を分析することによって、女子留学生の受けた幼稚園保姆養成教育の内容を明確にする。学科課程は次の表 3－6 と表 3－7 のようになっ

ている。

表 3-6 実践女学校師範速成科課程表（1905 年）

学科	第一学期	時間	第二学期	時間	第三学期	時間
教育	教育理論 管理法	6	同左	6	同左並保育	6
心理	要論	2	同左	1	同左	1
理科	植物 動物	2	物理 化学	2	生理衛生	2
歴史			万国歴史	2	同左	2
地理			万国地理	2	同左	2
算術	四則	4	同左	3	分数	
図画	自在画	1	同左	1	同左	3
体操	遊戯　体操	2	同左	2	同左	1
唱歌	単音唱歌	3	同左	3	同左	2
日本語	会話	6	会話 文法	4	会話 文法、作文	3 4
漢文		2		2		2
合計		28		28		28

出典:「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則」『東方雑誌』第 2 巻第 6 期、東方雑誌社、1905 年、152 頁。

表 3-7 実践女学校工芸速成科課程表（1905 年）

学科	第一学期	時間	第二学期	時間	第三学期	時間
教育	教育叢談	3	同左	3	同左	3
理科	植物 動物	2	物理 化学	2	生理衛生	2
算術	四則	2	同左	2	同左	2
術科	編み物造花 図画刺繍	10	同左	10	同左	10
体操	遊戯　体操	2	同左	2	同左	2
唱歌	単音唱歌	3	同左	4	同左	4
日本語	会話	4	会話	3	会話、文法	3
漢文		2		2		2
合計		28		28		28

出典:「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則」『東方雑誌』第 2 巻第 6 期、東方雑誌社、1905 年、153 頁。

表 3－6 と表 3－7 の課程表から、師範速成科と工芸速成科の授業科目は違うが、授業時間数は同じであることがわかる。師範速成科は教養系科目が中心となっているものの、第三学期の教育並びに保育、第一、二、三学期の図画、遊戯と唱歌、という科目は幼児教育の専門的科目と言える。もちろん、心理、算術、体操なども幼稚園教員になるための不可欠な知識である。一方、工芸速成科は手芸技術に重点が置かれている。

さらに、女子高等師範学校の保姆練習科の学科課程と比較して、実践女学校附属中国女子留学生師範速成科・工芸速成科の特徴を探りたい。同時期 1898 年女子高等師範学校の保姆練習科の学科課程は以下の表になっている。

表 3-8 女子高等師範学校の保姆練習科の学科課程（1898 年）

学科	第 1 期	時間	第 2 期	時間	第 3 期	時間
修身	人倫道徳ノ要領	2	前期ノ続	1	前期ノ続	1
教育	総論各論、保育方法	13	各論保育方法、実地保育	17	保育方法、実地保育	23
理科	庶物	2	前期ノ続	2	なし	
図画	自在画	3	前期ノ続	2	なし	
音楽	単音唱歌、楽器用法	4	前期ノ続	4	楽器用法	1
合計		24		26		25

出典 :「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984 年、70 頁。

実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科（以下実践女学校）と女子高等師範学校の保姆練習科（以下女高師）の修業年限は同じく 1 年であり、1 年間は 3 学期から構成されている。しかし、実践女学校の週授業時間数は女高師より多い。その理由は、留学生向けの授業なので、日本語の時間数が設けられていたためと考えられる。実践女学校と女高師両校ともに、教育、理科、図画、音楽学科が設けられていた。この 4 学科目は教員になるために必要な専門的科目や専門的知識が含まれていると言えよう。さらには、女高師の方は保育に関する時間数が断然に多く、幼稚園教員としての専門性は高いと推測できる。とはいえ、実践女学校を卒業した女子学生は中国に帰国後、日本で学んだ知識を活かし、中国の幼稚園の設立に

重要な役割を果たしたのであった。

３．清国女子留学生の中国幼児教育への影響

最後に、清国女子留学生が帰国した後に、中国の幼児教育へ与えた影響を検討する。実践女学校を卒業した女子学生の帰国後の動向の一例について、次のような記録が残っている[78]。

> 支那の幼稚園は北京に一ヶ所ございます、実践女学校を卒業した支那婦人が設立者で、東京府の女子師範出身の方が主としてやって居られます、生徒は四、五十人位居りました。其科目は日本の幼稚園に模倣して保育致して居りますので、子どもは皆おとなしく喜んで致して居ります。

このように、実践女学校で学んだある女子留学生は帰国後、習得した専門的知識を中国の幼稚園の設立や運営に役立てたのであった。

続いて、他の学校で学習した女子留学生、上海公立幼稚舎に付設されている上海務本女塾の呉朱哲を考察することによって、日本から中国への幼稚園保姆養成教育への影響を探りたい。1906 年、呉朱哲は留学生として東京の本郷区にある誠之保姆養成所へ派遣された。1907 年、呉は中国に帰国後、上海公立幼稚園付設保姆伝習所を創設した。保姆伝習所の教科内容は、保育方法、児童心理学、教育学、修身学、談話、楽歌、図画、手工、文法、習字法、理科、博物などであった。その中で、保育方法、児童心理学、教育学、談話、楽歌、図画、手工など保育に関する専門知識を教授する科目もあり、文法、習字法、理科、博物など一般教養になる科目も設けられ、教育内容は整備されている。当時生徒は 36 人いて、卒業生は 21 人であった[79]。日本に留学した呉朱哲は、中国の幼稚園保姆養成教育に影響を及ぼしたと言えるのではないだろうか。

しかし、中国の全体から見ると、女子留学生の幼児教育への影響はそれほど大きくないと考えざるを得ない。それは実践女学校の卒業生記録から推測できる。すなわち「清国留学生証書台帳（卒業証書台帳　清国留学生部）　明治 37 年～44 年」によると、実践女学校清国留学生卒業生数は以下のようになっている。

表 3-9　実践女学校における清国留学生の卒業生数

卒業年月日	各科（卒業年回数）	人数
1904 年 7 月 16 日	普通科（第 1 回）	2
1906 年 7 月 20 日	速成師範科（第 1 回）	5
同上	同上　聴講生	2
同上	速成師範工芸科（第 1 回）	3
同上	同上　修了生	2
1907 年 3 月 31 日	普通科（第 2 回）	2

1908 年 3 月 28 日	速成中学科（第 3 回）	4
1908 年 11 月 5 日	工芸科（造花科第 1 回）	1
1909 年 3 月 26 日	中学科（第 1 回）	4
1909 年 7 月 21 日	工芸科（第 2 回）	12
同上	速成師範科	14
同上	中学科	6
同上	工芸科	8
1910 年 3 月 26 日	師範科（第 1 回）	13
同上	工芸科（第 3 回）	6
1910 年 12 月 24 日	幼稚園速成保育科（第 1 回）	4
1911 年 3 月 25 日	中学科（第 2 回）	2
同上	工芸科（第 4 回）	2
		計 92

出典：実践女子学園一〇〇年史編纂委員会『実践女子学園一〇〇年史』実践女子学園、2001 年、141 頁。

表 3－9 は 1904（明治 37）年から 1911 年の間の実践女学校清国留学生の卒業生数を示したものである。その内、幼稚園速成保育科を卒業したのは 4 名だった。この 4 名の氏名は『清国留学生証書台帳』で確認でき、それぞれ王昌国、劉啓華、袁篤修、徐秀栄であった。その中で、女性として中国で初の省議員となった王昌国は留日女学生会のリーダーになり、帰国後婦人解放運動に参加し、女子教育にも力を注いだ。しかし、王は帰国後、幼児教育関係の仕事に携わらなかった。もちろん幼稚園速成保育科が 1910 年に設けられる以前、師範と工芸科で幼稚園保姆を養成していたが、幼稚園速成保育科を卒業した人でさえ帰国後に幼児教育に関与していないことから、実際幼稚園で仕事を従事する卒業生はほんのわずかであったと推測できる。

第 3 節　中国の幼稚園における日本人教習の活動とその影響

1900 年頃日本の幼稚園教育制度が中国に紹介された。それを牽引したのは、日本を視察した中国人や日本で幼児教育を学んだ中国人留学生、そして、清朝に招聘された日本の教員であった。アジアの近代化の中で、自国内に指導者がいないときに先進国から指導者を政府や民間で招く場合に「教習」という用語を使うため、本研究では日本人教習と記す。本節では、20 世紀初頭の中国の幼稚園における日本人教習の活動の実態とその影響を明らかにする。

１．中国へ派遣された日本人教習

清朝政府は、教育の近代化を目指して教育行政機関・各種近代学校を創設・運営するために、日本をモデルと設定して日本から教師や顧問を招聘した。これら日本人教師・顧問の雇用形態には 2 つのタイプがある[80]。第一には、日本人（個人またはグループ）が自力で、または中国側の有志と協力して学校を設立し、教育に携わる形態である。第二には、中国人が設立した学校に、日本人を顧問または教師として雇用し、契約期間を定める「お雇い教習」の形態である[81]。

一方、前述した留学生受け入れの背景と同様に、阿部洋らによると、このような日本人教習派遣の要請を受ける日本側には、「東亜保全」論的な考え方が存在し、東アジアの三国が連携し欧米列強の進出に対処すべきとの主張が見られた[82]。同時に、これらの教師や顧問を派遣することで、日本が中国大陸進出を実現するための有力な足がかりとなるとの考えも存在した[83]。このように、背景は様々であったが、この時期日本人教習が多数中国に派遣され、1906 年から 1909 年にかけてピークに達し、その数は約 600 人にものぼった[84]。彼らは、幼稚園から大学までにわたる幅広い校種において、中国の教育の近代化を推進した。学校段階別にまとめると、以下の表のようになる。

表 3－10　1909 年中国における日本人教習の分布状況（学校段階別）

学校段階	人数
幼稚園	7 名
小学堂	26 名
中学堂	15 名
高等学堂、専門学堂	47 名
大学堂	4 名
師範学堂	105 名
実業学堂	78 名
武備学堂	58 名
警務学堂	13 名
医学堂	18 名
方言学堂	5 名
女学堂	5 名

その他	24 名
小計	405 名

出典：阿部洋･蔭山雅博･稲葉継雄「東アジアの教育近代化に果たした日本人の役割」『日本比較教育学会紀要』第 8 号､1982 年､52 頁。

表 3－10 から、1909 年に中国で幼稚園事業に従事した日本人教習の人数は 7 人で、派遣された総数 405 名から見ると割合が少ないことがわかる。最も人数が多いのは師範学堂であるが、その理由は早急に教育を普及させる目的で中国人教員を増やそうとしたためであった。さらに、富国強兵のため、実業学堂、武備学堂にも多くの日本人教習が必要された。このような政策の下では、幼稚園が学校教育導入初期に重視されなかったのは当然であった。では、実際、どの程度日本人教習は幼稚園教育に影響を及ぼしたのであろうか。幼稚園事業に携わった彼女らの情報を、表 3－11 としてまとめた。

表 3－11　清末期幼稚園教育に関係した日本人教習（1903～1910 年）

	時期	地域	氏名	中国での勤め先・職務	卒業学校及び日本での職歴	契約内容（年俸）
1	1903 年	湖北武昌	戸野美知恵	湖北幼稚園園長	1890 年女子高等師範学校卒、夫周二郎は湖北師範学堂に派遣	100 元
2	1903 年	湖北武昌	武井初子	湖北女子師範学堂附属小学校幼稚園保姆科		50 元→120 元
3		湖北武昌	佐藤ミサヲ	湖北女子師範学堂附属小学校幼稚園保姆科		
4	1903 年	湖北武昌	丹雪枝	湖北幼稚園保姆	大阪高等女学校卒、久敷幼稚園保姆	50 元
5	1903 年	湖北武昌	丹トク	湖北幼稚園保姆		20 元
6	1906 年	湖北武昌	大杉ハル	湖北幼稚園保姆	清国派遣所教員養成所	50 元
7		湖北武昌	児島（名前不明）	武昌幼稚園	夫は武備学堂教員	
8	1905 年	湖南長沙	佐藤操子	湖南省官立蒙養院	東京府小学校訓導	
9	1905 年	湖南長沙	春山雪子	湖南省官立蒙養	東京府小学校訓導	50 元

				院		
10	1906 年	湖南常徳	田中たか子	常徳府蒙養院主任保姆	女子高等師範学校卒、元本郷誠之小学校附属幼稚園保姆	80 元
11	1906 年	湖南常徳	竹中多嘉	常徳府蒙養院		60 元
12	1906 年	湖南常徳	山崎知寿	常徳府蒙養院		
13	1908 年	湖南長沙	斎藤イシ	湖南省官立蒙養院	清漢語学講習所卒	
14	1908 年	湖南長沙	市村マツミ	湖南省官立蒙養院		
15	1908 年	湖南長沙	佐久間だい	長沙師範学堂蒙養院	清漢語学講習所卒	
16		湖南長沙	斎藤イシ	長沙模範小学堂蒙養院	清漢語学講習所卒	50 元
17	1907 年	奉天	山口政子	奉天第一蒙養院主任保姆	東京女子師範学校卒。東京の幼稚園	100 元
18	1908 年	奉天	大矢蕗子	奉天第一蒙養院保姆		40 元
19	1907 年	奉天	前田新子	奉天第二蒙養院保姆	清国派遣所教員養成所卒	50 元
20	1907 年	奉天	孟歌子	奉天第一蒙養院保姆		
21	1907 年	江蘇南京	小野八千代	粋敏第一女学堂幼稚園担任		
22		江蘇無錫	金原村子	競志女学校附属幼稚園保姆		
23	1907 年	北京	加藤貞子	京師第一蒙養院附設保姆教習所	東京女子師範学校卒、東京市尋常高等小学校訓導	50 元
24	1909 年	安徽安慶	酒井余野	布政使衛門幼稚園保姆	清漢語学講習所卒	
25	1910 年	福建福州	河瀬梅子	福州幼稚園保姆養成	神戸ミッションスクール卒、1906 年頌栄保姆伝習所卒	
26	1905 年	天津	大野鈴子	厳氏蒙養院保姆、厳氏女子小学保姆講習所教習	女子高等師範学校卒	

27	1910 年	吉林	小山内高子	吉林省師範学堂蒙養院	青森師範学校卒、元麻布小学校教員	

出典：楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」（1992 年）、加藤恭子「20 世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」（2015 年）、「外国官庁ニ於テ本邦人雇入関係雑件」、外務省外交資料館所蔵 3 門 8 類 4 項 16−2、外務省政務局第一課編『清国傭聘本邦人名表』（1903 年、1904 年、1908 年、1909 年、1910 年）、『婦人と子ども』3 巻 6 号（1903 年 6 月）、6 巻 11 号（1906 年 11 月）、7 巻 9 号（1907 年 9 月）、神戸頌栄短大『頌栄幼稚園保姆伝習所三十年間小略史』（1920 年）より作成。

表 3－11 によると、1903 年から 1910 年まで中国で幼稚園事業に従事した日本人教習の人数は合計 27 人である。これらの女性教師が活動していた地域は、湖北、湖南、江蘇に集中している。特に半分以上の勤務地は湖北と湖南であった。それは、張之洞が 1889 年から 1907 年まで湖広総督[85]を務めたことと大きな関係があると考えられる。前述したように、清政府官僚張之洞は清末の教育改革を主導した。張之洞が管轄した湖南、湖北省には多くの教習が招聘され、そして、いち早く幼稚園が設立された。

これらの日本人教習の中でも特筆すべきなのは、中国初の官立幼稚園である湖北幼稚園の設立に多大な貢献を果たした戸野美知恵である。外務省の「外国官庁ニ於テ本邦人雇入関係雑件清国ノ部　五」を見ると、中国駐日大使蔡鈞は、日本の外務大臣小村寿太郎へ「貴国女子高等師範学校教員戸野美知恵擬請到湖北幼稚園教習月薪中国龍洋壱百元」[86]と申し出た。これを受けて、戸野は 1903 年湖北幼稚園に招聘され、幼稚園の開設準備作業に携わった。戸野の提案により幼稚園の規則『湖北幼稚園開弁章程』が作られ、また幼稚園での教育内容も戸野が考案したものであった。戸野は「清国経験談」の中で、日本の幼稚園の童謡「かりかりわたれ」などを翻訳改定し、譜を記し、子どもたちに教えたところ、子どもに好かれたと述べている[87]。

また、それぞれの教習の年俸を見ると、湖北幼稚園園長を勤めた戸野美知恵は、100 元で 2 年契約、東京女子師範学校卒、奉天第一蒙養院主任保姆の山口政子が 100 元であり、それ以外は、概ね 50 元程度である。給料が違う理由は職務の違いと考えられる。100 元を貰っている人はそれぞれ園長と主任保姆を勤めた戸野と山口だけであり、一般教員（保姆）の給料は半分であった。これらの年俸の相場は、ほぼ日本の 3 倍にあたったといわれている[88]。さらに、これらの日本人教習の中国での勤務年限は概ね 3 年間である。このように、彼女らは中国の幼児教育の成立初期に、幼児教育に従事する中国人の人材が育成されるまで、支えとなってきたと言える。

２．日本人教習の学習歴

では、一体、これらの日本人教習は、幼稚園に関するどのような知識を中国に伝えたのか、また、彼女たちは教員としてのどのような専門性を持っていたのか。この点について、日本人女子教習の学習歴を分析することで検討する。

表 3－11 からわかるように、清漢語学講習所の他、女子高等師範学校が最も多くの卒業

生を中国に派遣している。それぞれ湖北幼稚園園長の戸野美知恵、湖南常徳府蒙養院主任保姆の田中たか子、厳氏蒙養院保姆及び厳氏女子小学校保姆講習所教習の大野鈴子の 3 人であった。次いで、二番目に多かったのは改称前の東京女子師範学校卒の教習であり、奉天第一蒙養院主任保姆の山口政子と京師第一蒙養院附設保姆教習の加藤貞の 2 人であったと記されている。周知のように、東京女子師範学校は、1890 年に女子高等師範学校と改称された後、教育課程も更新された。以下、東京女子師範学校と改称後の女子高等師範学校におけるそれぞれの幼稚園教員養成の教育課程を分析する。

東京女子師範学校は 1875 年に設立され、翌 1876 年 11 月に附属幼稚園が開設されることになった。続けて、1878 年 2 月から、同幼稚園の保姆養成のために、保育見習生の制度が設けられ、6 月には保姆練習科が設置されることになった。保姆練習科の「修業年限は一年で、生徒募集は毎年 9 月初旬、入学者は、年齢約二十歳以上四十歳以下、心身健康、読書および算術の入学試験に合格した者」[89]とされた。1878 年 10 月 31 日に給費生も置くとされたが、卒業後就職の義務づけは行われなかった。学科課程は以下の表 3－12 のように定められた。

表 3－12　1878 年東京女子師範学校の保姆練習科の学科課程表（修業年限 1 年）

学科目	前期	時間	学科目	後期	時間
教育論	其大意ヲ口授シ其要義ハ生徒ヲシテ手配セシム	2	修身学	其大意ヲ口授シ其要義ハ生徒ヲシテ手配セシム	2
物理学並動植物学	其大意ヲ口授シ或ハ実物経験ヲ以テ之レヲ示シ以テ生徒ヲシテ其概略ヲ了解セシム	2	人体論	口授或ハ問答法ニ依テ人体解剖ノ大意生理ノ概則及養成ノ法ヲ理会セシム	2
幾何学	平面幾何ノ大意ヲ口授シ或ハ之ヲ問答ス	1	幾何学	立体幾何ノ大意ヲ口授シ或ハ之ヲ問答ス	1
図画初歩	幼稚園法ノ縦横線ヨリ始メ略諸物体ノ形状ヲ摸写スルノ法ヲ知ラシム	1	古今小説	幼稚園適当ノ小説ヲ記憶セシメ且ツ其ノ話法ヲ練習セシム	1
園制大意	幼稚園記及ヒ其附録ニ就テロ授ス	1	布列別伝	当分原書ニ就テロ授シ生徒ヲシテ手記セシム	1
二十恩物大意	当分原書ニ就テロ授シ生徒ヲシテ手記セシム	1	二十恩物大意	授業法同左	1
音楽	唱歌、遊戯ヲ授ク	2	音楽	唱歌、遊戯ヲ授ク	2
恩物用法	二十恩物ノ内前十号ノ用法ヲ授ケ殊ニ製作品ノ貯	6	恩物用法	授業法ハ前期ト同シ	6

	蔵スベキモノアルトキハ検査ノ上縦覧室ニ陳列スベシ				
体操		1	体操		1
実地保育		6	実地保育		6

出典:「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984 年、24 頁。

表 3－12 のように、1878 年東京女子師範学校の保姆練習科は「教育論」「修身学」「物理学並動植物学」「人体論」「幾何学」「図画初歩」「古今小説」「園制大意」「布列別伝」「二十恩物大意」「音楽」「恩物用法」「体操」「実地保育」の 14 学科目から構成されている。その中でも、「恩物用法」と「実地保育」の毎週時数は同じ週 6 時間であり、最も多いことがわかる。「恩物用法」という学科目の内容は「二十恩物」という、恩物の使用方法と片付け方を教えることであった。さらに、「二十恩物大意」という学科目も設けられていることから、当時は恩物を中心として授業を展開していたことがわかる。「二十恩物」は「フレーベル考案の幼稚園における中心的教材」として位置付けられており[90]、恩物中心の教育が展開されたのは、後述するような、明治初期日本幼稚園における恩物中心の保育とも関連している。そのため、これら女性教員が中国で幼稚園教育を展開するときにも、恩物を中心としていたのである。

また、同校は実地保育も重視している。実地保育は、学校で学んだ教育に関する知識・技術を、教育の現場で実際に行うものである。実際の保育現場で、経験がある教師がどのように問題を解決するのかを学び、幼児の活動を観察し、幼児理解を踏まえた交流の在り方を模索することが、実地保育の目的であった。したがって、理論上の知識だけではなく、実際幼稚園で実習するのも重要視されていた。ただし、保姆練習科の修業年限が 1 年しかないことを考えると、幼児教育に関する十分な知識が身に付けられていたのかについては、疑問の余地がある。

この保姆練習科は1880年に一旦廃止された。しかし、1887年頃から幼稚園が各地で増設されはじめ、1887年には67（うち私立14）、1897年には222（同50）園を数えるに至った[91]ことで、幼稚園保姆を養成する機関が不足したことを契機に、1896年に女子高等師範学校に幼稚園保姆練習科が新たに設置され、同年10月から授業を開始した。その学科課程は「修身」「教育（保育方法及び実地保育を含む）」「理科」「図画」「音楽」であり、1878年の東京女子師範学校の保姆練習科の学科課程と比較すると、「物理学並動植物学」「幾何学」「古今小説」「人体論」「体操」などが削減されている。

恩物に関する授業は設けられていないが、保育方法や実地保育の授業で恩物の内容が含まれていると考えられる。それに代わって「教育（保育方法及び実地保育を含む）」の一週間の時数は大幅に増えた。さらに、1898年の学科課程は3期に分けられ、第3期は保育方法、

実地保育に集中している[92]。週23時間も設置されており、ほとんどの時間が幼稚園の現場での実習であったと考えられ、そのため修業年限は同じ1年だが、実質的に実地保育時間は増加したと結論づけることができる。前述したように、理論的な知識以外に、現地で獲得した経験も重要視されていた。柿岡玲子の研究によれば、当時の保育者は「保育の学理に通ずると共に必ず実地の術を練習し学理を実地に応用して誤まらざる技能を有すること」が特に必要であると認識しており、日々の保育に知識を適用し、理論に基づく保育を実践することこそが望ましいとされていた[93]。このように、1898年の女子高等師範学校の保姆練習科の生徒たちは、半年以上、幼稚園の現場での実習を行ったのである。

以上のように、中国に招聘された日本人教習の学習歴を見ると、いずれもかなりの程度幼児教育に関する専門的な知識を身につけた人材であったことがわかる。また、1879年の東京女子師範学校保姆練習科入学者数は、年に10人ほどしかいなかったため、幼児教育を学んだ貴重な人材だったとも言える。したがって、保育に関する専門的な知識を持ち、実際の教育経験もある専門性が高い優秀な人材が、中国に雇われていたと結論づけることができる。そして、これらの日本人教習は自分の専門的な知識を活かして、中国の幼稚園の実践においても大きな役割を果たしたと言える。

第 4 節　中国におけるフレーベル幼児教育思想の導入と受け止め方

周知のように、幼稚園は 1840 年にフレーベルによって創始された。それから 40 年後の 1876 年、日本で初めての幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園が設立された。そして、約 30 年後の 1904 年には、日本を経由して中国で最初の官立幼稚園である湖北幼稚園が設けられた。

ところで、日本における 1870 年代の幼児教育は、純粋にフレーベルの幼児教育思想を基盤とするよりも、恩物を使った保育技術の受容に目が向けられていた。しかし、20 世紀初頭になると、こうした形骸化した保育に対する反省が強く唱えられ、子どもたちが創造的で自由な活動を行えるような幼児教育が求められるようになった。

では、1900 年ごろ清朝政府が日本の幼児教育を学ぶ際に、日本の幼稚園ではどのような幼児教育が行われていたのか、それはフレーベルが主張した幼児教育思想とどのような関係にあったのだろうか、さらに、中国ではどのようにフレーベルの教育理論が導入されたのか。本節では、最初に日本におけるフレーベルの幼児教育方法の導入過程を確認し、次いで中国での受け止め方を検討する。

１．明治初期日本における幼稚園教育のフレーベル主義

（１）東京女子師範学校附属幼稚園におけるフレーベル教育法及び恩物の導入

明治政府は、近代化を推し進め、積極的に欧米の教育制度と科学技術を導入することに力を注いだ。1870 年、岩倉具視らの視察団が欧米各国に派遣された。この視察団の一員である田中不二麻呂は幼児教育の推進者であった。田中らによって、欧米の幼児教育施設やドイツのキンダーガルテンの導入が実現され、東京女子師範学校附属幼稚園が設置されることになる。当時の幼稚園で実施されたフレーベル教育の内容は、物品科、美麗科、知識科の三科目に分類されていた[94]。その中の知識科では、「観玩ニヨッテ知識ヲ開ク即チ立方体ハ幾個ノ端線平面幾個ノ角ヨリ成り其形ハ如何ナル等ヲ示メス」[95]と規定されているが、ここでの立方体や平面等が指しているのは、フレーベルが開発した恩物である。

以下、湯川嘉津美と荘司泰弘の研究を参考にして、その恩物の日本への導入過程を検討する。東京女子師範学校附属幼稚園は日本初の幼稚園であり、そこではドイツでフレーベル流の保育方法を学んだ首席保姆のドイツ人の松野クララ[96]の指導により、遊具と作業材料を分別して用いた保育が行われた。この保育方法は、後述の関信三の二十恩物とは対照的であり、ドイツのゴルダマー流の方法に近いものである。ゴルダマーはフレーベルの後継者であり、幼稚園書を著した。その中で、16 種類の遊具遊び（Gabe）と 12 種類の作業（Beschaftigungen）の使用方法が区別され、図入りで説明されている[97]。つまり、松野クララは遊具と作業材料を分別した点で、ゴルダマーに従っていたことがわかる。また、湯川は、ゴルダマーの著作を「フレーベルのオリジナルを敷衍して体系化を図ったことによるもので、1860 年代から 70 年代に著された他の幼稚園書をみても、取り上げる（恩物の）種類はさまざまながら、いずれもフレーベルの理論に忠実に従いながら、遊具遊びと作業を体系的に示しているのである」[98]と評価している。つまり、ゴルダマー流に近い方法をとっている松野クララもフレーベルの理論に忠実に従っていた。しかし、松野はドイツ人であり、「恩物の理解および保育の理論に通じていたという理由」で主席保姆に就任したが、「日本語に精通していなかったため直接幼児の指導にはあたらなかった」[99]とされている。1878 年に開設された保姆伝習科では、通訳の関信三を通じて、松野により英語での遊具の理論と使用方法についての講義が行われたが、松野が多忙であったためにしばしば中止された。こうした状況に対して、荘司泰弘は「実質は園長、中村正直、監事、関信三、保姆、豊田芙雄が日本独自のフレーベル理解を進めていったと言えよう」[100]と指摘している。このように、日本への恩物の導入は、ドイツからの影響が大きいとは言えない。次に、日本に恩物を紹介した関信三について検討する。

（２）明治日本における幼稚園教育の発展と改革

附属幼稚園の初代監事関信三は 1879 年 3 月に『幼稚園法二十遊嬉』を出版し、幼稚園における恩物の使用方法を紹介し、幼稚園教育内容のモデルを示した[101]。『幼稚園法二十遊嬉』は難解な恩物理論の説明を避け、誰にもわかりやすく 20 種の恩物とその使用方法を図入りで示して、創設期の幼稚園関係者の間に広く受け入れられた[102]。その結果、日本において、1876 年に初めて幼稚園が設立されて以来、1897 年ごろまでの幼児教育は恩物中心の保育

が主流となった[103]。

しかしながら、関信三が提唱した二十恩物は「フレーベルの原典では、遊具ではない単なる作業具が遊具として紹介され、第 10 までしかない遊具が倍の 20 もあることになってしまった」[104]と言われている。つまり、二十恩物は結局単に使用方法のみを普及させたことで、その正確さまで疑われ、理論的な裏付けが欠けたものとなってしまった。もちろん、関信三は最初に二十恩物を提唱した人物ではなく、アメリカのウィーブの『子ども時代の楽園』およびシュタイガ社製造の遊具の影響を受けていた[105]。このように、日本へのフレーベルの恩物の導入は、直接ドイツから学んだのではなく、アメリカを一度経由し、理解が不十分なまま取り入れられた。その後、恩物の形骸化が進み、次第に二十恩物自体も変容していったのである。

このような恩物の形骸化について、『幼児教育法』（1908 年）[106]の序文に「フレーベルの恩物は従来に於ける幼稚園教育の主眼であった。其所謂母の遊戯は今日幼稚園遊戯の淵源である。けれどもこれが其儘今日の教育社会に迎へられる可きものか否かと言うことは夫れぞれ学者の定評のあることで敢えて余輩の贅辨を要さぬ。従って吾人は之に関する語議を試みることは本書において努めて之を避けんことを心掛けた。併し吾人の意見を述ふる行き掛り上多少之に触れた場合もあるが何れも敢えて異を好んでの事ではなくて本書の組織上止むを得ざる次第である」[107]と記されている。

この説明から、フレーベルの恩物が従来の幼稚園教育の主要な要素であったことがわかる。もともと、科学的な幼児保育論においては、これまでの幼稚園で用いられてきた恩物や遊戯の特殊な方法に偏りがないことが前提とされているはずだが、当時はまだ恩物が主流であったため、この教育方法に対する議論を避け、あるいは議論する場合にも極めて慎重に取り扱われることがあった。そのため、酒井玲子はこうした認識について、「ここには恩物教育一辺倒の時代とは異なる変革期の幼児教育研究の姿勢が浮き彫りにされていると言えよう」[108]と評価している。

フレーベルの恩物がかつては幼稚園教育の主眼であったが、形骸化していたために、日本でも幼児教育改革者が出てきた。その人物として、1917 年に東京女高師付属幼稚園主事として就任した倉橋惣三があげられる。倉橋惣三は、保育において「誘導」が最も重要であると考え、「まず第一に、幼児のありのままの生活が尊重され、自発的な活動が重んじられる。そのためには幼稚園の生活形態が重要である。朝の会集を行わないことはもちろん、幼児の自由な遊びが一日の大部分を占める」[109]と主張した。その理論の中で、子どもの「自発的な伸びる力」に注目し、子どもたちに多様な刺激を与えることで、成長を促進するような教育環境を丁寧に構築することが重要であると考えている。このように、子どもの自由な活動を制限してしまいかねない恩物を遊ぶことよりも、子どもの自発性や自由遊びが強調されている。

ただし、こうした子どもの「自発性」を重視する教育がなされるようになるのは倉橋の着任以降であり、それ以前の女高師付属幼稚園では、手技の時間に恩物を専用机[110]の上で操っ

ていたのであり、第１節で考察した清末の中国人が見聞したのはこのような光景であった。

２．中国でのフレーベルの幼児教育思想の受け止め方

フレーベルの幼児教育思想は日本を経由し、清末の中国にも紹介された。以下、一見真理子と楊玉珍の研究を参考にし、フレーベルの幼児教育思想の中国への導入過程を確認する。1903 年発行の中国の教育雑誌『教育世界』第 46 号において、前述した関信三が 1879 年に著した『幼稚園法二十遊嬉』が、「幼稚園恩物図説」として小俣規義によって翻訳された。

前述したように、『幼稚園法二十遊嬉』は難解な恩物理論の説明を避け、誰にもわかりやすく 20 種の恩物とその使用方法を図入りで示したことから、日本の創設期の幼稚園関係者の間に広められ、恩物保育の普及に大きな役割を果たしたテキストであった。そのため、中国への幼児教育導入にあたり、中国人は恩物による保育を幼稚園教育内容の重要な要素と認識し、恩物の解説書としてこの書がまず翻訳されたのである[111]。

では、「幼稚園恩物図説」の翻訳は適切であったのだろうか。以下、『幼稚園法二十遊嬉』と「幼稚園恩物図説」の第二恩物と第三恩物の頁を比較することで、この点を検討する。まず、原本と訳本は以下の図 3－1 と図 3－2 のようになっている。

図 3-1　日本『幼稚園法二十遊嬉』（1879 年）

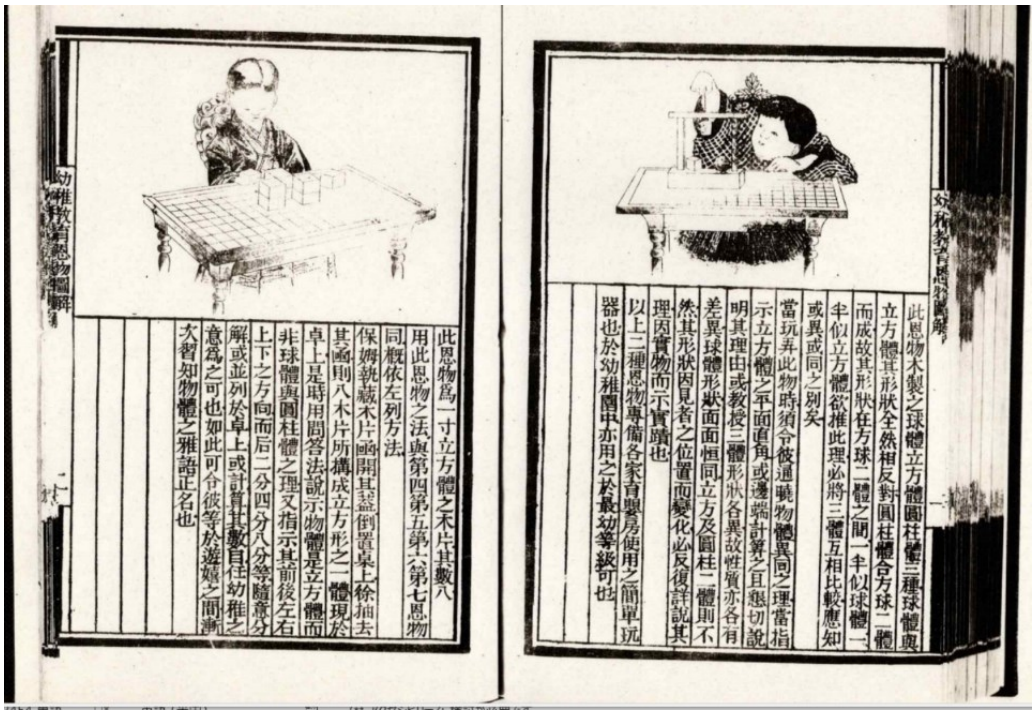


図 3-2　中国「幼稚園恩物図説」『教育世界』（1903 年）

図 3－1 の第二恩物の説明文は以下のようになっている。

この恩物は木製の圓体と立方体と並び圓柱体との三個なり其中圓体と立方体とは其形ち全く反対物なり圓柱は上の圓方二体を合同して成るものにて其の形ち二体の中間にありて一分は圓体の如く又一分は立方体に似たりこの理に依る三体交相ひ比るときは同き所あり或は異なる所ありと知るべし

幼稚にこの三体物を授て玩弄しむるとき容易く物体の同と異との理を暁しむべし其方法は先つ立方体の平面直角並に辺端を指示して之を算計しめ且つ懇に其理を説明し或は三体の性質も亦形状の同じ可らざるに因て自ら其差あるへきことを教へ又は圓体の形ちは恒に同一なりと雖ども立方圓柱の二体は見者の位置に因て時時に変るへき等の実績を示すべし已上二種の恩物は専ら家々の育嬰房に於て用ふべき所の最も簡単なる玩器なり然れども幼稚園に於ても亦其最幼等級に在ては之を便用するを得べし。

そして、図 3－2 はその中国語への訳文であり、以下のように訳されている。

此恩物木製之球體立方體圓柱體三種、球體與立方體其形狀全然相反對、圓柱體合方球二體而成故其形狀、在方球二體之間一半似球體一半似立方體、欲推此理、必將三個互相比較應知或異或同之別矣

當玩弄此物時、須令彼通曉物體異同之理、當指示立方體之平面直角、或邊端計算之、且

懇切説明其理由、或教授三體形狀各異、故性質亦各有差異、球體形状、面面恒同、立方及圓柱二體、則不然、其形状因見者之位置而變化、必反復詳說其理、因實物而示實蹟也以上二種恩物、專備各家育嬰房使用之簡單玩器也、於幼稚園中亦用之於最幼等級可也

図 3－1 と図 3－2 の内容を比較すると、中国語の「幼稚園恩物図説」は原文を忠実に訳していることがわかる。『幼稚園法二十遊嬉』は、恩物の使い方をより広く伝えるために、イラスト付きで説明しており、「幼稚園恩物図説」においても原文の図を複製している。これは、幼稚園の現場において保育者が理解しやすいようにと考えためと推察される。このように、清末の中国において、『幼稚園法二十遊嬉』は教育方法書として翻訳されたと言えよう。

しかし、『幼稚園法二十遊嬉』と「幼稚園恩物図説」は共に、恩物の形とその遊び方の説明しか述べておらず、その背後にあるフレーベルの教育哲学、特に「神」を中心とした幼児教育思想については触れていなかった。この点について、楊玉珍も「清朝末期中国に伝わったフレーベルの恩物の理論は、日本の明治中期頃までの場合と同じように、フレーベルの恩物の技術的な側面にとどまっていたのである」[112]と評価している。

また、恩物はあくまでもフレーベルの幼児教育思想の一部であり、フレーベルの幼児教育思想が体系的に中国に導入されたとは言えない。このような受け止め方は、前述したキリスト教団によるフレーベルの幼児教育思想の導入の仕方と、相当な差異が存在していたことを示している。その要因は、張之洞を含めた清政府の姿勢と関連すると考えられる。清における西洋知識受容を主導する張は、「中体西用」をスローガンにした「洋務派」官僚であり、後述する奏定学堂章程の説明の中で、張は「儒教主義モラル」を重視していた。しかし、儒教とキリスト教はそもそも宗教上の対立関係にあり、張は「北清事変」においても、キリスト教を排除しようとしていた。

張之洞は『勧学篇』の中で、第 1 節でも記したように日本経由で西洋知識を学ぶ利点をいくつかあげる中で、「西洋書の必要でない部分」が取り除かれていることを記していた。上記の儒教とキリスト教の衝突から、張のいう日本が西洋学問から取り除いている「必要でない部分」とはキリスト教を指していた、と推察できる。したがって、フレーベルの恩物をキリスト教思想までを踏まえた形で受容できなかったのは当然のことであった。

第 5 節　幼児教育制度の発足

本節では、清末中国で導入された幼稚園教育の制度について考察する。これまでも記したように 1904 年、中国教育史上初の幼児教育に関する法令である「蒙養院及び家庭教育法章程」が制定された。この章程と 1900 年代の日本の幼児教育制度を比較することにより、中国の法令の特徴と日本からの影響を明らかにする。

1．近代学校制度の一環として導入された幼稚園

1904 年の「奏定学堂章程」の発布は、中国において近代学校制度が本格的に成立する契機となった。前述したように、清末中国においては積極的に日本の近代学校制度が取り入れられるという潮流があった。その流れの中で、多くの官員や実業家が日本視察を行い、留学生も日本に派遣された。そして、その留学生たちによって、日本の学制に関して記述された法規などが翻訳された。そのため、「奏定学堂章程」もまた日本の教育制度の影響を強く受けて成立した。譚汝謙は『中国訳日本書総合目録』の中で、同章程発布以前の 1899 年から 1903 年にかけて翻訳された、日本の学校制度に関する法規や各学校の規程を整理している。その内容を表にすると表 3－13 のようになる。

表 3-13　　日本学制に関する法規の中で中国語に訳されたもの

出版年	法規名	編者	訳者	出版
1898 年	「日本学校章程三種」（日本教育制度、日本高等師範学校章程、日本華族女学校規則）	文部省	古城貞吉	時務報
1899 年	「日本東京大学規則考略」	東京大学	未詳	北京京師大学堂
1902 年	「日本新学制」	文部省	天津東寄学社	天津東寄学社
1902 年	「日本東京師範学校章程附予備科」	東京高等師範学校	翁崑焘	正学堂
1902 年	「日本学制大綱」	泰東同文局	未詳	泰東同文局
1903 年	「日本普通学科教授細目中学校令施行規則」	東京高等師範学校	胡元倓、仇毅	翔鸞社

出典：譚汝謙編『中国訳日本書総合目録』中文大学出版社、1980 年、279-280 頁。

表 3－13 の 5 つの法規では、日本の学校制度関係法規だけではなく、東京大学や師範学校の学校規則等も取りあげられていた。「奏定学堂章程」はこれらの規程を参考にして作成

され、「蒙养院章程及家庭教育法章程」「初等小学堂章程」「高等小学堂章程」「中学堂章程」「高等学堂章程」「大学堂章程」「初級師範学堂章程」「優級師範学堂章程」といった法規から構成されていた。すなわち、同学堂章程は、蒙養院から小学堂、中学堂、高等学堂、大学堂、師範学堂までの各学校段階に及ぶ体系的なものであり、それを学校系統図としてまとめると、次の図 3－3 のようになる。

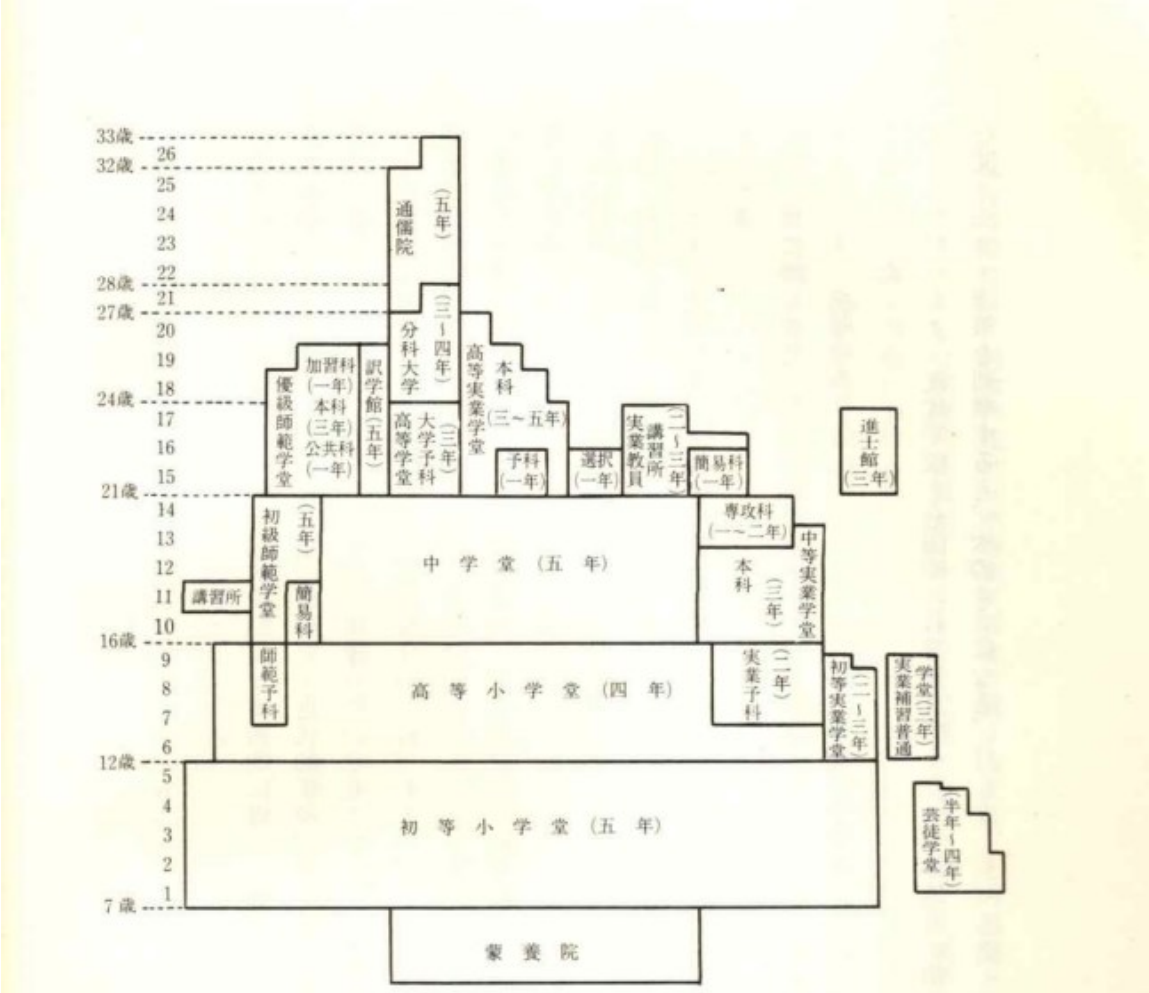


図 3－3　「奏定学堂章程」における学校系統図

出典：阿部洋『中国近代学校史研究―清末における近代学校制度の成立過程―』福村出版、1993 年、6 頁。

学校制度は、初等小学堂から大学堂まで 22 学年とし、三段階に分けられた。第一段階は初等小学堂 5 年と高等小学堂 4 年の初等教育である。第二段階は 5 年の中学堂で、中等教育である。第三段階は、高等学堂･大学予科 3 年、大学堂 3～4 年と、その上の通儒院 5 年から高等教育が構成されている。さらに、小学堂の下に、幼児教育機関として蒙養院（中国

の幼稚園）が置かれている[113]。このように、「奏定学堂章程」の発布は、清末において近代学校教育制度が樹立される契機となった。なお、時期や学校体系から判断して、1900 年前後の日本の学校制度を参照したものと推察される。実際、阿部洋によると、「『奏定学堂章程』は 1900 年の日本の教育制度を全面的に模倣して作られたもの」[114]とされている。

こうした中で、西洋の学問も取り入れられた。しかし、張之洞ら当時の指導者は、西洋近代の学問「西学」を講ずる上で他に不可欠な要素として、学生が「儒教主義モラル」を持つことを主張していた。彼は「重訂学堂章程折」の中で、次のように主張している[115]。

> 无論何等学堂,均以忠孝为本,以中国经史之学为基,俾学生心術一帰于純正,而后以西学渝其智識,練其能芸,務期他日成材,各適実用。〔訳：全ての学堂は忠孝をもって本となし、中国の経史をもって基礎となす。学生の心術が純正に戻って、その後西学を学び、知識を増やせ、芸能を練り、他日の材になれると期待している〕。

そのため、近代学校教育では「西学」だけではなく、中国の経史を学ぶことも必要とされた。つまり、近代教育制度が樹立されてもなお、清政府は未だに儒教的な「忠孝」の品質をもつ人材育成を教育目的としていたのである。

２．「蒙養院及び家庭教育法章程」（1904 年）と日本の幼児教育制度の比較

「奏定学堂章程」が制定される以前の、1902年には「欽定学堂章程」が立案されていた。「欽定学堂章程」は同様に日本の教育制度を模倣したもので、蒙学堂（小学堂）から大学堂を設けることを定めた章程であった。しかし、幼稚園についての規定は存在していなかった。では、なぜ幼稚園に関する規定「蒙養院章程及び家庭教育法章程」は「奏定学堂章程」に加えられたのだろうか。その作成経緯が以下のように述べられている[116]。

> 外国の蒙養院制度を調べたところ、蒙養院は外国では幼稚園というようだ。今回は外国の幼稚園の設立趣意をよく参酌したうえで、「蒙養院章程及び家庭教育法章程」一章を制定した。これは、元の章程のなかにあった「欠略」を補ったものである。

つまり、より完全な学校制度とするために、幼稚園の制度を設けることが決定されたのである。さらに「蒙養院章程及び家庭教育法章程」は「外国の幼稚園設立主意をよく参酌した」上で制定したものとされている。

では、「蒙養院章程及び家庭教育法章程」はどのような内容を定めていたのだろうか。

まず「蒙養院及び家庭教育法章程」は、「第一章　蒙養家教合一」、「第二章　保育指導要旨および項目」、「第三章　建物図書器具」と「第四章　管理人事務」の4章から構成されている。保育の要旨、対象、保育項目、設備、管理などが明確に規定されている。この「蒙養院及び家庭教育法章程」は、日本の1899年の「幼稚園保育及設備規程」[117]をモデルにしたもの

である、と阿部洋も指摘している[118]。この「幼稚園保育及設備規程」は幼稚園を「満三年ヨリ小学校ニ就学スルマテノ幼児ヲ保育スル所トス」と定義したほか、幼稚園の目的、保育項目、設備などについて、おおよそ以下のような内容を規定した[119]。

①「保育ノ時数ハ一日五時以内トス」、②「保姆一人ノ保育スル幼児ノ数ハ四十人以内トス」、③「一幼稚園ノ幼児数ハ百人以内トス、特別ノ事情アルトキハ百五十人マテ増加スルコトヲ得」、④「幼児ヲ保育スルニハ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス」、⑤「保育ノ方法ハ幼児ノ心身発育ノ度ニ適応セシムヘク其会得シ難キ事項ヲ授ケ或ハ過度ノ業ヲ為サシメ又ハ之ヲ強要シテ就業セシムヘカラス」⑥「常ニ幼児ノ心性及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメコトニ注意スヘシ」、⑦「幼児ハ極メテ模倣ヲ好ムモノナレハ常ニ善良ナル事例ヲ示サンコトニ注意スヘシ」、⑧「幼児保育ノ項目ハ遊嬉、唱歌、談話及手技トシ」、⑨「建物ハ平屋造トシ、保育室、遊嬉室、職員室其他須要ナル諸室ヲ備フヘシ」、⑩「保育室ノ大サハ幼児四人ニ就キ一坪ヨリ小ナルヘカラス」、⑪「遊園ハ幼児一人ニ就キ一坪ヨリ小ナルヘカラス」、⑫「恩物、絵画、遊嬉道具、楽器、黒板、机、腰掛、時計、寒暖計、暖房器具其他須要ナル器品ヲ備フヘシ」、⑬「敷地、食料水及採光窓ニ関シテハ小学校ノ例ニ依ルヘシ」。

この規程は、幼稚園に関する独立の規程であったが、1900年の小学校令で、幼稚園は「小学校ニ附設スルコトヲ得」と定められ、その設置廃止に関しては小学校令を準用することとし、その他の幼稚園についての事項は文部大臣が定めることとなった。しかし、文部大臣の定めた小学校令施行規則中に幼稚園に関することをまとめて規定したため、「幼稚園保育及設備規程」は廃止された[120]。このように、「幼稚園保育及設備規程」の内容はほとんど変更されず、1900年の「小学校令施行規則」に統合された[121]。

唯一違う点は幼稚園の管理について、「小学校令施行規則」（1900）では、「幼稚園ニ園長ヲ置クコトヲ得」（第203条）[122]と幼稚園に園長を置くことが規定されていた。さらに「幼稚園長及保姆ノ採用、解職ハ市町村立幼稚園二在リテハ府県知事之ヲ行ヒ私立幼稚園二在リテハ設立者二於テ府県知事二届出ツヘシ」（第205条）[123]と人事採用のことも規定されていた。「幼稚園保育及設備規程」（1899）では、こうした内容について全く言及がなされていない。

なお、幼稚園保育及設備規程にはない「人事」についての規程が中国の「蒙養院及び家庭教育法章程」に存在しており、同章程の「第四章　管理人事務」では、管理に関する内容が定められていた。同規定の第一節では「蒙養院に院長を一人置き、蒙養院の一切の事務を管理する」[124]とされ、また、その第二節では「蒙養院が官立の場合、院長も官より選ぶ。もし郷村公立の場合、紳董公議によって、地方官が選抜する。蒙養院が私立の場合、創設者が決める。但し地方官に報告するが必要」[125]と記されている。

以上から、「蒙養院及び家庭教育法章程」の内容は、日本の「小学校令施行規則」に近いと判断できる。そのため、以下中国の「蒙養院及び家庭教育法章程」と日本の「小学校令施行規則」とを比較して、日本のどのような点を受容したのかを明らかにする。具体的に、「蒙養院及び家庭教育法章程」の第一章と第二章と「小学校令施行規則」（第196条から207条まで）を対比しながら、保育内容などの基本要項を分析する。以下の表3－14は「蒙養院及び家庭教育法章程」と「小学校令施行規則」の対比表である。

表3－14 「蒙養院及び家庭教育法章程」と「小学校令施行規則」の対比表

	「蒙養院及び家庭教育法章程」1904 年	「小学校令施行規則」1900 年
保育要旨、目的	第一章第一節 蒙養家教合一之宗旨，在於以蒙養院輔助家庭教育，以家庭教育包括女學 第二章保育教導要旨及條目 第一節　保育教導要旨如下　外國所謂保育，即係教導之義，非僅長養愛護之謂也。茲故並加「教導」二字以明之 一、保育教導兒童，專在發育其身體，漸啟其心知，使之遠於澆薄之惡風，習於善良之軌範 二、保育教導兒童，當體察幼兒身體氣力之所能為，心力知覺之所能及，斷不可強授以難記難解之事，或使為疲乏過度之業。 三、兒童性情極好模仿，務專意示以善良之事物，使則效之，孟母三遷即此意也	第百九十六条 幼児ヲ保育スルニハ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス 幼児ノ保育ハ其ノ心身発達ノ程度ニ副ハシムヘク其ノ会得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ為サシムルコトヲ得ス 常ニ幼児ノ心情及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメ又常ニ善良ナル事例ヲ示シテ之ニ倣ハシメムコトヲ務ムヘシ
保育対象時間	第二節　蒙養院專為保育教導三歲以上至七歲之兒童，每日不得過四點鐘	第百九十五条　幼稚園ハ満三歳ヨリ尋常小学校ニ入学スルマテノ幼児ヲ保育スルヲ以テ目的トス 第二百二条　保育ノ時数ハ一日五時以下トス前項ノ時数ニハ食事時間ヲ包含ス
保育内容	第二節　蒙養院保育之法，在就兒童最易通曉之事情，最所喜好之事物，漸次啟發涵養之，與初等小學之授以學科者迥然有別。其保育教導之條目如下	第百九十七条　幼児保育ノ項目ハ遊戯、唱歌、談話及手技トス

遊戯	遊戯分為隨意遊戯及同人遊戯兩種隨意遊戯者幼兒自由運動，同人遊戯者合眾幼兒為諸種之運動，且使合唱歌謠，以節其進退；要在使其心情愉快活潑，身體健適安全，且養成兒童眾樂群之氣習。	第百九十八条 遊戯ハ分テ随意遊戯及共同遊戯トス 随意遊戯ハ幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ共同遊戯ハ歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲ為サシメ心情ヲ快活ニシ身体ヲ健全ナラシメンコトヲ要ス
歌謡	歌謠矣幼兒在五六歲時漸有心喜歌唱之際，可使歌平和淺易之小詩，如古人短歌謠及古人五言絕句皆可，並可使幼兒之耳目喉舌運用舒暢，以助其發育，且使心情和悅為德性涵養之質	第百九十九条 唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱ハシメ聴器、発声器及呼吸器ヲ練習シテ其ノ発声ヲ助ケ心情ヲ快活純美ナラシメ兼テ徳性ノ涵養ニ資セシメンコトヲ要ス
談話	談話須擇幼兒易解及有益處，有興味之事實，或比喻之寓言，以期養其性情興致。與小兒對話時，且就常見之天然物及人工物等指點言之，並可啟發其見物留心之思路。其所談之話，兒童已通曉時，保姆當使兒童演述其要領。演說之際務使聲音高郎，語無滯塞，尤不許兒童將說話之次序淆亂錯誤。	第二百条 談話ハ有益ニシテ興味アル事実及寓言、通常ノ天然物及加工品等ニ就キテ之ヲ為シ徳性ヲ涵養シ観察注意ノ力ヲ養ヒ兼テ発声ヲ正シクシ言語ヲ練習セシメンコトヲ要ス
手技	手技授以盛長短大小各木片之匣，使兒童將此木片作房屋門戶等各種形狀；又授以小竹簽數莖及豆若幹，使兒童作各種形狀，又實用紙作各種物體之形狀，更進則使用粘土作碗壺等形。又使於蒙養院附近之庭院內，播草木花卉之種於地，浸潤以水與肥料，使觀察其自發生以至開花結果等各形象。諸如此類，要在使引導幼兒手眼，使之習用於有用之處，為心知意興開發之資。	第二百一条 手技ハ幼稚園恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意ノ発育ニ資セシメンコトヲ要ス
保育人数		第二百六条　幼稚園ノ幼児数ハ百人以下トス但シ特別ノ事情アルトキハ百五十人マテニ増スコトヲ得 第二百七条　保姆一人ノ保育スル幼児数ハ四十人以下トス

出典：中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、93-100 頁、『明治以降教育制度発達史　第四巻』96-99 頁より作成。

「蒙養院及び家庭教育法章程」第 1 章第 1 節には、「蒙養家教の主旨は蒙養院をもって家庭教育を補助する。家庭教育は女学を包括する」[126]と定められている。この部分では蒙養院の教育機関としての性格が定義されている。日本の「小学校令施行規則」でも同じく「家庭教育ヲ補ハンコト」と規定され、つまり幼稚園は単に教育の場所ではなく、家庭教育を補助する機能も持つ教育機関として規定されていたことがわかる。しかし、「蒙養院及び家庭教育法章程」において示されている家庭教育は、日本と異なって女子教育の意味も含んでいた。「保姆養成の学堂が急速に普及することができないゆえに、蒙養院を多く設けることができない。必要のある幼児教育は家庭教育に頼るしかない」[127]と説明されていることからわかるように、蒙養院が家庭教育の補助として位置づけられた理由は、保姆養成が困難であり、蒙養院を多く設けることができなかったためであった。つまり、家庭教育を中心とした中国の伝統幼児教育が依然として主流であり、蒙養院は家庭教育の補助的な位置づけにすぎなかった。

さらに、「蒙養院及び家庭教育法章程」において保育の目的としては「心身を発達させ」「善良の規範を習わせる」「心情や行儀に注意する」などと規定（第 1 章第 1 節）されており、日本の「小学校令施行規則」（第 196 条）から全文翻訳されていることがわかる。また、保育対象は 3 歳から 7 歳まで（第 1 章第 2 節）で、これも「小学校令施行規則」（第 195 条）と同様である。保育時間も同じく 4 時間である。

そして、保育内容は「遊戯、唱歌、談話、手技」（第 1 章第 2 節）となっており、日本の規則（第 197 条、第 198 条、第 199 条、第 200 条、第 201 条）とほぼ同じ内容であった。しかし、中国の章程の中の「手技」（第 1 章第 2 節）は、表 3－15 を見ると、日本の規則（第 201 条）よりも詳細に規定されており、内容としては「幼児に長短大小各種の木の板が入った箱を与え、木の板を使って屋、門、窓などを作らせる；また若干竹箸、豆を用いて各種の形を作らせる；そして、紙を使って各種の物体の形を作らせる；粘土を利用して、お茶碗やつぼを作らせる」[128]と定められている。この規定は、それぞれ第 7 恩物正方形と三角形の色板、第 17 恩物豆細工、第 15 恩物紙を折る、第 20 恩物粘土遊びの使い方と対応している。このように、恩物の使用方法が詳細に規定されることによって、地方で幼稚園を設立する際に、どのような保育内容を実施するのかという点で参考になったと考えられる。また、保育内容の中で、他に日本と異なっているのは「歌謡」（第 1 章第 2 節）の部分において、日本では「平易ナル歌曲ヲ唱ハシメ」（第 199 条）と、平易な歌曲を教育内容とされているだけであるのに対して、「蒙養院及び家庭教育法章程」では歌の内容が「平易な小詩、例えば古人の短歌謡と五言絶句」と事例を挙げて定められている。第 1 章で分析したように、詩礼楽教育が当時の蒙養教育の 1 つであり、詩歌を吟詠することもよく行われていた。したがって、この部分からは、中国の近代的幼稚園の教育内容が、従来伝統的な文化の影響を強く受けていたことがわかる。

このように、「蒙養院及び家庭教育法章程」においては、日本の「小学校令施行規則」と

おおかた類似していながらも、差異も存在していた。さらに、この制度上の差異は幼稚園教育実践にも影響を及ぼした。当時の中国の伝統的文化や国内状況の影響を受けて、独自の規程が形成されたと言うことができるだろう。

では、その実践への影響は具体的にどのようなものであったのか、次章ではキリスト教系幼稚園と日本型幼稚園の実態について検討する。

注

[1] 王寶平編『晩清中国人日本考察记集成：教育考察記』杭州大学出版社、1999 年。
[2] 張謇（1853～1926）は江蘇省の南通（旧通州）生まれの郷紳。中国の実業家、政治家。1894 年には官吏になったが、後に実業家になり、大同で紡績工場などを経営し、資産階級の代表となった。文化・教育活動にも積極的に取り組み、中央教育会の会長を務めたこともある。
[3] 政治改革を行うことが中心となったのは資産階級であった。そして、本研究の分析対象になる、日本へ教育視察をしたのは実業であった。
[4] 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』龍渓書舎、2002、14 頁。
[5] キリスト教宣教団体によって作られた教会学校と区別されるため、「洋学堂」に名付けられた。教育内容も最初は外国語に限定されている。
[6] 太平天国の乱は、19 世紀半ばの中国で起こった大規模な反乱運動。この乱は 1850 年から 1864 年まで続いた。指導者は洪秀全という人物であり、彼は「キリスト教」を信仰する「天朝太平天国」を樹立することを目指した。
[7] 義和団は中国の農村や都市部で結成された秘密結社であり、外国の侵略から中国を守ることを目的としていた。
[8] 清は、ドイツと日本への謝罪使節の派遣、事変責任者の懲罰、2 年間武器の輸入の禁止、排外活動の禁止、4 億 5000 万両の賠償金の支払い、北京に公使館区を設けて外国軍を駐留させること、北京周辺の砲台を破壊すること、通商条約の改正などを承認せざるを得なかった。
[9] 張之洞『劝学篇 ·外篇』遊学第二。
[10] 陶徳民「西村天囚と張之洞の『勧学篇』」『懐徳』(60)、懐徳堂記念会、1991 年、83 頁。
[11] さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史 増補版』くろしお出版、1981 年、42 頁。
[12] 1898 年は戊戌の年である。
[13] 黄明同・呉熙釗『康有為早期遺稿述評』中山大学出版社、1988 年、297 頁。
[14] 同上、106 頁。
[15]『大清徳宗景光緒皇帝実録』421 巻、光緒 24（1898）年、華文書局、1964 年、17 頁。
[16] 章開沅著、藤岡喜久男訳『張謇伝稿―中国近代化のパイオニア―』1989 年、165 頁。
[17] 同上。
[18] 楊宏雨『困頓与求索―20 世纪中国教育变迁的回顾与反思―』学林出版社、2005 年版、42-43 頁。
[19] 洋務運動とは、1860 年代前半から 1890 年代前半、ヨーロッパ近代文明の科学技術を導入して清朝の国力増強を目指した運動をいう。
[20] 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院 1998 年、92 頁。

[21] 呉汝綸、1840～1903 年、清末の文学者･教育家。1902 年に京師大学堂の総教習となった。

[22] 羅振玉、1866～1940 年、清末民初活躍した考古学者、教育者。

[23] 王暁秋『近代中日関係史研究』中国社会科学出版社、1997 年、第 30 頁。

[24] 汪婉によれば「初期（1905 年まで）の視察は中央・各省の派遣の形式が大方を占め、派遣された人員もリーダー層が中心であった。中央政府より派遣された視察者らは、日本の教育改革の経験を受け入れることによって、直接中国の教育改革の参考にしようとした。後期（1911 年まで）の視察では、各級の教育行政機関の官員が組織的に日本教育視察に派遣された。それらの官員の日本視察は、（各地で）義務教育政策を制定或いは推進しようとしている」とされている。（汪婉、前掲書、163 頁。）

[25] 一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」『国立教育研究所研究集録』25、1992 年、辻本雅史 監修、湯川嘉津美・荒川智 編著『論集現代日本の教育史 第 3 巻 幼児教育・障害児教育』所収、日本図書センター、2013 年、83 頁。

[26] 潘静「近代中国におけるキリスト教宣教会の幼児教育活動―上海地区を中心に―」『日本の教育史学』第 48 集、2005 年、70 頁。

[27] 項文瑞『遊日本学校筆記』1903 年、6 頁（王寶平編『晩清中国人日本考察記集成 教育考察記』杭州大学出版社、1999 年、398 頁）。

[28] 同上、1 頁。

[29] 同上、6 頁。

[30] 同上、2 頁。

[31] 同上、6 頁。

[32] 同上、2 頁。

[33] 方燕年『瀛州観学記』1903 年、2 頁（王寶平編、前掲書、444 頁）。

[34] 同上。

[35] 同上。

[36] 権明愛、上垣内伸子「戸野みちゑと中国初期の幼稚園教育」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』第 9 巻、2011 年、32 頁。

[37] 汪婉、前掲書、245 頁。

[38] 張謇研究センター南通市図書館編『張謇全集 4 巻』江蘇古籍出版社、1994 年、214 頁。

[39] 張謇研究センター南通市図書館編『張謇全集 6 巻』江蘇古籍出版社、1994 年、448 頁。

[40] 同上、466 頁。

[41] 同上、3 頁。

[42] 張謇『癸卯東游日記』1903 年、25 頁（王寶平編、前掲書、551 頁）。

[43] 同上、9 頁。

[44] 同上。

[45] 1880 年 6 月 1 日に開園した。現存する幼稚園としては大阪府内では最も古い歴史をもち、また民間の手によって建てられた幼稚園としても日本最古のものである。

[46] 西小路勝子「子どもに寄り添う保育実践の黎明―大阪市立愛珠幼稚園の保育記録（明治 28～40 年）からの論考―」『保育学研究』49(1)、2011 年、11 頁。

[47] 王景禧『日遊筆記』1904 年、7 頁（王寶平編、前掲書、629 頁）。

[48] 張謇、前掲、8 頁。

[49] 王景禧、前掲、8 頁。

[50] 張謇、前掲、7 頁。

[51] 王景禧、前掲、8 頁。

[52] 同上。

[53] 羅振玉は、1901 年に日本に視察し、滞在中に会った伊澤修二の影響で帰国後に国粋の保存と道徳教育の重要性を強調した。彼は 1902 年に「学制私議」を出し、その中で、教育宗旨の 1 つを「儒教主義を守る」と主張している。また、彼は教育の内容に、「修身」と「古典を読む」ことを加えている。
[54] 清水稔「中国留学生と日本の近代」『佛教大学総合研究所紀要』(1)、佛教大学総合研究所、1995 年、125 頁。
[55] 同上、126 頁。
[56] 中村義「洋務運動と改良主義」(『岩波講座世界歴史』第 22 巻、近代九「帝国主義時代」、岩波書店、1969 年、366 頁)
[57] 同上。
[58] 同上。
[59] さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版社、1960 年、79 頁。
[60] 同上。
[61] 同上。
[62] 1903 年創刊、主に日本の事情を紹介する。
[63] さねとう・けいしゅう、前掲書、77 頁。
[64] 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会『実践女子学園一〇〇年史』実践女子学園、2001 年、118 頁。
[65] さねとう・けいしゅう、前掲書、27 頁。
[66] 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会、前掲書、118 頁。
[67] 故下田校長先生伝記編纂所『下田歌子先生伝』1943 年、399-400 頁。
[68] 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会、前掲書、121 頁。
[69] 同上、429-430 頁。
[70] 韓華「清末における下田歌子著『新選家政学』の 翻訳・出版について」『言葉と文化』15、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、2014 年、13 頁。
[71] 故下田校長先生伝記編纂所、前掲書、416 頁。
[72] 小野和子「下田歌子と服部宇之吉」竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』上 朝日新聞社 1974 年、217 頁。
[73] 「女子師範学堂章程」光緒 33 年 1 月 24 日『中国近代教育史資料編―学制演変―』575 頁。
[74] 崔淑芬「中国の女子教育思想と儒教」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 25 号』、2014 年、168 頁。
[75] 上海の商務印書館により 1904 年から 1948 年まで発行された雑誌である。政府発表の文書、論説、教育に関する情報などを掲載したものである。
[76] 「附言」『東方雑誌』第 2 巻第 6 期、東方雑誌社、1905 年、153-155 頁。
[77] 実践女子学園八十年史編纂委員会『実践女子学園八十年史』実践女子学園、1981 年、103 頁。
[78]「清国の婦人と子ども」『婦人と子ども』10 巻 6 号、フレーベル会、1910 年、4 頁。
[79] 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、114 頁。
[80] 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990 年、138 頁。
[81] 同上、151 頁。
[82] 阿部洋・蔭山雅博・稲葉継雄「東アジアの教育近代化に果たした日本人の役割」『日本比較教育学会紀要』1982 年、51 頁。
[83] 同上。
[84] さねとう・けいしゅう、前掲書、93 頁。
[85] 湖広総督は清朝の九大地方大臣の一人である。湖北と湖南の軍事・民政を統括する。
[86] 外務省「外国官庁ニ於テ本邦人雇入関係雑件清国ノ部　五」。

[87] 戸野美知恵「清国経験談」国民教育学会『日本之小学教師』7 巻 80 号、1905 年 8 月、49 頁。
[88] 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版、1990 年、138 頁。
[89] 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984 年、23 頁。
[90] 荘司泰弘「日本へのフレーベル遊具伝達の誤り」『人間教育の研究』第 9 号、1996 年、129 頁。
[91] 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会、前掲、80 頁。
[92] 同上、70 頁。
[93] 柿岡玲子『明治後期幼稚園保育の展開過程』風間書房、2005 年、237 頁。
[94] 酒井玲子「明治期におけるフレーベル教育論の考察」『北星論集(文)』第 38 号、2001 年、43 頁。
[95] 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979 年、57 頁。
[96] フレーベルが設立した保育者養成学校で学ぶ。1876 年に来日し、東京女子師範学校附属幼稚園の初代主任保姆として、自身がドイツで学んだフレーベルの理論や保育内容を東京女子師範学校の保姆練習科の生徒たちに教えた。
[97] 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001 年、174-179 頁。
[98] 同上、175 頁。
[99] 岡田正章「幼児教育の発足」国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第六巻 学校教育 4』教育研究振興会、1974 年、1049 頁。
[100] 荘司泰弘「日本へのフレーベル遊具伝達の誤り」『人間教育の探究 ： 日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要』第 9 号、131 頁。
[101] 実際に、関信三の『幼稚園法二十遊嬉』よりも 3 年早い、1876 年に文部省から桑田親五が訳した『幼稚園』第 1 巻が出版された。この中で紹介された恩物は、六色の小毬、三形体、4 種の積み木、木箸、豆を利用した木箸細工、組紙、織紙、剪紙、図画、粘土細工の 13 種であった。『幼稚園』は『幼稚園法二十遊嬉』と共に、明治期の幼稚園の手引書として使われていた。
[102] 湯川嘉津美「二十恩物の系譜―明治初期における恩物受容をめぐって―」『日本保育学会大会研究論文集』32-33、1990、33 頁。
[103] 文部省『幼稚園教育百年史』前掲、63 頁。
[104] 荘司泰弘、前掲、132 頁。
[105] 湯川嘉津美、前掲書、181 頁。
[106] 中村五六と和田實共著によるフレーベル会発行の『幼児教育法』（1908）は、この時期の幼児教育論の集大成といえる。
[107] 中村五六・和田實『幼児教育法』1908 年、岡田正章監修「明治保育文献集」第九巻、93 頁。
[108] 酒井玲子「明治期におけるフレーベル教育論の考察」『北星論集（文)』 第 38 号 2001 年、57 頁。
[109] 文部省『幼稚園教育百年史』前掲、233 頁。
[110] 恩物を使う机は、基盤のように縦横に線が引かれており、幼児はこの線に合わせて積み木のような恩物を使って保姆から指示されたいろいろな制作を行ったのである。（同上、66 頁。）
[111] 一見真理子、前掲、85 頁。
[112] 楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」1992 年、186 頁。
[113] 何暁夏『簡明中国学前教育史』北京師範大学出版社、2014 年、110 頁。
[114] 阿部洋、前掲書、14 頁。
[115] 張百熙、栄慶、張之洞「重訂学堂章程折」光緒29（1903）年11月26 日（『中国

近代教育史資料編―学制演変―』288 頁）。

[116] 同上、291 頁。

[117] 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史　第四巻』竜吟社、1938 年、151 頁。

[118] 阿部洋「解放前の中国の幼児教育」『世界の幼児教育 1　アジア』日本らいぶらり 1983 年、19 頁。

[119] 教育史編纂会編、前掲書、151-153 頁。

[120] 同上、153 頁。

[121] 文部省『学制百二十年史』ぎょうせい、1992 年、31 頁。

[122] 教育史編纂会編、前掲書、97 頁。

[123] 同上。

[124] 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、100 頁。

[125] 同上。

[126] 同上、93 頁。

[127] 同上。

[128] 何暁夏、前掲書、110 頁。

第 4 章　20 世紀初頭中国の幼稚園の実態

これまで述べたように、中国の近代幼児教育には「ミッションスクールを通しての浸透」と「日本モデルの導入」という 2 つのルート[1]が存在していた。本章では、まず、キリスト教系幼稚園の教育計画と保育内容を明らかにする。その際、キリスト教系幼稚園の展開の実態にも触れる。次に、もう一方の幼稚園、中国の日本型幼稚園の保育内容・方法について、官立と私立に分けて検討する。最後に、この 2 種類の幼稚園の相互関係について考察する。以上により、20 世紀初頭中国の幼稚園の実態の一端を描き出す。

第 1 節　キリスト教系幼稚園の実態

１．保育の長期的計画及び短期的計画

本項ではまず、「中国の幼稚園におけるプログラム作成（Program Making in A Chinese Kindergarten）」という小論を用いて、当時のキリスト教系幼稚園ではどのような教育計画が立案されていたのかを分析する。この小論はレオン・チン（Ching Leung）によって執筆され、*Educational Review*（1911 年）という教育雑誌に掲載されたものである。レオン・チンは上海のある幼稚園の教員であり、そして長老派の宣教師であった。また、レオンは中国華中幼稚園協会（The Central China Kindergarten Association）の役員の一員で、英文通信の秘書を担当している。中国華中幼稚園協会は「中国で幼稚園への関心を促進すること」[2]を目的として、1911 年 10 月に結成された。なお、当協会の役割は第 5 章で詳しく検討する。

レオンはまず、幼児教育における計画立案の重要性と困難、立案時に必要とされる能力を以下のように提示している[3]。

> 幼稚園教諭の仕事で最も難しいのは、月ごと、週ごと、日ごとのプログラムを計画することだろう。この仕事を成功させるためには、若い女性は子どもが好きでなければならない。子どもらしいいたずらや可愛い面白さが好きなのではなく、子どもが困っている時に助け、見守るのを好まないといけない。原則として、中等教育（high-school）かアカデミーを卒業し、ある程度の音楽的素養があり、絵画の能力を持っていること、威厳と上品さを持ちながら、子どもらしいところが必要である。そして、2 年間の忠実な学習と訓練によって、本物の幼稚園教員、つまり子どもという植物の庭師になることを望むことができる。

このように、レオンは、的確な計画案を作成するためには、高等学校かアカデミーで 2 年間の学習と訓練を通して、音楽や絵画に関する専門知識ないし能力を身につける必要がある、とする。すなわち、保育の質と教員の質が結び付けられて論じられていることがわかる。

そして、彼女は秋学期から始まる 10 週間のプログラム、おおよそ 3 カ月間の保育の長期的計画を示している。その際の注意事項は、各テーマに適切な時間と場所を与えることであった。1 年間の活動において、プログラムは「自然」「家庭」「祭り」という 3 つのテーマから始められるため、それに基づいて長期的計画が作成された。その計画は以下の表のようにまとめることができる。

表 4－1　キリスト教系幼稚園保育の長期的計画

月、週	曜日	テーマ	備考
7 月 第 3 週	月曜日	夏休みの経験	
	火曜日とその週の次の曜日	時計のテーマ	子どもたちに迅速で規則正しい生活の重要性を印象づけるために、時計のテーマを与える。
第 4 週		「家庭」 洗濯、アイロン、繕い物、家の掃除、料理	このプログラムを通じて、子どもたちは家事に親しみ、手伝うことを学ぶ。経験から言うと、これは非常に成功したプログラムである。
8 月		満月を祝うお祭り 明かりをテーマにする	通常は、先に太陽をテーマに持ってきて、人工光を取りあげるが、今回はその順番を逆にした。
第 1 週		人工の光	
第 2 週		祭りに間に合うように、月につながる天体をテーマにする	
第 3 週		果物	
第 4 週		ナッツ	
9 月 第 1 週		鳥の移動	
第 2 週		種子	
第 3 週		葉	
第 4 週		収穫	

出典： Ching Leung, “Program Making in a Chinese Kindergarten,” *Educational Review*, Vol.4, No.10, 1911, p.9.

以上のように、園の開始は 7 月の 3 週目で、その前に夏休みがあることがわかる。開始時から大きな保育テーマに入るわけではなく、レオンはまず保育が始まる 1 週目の月曜日

のテーマを「夏休みの経験」に設定している。子どもの生活との接続が配慮されている。さらに、彼女は「子どもが新しく入学する場合、最初の週は明確なプログラムは設定しない。その理由は子どもたちが新しい環境、材料、秩序に慣れる必要があるからである」[4]と説明している。また、7 月のテーマは「家庭」、8 月のテーマは「お祭り」、9 月のテーマは「自然」とされている。各々の大きなテーマは、またそれぞれ小テーマから構成され、そのテーマに即した保育がおおよそ 1 ヶ月をかけて行う計画である。

その中で、9 月第 4 週の小テーマ「収穫」に関して、週間計画が以下のように詳しく設定されている[5]。

> 主題：収穫。
> 月曜日　1 限目、散歩しながら田んぼに行く。穀物を集め、サンドテーブルに植える。2 限目、黒板に絵を描く。
> 火曜日 1 限目、稲刈りと脱穀。工程を説明し、実際に見たり、写真を見せたりする。棒で農具を作る。2 限目、同じものを紙で切ったり、ちぎったりする。
> 水曜日 米を市場へ送る。1 限目、恩物積み木（building gifts）で船や汽車を作る。2 限目、舟の折り紙をする。
> 木曜日 米を売る。1 限目、恩物積み木でお店を作る。2 限目、水彩画またはクレヨンで絵を描く。
> 金曜日 米を炊く。1 限目、恩物積み木でコンロを作る。2 限目、粘土でボウルを作る。

このように、稲刈りから脱穀、そして市場への運送、販売、炊飯まで、米の収穫にかかわる活動が構想されている。幼稚園児に対して米の収穫を紹介する際には、言語的な説明のみでは不十分である。そのため、レオンは子どもたちを田んぼまで連れて行き、稲刈りや脱穀の実際の過程を直観的に示し、体験を通じて説明することで、子どもたちの理解を容易にしたと推察される。この点から、子どもたちの発達段階を考慮した具体的な保育計画の立案が提言されていたと言えよう。

また、恩物積み木（building gifts）を使って、米を運送する際に使われる船や汽車、搬入先のお店、米を炊くときに使われるコンロなどを作る、見立て遊びや表現活動が計画されていた。レオンはこのような恩物を使って子どもの経験を再現する意義を明言していないが、以下の日本で幼稚園実践を行ったピービー（Peavy）[6]の発言から、レオンの意図と似たような部分を読み取ることができる[7]。

> 子供達が興味を持つ様な所が近くに沢山御座いますでせう。そんな所に連れて行うて親しませ、子供達に直接関係ある様々なものを知らせる事が大切な事で御座います。＜中略＝筆者＞連れて行く場所としては、何処の幼稚園でもその近くにいろいろな価値あるところが沢山あるでせう左にその例を記して見ませう。

郵便局、ラジオ放送局、停車場、車両工場、飛行場、消防署、果物店、花屋、靴屋、下駄屋、氷店、製氷会社、洗濯屋、ガス会社、小鳥店、公園、動物園、電気器具店、農場、養鶏場、蚕業試験場、養蚕会社、池（おたまじゃくしのいる所）。

このように、ピービーはレオンと似たような、子どもに直接関係がある、実際の社会生活を見学させるといった実践を行ったことがわかる。しかし、ピービーは子どもたちが単に見たり聞いたりするだけでは、経験を自分のものとして確かなものにできないと考え、教師に「行って後自分達の経験した事を積木や其他の材料で造って見たり、絵をかいたり、劇遊びをしたり一緒にその経験を話し合ったりする事が大切です」[8]という指導意見を出した。つまり、単に見学するだけでは子どもの知識を深めることができない。ピービーは、このような考えに基づき、「積み木や其他の材料」を使って、表現活動を通じて子どもたちに経験の意味を理解させるようとしていた。また、先生は表現活動の材料を用意して、子どもの経験を深めるようにサポートする必要があると考えられる。レオンもおそらくこのような意図をもって、子どもに恩物を使った表現活動を計画したと推測できる。

最後に、短期計画として、月のお祭り「中秋節」に関する日案が提示された[9]。

1 サークル目（first circle）では、歌をうたう。祝日の由来を説明し、関わりのある伝説を話す。
1 限目、テーブルワーク：粘土で月餅を作る。
休憩。
2 限目、テーブルワーク：恩物でケーキ屋を作る。
2 サークル目では、ゲーム、ドラマチック物語、スキップや行進練習。終了。

旧歴の 8 月 15 日は中国の伝統的な祝日「中秋節」である。そこで、レオンは「祝日の由来を説明し、関わりのある伝説を話す」という活動を計画していた。「中秋節」では、月餅を食べる習慣があるため、レオンは「粘土で月餅を作る」という祝日と関わる制作活動を計画した。こうした遊びを通して、「中秋節」に対する子どもの理解が深まると同時に、中国の伝統や習俗などの文化が受け継がれていく。この保育計画の興味深い点は、キリスト教系幼稚園にしても、保育計画には中国の伝統行事が組み込まれ、フレーベル幼児教育と中国の伝統との融合がみられることである。さらに言えば、このキリスト教系幼稚園では、キリスト教と関係する保育内容が計画されず、中国の伝統の方が重視されていた。

最後に、レオンは計画を立てる際の注意事項について、次のように述べている[10]。

幼稚園保姆はこのように慎重に計画を立てるが、もし子どもたちが戴冠式や飛行機械のような何か共通の体験に関する最大限の熱烈な興味を持って、登園してきたとすれば、決してその計画を実行に移すことにこだわるべきでない。どんなにすばらしい計画

でも、一時的に脇に置いておかなければならない。子どもたちと共感しながら仕事をしなければ、自然に逆らうことになり、悪い結果しか得ることができない。
ある物事を知りたいと思うことは、それを知るための第一歩である。この特定の対象を知りたい、この特定の出来事を理解したいということが、子どもの本当の欲求なのである。

つまり、教師が事前に計画することも重要だが、子どもがその時最も興味を示している題材を優先しなければならない、と考えている。その理由は、子どもたちが特定の対象や出来事への知的な好奇心をもつということは、彼らの真の欲求を表しているからである。レオンはこのように、子どもの興味・関心を優先させながら、教育の長期計画及び短期計画を綿密に構想していた。

２．保育内容

第 2 章で述べたように、白川蓉子はフレーベルのオリジナルなキンダーガルテンの保育内容を考察し、それを「①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯（歌を伴うもの、歌なしの競争、ボール遊び）、③自然との関わり、作業のひとつとしての栽培活動、④言葉、お話、読み書き」[11]とまとめている。では、実際の中国のキリスト教系幼稚園では、フレーベルの幼児教育思想に基づいて保育が展開されたのか。以下、保育内容について、(1) 遊具・作業具による遊戯と作業、(2) 運動遊戯、(3) 自然との関わりを取り上げて、その教育活動の特徴を明らかにしたい。その際、フレーベルの幼児教育思想からの影響に着目する。

（１） 遊具・作業具による遊戯と作業

まず、フレーベルの考案した遊具・作業具による遊戯と作業について考察する。当時、中国のいくつかのキリスト教系幼稚園で、遊戯と作業の様子が記録されていた。

例えば、19 世紀末、福州毓英幼稚園では、宗教上の朝礼と日曜日の礼拝以外、固定された時間割がなかった。宗教以外の時間は、各教員が平均 8～9 人の子どもたちを連れて、室内でお話をしたり折り紙をしたり、あるいは室外の遊び場でブランコをしたりして自由に過ごした[12]。また、莆田の幼稚園では、宗教、算数、言語、唱歌、遊戯の課程となっており、その中で「遊戯は主な内容である」[13]とされている。フレーベルの幼児教育理念の中で、「遊戯」はその中核的な概念のため、思想が中国に受容されたと同時に、幼稚園においても「遊戯」を保育内容に取り入れていた。

また、その際、遊具が使われていたことが記されている。例えば、厦門のウェールズ（Mrs. Wales）は、1900 年に始まった幼稚園を担当しており、その幼稚園の教育内容は遊具（gifts）や作業具（occupations）であった[14]。ここで注目すべきなのは、「遊具」と「作業具」が区別されたことである。五十嵐裕子によれば、「フレーベルが考案したのは、遊具（Gabe、Gift）＜恩物は遊具に相当する＝筆者注＞と作業具（Beschäftigung、Occupation）からなる一連

の体系である」[15]という。そして、荘司によれば「外界環境の知識を提示する遊具に対し、内界の創造的活動衝動の自由表現を援助する」[16]のが作業具であった。つまり、フレーベルの幼児教育構想にあっては、「遊具」と「作業具」は対照的な概念であり、両者が区別されて実践されることが意図されていた。それに対して、前述したように、日本の関信三が提唱した二十恩物は遊具と作業具が区別されないまま受容されたのである。この点で、キリスト教系幼稚園は、日本型のそれよりもフレーベルの意図に沿ったものとなっていたと言える。

そして、厦門の懐徳幼稚園では遊具（恩物）が重要な位置を占めている[17]。例えば、第四恩物（長方形のブロック）でベッドを作る活動が記録されている（図 4－1）。これはフレーベルの恩物の中の「生活の形式」という表現となっている。「生活の形式」は自分の生活での体験や身の回りのものを恩物で再現する遊びである。ベッドを作ることによって、生活の中で体験したことを再認識することができる。この点について、荘司泰弘は「万物の本質を直観するためには『象徴』(Symbol）という手段が必要になる。フレーベルは自然物や自然現象にシンボル化された人類の使命を読みとろうとした」[18]と述べ、「ごっこ」遊びと、見立て遊びの意義を強調している。事物を恩物で再現することを通して、子どもの想像力が促されることが考えられる。

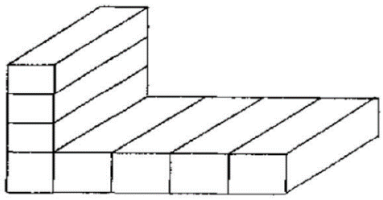


図 4-1　第 4 恩物によって作られたベッド

出典：福建省地方志編纂委員会『福建省志・教育志』方志出版社、1998 年。

また、懐徳幼稚園では恩物と歌遊びと併用することで、恩物の多様な使い方を試みた。例えば、恩物でベッドを作ると同時に、「起床の歌」が教えられていた。歌の内容は自己管理能力や生活習慣に関するものである。その歌の楽譜は次のようになっている。

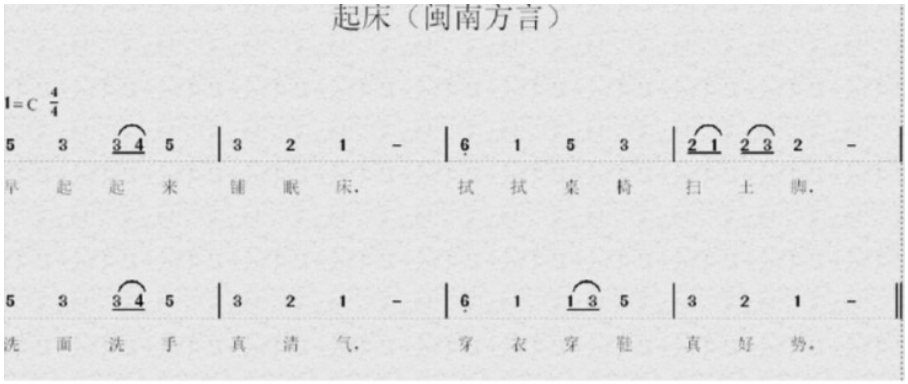


図 4-2　起床の歌の楽譜

出典：福建省地方志編纂委員会『福建省志・教育志』方志出版社、1998 年。

このように、恩物と組み合わせ、子どもが分かりやすく、楽しめるように、実生活に即した創意工夫がされていた。実際、イギリスで最初のフレーベル主義幼稚園を創設したロンゲ夫妻の著書 *A Practical Guide to the English Kindergarten* には、子どもが親しみを覚えやすいように創作した「おはなし」と恩物遊びの実践についての記録がある。ロンゲは同書の中で、「皆さん、はちみつを食べたことがある？甘いよね。はちみつを集める小さい昆虫を見たことはある？」などと問いかけ、蜜蜂に興味が湧くような「おなはし」の後、第 4 恩物＜中国の幼稚園のベッド作りの際に使われた恩物と同じ長方形のブロック＝筆者注＞を用いて蜜蜂の巣箱（図 4－3 を参照）を作る活動に誘う例をあげた[19]。歌と「おはなし」の内容は違うが、その出発点は同じであった。それは、「おはなし」や歌を使って、子どもの興味を引き出し、恩物を使って子どもの生活の中の事物を再現し、その活動を楽しく支えることにある。

さらに、ロンゲ夫妻の著書 *A Practical Guide to the English Kindergarten* は、イギリスにおけるフレーベル幼稚園の教育方法に関する指導書とされ、「フレーベルの遊具と作業具をかなり忠実に適用し」[20]ていた。そのため、同書で示されたカリキュラム例は、当時のフレーベル幼稚園において典型的なものとして迎えられた。恩物と歌遊び（生活の内容）を結びつける懐徳幼稚園の実践には、同書の例と酷似したものが多く見受けられる。このように、恩物を子どもの実生活と結び合わせる懐徳幼稚園の実践は、フレーベル幼稚園の典型的なものと言うことができる。

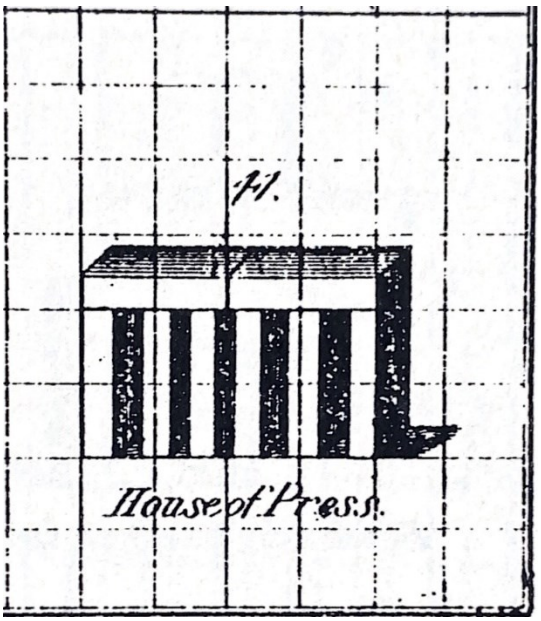


図 4－3　第 4 恩物によって作れられる蜜蜂の巣箱

出典：J. Ronge and B. Ronge, *A Practical Guide to the English Kindergarten*, 1855,

Thoemmes Press, 1994, p.XVIII.

(2) 運動遊戯

次に、「運動遊戯」について考察する。フレーベルは集団で輪を作って音楽に合わせて体を動かす集団遊びのことを「運動遊戯」と呼んでいる。1913 年幼稚園に入学した李来栄は懐徳幼稚園での遊びについて、次にように回顧している[21]。

> 私はすぐに、先生が教えてくれたゲームや歌に魅了された。先生が教えてくれたのは、一人の子どもがハンカチで目隠しをする「目の見えない人が触る」という遊びだった。ある子どもは「目の見えない人」になり、ハンカチで目を隠された。その子どもは手に杖を持つ。他の子どもたちは彼の周りをまわりながら歌をうたう。「目の見えない」子どもは杖で地面を叩いたら、他の子どもはみんな立ち止まって、「目の見えない」子どもは目の前に止まった子を触って、名前を当てる。正しく当てられれば勝ちだが、当てられなければもう一回やり直さなければならない。私はこのゲームをやったことがなかったのでとても新鮮だった。また、「かくれんぼ」もした。

李によれば、幼稚園で様々な遊びを楽しんでいた様子がみられる。この中で、手を使って、ほかの子どもの顔を触って、名前を当てる遊びや、「かくれんぼ」といった体を動かした運動遊びが行われた。

そして、音楽に合わせながら歌をうたうのも運動遊びの 1 つである。湯川嘉津美によれば、「運動遊戯にはそれに調和した歌がつけられていた。歌をうたいながら輪になって星や花を表現したり、ボールを使って運動したりする中で、子どもの身体的・精神的発達は促される」[22]という効果があったと指摘されている。そのため、歌遊びに関する記述は多くの幼稚園で確認できる。例えば、福州毓英幼稚園では、「教師は地面に円を描いて、幼児は円を囲んで歌をうたう」[23]という記録がある。その歌のテーマは「小鳥が飛ぶ」であり、福州の方言でうたわれている。歌詞は「飛んで、小鳥飛んで、飛んで、友達を探して一緒に飛ぼう」[24]となっている。実際、この歌は歌いながら遊ぶという形で行われていた。この遊びを通して、「子どもが集団を愛することや協力精神が育む」[25]とされていた。

また、この点に関連して、前述の李は以下のように回顧していた[26]。

> 唱歌は厦門の方言で歌っている。歌詞は先生が作るものである。例えば、歌詞は「朝起きて、ベッドメイキングして、顔を洗って、手を洗って、服を着て」というように、子どもたちに良い習慣を教えるためのものである。そして、流行っているヨーロッパやアメリカのクラシック曲に合わせて歌われていた。「ジングルベル」という曲で、「厦門に行くなら、舟を漕がないと行けないの」という歌詞があったのを思い出した。

西洋の曲を借りて、歌詞を入れることによって、歌は各場面でアレンジができるようになる。このような生活の習慣を主題とする歌は、福建省のキリスト教幼稚園の教員によって作られた。また、歌詞は福州でも厦門でも「方言」が重視されていた。

さらに、福州の幼稚園で教えられた歌は教科書として発行されている。『福州幼稚園歌謡集』（Foochow kindergarten song book）という本が「福建省のほぼすべての伝道所で少量ずつ配布」[27]されている。それはアメリカン・ボード・ミッション[28]の幼稚園のブラウンによって出版したものである。彼女は 1902 から 1905 年までの間、いくつかの教科書を翻訳し、また、幼稚園用の歌集を出版した。つまり、このような歌は教科書の普及とともに広められていた。

（3）自然との関わり

続いて、自然との関わりについて検討する。宣教師アレン（Bertha H. Allen）は、彼女が務めた福州協和幼稚師範学校附属幼稚園で行われた保育について、以下のように記録している[29]。

> 今週、私たちは庭に植物を植えた。すべての子どもが面白い竹製の熊手で畑を耕す機会があった。そして、先生は、最後に凹凸を滑らかにしてくれた。熱心に紐をピンと伸ばす子どももいれば、鋭い瓦の破片で紐に沿って、小さな畝間を作ろうとしている子どももいた。種まきのボランティアは小さな手のひらを差し出してくれて、私たちは小さな種が転がり落ちないように一緒に工夫をしていた。楽しいひとときだった。そしてついに、狭い通路を挟んで半分には花が、もう半分には野菜が植えられた。数日前まで 30 分も泣き叫んで最後に家に帰らされていた新入りの子どもは、最も熱心に植物を植えた。彼の恥ずかしがり屋の兄は、自ら区画の周りに石垣を作ると言い出したのである。彼は水やり缶を持つのを手伝い、自分の手が濡れて汚れていることに気付くまで、存分に楽しんでいた。

このように、子どもが畑仕事に熱心に参加する様子が見られる。子どもはこのように自然と関わりながら、「自ら区画の周りに石垣を作ると言い出す」といった主体性を発揮していることが確認できる。自然との関わりの意義について、荘司泰弘は「フレーベルは遊具や作業具で子ども達を教育しようとしたのではなく、自然に子ども達の保育を委ねたのであり、自己に内在する自然と合一することが自己教育の道であったわけである。屋外での活動という『多様で変化に富む自然と接する環境』があってこそ、室内で遊具を使って遊ぶという安定した環境が自己学習効果を発揮するわけである」[30]と指摘している。

先に例としてあげたのは庭での栽培活動であった。こうした栽培活動についてフレーベル自身は『人間の教育』の中で、「栽培のために自分の畠を耕すことは,この年齢においては特に重要である。＜中略＝筆者＞このことを通じて、少年の生命は、自然に関する彼の疑問、

自然を知りたいという彼の憧憬、植物や花を長期にわたってくり返しくり返し観察し、思慮深く注意したいという憧憬にたいする、いろいろな、かつ完全な満足を自然と見出すのである」[31]と庭で栽培活動を行うことの重要性を強調している。この点に関連して、荘司泰弘も「フレーベルにとって、庭が提供する自然環境、庭が象徴する自然が自己教育を援助する環境のすべてだったと考えられる。彼にとって自然による保育は神による養育を意味している。人間教育は創造神によってのみもたらされると直観するフレーベルは、自己教育のための環境である庭を要求したのである」[32]と指摘している。

以上のように、清朝末期、教会が運営する幼稚園の多くは欧米のモデルに倣い、フレーベルの幼児教育思想に基づいた保育内容を取り入れていた。その保育内容の特徴については、次のようにまとめることができる。

第一に、キリスト教系幼稚園では、長期的計画と短期的計画が立案されている。その長期的計画は「自然」「家庭」「祭り」という 3 つのテーマから構成されている。いずれも子どもの生活と直接関わる内容である。計画案では子どもに実際の社会生活を見学させるだけではなく、「積み木や其他の材料」を使って、表現活動を通じて子どもたちに経験の意味を理解させるようとしていた。また、「祭り」というテーマの中で、中国の年間行事「中秋節」が保育計画に取り組まれたことがわかる。キリスト教と関係する行事ではなく、子どもの身近な中国の伝統行事が重視されていた。

第二に、遊びがキリスト教系幼稚園の主な教育内容となっている。その中には、①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯、③自然との関わりなどの活動が実践されたことがわかる。特に、遊具と作業具が区別されている点は、日本型のそれよりもフレーベルの意図に沿ったものであった。

しかし、フレーベルの幼児教育思想の受容の際、恩物について触れている宣教師はボッグス以外にいないことを 2 章の第 4 節で明らかにした。そして、宣教師たちは恩物を特別視することなく、遊び論全体を受容していた、と結論づけたが、実際の幼稚園の実践では、恩物が多いに用いられている様子が記録され、保育内容での一定の比重を占めていた。それにしても、恩物を遊具として使わせる際、歌と結合させ、生活の中の事物を再現するなどの工夫がなされており、恩物の形式的な操作方法とは大きな違いがある、と言える。

３．キリスト教系幼稚園の数と展開の過程

キリスト教系幼稚園の数を正確に示した統計資料は少ないが、宣教師ヤング・アレンの 1903 年の著書『五大洲女塾通考』によれば、1902 年時点でキリスト教幼稚園は 6 ヶ所あり、児童数は 194 人であった[33]。さらに、1922 年の中華基督教教育調査会の『中国基督教教育事業』によると、幼稚園の数は 139 ヶ所で、園児数は 4,324 人であった[34]。つまり、20 年の間に、幼稚園数と園児数の両方が大きく増えたことがわかる。

では、これらの幼稚園は中国のどの地域に設置されたのだろうか。「幼稚園協会」という記事では、「蘇州市には 2 つの幼稚園に加えて、1 つの幼稚園の教師を養成するための学校

があり、すべて宣教師の援助を受けている」[35]というように、蘇州に 2 つの教会幼稚園があることに触れている。そして、『教務雑誌』（1911 年）では教会幼稚園についても記されており、「幼稚園事業」という記事では、長老教会によって作られた幼稚園について、以下のように述べられている[36]。

> 現在、上海には四つの設備の整った幼稚園があり、完全に訓練された広島（日本）、サンフランシスコとニューヨーク市からの卒業生が経営している。その例の 1 つは、長老教会女子学校（Presbyterian girls school）に関連しており、上海の南門におよそ一年前に開設された。

上海の四つの幼稚園のうち、1 つが長老派によって設立された幼稚園であるということについて言及されている。このように、上海と蘇州にキリスト教系幼稚園が作られたことがわかる。

これは、前述したように、アヘン戦争後の開港と関係があると考えられる。1842 年のアヘン戦争後、広州、福州、厦門、寧波、上海の開港を迫られた。その頃から、欧米諸国のキリスト教宣教会は中国の開港された都市で宣教し始めた。その結果、江蘇省、上海、福建省も他の地域より早く教会立学校が作られた。以下では、開港地福建省を例に取り上げ、キリスト教系幼稚園の展開過程について概観しておきたい。

福建省の最初のキリスト教系幼稚園は、福州の毓英女子寄宿学校附属保生堂幼稚園である。1859 年、メソジスト監督教会女性宣教師は福州で女子塾と保生堂（孤児院）を創設し、1874 年に、その保生堂で幼児教育機関を設立した[37]。1892 年には、漳州啓蒙教会付属の女学校（後に養正女学校と改称）でも、キリスト教信者の 3 歳から 7 歳までの子どもと、孤児院の年長孤児を対象とした修道院を運営していた。同年、養正女学校では、4 歳から 6 歳までの女子及び孤児院女子を対象とした幼稚園を設けた[38]。さらに、1893 年、英国聖公会の女子宣教師顔師姑が古田で萃英女学校を設立した。1897 年から同校に幼稚園が付設され、4 歳から 6 歳までの捨てられた女児のため幼児教育が実施された[39]。その幼稚園児たちは卒業後、教会の女子校や教会が運営するチャリティー工房で働くことになった。そして、1898 年に英国長老会の牧師夫婦が、福建省の厦門に家庭式幼稚園「怜児班」（懐徳幼稚園の前身）を設立した[40]。当時、福建省には 13 園存在していたが、表 4－2 のようにまとめられる。

表 4–2　中国福建省における初期キリスト教幼稚園一覧

キリスト教幼稚園	創立年	設置者・設置団体	設置団体所属国	所在地
毓英女子寄宿学校附属保生堂幼稚園	1874 年	メソジスト監督教会	アメリカ	福州
山麓幼稚園	1887 年前後	美部会（公理会）	アメリカ	福州

養正女学校幼稚園	1892 年	英国長老会女性宣教師安玉瑜、力禧年	イギリス	漳浦新路尾
美以美女学校幼稚院	1893 年	女性宣教師蒲星	アメリカ	興化
進徳女斎幼稚園	1894 年	倫敦会女性宣教師嘉日敏	イギリス	漳州
The kindergarten of the American Board Mission	1894 年	American Board Mission 美部会 Miss Woodhull	アメリカ	不明
不明	1896 年	Methodist Mission Miss Alice Linam	アメリカ	福州
新義山育嬰堂（萃英女学校）付設幼稚園	1897 年	安立甘会（聖公会）女性宣教師顔師姑	イギリス	古田
懐徳幼稚園	1898 年	英国長老会	イギリス	厦門鼓浪嶼
培徳女学付設幼稚園	1898 年	中華聖公会[41]	イギリス、アメリカ、カナダ	莆田
時化幼稚園	1908 年	倫敦会	イギリス	泉州
銅山私立砺茲小学堂付設幼稚園	1908 年	不明	不明	漳州
育坤女子小学校付設幼稚班	1911 年	不明	不明	漳州

出典：厦門市地方志編纂委員会『厦门市志（第四册）』3058 頁、莆田市地方志編纂委員会『莆田市志（巻 33）』2018-2019 頁、福州市教育志編纂委員会『福州教育大事记（公元 308 年－公元 1994 年）』44 頁、漳州市地方志編纂委員会『漳州市志』2086 頁、泉州市地方志編纂委員会『泉州市志教育志』119 頁。Hannah C. Woodhull, “A Partial Report of the kindergarten Work in Fuhkien Province,” *Educational Review*, Vol.2, Aug, 1909, p. 40.

表 4－2 から明らかなように、当時の福建省のキリスト教幼稚園の設置者は、全てプロテスタント宣教会である。イギリスとアメリカの宣教会によって作られた幼稚園はそれぞれ 5 園であった。さらに、その中で、培徳女学付設幼稚園はイギリス、アメリカ、カナダ三つの国からの教会共同で作られた。多賀秋五郎が「二十世紀の中国における教会学校の発達」で注目されることは、「従来のフランスやイギリスに対して、アメリカの進出が積極化したことである」[42]と述べたが、福建省ではアメリカの優位が初期には見られていなかったのであ

る。それは、19 世紀に来華したイギリス長老教会が、同省厦門に最初に中心となる宣教拠点を設けたからである。幼稚園の所在地は同省の開港地である福州と厦門を中心に、またはその周辺に集中していた。このような経緯を辿りながら、キリスト教幼稚園は 1874 年から長年をかけて普及されてきたのである。

対して、中国官立の幼稚園の状況をみると、1904 年、清朝政府は「奏定学堂章程」を頒布し、幼稚園教育を法的に位置づけた。しかし、幼児教育は重視されておらず、普及は遅れた。次節では、中国での「日本型」幼稚園の実態について探る。

第 2 節　「日本型」幼稚園の実態

１．官立蒙養院の教育実践

1904 年「蒙養院及び家庭教育法章程」が制定されると、章程に基づいた幼児教育制度が確立し、各地で官立蒙養院が相次いで設立された。例えば、1905 年に京師第一蒙養院、湖南蒙養院、1907 年に福州蒙養院、上海公立幼稚舎、1908 年に山西育嬰堂附設蒙養院などである。以下、「蒙養院及び家庭教育法章程」制定後の 1905 年に開設した湖南蒙養院を例にして、官立蒙養院の保育内容の特徴の一端を明らかにする。

湖南蒙養院は当時の湖南省の巡撫（長官）であった端方[43]によって設立され、その保育対象は 3 歳から 7 歳までの子どもであった。湖南蒙養院が最初に開設されたとき、端方は日本から春山と佐藤という二名の保姆を招聘した。保育内容はこれらの保姆が考案したもので、「湖南蒙養院教課説略」（1905 年）[44]として出された。その中で、保育内容、方法、教材などについて説明されている。

では、湖南蒙養院の保育内容は章程通りに設けられたのか、つまり、政府規程上の保育内容と実際に行われた保育内容は、一致していたのであろうか。この点に関して、以下では、「湖南蒙養院教課説略」で定められた保育内容と「蒙養院及び家庭教育法章程」を比較して、湖南蒙養院の保育内容の特徴を探る。

表 4－3「湖南蒙養院教課説略」と「蒙養院及び家庭教育法章程」の保育内容についての比較

項目	湖南蒙養院教課説略（1905 年）	蒙養院及び家庭教育法章程（1904 年）
遊戯	保姆たちは、教室でも屋外でも、自然の法則を組み合わせた面白い遊戯を通して、子どもの元気を引き出し、気質を調和させる。 様々な種類の遊戯がある。遊戯を利用し	遊びには、自由遊びと集団遊び 2 種類がある。自由遊びでは子どもたちは自由に遊び、集団遊びでは子どもたちは一緒に各種のスポーツをしたり、一緒に歌をうたったりして調節する。子どもたちを

	て、子どもの本性に従って、将来的に学者、農民、実業家などに導くことができる。	楽しく生き生きとさせ、身体を健全にさせ、そして集団意識を養成する。
楽歌唱歌	楽歌は体育の 1 種である。楽歌は音とリズムで精神を発達させ、歌詞で踊らせ、筋肉を鍛え、気持ちを込めて歌うことで感情を育てる。歌は、教育の本質である忠誠心や民族愛に関わるものであり、これを疎かにすることはできない。 すべての歌は子どもたちの心身を発達させるために取り入れられ、美意識を養うこと、また、気分を良くし、情緒を養うこともできる。単音歌唱、輪唱、多声歌唱があり、輪唱多声歌唱は少し難しく、単音歌唱は幼稚園で教えるべきである。 本省の有名な山、川、人物と動植物などを歌詞にして、新しい曲を作って、子どもがそれを歌うようにする。山、川は地理と関係している；名人は歴史と関連している；動植物は理科と関連している。これら本省の特徴ある地理歴史理科を使って、故郷を愛する心を啓発させることができ、将来歌詞は忠孝仁義的なことを加え、愛国教育を行うことができる	もし子どもが 5、6 歳の時、唱歌したいという願望があれば、簡単な詩を教えることができる。例えば、古人の短歌や五言韻文を歌にして、子どもの耳、目、喉、舌を使うことによって発達を助長する。さらに、心情を楽しくし、徳性涵養に資する。
談話	談話を行う人は教師であり、人間としての道を示す。たとえば、二十四孝徳の話は非常に興味深いし、家を守ることができる犬や、朝に仕えることができる雄鶏の話も、子どもの心に自然に響く。こうした話はすべて、教師が知っていなければならない。 また、談話は修身の話と庶物話の 2 種類がある。修身の話は人間としての道を示すもので、分かりやすく面白くなければならない。庶物話は簡単な物の名称について、教師が一つ一つ指導し、意味を教え	談話は、子どもにとってわかりやすく役に立つ事実、子どもにとって興味のある事実、寓話にすべきである。それをもって子どもの性格、興味を養う。子どもと会話する時、一般的な自然物や人工物を指し示し、子どもが物を見たり、注意を払ったりするよう促すべきである。子どもが既に話していることを理解した場合、保姆は子ども自身にその内容を話させるべきである。その際、声を高くし、言葉がたどたどしくならないように、言葉の順序を間違えないように注意する。

	ることである。	
手技	手技は恩物のことである。恩物は多くの種類があり、子供たちに軽さ、大きさ、長さ、力点の中心を理解させることができる。恩物はドイツのフレーベルが考案したもので、20 種類まであり、日本はそれを導入した。 日本は欧米を真似、恩物を導入し、当初は十数種類だったが、20 数種類に変更させた。（中国で）すべてを教えることはできないが、もっとも心智を発達させる 11 種を選んで教える。 11 種類の恩物の使い方は以下の通りである。 木積〔積み木〕　木製の正方体を取り、図面通りに家、作業場、船、乗り物、橋などさまざまな形に積み上げること。 板排〔木の板〕　木の板を取り、様々な物の形に並べることであり、最初に並べる時に真似る手本がある（以下同じ）。 箸排〔棒〕　竹の棒を使って、一、二、三のような文字、そして、大、小、工などの漢字を並べていくものである。 環排〔環〕　環排とは、環状に穴が開いている部分を繋ぐことができるもので、銅でできており、排列の方法は真似る手本がある。 豆〔豆細工〕　竹の棒で豆を通して、建物、建物、船、橋や人の形を作ることができる。 紙織　5 色の紙を細長い紙片に折り、紙片を使って様々な形を作ることができる。 紙折り 小さな正方形の紙を折って、いろいろな動物やオブジェを作る。 紙ばさみ 紙を使って花や人物の形を切る。	子供たちに、様々な長さや大きさの木片を入れた箱を与え、木片で家や扉などの形を作る。また、数本の小さな竹の茎と豆で様々な形を作り、紙で様々な形を作り、粘土で茶碗や水差しを作る。そして、蒙養院の近くの庭で、草や木や花の種を蒔き、水と肥料で湿らせ、花が咲き、実がなるのを観察させた。こうした活動の目的は、幼い子どもたちの手と目を導いて、それらを有用な方法で使えるようにすることで彼らの心と思考を発達させる。

	紙刺し 紙の上に花や木、水や雲の形を針で刺して作る。 縫取　針と糸を使って各種の形を縫くことである。 画方〔描く〕　各形を描く、2～3 年生で習うのが望ましい。	
行儀	子どもが良い習慣を身につけるように、徳性を涵養することを教えるべきでる。これが真の修身であり、もっぱら実践の中で追求されるべきであり、教師はいつでも指導を行うべきである。 行儀は道徳教育の基礎である。	規定なし。
読方	日本で国語を学ぶ方法は、読み方、書き方、綴り方の 3 つがあり、読み方はその国の文字を読むことであり、書き方は文字を書くことで、綴り方は文章を作る方法である。書き方と綴り方は皆小学校で習うことで、読み方は幼稚園の 2、3 年目の時から始まる。	規定なし。
数方	奇数、偶数などの数字を数え、足し算、引き算、掛け算、割り算をすることである	規定なし。

出典：中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年。

以上から、「蒙養院及び家庭教育法章程」の保育内容には、「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の 4 項目が設けられているのに対して、「湖南蒙養院教課説略」の保育内容には「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」「行儀」「読方」「数方」の 7 項目が定められていることがわかる。その内、湖南蒙養院の「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の 4 項目は「蒙養院及び家庭教育法章程」の規定と一致している。第 3 章では「蒙養院及び家庭教育法章程」が日本の「小学校令施行規則」を参考にして作成されたことを指摘したが、同様に湖南蒙養院の保育内容も「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」の 4 項目が含め、基本的に近代日本幼児教育をモデルにしていたと言えよう。

しかし、「湖南蒙養院教課説略」では、「行儀」「読方」「数方」の 3 項目が付け加えられていた。次に、この 3 項目は具体的にどのような内容であったのか、そしてなぜ設けられたのかを分析する。

1 つ目の項目は「行儀」である。「行儀」は儒教的な「修身」のことであり、「湖南官立蒙養院教課説略」では「行儀」に関して、「子どもが良い習慣を身につけるように、徳性を涵

養することを教えるべき」[45]と規定されている。ここから湖南官立蒙養院は、道徳的な習慣を身につけることを目的とした徳育を重視していたことがわかる。第 1 章で検討した伝統幼児教育の道徳教育の中でも、「礼儀」等が保育内容の中心となっていた。そのため、「行儀」が設けられることは、中国の伝統的な幼児教育内容を取り入れようという創立者の意図が反映されている。また、このことは、第 3 章で分析したように、官員が日本の幼稚園教育で視察した際、その保育内容の中でも特に、当時設定されていた、修身に注目していた、という事実とも一致する。

2 つ目の項目は「読方」である。「湖南官立蒙養院教課説略」で「読方」については、「日本で国語を学ぶ方法は、読み方、書き方、綴り方の 3 つあり、＜中略＝筆者＞読み方は幼稚園の 2、3 年目のときから始まる」[46]と説明されている。このように、「読方」の設定は日本からの影響を受けていることがわかる。実際、日本の幼稚園教育では一時期、「読み書き」が保育内容として教えられていた。湯川嘉津美は、東京女子師範付属幼稚園の保育課目について、「1881 年からは保育課目に『読ミ方』『書キ方』を新たに採用して、読み書き算を教えるようになった。その背景には、子どもを幼稚園に通わせても遊んでくるばかりで何も教えてくれないという親の強い不満があった」[47]と述べている。さらに、橋川喜美代は、地方の幼稚園の保育課目について、「付属幼稚園が読み書き算を保育項目に取り入れた影響は、明治十年代後半、つなぎの組をもたない各地の幼稚園課目に含み込まれるという形で出現した」[48]と指摘している。つまり、親の要請に応じる形で、創始期の日本の代表的幼稚園である東京女子師範付属幼稚園から、地方の幼稚園にわたって、読み書き算という保育内容が取り入れられたのである。

しかし、この「小学校化」とも言える保育内容の変化はその後、幼児の発達に適しないとの批判に晒された。その結果、1891 年に女子高等師範学校附属幼稚園では、幼稚園規則を改正して保育課目から『読ミ書キ』と『数ヘ方』を削除した[49]。さらに、大阪市愛珠幼稚園の『沿革誌』（1903）で「廿六年ニ至リ読ミ方書キ方ノ幼児ノ能力ニ適セサルヲ認メ之ヲ廃シ漸次改良ノ歩を進ム」[50]と記録されているように、1893 年に「読ミ方書キ方」は幼稚園の保育課目から外されていった。とはいえ、「小学校の予備校的性格からの脱皮を図るが、幼稚園の教育施設としての性格自体に変わりはなかった」[51]と指摘されたように、依然として幼稚園の「教育」的性格が色濃く残されていた。

以上の歴史的背景に加えて、第 1 章で述べたように幼稚園がまだ成立していない時期の中国では、幼児教育機関としての「私塾」が開かれ、そこでは、読み書きは主な授業内容として存在していた。このように湖南官立蒙養院においての「読方」の設定は、日本からの影響だけではなく、従来までの中国の幼児教育内容からも影響を受けていたと言えよう。

3 つ目の項目は「数方」である。「数方」は奇数、偶数などの数字を数え、足し算、引き算、掛け算、割り算をすることである。「数方」は中国の伝統的な幼児教育にもあった内容であるため、「行儀」と「読方」の 2 項目のように中国の伝統的な幼児教育から影響を受けている。

最後に、注目すべき保育内容は湖南蒙養院の「楽歌」である。教材として使用されている歌は「本省の有名な山、川、人物と動植物などを歌詞にして、新しい曲を作る」[52]と定められている。「楽歌」における教育方針としては「これらの本省特徴のある地理歴史理科を使って、故郷を愛する心を啓発させることができ、将来歌詞は忠孝仁義的なことを加え、愛国教育を行うことができる」[53]と説明している。このように、「楽歌」は歌唱を目的としただけではなく、故郷愛、さらに愛国教育を目的としている。故郷を愛する、そして愛国心をもつ近代国民を養成しようとする政府の意図が窺える。

このように、湖南官立蒙養院は「蒙養院及び家庭教育法章程」を基に、「行儀」、「読方」、「数方」の 3 項目を付け加え、さらに地方の特色のある教育内容を取り入れていた。そして、その中の「行儀」、「読方」、「数方」は日本からの影響を受けている他、中国の伝統的な幼児教育から大きな影響を受けている。要するに、湖南官立蒙養院は日本の幼稚園モデルを参照しながら、同時に儒教的な保育内容も取り入れ、小学校準備教育相当の教育を行っていた。では、このような特徴は他の官立幼稚園にもみられるのか。当時 3 校の中国の官立幼稚園の保育項目を検討する。

表 4－4　中国の官立幼稚園の保育項目

幼稚園名	創立年	保育項目
湖北幼稚園	1904 年	行儀、訓話、幼稚園語、日本語、手技、唱歌、遊戯
上海公立幼稚舎	1904 年	遊戯、談話（修身、博物）、唱歌、手工、識字、温字、習字、図画、計算
旅寧第一女学校付属幼稚園	1906 年	識字、連句、心算、図画、談話、唱歌、遊戯、博物、手技、習字

出典：中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、朱有瓛『中国近代学制史料』华东师范大学出版社、1989 年、103 頁、114 頁。

表 4－4 から、湖北幼稚園には「行儀」、上海公立幼稚舎には修身内容を含めた「談話」が置かれ、3 校中 2 校に礼儀、修身的な保育内容が設けられていることが確認できる。

そして、湖北幼稚園には「幼稚園語、日本語」、上海公立幼稚舎には「識字、温字、習字」、旅寧第一女学校付属幼稚園には「識字、連句、習字」が置かれており、3 校とも「読み書き」の保育項目が確認できる。さらに、上海公立幼稚舎には「計算」、旅寧第一女学校付属幼稚園には「心算」、3 校の内、2 校が算数に関する保育内容が設けられている。

このように、湖南官立蒙養院と同じく、「蒙養院及び家庭教育法章程」を基に、「行儀」「読方」「数方」の 3 項目を付け加えた官立幼稚園は多く、これらの幼稚園でも日本や伝統的な幼児教育からの影響を確認することができる。そもそも、「蒙養院及び家庭教育法章程」の中の「蒙養」とは、易経で出てくる「蒙以養正」、子どもに正しい教育を与えるという意味

であり、ここでの正しい教育は子どもに礼儀、知識、勇気、忠誠などの儒教的な品格を教えることである。この章程が制定されると、湖北幼稚園も章程に則して「武昌蒙養院」に改称した。このように儒教に関連した名称である「蒙養院」に改称したことからも、清政府が儒教的な教育理念に則って幼稚園教育を行おうとしたという意図が窺える。このように、清政府は近代教育の導入だけではなく、中国伝統文化に基づいた幼児教育も志向していた。

以上のように、教育制度の近代化を目指した清政府は、幼児教育段階から系統的に近代的な人材を育成するために、幼稚園教育制度を導入したが、儒教思想の影響から中国伝統文化に基づいた幼児教育も取り入れていたことがわかる。いわば、「伝統に基づいた近代化」が行われていたのである。そのため、官立幼稚園教育の特徴は、「学習」が主な教育内容になっていた。それは、「小学校の基礎」、「就学前の準備段階」としての性格を持っており、既述した視察官員の認識にも表れていたように、修身などを重視した伝統的な儒教思想を著しく帯びたものであった、と言える。また、恩物の使い方や手順が細かく定められ、日本の幼稚園と同様、形式的な操作方法に頼る傾向にあった。

これに対して、キリスト教系幼稚園はフレーベルのキンダーガルテンに倣い、フレーベルの幼児教育思想に基づいた保育内容として、①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯、③自然との関わりなどの活動を取り入れていた。その特徴は「遊び」が主な教育内容となっていることであり、遊びのテーマとしては子どもの生活と直接関わる内容が取り入れられていた。また、「遊具」と「作業具」が区別されて実践されていた。さらに、恩物を遊具として使用する際には、主に歌と結合させ、生活の中の事物を再現するなどの工夫がなされており、恩物の形式的な操作とは大きな違いがある、と言える。

２．地方民間（私立）幼稚園の教育実践

では、民間実業家たちによって設立された私立幼稚園は、どのような特徴を持っていたのだろうか。第 3 章において、日本へ幼稚園を視察した官員と、実業家が注目したところが異なることを明らかにした。つまり、官員達は修身という規律や礼儀を教える教育内容に注目する傾向が強かったのに対し、実業家たちは自由な遊びを含んだ教育内容を重視していた。では、実際、実業家たちが幼稚園を設立し運営する際には、どのような保育内容を取り入れていたのであろうか。

私立幼稚園も1904年の「蒙養院及び家庭教育法章程」が出された後、相次いで設立された。例えば、1904年に上海務本女塾付属幼稚舎、1907年に上海私立愛国女学社付設幼稚園、1908年に湖南周氏女塾附设幼稚園、北京曹氏家庭幼稚園などが設立された。私立幼稚園はその多くが企業家によって作られ、資金も充足していたため、設備も整っていた。例えば、広州南強公学付属幼稚園では、「保育室があって、そこに小さいオルガンが数台置かれている。遊戯室も一つあって、そこに大きいオルガン一台が置かれている。庭園に池があり、花壇は2つもある。そのほか、職員室、応接所、標本室なども整備されている。道具について、幼児用机、椅子、黒板、チョーク、楽器、恩物、時計、救急用具、遊戯用

具、暖房器具などもついている」[54]という記述が残されている。そして、多くの私立幼稚園は教員の資質を重視しており、直接日本人教員を雇用した。次に、直接日本人教員を雇用した天津厳修の厳氏蒙養院と江蘇張謇の幼児教育機関を例にして、私立幼稚園に日本人が与えた影響及び日本からの影響以外の特徴を明らかにする。

（1）天津厳修の厳氏蒙養院

女子高等師範校卒業の教師、大野鈴子は 1905 年に厳修によって天津に招聘された。大野は厳氏蒙養院保姆と厳氏女子小学校保姆講習所教習を担任した。では、厳修はなぜ日本人教員を中国に招聘したのか、また、大野はどのように日本で学んだ幼児教育知識を中国に伝えたのか。以下、厳修及び大野の教育観と教育方法に焦点を当て、厳氏蒙養院における教育実態を明確にする。

日清戦争後、中国の有志たちの間では敗戦の理由が考察され、厳修も「方今時勢、非自強不能自存、非人才不能自強、非講学不能育才（今の時期では、自分を強くしなければ自立できない。人材がなければ国が強くならない。学校を開設しなければ人材が育てられない）」[55]と考えた。そして、1898 年変法の前に、厳修は「科挙を廃止して、経済特科[56]を開設する」ことを清朝政府に上奏したが、採用されなかった。そのため、厳は北京から天津に帰郷した。同年、自宅で西洋的な学問を学ぶ厳氏家塾を開いて、子弟の教育に力を注ぎ、1902 年には厳氏女塾を開設した[57]。

厳修は「日本が強国になった原因は明治維新以来西洋科学技術や教育制度を導入したからである」[58]と考えた。したがって、中国でも教育改革を行い、強国になるために日本の教育制度を学ばなければならないと認識した。1902 年、厳修は長男厳智蠲と共に初めて日本を訪問し、智蠲を日本に留学させた。1904 年に再び日本視察を行い、1905 年には中国に厳氏女子小学校を創立、蒙養院と保姆講習所を併設した。

保姆講習所が設立された後、次いで蒙養院が開設された。蒙養院は保姆実習の場所である。日本人教習の大野鈴子は朝、蒙養院で実習生に対して教授を行い、午後は保姆講習所で講義をする。最初は、大野自身がオルガンを弾いたり、歌を教えたりした。保育時間は朝の 9 時から 11 時であり、園児は 4〜6 歳の厳の家族と、厳の親友と近所の子ども、全部で約 30 名程であった。学費は毎月 1 元である（厳氏家族の子どもであっても学費が必要）。子どもが卒業した後、男児が小学校に進学し、女児は同校の女学部に進む[59]。

厳氏蒙養院ではどのような教育が行われていたのだろうか。蒙養院には保育のために活動室が新しく建てられ、活動室の床の上には白い線で大きな丸が描かれた[60]。子どもはいつも丸の線に沿って並んで、教師は活動室の中央に立ち、歌を教える。この教授形態は女子高等師範学校付属幼稚園の「教室の床には直径 2 丈くらいの大きな丸の線が引かれてある」という様子と同様である。活動室の隣には、教師休憩用の部屋がある。

蒙養院の設備は全て日本から購入され、例えば、ピアノ、オルガン、子ども用の机と椅子、教具などがあった。1 つの椅子には 2、3 人の子どもが座る。指導の際に使用するため、机

には線が引かれている[61]。遊具は室外にブランコなど体を動かせるものがあり、それ以外、綱引き用の綱や猫とねずみのゲーム用の鈴などの道具が用意されている。しかし、子どもが自由に遊べる遊具は少なかった[62]。

机の上で遊べる玩具は「積み木、色板、長さが違う木の棒や円形金属の環」[63]など平面と立体のものがある。それぞれ第 3 恩物立方体の積み木、第 4 恩物直方体の積み木、第 7 恩物正方形と三角形の色板、第 8 恩物 5 種類の木の棒と第 9 恩物金属製の鐶に対応している。子どもの手工は「折り紙、切り紙、粘土、豆細工や図画」[64]などいくつかがあった。それぞれ第 15 恩物は紙を折る、第 16 恩物は紙を切る、第 20 恩物は粘土遊び、第 17 恩物は豆細工、第 13 恩物は描くというものと対応している。大野は二十恩物を全部日本から中国に持ち込み、恩物を中心として授業を行ったことがわかる。

また、唱歌は全部日本語から訳された。内容は主に植物、動物、自然現象、礼儀などに関するものである。歌詞は留学生が訳した。例えば「『公鶏打鳴〔おんどりが時をつくる〕』という歌は北京と天津の間で広がって、多くの幼稚園に採用された」[65]とされている。物語は日本と中国の昔話を使い、日本の桃太郎、スズメちゃん、中国の西遊記などが取り上げられていた。設備や玩具だけではなく、保育内容や方法まで日本から大きく影響を受けていたと言える。

（２）江蘇張謇の幼児教育機関

1903 年に日本を視察した張謇は中国へ帰国した後、1904 年に自身の子息と親友の子ども合わせて 10 人のため、海門常楽鎮に扶海垞家塾を設立した。張謇は「谋体育、德育、智育之本基于蒙养〔体育、徳育、知育の基本は蒙養である〕」[66]を教育目標として提出していた。さらに扶海垞家塾には日本人の女性教師森田政子が招聘された。この家塾の学則は「日本人の教習に体操・算術・音楽・図画を教育し、そして幼稚遊戯の事を習わせ、本国の教習が修身・国文を教授する」[67]と規定されていた。つまり、日本人と中国人両方の教員が招かれ、それぞれ近代的な幼児教育と中国の文化知識を教えていたことがわかる。

扶海垞家塾では「扶海垞家塾章程」が定められ、課程内容、礼儀規則などが規定されている。例えば、「初めて先生に会うとき三回のお辞儀をする」「身長順に席に座る」「遅刻すると親に銀元 1 角を罰金する」「他の人は授業中に教室内に入ってはいけない」などの基本ルールを定めている。

授業については、毎日午前は 8 時半から、午後は 1 時半からである。遊戯時間は朝の 11 時と午後 4 時、いずれも授業の後である。第一学年第一学期の毎週の時間割は表 4－5 の通りである。

表 4-5　扶海垞家塾第一学年第一学期時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
8:30～9:30	修身	修身	修身	修身	修身	修身

	(家庭)	(自身)	(同窓)	(家庭)	(自身)	(同窓)
10:15～11:00	国文(識字と習字)	国文(読書)	国文(識字と習字)	国文(読書)	国文(識字と習字)	国文(読書)
11:00	遊戯					
13:30～14:00	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽
14:15～15:00	算術	図画	算術	図画	算術	図画
15:30～16:00	体操	体操	体操	体操	体操	体操
16:00	遊戯					

出典：「扶海垞家塾章程」『张謇全集』江蘇古籍出版社、第 4 巻、37 頁。

表 4－5 からは、音楽、図画、遊戯などの幼児教育に関する内容が含まれていることがわかる。その中での音楽という教育内容については、森田は童謡を作り、子どもが良く理解できるように、張がそれらの歌詞を中国語に改めた。例えば、『池中之金魚（池の中の金魚）』という曲は「風吹池面開、一群金魚排。小魚摆摆尾、大魚喁喁腮。白魚白玉琢、紅魚紅錦裁。我投好食不須猜、和和睦睦来来来」[68]と訳されている。このように音楽を通じて、子どもは満足感を高め、活動自体を目的として自発的に取り組む意欲が高まったとされている。そして、遊戯の時間は 1 日 2 回設けられ、他の教科より多く取り入れられている。張謇の視察内容、自由な遊びを含んだ保育内容がある程度反映されている。つまり、遊戯は幼稚園に取り入れられるべきものと理解されており、こうした理解には日本からの影響があったと言えよう。

しかし、その一方で、修身は毎日 1 時間、国文、算術あるいは図画は毎日 45 分、音楽と体操は毎日 30 分とされていて、修身の時間が各教科の中で最も長く設定されていることがわかる。張謇は視察時、修身についてそこまで注目していなかったが、実際に幼稚園を設立・運営する際には、修身を重視していた。また、国文や算術、体操などの授業が設けられた。日本の 1900 年の「小学校令施行規則」では、尋常小学校の第一学年の教科は、修身 2 時間、国語 10 時間、算術 5 時間、体操 4 時間と設定されている[69]。扶海垞家塾の音楽、図画、遊戯以外、他の教科は尋常小学校のそれと変わらなかった。以上の教育内容から、扶海垞家塾は小学校就学前の準備教育機関であったと言えよう。実際、張の息子である張若孝は 1904 年に当幼稚園に入り、1905 年に通州師範附属小学校に入学した。

そして、1912 年に、辛亥革命後、張は扶海垞家塾での教育を基盤として、南通で新育嬰堂第一幼稚園を創立した。さらに、1914 年、女子師範で附属幼稚園を設立した。それ以外にも、1917 年に張楊私立第二幼稚園、1920 年に馬家巷で張呉私立第三幼稚園を開園した。

このように、張謇によって作られた幼稚園も、官立幼稚園と同じく、日本から大きく影響を受けながらも、修身、読み書きといった伝統的な幼児教育を取り入れていた。具体的に言うと、張謇は視察中、遊びを中心とした保育内容に注目し、遊びを保育内容にも設けていたが、遊びを幼稚園のメインとして設置することはなかった。その要因は、何千年も中国を統

治してきた儒教と科挙制度と関係があると考えられる。第 1 章で分析したように、儒教や科挙制度の下、中国の伝統的幼児教育は道徳教育（修身）や知識教育（読み書き）がを中心となっていた。このような社会の中で、幼稚園の内容を中国の伝統的幼児教育を切り離すことは難しかった。また、私立幼稚園も官立幼稚園と同様に、小学校就学前の準備教育機関という性格をもち、学校教育の基礎的な段階に位置付けられていた。

第 3 節　キリスト教宣教師の見た中国の「日本型」幼稚園の特徴とその影響

本節では、清朝末期のキリスト教団体によって刊行された『教務雑誌』を用いて、キリスト教宣教師が中国の「日本型」幼稚園の実態のどの部分を記録し、どのように評価したのかを分析する。前述の通り、中国ではキリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園という 2 種類の幼稚園が存在していた。キリスト教宣教師も幼稚園を経営しているため、宣教師らが注目したところは、自分たちの幼稚園と異なる部分、つまり中国の幼稚園の特色であったと考えられる。この分析によって、中国の幼稚園の特徴を明らかにすることができる。また、この特徴がキリスト教系幼稚園に与えた影響について考察する。

１．宣教師の見た中国の「日本型」幼稚園の特徴

（１）保育形態と内容

最初に、保育内容についての記述に着目する。1906 年の記事「ある中国の幼稚園」では、次のように記されている[70]。

> 先生は黒板の前に「立っていた」。実際、片隅のオルガンの前を除いて、彼女が座れる椅子は見あたらなかった。彼女はこの本を教える時、教科書の通り黒板に板書するだけでなく、立派な図で説明した。
> その後、同じ先生が「中国語」の代わりに、子どもたちにいくつかの動作を伴う歌を指導し、みんな強い興味を持って、熱心に参加している様子を見た。さらに後で、子どもたちが午後のおやつの時間に餃子を食べるのを見た。

このように、教科書を教える、歌をうたうといったような同一の活動を、教師がクラスの子ども全員を対象に行っている。以上から、保育形態は一斉保育であったことがわかる。さらに、教科書を使って教えられる「中国語」は保育の内容の 1 つであることが確認できる。この事実は、保育内容に「読み書き」が含まれていたという前節で分析した結果と一致している。なお、教科書の具体的な内容は次の項目で検討する。

その他、おやつが出されることが記録されている。おやつの内容を見ると、この園では餃子が出されている。当時、教会立幼稚園の場合には、食事も普通は西洋風のものであり、餃子など中国のものは出されない、このように、宣教師はキリスト教幼稚園と異なる面に注目し、記録に残した。

（２）教科書

次に、中国人によって設立された幼稚園の中で使われた教科書について分析する。

前述した「ある中国の幼稚園」の記事では、教師が教科書を用いて授業を行っている様子が記録されている。そして、その教科書は「園児たちの机の上に商務印書館の優れた『最新国文教科書』の第二巻の写本が置かれて、色のついた蓮の花の絵が描かれた頁が開いてある」[71]との描写から、カラーのイラストが付いた『最新国文教科書』が用いられていたことがわかる（図 4－4 を参照）。同書は 1904 年に商務印書館から出版され、初版が 4 千冊売れたとされている。呉倩によると、この教科書の特色は「筆画が平易なものから複雑なものへ、文章が短いものから長めのものへ、意味の易しいものから深いものへと徐々に難易度が変化していく」[72]ことにある。子どもの興味、発達段階に即した教授法がとられていることがわかる。

図 4－4　『最新国文教科書』（第二冊）第三課

出典：蒋維喬・莊俞『最新国文教科書』（第二冊）（商務印書館、1908 年）。

幼稚園で教科書が使われていたことは、当時の中国の幼稚園の特徴の 1 つであった。では、キリスト教宣教師はどのようにこの特徴を評価していたのか。女性宣教師、華中幼稚園協会の会長ネバタは次のように指摘している[73]。

幼稚園の理論が受け入れられるかどうかに関して、関係者が深刻に疑問視しているのはただ一点である。中国で教育活動をしている中国人や一部の外国人は、子どもたちの教育課程から本を完全に排除することを望んでいない。彼らは、遊びの学校と「学習」の学校の両方を望んでいるのである。そのため、場所によっては、矛盾した二重システムが出来上がっている。子どもたちは午前に幼稚園に行き、午後に「学校」に行くのである。しかし他の地域では、真の幼稚園方式だけで成功を収めている。幼稚園が修正され、諸外国よりも小学校に近いものになるか、それとも遊びの学校としての性格を維持するかは、今後数年間の主要な幼稚園リーダーたちの信念と性格の強さにかかっていると思う。

このように、当時の中国の幼稚園には、「遊びの学校と『学習』の学校」の両方の機能が要求されていたことが記述されている。遊びの学校は幼稚園の本来の機能である以上、「学習」の学校が存在することが注目されるポイントになった。ここから、中国の幼稚園には「小学校化」の傾向があるという特徴を、宣教師が十分認識していたことがわかる。その認識に基づき、キリスト教系幼稚園の中にも「学習」を取り入れるかどうかという問題が当時生じていた。そして、この問題に対する宣教師の答えは園児の属する社会階層によって異なる。換言すれば、園児の社会階層と「学習」の取り入れ方には関連があると考えられる。次に、両者の関連について検討する。

（３）園児の社会階層

中国の幼稚園へ通っている園児たちの社会階層に関しては、『教務雑誌』（1904 年）によってうかがうことができる[74]。

一人の子どもが、襟に赤い錨が刺繍されたかなり立派な外国風のセーラー服を着ていた。他の（セーラー服以外の）外国服を着ている子どももいる。もちろん、これらの園児は、外国人が捨てた服を着ているような最も貧しい階級の中国人ではない。幼稚園の施設や事業は初めて欧米から来た人にとって小さいかもしれないが、中国の一般的な学校に慣れている人にとって、この幼稚園を見学することには価値がある。
新しくて綺麗な中国の園舎に行って、遊んでいる子どもや、（高い椅子に座って、足がぶら下がっていて、机が高くて、顎を机の端にかけるのではなく）自分のサイズに合った机と椅子に座っている子どもを見るのはとても新鮮だった。

ここでは、子どもがセーラー服を着ていることから、外国の影響が大きかったことがわかる。この服は「外国人が捨てた服」ではないという記述から、園児の家庭は、外国風のセーラー服を入手できる階層の家庭であったと推察できよう。さらに、幼稚園の施設について、

この中国の幼稚園は新しい園舎をもち、子どもの身体の特性と合わせた机と椅子が設置されていると記述されている。ここから、この幼稚園には、新しい園舎や新しい設備を購入するほどの潤沢な資金があったことが示唆される。以上 2 点から、当園に通っている園児は上層階級の家庭の子どもと判断することができる。実際、当時の中国の幼稚園は基本的には上層階級のものであり、中国初の官立幼稚園の創設に関わった、日本人教習の戸野美知恵も、「幼稚園の児童定員は男女合わせて 84 名であって、何れも上流の子弟で」[75]あったことを記録している。

そして、幼稚園の園児の社会階層と「学習」の取り入れの関係について述べると、園児の社会階層は、中国の幼稚園に対する「学習」の取り入れの理由の 1 つでもあった。第 1 章に加えて、前節でも繰り返し述べたように、上層階級の親たちは、子どもが勉強することによって立身出世することに期待を寄せ、上層階級の男児は幼い頃から教育を施され、官吏登用試験という科挙試験に参加させられた。これは清代家族制度における子ども像である。そのため、幼稚園が導入されても、完全に遊びを受け入れることができず、前節で検討した中国側の幼稚園はほとんど漢字の「読み書き」が教えられた。しかもこれは官立幼稚園だけで見られた現象というわけではなく、実業家の創立した私立幼稚園でも「小学校」的な教育内容が取り入れられていた。つまり、幼稚園における「読み書き」の指導といった「学習」の内容は中国の伝統的家族制度の帰結であり、当時中国上層階級の親の要望によって実施されていたと言える。そして、宣教師はこのような中国上層階級の親のニーズに注目をしていたのである。

２．キリスト教系幼稚園への影響

では、宣教師はこうしたニーズを、どのように受けとめたのであろうか。換言すれば、宣教師が設立・運営していたキリスト系幼稚園では、こうした上層階級の親のニーズに対してどのように対応したのであろうか。この点に関連して、“Teaching character in the kindergarten”という文章の中では、作者グラーク（Grack）所在の園は以下のように記している[76]。

> ほとんどどこでも愛用者＜保護者＝引用者＞は幼稚園の子どもたちに文字を教えることを求めている。＜中略＝引用者＞子どもたちは文字を徹底的に学んだが、その作業が負担になることはなかった。私は幼稚園で文字を教えるべきだとは思っていないが、子どもたちはこれで成長したので、全体としてはこの試みは成功したと言えるだろう。

つまり、子どもに文字を教えてほしいという親のニーズが存在していたことがわかる。そして、グラークは「幼稚園で文字を教えるべきだとは思っていない」が、親のニーズに応えるため、文字教育を導入していた。つまり、中国人に設立された幼稚園と同様に、キリスト教系幼稚園においても、親の要望に応じて、子どもに文字を教えることが検討されたことが

わかる。

そして、このような事実はグラークの幼稚園だけではなく、他のキリスト教系幼稚園にも確認できる。例えば、キリスト教系幼稚園の「蘇州慕家花園幼稚園」でも「社会の心理に対応するため、年長さんに教科書を教え」[77]、漢字の識字の授業を設けていた。また、厦門のウェールズ夫人所属の幼稚園でも「読み書きと算数」[78]が教えられていた。さらに、同様のことは、『教務雑誌』（1907 年）に掲載されている「私たちの本の見出し（新書紹介）」[79]という記事の中でも窺える。同記事の中では、『幼稚園入門（イラスト付き）四巻』と『初等算術（イラスト付き）一巻』という二冊の教材が紹介されている。両者とも王亨統[80]によって執筆され、長老派宣教会によって販売されたものである。定価はそれぞれ 15 セントと 10 セントである。同記事では、以下のように王の教材が紹介されている[81]。

> 王亨統の本は現在三十二巻[82]に達し、最近、彼は子どもの要求に注意を向けている。長老派宣教会によって発行されたばかりのこれらの最新の二冊の本は、多くの幼い心に「思考への愛」をもたらし、そして、彼は初等算術のシリーズを始めたのはこうしたことを考慮したのだ。序文で彼は、算数の勉強を始めた時の彼自身の幼児期の苦労を語り、その記憶があってこそこれらのたくさんの本ができた。当本は今日の小さな園児のために負担を軽減することができるかもしれない。＜中略＝筆者＞この教材は当時としても影響力が大きく、中国で使用されているだけでなく、韓国でも幅広く使われていた。

このように、幼稚園では王亨統の執筆した『幼稚園入門（イラスト付き）四巻』と『初等算術（イラスト付き）一巻』を取り入れ、教科書として使っていた。また、「この教材はとても影響力が大きい」ことから、「算数」が多くの幼稚園で教えられていることが推測できよう。

では、「算数」や「識字」はどのように教えられたのであろうか。その教え方について注目する。「私たちの本の見出し（新書紹介）」では、王自身の子ども時代の経験をもとに執筆された、上記の図書教材は子どもが算数を学ぶ際、負担を軽減させることが期待できると宣伝されている。換言すれば、同教材は以前の「苦労のある算数の勉強」と異なる教育方法をとっている。その教育方法について次のように述べられている[83]。

> 彼は、彼の授業方法が子どもたちにとって非常に楽しいものになることを願っている。一旦本を開くと、「子どもたちは本の内容を学ぶことをとても切望しているため、教師の助けなしで勉強を続けるだろう」。彼は、「幼稚園の理想に反することは分かっているが、個人的には、幼稚園で毎日これらの本を少しずつ使用することは、小さな園児にとって大きな助けになり、親にとって、幼稚園制度の『遊戯（play method）』と呼ばれるものをより早く理解するようになる。」という意見を用いて序文を締め括っている。彼の一連の幼稚園の入門書は、親の「遊戯」への懸念を新しく、またより良い学習方法と

調和させるための努力である。

この教育方法は、単純に算数を教えるのではなく、遊びを通して楽しく学ぶという学習方法である。王が幼稚園で算数（勉強）を教えるのは「幼稚園の理想に反すること」と自覚したように、それ以前のキリスト教系幼稚園では遊びを中心とした教育が原則のはずであった。しかし、親の要望に応じ、幼稚園では「識字」「算数」を教えることは主流になった。このように王は、当時の中国の状況に適応し、遊びを通して算数を教える方法を考案したのである。

そのため、教科書の中では、「親にとって、幼稚園制度の『遊戯（play method）』と呼ばれるものをより早く理解するようになる」という願望を含んで編纂されていた。幼稚園の設立以前、中国の私塾は文章の暗記といった教え込みが主な教育方法であったために、「遊戯」という幼稚園の教育方法は、親にとって新奇的なものであったと考えることができる。この教科書は遊戯と対立するものではなく、むしろ親の「遊戯」への懸念を払拭するためのものであった。

そして、グラークも新しい教え方を模索していた[84]。

> 文字を教える際に私が主張しているのは、非常にゆっくりと、徹底的に、1 週間に 2 文字程度を与えることである。文字は黒板だけでなく、数センチ四方の厚紙に中国の筆で書く。名詞はほとんど、子どもたちが聞いたり話したりしている物語から選んでいる。1 週間の間に、前の日曜日に教えられた物語を復習する。物語は「日曜学校学習レベル別のコース」の「初級課程」からのもので、文字は主にこの物語から選ぶが、たまに他の幼稚園の物語から選ぶこともある。
> 例えば、モーゼが救われる話では、年少の子どもたちは「舟」と「子」という漢字を覚え、前学期に習った年長の子どもたちはそれを復習して、新たに「王」と「家」という漢字を覚えた。子どもたちは皆、粘土で箱舟を作り、モーゼの家と王様の家の絵を描いた。前の日曜日に、ブロックでこれらの物を作り、川の輪郭を描いていた。

このように、子どもの身近な文字は物語を通して教えられていた。その数は一週間に 2 文字程度であったため、子どもの発達の程度が考慮されていた。さらに、「舟」を勉強するときには、まずお話の導入からはいり、さらにその文字を具現化して、粘土で箱舟を作る作業が行われた。これによって、単に文字だけを覚えることよりも、分かりやすく、印象にも残りやすいと思われる。

なお、その他の文字を教える方法について、グラークは以下のように説明している。

> 方法に関しては、カードを掲げて文字を繰り返し暗誦させたり、私たちが文字を読んで子どもがボード上で指したりする。幼稚園での経験が長い子は、大きな面に書かれた文

字をなぞり、簡単な文字をボードに書くようにしている。私たちは、教える文字ごとに、その物を表す絵を用意するようにしている。去年、耳の不自由な女の子を教えるときに特に役立ったが、これはどのような場合にも役立つと信じている。

このように、カードを用意して、子どもたちは活動的に参加し、文字を身体的に経験することで学ぶことができた。そして、文字ごとにその物を表す絵が用意され、視覚的な手法を通して、文字の意味も同時に直観的に勉強することができた。子どもとのやり取りの中で、教育が展開されたことがわかる。これは前述した、教師が黒板の前に立ち、教科書通り文字を教えるという教え方と異なっていた。

このように、親の考えに合わせ、「識字」「算数」の保育項目が、今まで遊びを中心としたキリスト教系幼稚園においても行われていたのである。しかし、キリスト教系幼稚園では、教育方法を工夫し、遊びを通した算数学習や物語を通した文字学習が導入されていた。

次章では、これらの幼稚園教育を担当する教員に着目して、幼稚園教員の養成機関の創設と普及について考察する。

注

1 一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」『國立教育研究所研究集録』25、1992 年、辻本雅史 監修、湯川嘉津美・荒川智 編著『論集現代日本の教育史 第 3 巻 幼児教育・障害児教育』所収、日本図書センター、2013 年、97 頁。

2 "Constitution of the Central China Kindergarten Association" *Educational Review*, Vol. 4, Oct, 1911, p.21.

3 Ching Leung, "Program Making in a Chinese Kindergarten," *Educational Review*, Vol.4, No.10, 1911, p.9.

4 *Ibid.*

5 *Ibid.,* p.10.

6 ピービーは、コロンビア大学を卒業し、1924 年に日本のランバス女学院教師になった。ランバス女学院で保育者養成に携わった。

7 ピービー「幼稚園の見学」『ランバス女学院報』第 1 号、1932 年、1 頁。

8 同上。

9 Ching Leung, *op.cit.,* p.10.

10 *Ibid.*

11 白川蓉子『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究―「遊び」と「作業」をとおしての学び―』風間書房、2014 年、53 頁。

12 福建省地方志編纂委員会『福建省志・教育志』方志出版社、1998 年、102 頁。

13 莆田市地方志編纂委員会『莆田市志(巻 33)』方志出版社、2001 年、2018-2019 頁。

14 Hannah C. Woodhull, "A Partial Report of the Kindergarten Work in Fuhkien Province," *Educational Review*, Vol.2, Aug, 1909, p.40.

15 五十嵐裕子「折り紙の歴史と保育教材としての折り紙に関する一考察」『浦和論叢』46、2012 年、50 頁。

[16] 荘司 泰弘「フリードリッヒ・フレーベルの教育遊具の研究（その３）―「作業具」をめぐって ―」『人間教育の探究』25 巻、2013 年、1 頁。
[17] 福建省地方志編纂委員会、前掲書、102 頁。
[18] 荘司泰弘「フレーベルのキンダーガルテンと自然保育―自然をガイドラインにした保育―」『自然保育学研究 』1 (1)、自然保育学会、2018 年、2 頁。
[19] J. Ronge and B. Ronge, *A Practical Guide to the English Kindergarten*, Thoemmes Press, 1994, p.19. 初版は 1855 年刊行。
[20] 白川蓉子、前掲、278 頁。
[21] 李来栄「我的童年」『科学家的童年（二)』新蕾出版社、1983 年、94 頁。
[22] 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001 年、191 頁。
[23] 福建省地方志編纂委員会、前掲書、102 頁。
[24] 同上。
[25] 同上。
[26] 李来栄、前掲、95 頁。
[27] Hannah C. Woodhull, *op.cit*., p.40.
[28] アメリカン・ボード・ミッションは、アメリカ会衆派海外宣教委員会（ACBFM）として知られ、1810 年、アメリカ・マサチューセッツ州のウィリアムズ大学の卒業生たちによって提唱され、1812 年に正式に設立された。中国では「美部会」と呼ばれ、アメリカ改革派キリスト教の最初の海外伝道所である。
[29] Bertha H. Allen, “Union Work in Foochow Kindergarten and Training Class,” *Life and Llight for Woman,* vol.149*,* Woman's Board of Missions, 1919, p.85.
[30] 荘司泰弘、「フレーベルのキンダーガルテンと自然保育―自然をガイドラインにした保育―」、前掲、11 頁。
[31] フレーベル著、岩崎次男訳『人間の教育　１』明治図書、1960 年、101-102 頁。
[32] 荘司泰弘、「フレーベルのキンダーガルテンと自然保育―自然をガイドラインにした保育―」、前掲、5 頁。
[33] ヤング・アレン（林楽知）『五大洲女塾通考』第十集下巻、美華書局、1903 年、35 頁。
[34] 中国基督教教育調査会『中華基督教教育事業』1922 年、378 頁。
[35] Nevada Martin and Margarita Park, “Missionary News Kindergarten Association,” *The Chinese Recorder*, Vol.42, 1911, p.722.
[36] “Kindergarten Work,” *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Aug, 1911, p.489.
[37] 福建省地方志編纂委員会、前掲書、87 頁。
[38] 漳州市地方志編纂委員会『漳州市志』中国社会科学出版社、1999 年、2086 頁。
[39] 福建省地方志編纂委員会、前掲書、88 頁。
[40] 厦门市地方志編纂委員会『厦门市志（第四册）』方志出版社、2004 年、3058 頁。
[41] 英国国教会、アメリカ聖公会、カナダ聖公会が中国で設立した聖公会の連合体。
[42] 多賀秋五郎『中国教育史』1955 年、佐藤尚子等編『中国近現代教育文献資料集　第 10 巻』日本図書センター、2006 年、148 頁。
[43] 端方はまた湖北幼稚園の設立者でもある。
[44] 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、106-110 頁。
[45] 同上、107 頁。
[46] 同上。
[47] 湯川嘉津美、前掲書、376 頁。
[48] 橋川喜美代『保育形態論の変遷』春風社、2003 年、141 頁。
[49] 湯川嘉津美、前掲書、376 頁。
[50] 愛珠幼稚園『沿革誌』1903 年、52 頁。
[51] 湯川嘉津美、前掲書、376 頁。
[52] 同上、109 頁。

[53] 同上。
[54] 李桂林、戚名誘等編『中国近代教育史資料汇編（普通教育）』上海教育出版社、2007年版、第27頁。
[55] 厳修『使黔日記』1897年。
[56] 西洋数学や理科を指す。
[57] 朱鵬「厳修の新学受容過程と日本―其の二・天津の紳商と近代初等学堂をめぐって―」『天理大学学報』51(1)、1999年、177頁。
[58] 厳仁清「回憶祖父厳修在天津創办的幼儿園」中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989年、111頁。
[59] 同上、112頁。
[60] 同上。
[61] 当時幼稚園で使われている「恩物机」のことを指す。
[62] 厳仁清、前掲、113頁。
[63] 同上。
[64] 同上。
[65] 同上。
[66] 「扶海垞家塾章程」『张謇全集』江蘇古籍出版社、第4巻、35頁。
[67] 同上。
[68] 歌詞は白い金魚と赤い金魚が池のなかに、自由に泳いでいる姿を書いている。
[69] 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史　第四巻』竜吟社、1938年、151頁。
[70] Arnold Foster and A. S. Mann, "Educational Department," *The Chinese Recorder*, Vol.37, Apr, 1906, p.209.
[71] *Ibid*., p.574.
[72] 呉倩「20世紀初頭における商務印書館の教科書と日本」『アジア文化研究 別冊』(20)国際基督教大学アジア文化研究所編、2014年、64頁。
[73] Nevada Martin, "The Present Outlook for the Kindergarten in China," *Educational Review*, Vol.6, No.1, 1913, p.15.
[74] Crofoot Rev J W, *op.cit*., p.574.
[75] 戸野美知恵「清国経験談」国民教育学会『日本之小学教師』7巻80号、1905年8月、49頁。
[76] Grack "Teaching Character in the Kindergarten," *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.7.
[77] 楊芳「参観蘇州慕家花園幼稚園記」『婦女雑誌』第3巻第3号、1917年、12頁。
[78] Hannah C. Woodhull, *op.cit*., p.42.
[79] M.M.F, " Our Book Table," *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Aug, 1907, p.446.
[80] 王亨統は浙江省余姚出身であり、早くに西洋の思想の影響を受け、中国の教科書の改革に携わった一人である。王はドイツの宣教師のアシスタントとして、ドイツとアメリカの宣教師と密接な関係を持っていた。
[81] M.M.F*, op.cit*., p.446.
[82] 以下は王が出版した教科書の一部である：絵図蒙学捷径初編上（五版）、絵図蒙学捷径初編下（五版）絵図蒙学捷径二編上（四版）、絵図蒙学捷径二編下（三版）絵図蒙学課本首集（三版）、絵図蒙学課本二集（三版）絵図蒙学課本三集（再版）、絵図蒙学課本四集（再版）最新女子国文課本第一册（初版）、絵図蒙学本国地理志（初版）新輯地理問答上集（十三版）、新輯地理問答下集（十三版）新輯天文問答全集（再版）、中国近世地理志上集（再版）中国近世地理志下集（再版）、最新小学地理課本（初版）。
[83] M.M.F, *op.cit*., p.446.
[84] Grack, "Teaching character in the kindergarten," *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.7.

第 5 章　　幼稚園教員養成機関の創設と普及

既述のとおり、中国の近代幼児教育は「日本モデルの導入」と「ミッションスクールを通しての浸透」という 2 つのルート[1]から始まったとされているが、その保育者の養成も上記の 2 つのルートにより開始されている。つまり、保育者養成については、前者のルートとしての「日本モデル」の保育者養成機関と、後者のキリスト教保育者養成機関の 2 種類が存在していた。本章では、2 種類の保育者養成機関の創設と普及について考察する。

第 1 節　キリスト教系保育者養成機関

中国での近代保育者養成教育の発展においては、民国中期まではミッションスクールを通しての浸透ルートが主流であり、「主にキリスト教会によって作られた幼稚師範学校」とキリスト教系「師範学校に付設された幼稚師範科」[2]が保育者養成を担っていた。そのため、キリスト教保育者養成機関の設立経緯と実態を明らかにすることには大きな意義がある。また、キリスト教保育者養成機関での教育内容を明らかにすることは、フレーベルの教育思想の中国への移入の一端を明らかにすることにもなると考える。

本節では、20 世紀初頭の各キリスト教保育者養成機関ではどのような養成が行われていたのかを明らかにする。特にそこでの教育内容の特徴を検討し、女性宣教師らの専門的知見（第 2 章で検討した女性宣教師の学習歴）との関連を仮説的に示す。なお、考察対象の時期としては 1920 年代の反キリスト教運動[3]までとする。

1．キリスト教保育者養成機関の開設

（1）概況

前述したように、キリスト教幼稚園の増加につれ、中国人の保育者が求められるようになり、保育者養成機関が中国で次々と設置されるようになった。

本項ではまず、中国における初期キリスト教保育者養成機関の開設状況を確認する。当時、中国には 12 か所の養成機関が存在し、表 5－1 のようにまとめられる。

表 5－1　中国における初期キリスト教保育者養成機関一覧

保育者養成機関	創立年	設置者と設置団体	所在地
懐仁女学校付設幼稚園保姆養成所（1912 年に懐徳幼稚師範学校に改名）	1870 年頃	イギリス長老派	福建省厦門鼓浪嶼烏棣角
中西女塾（McTyeire Girls' School）幼稚科	1891 年	米国監理会林楽知（Young J.Allen）	上海憶定盤路

保姆養成学校（Maternity training school）	1901 年	未詳	浙江省杭州
女子師範学校幼稚科（girl's high and normal school）	1905 年	倫敦教会厦門大關教育部	福建省厦門
華北協和女子大学幼稚師範科	1905 年	北京公理会・ロンドン会・長老会	北京
明道婦学幼稚園師範科	1909 年頃	米国バプチスト教会系	広東省汕頭
福湘女子中学校幼稚園師範科	1914 年	米国長老会・遵道会	湖南省長沙北門外長春巷
英華女学校幼稚師範科	1910 年頃	米国監理会会員金振声	江蘇省蘇州
蘇州幼稚園養成学校（Soochow kindergarten　training school）	1910 年頃	米国南メソジスト Southern Methodist Board	江蘇省蘇州
福州協和幼稚師範学校	1914 年	米国公理会、米国衛理公会、英国聖公会	福建省福州
杭州弘道女学幼稚師範科	1916 年	米国南長老会、北長老会、北浸礼会	浙江省杭州
景海女子師範学校幼稚師範科	1917 年	米国監理公会	江蘇省蘇州

出典：南満洲鉄道株式会社総務部交渉局『支那ニ於ケル外国人経営ノ教育施設』（交渉資料；第 17 編）、1916 年；外務省『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』1929 年；Nevada Martin, "Soochow Kindergarten Training School," *Woman's Work in the Far East,*1912, p.157；福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編　第五巻』福建人民出版社、2003 年、394 頁；中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、356-358 頁。

表 5－1 に示した通り、当時のキリスト教保育者養成機関として 12 校が確認でき、楊玉珍が指摘した 4 校[4]よりもはるかに多くの機関が存立していたことがわかる。この内、最も早く設けられたキリスト教保育者養成機関は、1870 年頃に創立された懐仁女学校付設幼稚園保姆養成所である。これは中国全土で最初の保育者養成機関でもあった。それに対して、同時代の中国官立の最初の保育者養成機関は、1904 年の「奏定学堂章程」[5]の頒布と同時に創立されたが、当時の社会事情[6]によりすぐ閉校になってしまった。この点を踏まえると、キリスト教団体はいち早く保育者養成に着手していたといえる。

次に保育者養成機関を形態面からみると、12 校のうち 9 校が女学校に幼稚科や幼稚園師範科を併設しており、さらに独立した保育者養成学校も 3 校あった。また、中西女塾幼稚

科、明道婦学幼稚園師範科、福湘女子中学校幼稚園師範科、英華女学校幼稚師範科、杭州弘道女学幼稚師範科のそれぞれの母体は、いずれも中等教育段階の女子学校であることから、併設の師範科も中等教育機関であったと推察される。

これら養成機関の設置者は、イギリスあるいはアメリカのキリスト教団体か、教会を代表する個人である。表 5－1 をみると、設置者はイギリスの教会が 3 校、アメリカの教会が 7 校、イギリスとアメリカ教会の合同設置が 1 校であり、アメリカの方が多いことがわかる。この点について、多賀秋五郎は「二十世紀の中国における教会学校の発達」は、「従来のフランスやイギリスに対して、アメリカの進出が積極化したことである」[7]と述べている。また、これら 7 校の教派（アメリカの長老会、メソジスト、バプチストなど）は全てプロテスタントに属するものであった。実際、19 世紀以前の中国の教会学校は、そのほとんどがカトリック教会によって作られたが、19 世紀後半にはプロテスタント側の活動が活発となっていった[8]。そして、教会学校の大多数はプロテスタントではあったが、各派の宗教団体によって、別々に設置されていた。

キリスト教保育者養成機関の所在地を記すと、上海に 1 校、上海に隣接する浙江省と江蘇省にそれぞれ 2 校と 3 校、そして福建省の厦門には 2 校、福州には 1 校が確認できる。このように、養成機関は全て、中国の経済が発展している沿海港湾都市、特に江蘇省と福建省に集中する傾向があった[9]。

（２）教育目的

これらのキリスト教系保育者養成機関の設立目的はどのようなものであったのだろうか。

明道婦学の教育目的は、「米国『バブチスト』教会系ニ属シ伝道ニ従事スヘキ婦人又ハ相当ノ年齢ニ達シタル婦人ニ対シテ普通教育並ニ高等普通教育ヲ速成的ニ施スヲ以テ目的トシ」[10]と記載されている。このように、明道婦学では教員養成以外に「伝道」という目的が確認できる。実際、「伝道」は当時の教会学校共通の目的の 1 つである。これに関して、アメリカ人の女性「麦女士」は次のように記している。「幼稚園から大学までの教育期間は約 17 年間であった。どのような教育段階の学校でも、宗教を中心とした信者、教育者を養成することを目的とする。＜中略＝引用者＞中国国内に、幼稚師範学校を設け、女子を入学させ、幼稚園教育の人材を育成すべきである」[11]と。このように、キリスト教宣教団体による教育事業は、伝道という目的に基づいて行われていたのであった。

また、もう 1 つ計画中のキリスト教系保育者養成機関の設立目的は、以下のようであった。1916 年のバプテストの教育会議（Baptist Conference on Education）で、華東地区米国バプテスト対外宣教協会（the East China District of the American Baptist Foreign Missionary Society）と南バプテスト連盟華中伝道部（the Central China Mission of the Southern Baptist Convention、以下両ミッションと記す）は共同の保育者養成機関構想について、両ミッションの「学校に、より良い訓練を受けた教師を赴任させるために努力すべきだという強い思いがあった」ため、「両ミッションは、保育者を 1 つの教育機関で

養成する計画を慎重に検討すべきだ」[12]と意見を表明している。つまり、「良い訓練を受けた」専門的幼稚園教員を養成することも、キリスト教系保育者養成機関の設立目的の1つとされていたのである。したがって、教会を母体とする伝道という目的に加えて、近代的な教員を育てるために専門性のある教育を行うことが、当時のキリスト教系保育者養成機関の目的であったと言えよう。

２．キリスト教保育者養成機関の実態

（１）入学資格と修業年限

入学資格について明確に規定していたのは、福湘女子中学校のみであった。当校では「教育科及幼稚園師範科ニ入学セントスルモノハ初級中学程度以上ノ学識アルヲ要ス」[13]と定められている。このことから、入学資格は初級中学以上だということがわかる。実際、「高級中学ハ分科制ヲ採用シ普通科、教育科、幼稚園師範科ノ三科ニ分ツ」という規定からわかるように、福湘女子中学校は初級中学と高級中学に分けられ、そして幼稚園師範科は高級中学に所属していた。

当時、中国における教会学校は初等教育、中等教育、高等教育に分けることができる[14]。その内、初等教育には初等小学校・高等小学校が、中等教育には中等学校（医学校・師範学校・実業学校・盲学校）・神学校聖書学校・寄宿学校などが含まれていた。さらに、高等教育には神学校・単科大学・総合大学があった[15]。以上から、福湘女子中学校幼稚園師範科は中等教育に位置付けられる。

また同様に、表5－1のキリスト教保育者養成機関の内、中西女塾幼稚科、明道婦学幼稚園師範科、英華女学校幼稚師範科のそれぞれの母体は、いずれも中等教育段階の女子学校のため、これらの師範科も中等教育と位置付けることができる。この他、華北協和女子大学には幼稚師範科も設けられていた。このように、当時のキリスト教保育者養成機関9校の内、5校は中等教育レベル以上に所属することがわかる。各種学校的なものを除いて少なくとも中等教育レベルであった。

さらに、この連合幼稚園訓練学校の修業年限は 2 年と定められた。他のキリスト教保育者養成機関の修業年限をみると、蘇州幼稚園養成学校（Soochow kindergarten training school）[16]の修業年限も 2 年であり、そして、上海のある幼稚園に関する以下の記事でも、保育者の養成期間について記録されていた。

> 彼女（幼稚園の教員）はある程度の音楽を習得しなければならず、絵を描く技能を持つ必要がある。彼女は尊厳と教養が求められ、同時に童心が求められていた。2年間の忠実な研究と養成を経て、彼女は本当の幼稚園教員（kindergartener）、つまり子どもという植物の庭師（gardener）になることを希望するだろう[17]。

幼稚園教員には音楽や絵を描くなどの技能が求められ、それを習得するには 2 年間の研

究と養成が必要である。同様に、厦門のウェールズからの報告では「ここの幼稚園は成長している。昨年（1910 年）は幼稚園が 90 人、初等学校が 100 人で、13 人の生徒が（幼稚園教員）養成を受けている。そのうち 10 人は厦門周辺の町の幼稚園で教えている。園児は 20 人から 90 人である。彼らは相当な給料（月に 1.5 ドル）を貰っている。彼らは 2 年間の養成を経て、試験を受け、合格してそして費用を全額自分で払えば教師になれるが、そうでない場合は、少ない給料で一年間の仕事を課する」[18]と記述されていた。ここから、厦門の幼稚園教員も 2 年間の教育を受けていたことがわかる。

ただし、福湘女子中学校幼稚園師範科と女子師範学校（girl's high and normal school）幼稚科は 3 年の修業年限であった。

以上の各学校の修業年限をまとめると、当時のキリスト教保育者養成機関の平均年限は 2 年間であると言えよう。このような 2 年間の修業年限の確立は、当時のアメリカ保育者養成期間と関係があると考えられる。第 2 章で述べたように、1880 年から 1910 年にかけて、アメリカの保育者養成は 2 年間となっていった。女性宣教師は訪中前、アメリカの保育者養成学校を卒業したため、アメリカの保育者養成学校のカリキュラムだけではなく、その養成年限といった基準も中国に導入したと推測できる。

（2）学費などの費用

最後に、キリスト教保育者養成機関の学費などの費用について検討する。福湘女子中学校、明道婦学の費用は次のようにまとめられる。

表 5－2　キリスト教保育者養成機関の費用一覧

項　目	福湘女子中学校（1914 年）	明道婦学（1909 年）
授業料	年 80 元	年額　20 元
寄宿合費		年額 4 元
食費年額		40 元
雑費年額		14 元
「ピアノ」習学費	毎学期　10 元	6 元
「オルガン」習学費	同　6 元	
家政習学費	年　1 元	
理化実験費	同　1 元	
体育費	同　1 元	
医薬費	同　1 元	
手工費	同　3 元	
制服費	同　7 元	
書籍費	高中　13 元	

保証金	学期末ニ各生ハ保証金 5 元ヲ納入スヘシ右保証金ハ次学期ノ学費ニ繰入ルルモノトス	

出典：外務省『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』1925 年、148、214 頁。

表 5－2 に示したように、福湘女子中学校と明道婦学の学費、食費、部屋代、雑費などはそれぞれ 80 元と 78 元であった。両校の費用はおおよそ同じ金額となっている。当時中国で勤める日本人の幼稚園教員の年収はおおむね 50～70 元程度であり[19]、外国人の収入が中国人より高いという基本認識から考えれば、これらの女子学校の学費はかなりの高額であったと言ってよい。したがって、この時期の一部のキリスト教会学校で教育を受けている生徒は上層階級の子弟であったと言えよう。実際、多賀秋五郎によると、「19 世紀末、1890 年に上海に設立された中西女塾や 1897 年に設置された晏摩氏女学校などは、上級富裕階級の子弟を対象としての教育機関であった」[20]と記されている。

また、部屋代や寄宿費が徴収されていることが注目される。実際、当時ほとんどの女子学校は寄宿という形をとっている。その原因はバートンによると、「中国の習慣では、若い女性が路上を行き来するのは倫理に反するため、小学校以上の女子のためのキリスト教学校は全て寄宿学校になっている」[21]となっている。近代的な教育機関にもかかわらず、中国の習俗が考慮されていることがわかる。

(3) 卒業生

最後に、これらの学校では、生徒たちにどのような卒業試験や卒業発表会が課されていたのだろうか、また、彼らは卒業後、中国の幼児教育にどのような影響を与えたのだろうか、これらを検討する。

卒業試験について、厦門のウェールズの報告では、1910 年に次の試験が行われたことが記述されている[22]。それは 2 名の試験監督係の前で行われた。

1. 主題授業、ゲー、作業具（occupation）を順番に 1 時間。
2. 黒板に物を描いたり、物語を説明したりする。
3. 幼稚園と小学校の指導法についての論文。
4. 地理の授業。
5. トニックソルファ法（Tonic Solfa）による歌唱授業。
6. 音楽の授業、歌、讃美歌、行進曲をオルガンで演奏する。
7. 聖書の授業、書くこと。
8. 漢字、十冊の本、読み、書き、作文。

試験の内容から、ゲーム、作業具などを取り入れた保育方法、幼稚園と小学校の指導法、地理、唱歌、オルガン、聖書、読み書きなどが在学中に教えられたことが推測される。いずれも当時の幼稚園教員に求められた資質である。このように、厦門では卒業する際に試験を設けることによって、卒業生に一定の教育の質を確保していたのである。

卒業後、10 人は厦門周辺の町の幼稚園で教え、給料は月に 1.5 ドルであった。ウェールズは「彼らは相当な給料をもらっている。彼らは 2 年間の研修を経て、試験を受け、合格してそして研修費用を全額自分で払えば教師になれる」が、そうでない場合は卒業後 1 年間、少ない給料で働くことが求められていたと報告している。このように、卒業生は専門知識をもち、幼稚園に就職していたことがわかる。

３．キリスト教保育者養成機関の教育内容とその特徴

最後に、史料の比較的豊富な江蘇省の蘇州幼稚園養成学校、福建省の福州協和幼稚師範学校の 2 校を中心に、キリスト教保育者養成機関の教育内容とその特徴を明らかにする。

（1）蘇州幼稚園養成学校

蘇州幼稚園養成学校は南メソジスト監督教会のもと、幼稚園、小学校、高校、幼稚園養成学校、工業学校から成る蘇州の広範な学校組織の一部として創設された[23]。同校は独立した保育者養成学校であり、女学校に付設されたものではなかった。その養成教育内容は以下のようになっている[24]。

> 蘇州大学のジー教授（Prof. Gee）は生物学の定期講義、パーク博士（Dr. Park）は医学、 景海女子師範学校のスモールウッド（Miss Smallwood）は自然学習（毎週）、長老派委員会のクロフォード（Mrs. Crawford）は幼稚園原理（毎週）、リタ・パーク（Miss Reta Park）は週 2 時間の物語、ビードル（Miss Beadle）は体育、ヒンドリー（Misses Hindry）とリ（Li）は音楽、オティス（Miss Otis）はお絵かき、マーティンとイーンとバン（Misses Martin and Iung and Mrs. Van）は方法、練習、日常訓練、アトキンソン（Miss Atkinson）は聖書である。

以上のように、養成教育内容は幼稚園原理、音楽のような幼児教育に関するものだけではなく、生物や医学まで教えられ、幅広い教養教育が行われている。これは、自然科学を広く修めておくことが、保育者として不可欠であることを、同校が認識していたことを示していると言えよう。なお、担当教員にはそれぞれの所属が記されているため、この学校の専任教員ではないと推察できる。

そして、これらの科目を学習した女学生、ジー・ツウイーン（Zi Tsu-iung）、ザン・ツンメ（Zung Tsung-me）、キャン・ジツン（Kiang Ji-tsung）らは、1912 年の卒業式（卒業発

表会）で次のような演目を披露している。

表５－３　蘇州幼稚園養成学校卒業式のプログラム

第 1 部	発表者（卒業生）	第 2 部	発表者（卒業生）
1.ピアノ独奏： a.スカーフダンス b.アルバムリーフ	ジー・ツウイーン	1.子ども向けの遊びと活動 a. 「時計を巻く」「ドイツの拍手ダンス」 b. ドイツ民俗舞踊「行きましょう（Here We Go）」、音楽劇　「鶏舎」 c.「燕麦、豌豆、大豆、大麦」、「薔薇の輪」	ザン・ツンメ ジー・ツウイーン キャン・ジツン
2. パーカー博士（Dr. A.P.Parker）による演説：現代の教育傾向			
3. 歌：「夏へようこそ」	クラス全員		
4. ユウ・パウ・サン（Mr. Eu PAU-SAN）による演説：幼稚園について			
5. 10 分間のトーク： a. 『母の歌と愛撫の歌』について b. 教育の歴史 c. 幼稚園の運動	キャン・ジツン ジー・ツウイーンザン・ツンメ	2.「 森のダンス」	クラス全員
6. アトキンソン（Miss V. M. Atkinson）による賞状授与			

出典：Nevada Martin, “Soochow Kindergarten Training School,” *Woman’s Work in the Far East*, 1912, p.155.

卒業式のプログラムから、生徒たちは学校でピアノ、歌、遊びなどについて理解を深め、技能を習得していたことがわかる。そして、「ドイツの拍手ダンス」やドイツの伝統舞踊「行きましょう」などが披露されていたことから、この学校はアメリカの南メソジスト派ではあったが、ドイツのフレーベル幼稚園のカリキュラムからの影響を受けていることが明らかになる。

特に注目すべきなのは、それぞれの 10 分間のトークのテーマがすべて幼児教育の原理であり、その中で、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』が主題として取り上げられていることである。この点について、以下で卒業生キャンのトークの原稿“Mother Play”を資料として

用いつつ考察する。

キャンは冒頭で、フレーベルの「『母の歌と愛撫の歌』は幼稚園で最も重要な本である。この本は、母親が子どもと一緒に歌やゲームで遊ぶことがテーマになっている」[25]と述べ、主に母親の教育、遊びの思想の 2 点からトークを展開している。

まず母親の教育について、キャンは「フレーベルが特に母親と子どものためにこの本を著した」と述べ、「彼〔＝フレーベル〕は、子どもが何を必要とし、母親がどのようにその必要を満たそうとするのかを見出そうとした」と語っている。そして、キャンは、当時の母親たちが、母親になるための訓練を欠いていることに警鐘を鳴らす。その上で、その訓練の一環として「母親は子どもについて知るべき」と主張し、「中国の全ての女性がこの本を読み、母親たちは遊びを通して子どもを成長させる方法をよりよく知ることができるようになること」を求めている[26]。

次に、遊びの思想について、キャンは「フレーベルは、遊びが子どもの最も特徴的な自発的活動であることを発見した」と述べ、「フレーベルは遊びの教育的価値を理解し、幼稚園の実際の手順で彼のアイデアを実現した」と主張する。このフレーベルの主張を受けて、キャンは「遊びから教師は良い習慣、すなわち、感情や思想を教えることができる」ために、「遊びが幼児期におけるプロセスの基礎となる」と指摘し、幼稚園を、「遊びを通して子どもを教育する」ことを目的とする「遊びの学校」と規定している。そしてキャンは、その遊びを通した教育の方法として恩物を挙げ、6 色の球体で遊ぶ中で色と球形を学ぶことができ、また、積み木で好きなものを作って遊ぶ中で内的な考えを表現することができる、と指摘する[27]。

このように、キャンは、保育者養成機関でフレーベルの母親へ教育する重要性、遊びの思想、特に恩物を使った子どもの自発的遊びについて学んだことがわかる。以上の 2 点は、フレーベルの理論的支柱であり、この意味でキャンはフレーベルの教育思想について体系的に学習し、教養を深めていたと言える。したがって、この養成学校では恩物の遊び方を代表する保育技術をもつ保育者だけではなく、フレーベルの理論を理解した保育者が養成されていたことがわかる。

卒業後、キャンは、蘇州東部の大規模な幼稚園でリタ・パーク（Rita Park〔原文ママ〕）のアシスタントを務めることになった。そして、ザン・ツンメは松江にあるスーザン・ウイルソンという名称の学校の幼稚園部門を担当することになった。また、ジー・ツウイーンは、パーカー（A.P.Parker）の指導の下、上海の虹口で幼稚園を開園した[28]。このように彼女たち（図 5－1）は、卒業後に中国の幼児教育に携わったのである。

図 5－1　蘇州幼稚園養成学校の卒業生の写真

（左からキャン・ジツン、ジー・ツウイーン、ザン・ツンメ）

出典：*Missionary Voice*, Vol.2, Bord of Missions ME Church South, 1912, p.744.

（２）福州協和幼稚師範学校

1916 年、米英に属する三大教会[29]が共同で、福州に協和女子幼稚師範学校を設立し、保育者の需要増に対応することになった。同幼稚師範学校に入学した生徒は、当地の有名な女学校である文山女学校や毓英女学校など、いわゆる「お嬢様学校」に通うことのできない、貧しいキリスト教徒の家庭の少女たちであった[30]。

彼女たちの学校での 1 日の流れが、校長アレン（Bertha H. Allen）によって記録されている[31]。

> 月曜日の朝、7 時半に集合して朝食をとる。8 時半には学校に行って礼拝をする。今週は私の担当なので、私は正面の机に座り、6 人の女子生徒と寮長のレイシー先生（Miss Lacy）、幼稚園の教員、3 人の使用人は私が座るまで立っている。彼女たちは順番に讃美歌を選び、私たちの大切なピアノで演奏する。また、祈りの指導も交代で行う。これは、彼女たちの訓練の一環であるべきだと考えているからである。
>
> 次に広い廊下で 10 分ほど体育の授業がある。このころには中国語の先生が到着している。私は先生と一緒に 11 時 15 分からの手工の授業を準備しに行く。手工のクラスはとても楽しい。彼女たちはとても反応がよく、来年はこのクラスで竹などの当地の素材を使った独自の実験ができるようになればいいと思う。
>
> 1 時半になると、私は娘たちをピアノの周りに集めて歌の授業をする。中国の女の子にとって、これはかなり難しい科目だが、彼女たちは少しずつ上達している。私の 3 時半

からの自然学習の授業の準備をしている間に、彼女たちをレイシー先生の授業に回す。私が教えようとしている他の科目は次の通りである。お絵かき、フレーベルの生涯、旧約聖書の登場人物、日曜学校の準備、そして女の子たちが希望した夜の英語クラス。レイシー先生は、子ども研究（Child Study）、ヨハネの福音書、遊びと理論、お話、音楽など、難しいことを全部やっている。

以上の記録から、この学校では午前中に礼拝の時間があり、また学習内容としては旧約聖書の登場人物、ヨハネの福音書などの宗教科目があり、宗教に関する内容が教えられていたことがわかる。そして、理論科目（フレーベルの生涯、保育の本質子ども研究、遊びと理論）と実践科目（手工、音楽、お絵描き、お話）など幼児教育に関する専門的な科目が講じられていた。一方で一般教養科目はあまり重視されていなかったと言える。

さらに、福州協和幼稚師範学校の学科目の時間配分について、同校の中国語を担当する教師は以下のように回顧していた[32]。

協和幼稚師範学校のスタッフの大半も、そもそもキリスト教徒から選ばれている。彼らの多くは神学校で直接教育を受けており、聖書について話すことが多い。彼らは、学校の教育や財政に最も重要な責任を負っている人たちであった。

学校が定めた主な課題は、第 1 に聖書朗読と礼拝と日曜学校、第 2 に英語の授業と保育方法、第 3 に各種聖書研究への強制参加である。特に中国語と歴史はカリキュラムにあったが、ずっと注目されなかった。

このように、この学校ではアレンの記録と同様に、聖書と保育方法が重視されていたことがわかる。また、英語にも力を入れていた。学生の英語能力について、福州協和幼稚師範学校では、「特に英語では、2 年、3 年の生徒が外国人と直接話せるようになる」[33]という記録があった。ここから、女学生たちは通訳を介さず、直接宣教師（教員）の指導を受けることができ、より効果的に学ぶことができたことがうかがえる[34]。

（３）教育内容の特徴と女性宣教師らの専門的知見との関連

最後に、2 つのキリスト教保育者養成機関の教育内容とその特徴を明示するとともに、女性宣教師らの専門的知見との関連を仮説的に示す。

上記のキリスト教保育者養成機関では、教育内容が明確に記録されている。そこで、学校の記録や卒業式のプログラム、担当教師の回顧により、蘇州幼稚園養成学校と福州協和幼稚師範学校の学科目を整理し、その概要を表 5－4 にまとめた。

表５－４　蘇州幼稚園養成学校と福州協和幼稚師範学校の学科目の比較

項目	蘇州幼稚園養成学校	福州協和幼稚師範学校
保育の本質・目的	幼稚園原理	フレーベルの生涯、遊びと理論、子ども研究
保育の内容・方法	物語、音楽、お絵かき、方法、子ども向けの遊びと活動（卒業式で行われた）	手工、音楽、お絵かき、物語、保育方法
保育実習	練習、日常訓練	
宗教科目	聖書	旧約聖書の登場人物、ヨハネの福音書、日曜学校の準備
教養科目	生物学、医学、自然学習、体育	英語、中国語、歴史

出典：Nevada Martin, “Soochow Kindergarten Training School,” *Woman’s Work in the Far East*, 1912, p.155; Bertha H. Allen, “Union Work in Foochow Kindergarten and Training Class,” *Life and Light for Woman,* Vol.149*,* Woman's Board of Missions, 1919, p.84; 林家溱「略憶福州協和幼稚師範学校」1965 年、福建省政協文史資料委員会編、『文史資料選編　第五巻』所収、福建人民出版社、2003 年、394 頁により作成。

以上のように、キリスト教保育者養成機関の教科目は、保育の本質・目的に関する科目、保育の内容・方法に関する科目、保育実習に関する科目、宗教科目、教養科目に分けることができる。その内、両校に共通している科目は次の 4 項目である。

① 保育の本質・目的に関する科目：幼稚園原理、フレーベルの生涯、遊びと理論。

② 保育の内容・方法に関する科目：遊び、お絵かき、音楽、物語。

③ 宗教科目：聖書と旧約聖書の登場人物、ヨハネの福音書。

④ 教養科目

以下、キリスト教保育者養成機関の養成教育内容の特徴を挙げる。

まず、フレーベルの教育思想が教授されたことである。前述したように蘇州幼稚園養成学校の卒業式では卒業生キャンが『母の歌と愛撫の歌』を取り上げて 10 分間のトークを行ったことから、フレーベルの教育思想について学んだことがわかる。特にキャンは、保育者養成機関でフレーベルが唱えた母親への教育の重要性、遊びの思想、さらには恩物を使った子どもの自発的遊びについて理解していたことが明らかである。

次に、保育に関する専門的な科目と宗教、教養科目が講じられていた。その中で、保育に関する専門的な科目は大きな比重を占めている。また、教養科目については、理系と文系に分かれている。当時まだ統一されたカリキュラムは存在せず、それぞれの教派が重視している素養が違っていたことがわかる。

最後に、これら養成機関における教育内容の設定は、女性宣教師の訪中以前の学習歴と関係があると考えられる点を記す。例えば、福州協和幼稚師範学校では手工、音楽、遊びと理論、お絵かきなどの保育の内容やフレーベルの生涯が教えられている。そして、第 2 章第 3

節で述べたように、同校の校長のアレンは、女性宣教師としての訪中以前、ロサンゼルス州立師範学校幼稚園科で学習していた。アレンが履修した科目の中では、美術、理論、遊戯、手工、物語、ピアノ、心理学、音楽、観察、教育、教授法、保育内容編制等が保育に関する専門的な科目であった。特に理論という科目では、フレーベルの教育思想を学んでいた。このように、同校で設定されていた教育内容は、アレンの学習歴と近似している。同校の教育内容はアレンの訪中以前に培った専門的知見に基づいていると推察される[35]。

次の節では、保育養成課程の統一への試みについて検討する。

第 2 節　幼稚園協会のキリスト教系保育者養成に果たした役割

１．幼稚園協会の設立と保育者養成への取り組み

第 1 節では、キリスト教系保育者養成機関の設立経緯と実態を分析してきた。特に、女性宣教師の専門的知見と関連づけて、女性宣教師の果たした役割を検討した。しかし、創設当初、個人の力だけではなく、幼稚園協会もキリスト教系保育者養成に大きな役割を果たした。本節では、協会の設立の経緯や活動内容について分析し、協会が具体的にどのような役割を果たしたかについて考察する。

中国の幼稚園協会は、宣教師たちによって設立された幼児教育専門団体であり、キリスト教系幼稚園と保育者養成機関の連携を促進することを目指していた。『教務雑誌』の「幼稚園協会」という記事では、中国の幼稚園協会の設立経緯について、次のように述べている[36]。

> ある幼稚園協会が 1911 年 2 月に中国の蘇州で組織された。この協会は江南幼稚園協会（Kiangnan Kindergarten Association）と呼ばれ、中国のこの地域の全ての保育者をメンバーに加えることを望んでいる。また、この協会は国際幼稚園連盟（International Kindergarten Union）への参加を提案している。この協会の設立は、現在活躍している保育者によって行われたが、メンバーの中に、かつて幼稚園の先生をしていた宣教師の女性が多くいることは驚くべきことである。
>
> 現在、蘇州市には 2 つの幼稚園と 1 つの保育者養成学校があり、全て宣教師の援助を受けている。しかし、中国人の役人も、郷紳も、民衆も、今や幼稚園に強い関心を寄せている。新しく組織された地方議会は、蘇州市の各地に無料の幼稚園を開設することを視野に入れて、4 人の中国人女性の保育者養成学校での学費を支払うことを決議している。
>
> 協会会長：ネバダ・マーティン（Miss Nevada Martin）通信係：マルガリータ・パーク（Miss Margarita Park）。

以上のように、1911 年に中国の蘇州で江南幼稚園協会が設立され、この地域の保育者が会員として協力することを目的とする、協会が組織されたということは既にキリスト教系幼稚園が複数存在していることを意味する。そして、これらの幼稚園は宣教師によって設立、運営されたことがわかる。当時、中国で幼稚園がまだ知られていない状況の中、同じ保育業界同士で協力し、幼稚園をより多くの人に広めようとしていた姿勢が見える。特に、この記事では、既に幼稚園に興味を示した中国人がいることがわかる。幼稚園事業を広めようと、これまで行われてきた活動が実を結んできたことを示している。

同協会は「より広い分野での活動」を視野に、「1911 年 10 月 12 日と 13 日に上海で開催された前回の総会」で、「華中幼稚園協会（Central China Kindergarten Association）と改名」された[37]。「役員や委員会のほとんどはそのまま引き継がれ」[38]、改名前後の会長職は共に、ネバダ・マーティン（Nevada Martin）[39]が務めている。以下は華中幼稚園協会の会則として定められたものである[40]。

第 1 条　名称

本組織の名称は、中国華中幼稚園協会（The Central China Kindergarten Association）とする。

第 2 条　目的

本団体の目的は、中国における幼稚園への関心を高めることである。

1. 中国の教育発展に関心を持つ人々の協力を確保すること；
2. 希望者に幼稚園の原理を知る機会を提供すること；
3. 中国における保育者の高水準の専門的訓練を奨励すること。

第 3 条 会員資格

1. 現在、幼稚園の仕事に従事している者、またはそのための訓練を受けた者は、正会員としての資格を有することができる；
2. 児童研究に十分な関心を持ち、少なくとも 1 冊の本を読んだ者は、事務員の 1 人にその本の簡単な報告をすることにより、準会員になることができる；
3. 幼稚園に特別の貢献をした者は、名誉会員に選ばれることができる；
4. 名誉会員および準会員は、委員会の委員となることができる。

第 4 条 会費

1. 正会員および準会員の会費は、年額 1 ドルである；
2. 名誉会員は、会費の支払いを免除されるものとする。

第 5 条 役員

1. 役員は、会長、副会長、記録係、中国語および英語の通信係とする；
2. これらの役員は、議長が任命する委員会によって選出され、春季総会において選挙されるものとする；
3. 会長、副会長および記録係の職務は、通常これらの役職に付随するものとする；

4. 中国語通信係の任務は、中国語定期刊行物への報告を含む、全ての中国語通信を実施することである；

5. 英語通信係の任務は、国際幼稚園連盟への報告、『キンダーガーテン・レヴュー（*Kindergarten Review*）』及びその他の英語定期刊行物への報告を含む、全ての英語通信を実施することである。また、彼女は会計係の職務も負うものとする。

第 6 条 委員会

1. 役員は、執行委員会を構成し、その任務は会議の日時と場所を決定し、会議のプログラムを計画し、また、委員会に通常課されるその他の職務を遂行することである；

2. 本協会は文芸委員会を設置し、その任務は、児童研究に関する書籍の承認リストを作成し、また、この運動の影響力（interest of this movement）に寄与するような文献の出版を手配すること。

第 7 条 会議

1. 毎年、春と秋の 2 回、公開会議を開催するものとする；

2. 4 月および 10 月の第 2 土曜日には、定例会を開催する；

3. 会員 5 名の出席をもって成立する。

第 8 条

1.本協会は、国際幼稚園連盟に加盟するものとする。

第 9 条 改正

1.この会則は、いかなる会議においても、正会員の 3 分の 2 以上の賛成票によって改正することができる。

中国華中幼稚園協会の役員および委員会

名誉会長：ジョージ・F・フィッチ（Mrs. George F. Fitch）、上海。

会長：ネバダ・マーティン（Miss Nevada Martin）、M.E.ミッション、蘇州。

記録係：O.C.クロフォード（Mrs. O. C. Crawford）、蘇州。

英文通信係：チン・レオン（Miss Ching Leung）、長老派出版（Presbyterian Press）、上海。

中国語通信係ヴァン・ソン・ナイセン（Mrs. Van Sung Nysen）、西蘇州幼稚園。

文芸委員会： R.C.ウィルソン（Mrs. R. C. Wilson）、蘇州、L.パール・ボッグス（Dr. L. Pearl Boggs）、M.D.モートン（Miss M. D. Morton）、ネバダ・マーティン（Miss Nevada Martin）、ヴァン・スン・ナイセン（Mrs. Van Sung Nysen）。

用語委員会：メアリー・M・タラント（Miss Mary M. Tarrant）、蘇州、E.G.テュークスベリー（Dr. E. G. Tewksbury）、F.G.ヘンケ博士（Dr. F. G. Henke）、ヴァン・リエン・ソン（Mr. Van Lien Sung）、チン・レオン（Miss Ching Leung）。

材料 Materials 委員会：エリザベス・ランマン、長老派伝道会、上海、M. D.モートン

（Miss M. D. Morton）、ウォー（Mrs. Wo）、フォン・F・セック（Dr. Fong F. Sec）

このように、華中幼稚園協会は上海、蘇州を中心として活動している。当協会の目的は、「中国における幼稚園への関心を高めること」と定められている。前述したように、当時幼稚園の数は増加の一途を辿っていたものの、各宣教師はほとんど自らの教派内で活動し、宣教師同士の連携は不十分であった。このような状況の下で、華中幼稚園協会は「中国の教育発展に関心を持つ人々の協力を確保する」ことを目標に掲げ、宣教師たちが相互に協力し合える環境の整備を進めた。また、幼稚園教育従事者の連携だけではなく、「希望者に幼稚園の原理を知る機会を提供する」ことによって、幼稚園従事者の数を増やそうという意図が読み取れる。最後には、「中国における保育者の高水準の専門的訓練を奨励する」という目標が掲げられていた。

この保育者の訓練の基準に関しては、翌 1911 年 10 月の総会で議論がなされている。当会議の「最も重要な議題の 1 つ」として、「中国に連合幼稚園教員養成校（Union Kindergarten Training School）を設立すること」[41]があげられた。また、「この問題は、検討のために各ミッション委員会に任せる予定である。今回は、2 年制のコースを設け、入学には中等教育（high school）を必要とする」[42]という総意がまとめられた。つまり、各教派の連合した幼稚園教員養成校の設立が計画され、保育者養成機関に入学するには中等教育の学校を卒業することが必要とされていたことがわかる。そして、年限としては 2 年制のコースが要求された。保育者養成機関が設立された当初は、保育業界の基準が存在しなかったため、入学資格と卒業年限は各教派それぞれ決められたものであった。このような状況の中で、華中幼稚園協会は各教派の保育者養成の基準を統一した。入学資格を中等教育の学校を卒業に、修業年限を 2 年間と設定するなどし、保育者の専門性を確保したのであった。

また、水準を高めるため、華中幼稚園協会は次のような事柄を決議した[43]。

1. 各ミッションは、現地に少なくとも 1 人の十分な訓練を受けた幼稚園教諭を配置し、現地の訓練センターの設立事業を引き受けるよう勧告すること。
2. 南京に建設予定の連合女学校の計画には、幼稚園の訓練部門が含まれているので、各教会はこれに力を注ぎ、特に優秀な訓練教師を数名現地に派遣して、より高度な訓練コースを提供すること。この仕事には中国語の知識が不可欠であるため、これらの教師を直ちに派遣することを強く勧めること。

この決議により、各ミッションは現地に訓練された教師を配置し、現地の訓練センターを設立し、また南京の連合女学校にも優れた訓練教師を派遣して、高度な訓練を提供することが勧告された。つまり、「高水準」の保育者を養成するため、その教員も確保しなければならないとされたのであった。以上、華中幼稚園協会のキリスト教系保育者養成に果たした役割をまとめると、①保育者養成の基準を統一したこと、②保育者養成を牽引する教員を確保

することを勧告したことを指摘できる。

さらに、華中幼稚園協会は幼稚園事業を広めることに貢献した。以下の記事で華中幼稚園協会の役割が描き出されている[44]。

> 華中幼稚園協会は、1911 年 2 月、蘇州で地方組織として始まった。数回の会合を重ねるうちに、中国中部の全ての幼稚園教諭だけでなく、多くの指導的な教育関係者やその他の関係者が参加するようになった。ごく短期間のうちに、上海では 4 つの幼稚園が開設され、当協会の会員が教鞭をとっている。秋には少なくとももう 1 校がそこに開設され、そして 1 校が松江（Sungkiang）にも開設される予定である。

華中幼稚園協会の会員が幼稚園の教員になる形で、幼稚園の開設に助力したことがわかる。華中幼稚園協会の努力の下、中国の幼稚園事業には「着実な進歩が見られる」[45]ことになった。1916 年 1 月 20 日と 21 日に、第 4 回華中幼稚園協会年次総会が上海で開催された。その会議内容は以下のようであった[46]。

> 幼稚園教諭がどのように地域社会に貢献できるかという問題が議論された。公共の遊び場での活動（public playground work）やコミュニティ・クラブ、その他の社会奉仕活動を支援することが提案された。出席者は、幼稚園教諭がこのような社会奉仕活動を行うことに大きな関心を示した。
> この会議の最大の特徴は、最終日の午後に行われた「お母さん会議」である。この時、上海の多くの幼稚園の子どもたちが参加した。歌、遊び、行進曲など、大勢の聴衆に大いに楽しんでもらえた。子どもたちの母親たちもこの催しに招待され、プログラムを楽しんでいるようだった。
> 続いて、2 つの感動的な講演が行われた。1 つ目は呉ウェイキエウ（Wu Wei Kieu）による「幼稚園の価値」、2 つ目は黄イェンペイ（Huang Yen Pei）による「幼稚園について」である。この講演で、参加者全員が大いに楽しみ、大成功のうちに会は幕を閉じた。

このように、幼稚園で子どもを教育する他、幼稚園の教員は地域社会での貢献と母親に幼稚園教育を紹介することが期待された。特に、母親に歌、遊びなどのプログラムを楽しんでもらうことは、母親の幼稚園理解の第一歩ともいえる。母親に幼稚園教育を紹介することによって、家庭と幼稚園の連携が進められたと考えられる。

２．国際幼稚園連盟との連携

国際幼稚園連盟は、1892 年に全米教育協会（National Education Association）内の幼稚園教育部会において設立が決議された[47]。同連盟が設立された理由は、全米教育協会内で教職の専門性についての議論が行われた結果であり、国際幼稚園連盟の設立の目的は以下の

とおりである[48]。すなわち、①国際規模で幼稚園運動に関する知識を集める。②幼稚園の事業に協力する。③幼稚園設立を促進する。④幼稚園教員養成のレベルを向上させる、の 4 点である。

特に、国際幼稚園連盟は「幼稚園教員養成のレベルを向上させる」という目標を実現するために、養成に関する委員会を組織した。初期段階では、養成の重要性を啓蒙することに委員会活動の重点が置かれていたが、次第に養成プログラムの内容の整備が中心になり、最終的に国際幼稚園連盟は養成校の標準カリキュラムを制定した。そのカリキュラムはナショナルスタンダードを目指したもので、国際幼稚園連盟の重要な成果として評価された。1913 年には養成校の基準設定が提案され、1914 年の大会では保育の専門性と保育者の地位向上が提示された。永井優美によれば、この基準の特徴は「最も高い保姆養成の水準に合わせられたのではなく、2 年制の実現可能な養成基準に設定され、その底上げが目指されたこと」[49]にある。また、国際幼稚園連盟の会員は、保育者と幼児教育のスタンダードを維持する責務を持ち、国内および国際的なレベルで協力し、幼稚園運動を世界的な運動に拡大するために活動することが求められた[50]。

上記の華中幼稚園協会の会則第 5 条 「英語通信係の任務は、国際幼稚園連盟への報告、『キンダーガーテン・レヴュー』（*Kindergarten Review*）及びその他の英語定期刊行物への報告を含む、全ての英語通信を実施することである」、第 8 条「本協会は、国際幼稚園連盟に加盟するものとする」といった規定から、中国の幼稚園協会は国際幼稚園連盟と連携していたことがわかる。また、“The Central China Kindergarten Association”という記事においても、「様々な委員会の報告は非常に興味深く、そして、協会のメンバーは現在約 50 名である。国際幼稚園連合に加盟したことで、他の地域で行われていることに触れることができるようになった」[51]と記録された。

では、華中幼稚園協会は具体的に、どのように国際幼稚園連盟と連携していたのであろうか。ここで、華中幼稚園協会の設立目的と比較することで、連盟と華中幼稚園協会との関係を探る。その対比をまとめると、以下の表のようになる。

表 5－5　国際幼稚園連盟と華中幼稚園協会の設立目的の対比

	国際幼稚園連盟	華中幼稚園協会
設立時期	1892 年	1911 年
目的	① 国際規模で幼稚園運動に関する知識を集める。	
	② 幼稚園の事業に協力する。	1、中国の教育発展に関心を持つ人々の協力を確保すること。
	③ 幼稚園設立を促進する。	2、希望者に幼稚園の原理を知る機会を提供すること；
	④幼稚園教員養成のレベルを向	3、中国における幼稚園教員の高水準の

	上させる。	専門的訓練を奨励すること。

出典：北野幸子「19・20 世紀転換期アメリカにおける保育の専門職化プロセス―国際幼稚園連盟(IKU)を中心に―」『中国四国教育学会　教育学研究紀要』第 45 巻第 1 部、1999 年、507 頁。"Constitution of the Central China Kindergarten Association," *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.21 により作成。

以上のように、国際幼稚園連盟で規定された目的の「国際規模で幼稚園運動に関する知識を集める」以外、華中幼稚園協会の目的はそれぞれ国際幼稚園連盟の目的と類似していることがわかる。つまり、華中幼稚園協会の目的に関する規定は、国際幼稚園連盟を参考にしたうえで制定されたと推察できる。

また、華中幼稚園協会の国際幼稚園連盟への加盟は、他の国の幼稚園とその教員養成機関の情報の取得を可能にした。以下のように、他の国の幼稚園の状況が紹介されている[52]。

> ホークス・ポット博士（Dr. F. L. Hawks Pott）が会議の司会を依頼された。彼はまずアメリカの幼稚園を紹介し、この 30 年間で、アメリカの教育制度は素晴らしい発展を遂げ、現在、アメリカには約 9,000 のキンダーガーテンがあり、198,000 人以上の子どもたちが通っている。幼稚園の教育原理は、身体的にも知性的にも子どもの自然な発達に沿ったものであり、抽象的な考えを教える前に、まず具体的なものを理解するよう訓練しなければならない。最後に、フィスクの『宇宙進化論』からいくつかの文章を引用し、子どもたちを適切に訓練することの重要性を強調した。
> アリス・ケリー（Miss Alice V. Kelly）は、「イギリスの幼稚園」と題する論文を読み、この偉大な運動の概要を簡潔に説明した。
> その後、中国の幼稚園について 5 分間の講演が行われた。フィッチ（Mrs. Geo. F. Fitch）が「トーク」を紹介した。テュークスベリー牧師（Rev. E. G. Tewksbury）は「宣教との関係」、ホワイト（Miss M. C. White）は「幼稚園における中国の子どもたち」、コグダル（Miss M. E. Cogdal）は「幼稚園教員としての中国の女性」、ランマン（Miss E. Lanman）は「宣教との関係」、パーク（Dr. W. H.Park）は「中国人の態度」について短い講演を行った。

以上から、アメリカとイギリスの幼稚園の現状が紹介されたことがわかる。他の国の幼稚園教育で実施されている実践や成功事例を知ることは、教育の向上に役立つと考えられる。上記の引用において、外国の幼稚園についてだけではなく、宣教師たちは中国の幼稚園についてもよく観察し、熟考していた。他国の幼稚園事業と比較して、中国の幼稚園のどこを改善すれば、より効果的な教育を提供することが可能になることが検討されている。

そして、国際幼稚園連盟の制定した標準カリキュラムが、中国へ導入されたかどうかは直

接確認できなかったが、会員たちの努力によって、世界範囲で影響力を広められていたことが明らかになる。すなわち、北野幸子の研究によると、「1919 年の標準カリキュラムは日本の支部を通じて」、日本に導入され、「その後のナショナルスタンダードとなった」[53]という。つまり、日本の幼稚園の協会も国際幼稚園連盟の下で標準カリキュラムを制定していた。このように、こういった類似の動向が世界規模でも見られるようになった。中国でもこの時から、宣教の手段にすぎなかった教育、特に幼児教育は、独立した専門事業としての性格を帯び始めることになる。いわば、宣教師らによる萌芽的な教育活動は、独立事業として開花期へと移行したのである。

第 3 節　中国の保姆養成機関の創設

1．中国の伝統的女性観

前述したように、中国において幼稚園教育は近代学校制度の一環として導入された。しかし、清末中国で幼児教育を担う教員を養成することは困難を極めた。その理由としては、幼稚園の教員を担当するのが女性であり、中国では儒教の大きな影響を受けており、封建制社会では女性が学校教育を受けることは禁止されていたことがあげられる。では、儒教文化では女性をどのように位置付けていたのか。また、学校教育以外に、女性は教育を受ける機会があったのか。以上の問題を検討することを通して、当時の幼児教育教員養成の課題の背景を解明する。

第 1 章で検討したように、中国は儒教社会であった。儒教においては「男女の別」が強調され、「男尊女卑」という観念もあり、男性の絶対的権威が堅持されていた。また「男は外を主とし、女は内を主とする」[54]といった文言に見られるように、性別分業が固定化されていた。つまり、中国における伝統的な性別関係は「男尊女卑」（価値）と「男主女従」（分業）という語で表される[55]。このような関係の中で、女性の地位は低いものとして定義されていた。

その背景にあった制度は家父長制である。家父長制は、社会システムの一形態であり、権力や資源の配分が男性を中心に行われることを示している[56]。家族内では、家長（男性）が絶対的な支配権を持ち、女性は家族に属し、結婚前は父に従属し、結婚後は夫に従属する。女性は家庭の存続を任務とし、養われる一方で、知的教育は不必要、さらには有害とされ、社会的な活動も制限された。つまり、女性は学校教育の機会を得ることができず、職業に就くことも許されなかった。家庭に閉じ込められた女性が受ける教育は、基本的に女徳教育しかなかった。崔淑芬によると、女性は「忍耐強く礼儀正しく、貞操を持ち、勤勉節約などの美徳をもってはじめて『良妻賢母』となること」[57]が求められた。

女徳教育への重視は、古くから継続されてきた。『易経・家人卦』では、「家人は、女位を

内に正しく、男位を外に正しくす。男女正しきは、天地の大義なり。家人に厳君有り。父母の謂なり。父父たり子子たり、兄兄たり弟弟たり、夫夫たり婦婦たり、而して家道正し。家を正しくして天下定まる」[58]と記されている。つまり、女は内を主とし、男は外を主とすることが正しいことであり、そして各家庭の女性を含む各成員が「正」であれば、家が「正」となり、各家庭が安定してこそ、国家も安定することができるとされていた。このように、儒学思想によれば、女性の修身徳は社会秩序の維持をもたらす大きな要因であった。女徳教育の中核は「三従四徳」[59]であり、女徳教育に関する教材も全て、「三従四徳」を中心として展開された。そして、大部分の教材は読者がよく理解できるようにするため、図・絵をつけている。これらの女子教育の本は清朝においても大量に発行され、民間に大きな影響を与えた。

その教科書としては「女四書」が最も有名である。「女四書」は儒家の経典たる四書に倣ってつくられた女訓書集であり、後漢の班昭著『女誡』、唐の宋若昭著『女論語』、明の仁孝文皇著『内訓』、清の王相の母劉氏著『女範捷録』の４冊の書物から構成される。これらの本は、崔淑芬によれば、「儒学の道徳思想をもって、詩・書の中から賢母・烈婦などを母儀（母道の模範）、賢明、仁智、貞順、節義、弁通（物事の道理をわきまえ知る）、また、賢妃、貞婦を取り上げ、それをもととし、家庭の和睦、教養の向上、言行の慎みなどを唱え、女性の貞順、節義、寛容、礼儀を守る女性を賛美した」[60]ものと説明されている。

その中で、最も代表的な教科書は『女誡』である。『女誡』は「卑弱第一・夫婦第二・敬慎第三・婦行第四・専心第五・曲従第六・ 和叔妹第七」の七篇から成るもので、広範な女子教育について議論し、単に妻や嫁としての役割に留まらず、謙譲と恭敬に基づく儒教的な人格形成を女子の目標として追求している[61]。当時の家庭教育の経典としてよく使われた。特に重要なものは「婦行第四」であり、そこでは女性の徳に関して次のように述べられている[62]。

> 女に四行あり。一に曰く婦徳、二に曰く婦言、三に曰く婦容、四に曰く婦功なり。婦徳というのは、必ずしも才に長け他人と懸絶していることではない。婦言は必ずしも弁口利辞ではない。婦容は必ずしも容色美麗なことではない。婦功は必ずしも技巧が他人に優れていることではない。幽間貞静、節を守り整斉とし、己を行うに恥がある。立ち居振る舞いが法に適っている。これを婦徳と言う。言葉を選んで話し、悪語を言わず、時にして然る後に言い、人に厭われず、これを婦言と言う。顔の汚れはよく洗い、服装は清潔にし、沐浴時を以て行い、身垢辱せず、これを婦容と言う。心を紡織に専にし、戯笑を好まず、酒食を潔斎、以て賓客に供す、これを婦功と言う。この四つは、女人の大徳にして、これを乏しくしてはならないものである。しかも、これを為すことは甚だ易く、ただ心を存するに在るのみ。古人言える有り、仁遠からんや、我仁を欲して、仁ここに至るとは、この謂いである。

このように、「三従四徳」の「四徳」は婦徳、婦言、婦容、婦功という「女四行」から成る。この「四徳」論は女性道徳の基本となり、中国の近代女子教育に大きな影響を与えた。このように、清朝末期までの女子教育は女徳教育を中心に行われた。一部の裕福な家庭では女子に対し、女徳教育のほかに、詩詞曲賦、琴棋書画などの知的教育を施すこともあったが、それは極めて稀なケースであった。そして、こうした場合であっても、この時期の女子への知的教育は学校や私塾に通っていた男子とは異なり、教師を家まで招聘して行われた。このように、たとえ一部の裕福な家庭に生まれ、知的教育を受ける機会に恵まれたとしても、教えを受ける環境には、男女間の明確な区分が引かれていたのである。

こうした女子教育の状況は清末まで続いていく。では、清末において近代的な女子教育制度はどのように定められたのだろうか。次節では 1904 年の「奏定蒙養院章程および家庭教育法章程」を分析することで、清末中国の女子教育、そしてその中の幼稚園教員養成教育の独自性を明らかにする。

２.「蒙養院及家庭教育法章程」（1904 年）の女子教育に関する内容

1904 年には「奏定学堂章程」が制定され、中国の近代学校教育制度が始まった。「奏定学堂章程」の内容は「学務綱要」「大学堂章程」「高等学堂章程」「中学堂章程」「高等小学堂章程」「初等小学堂章程」「蒙養院及家庭教育法章程」から構成されていた。さらに、「蒙養院及家庭教育法章程」は「蒙養家教合一」「保育指導要旨および項目」「建物図書器具」と「管理人事務」の 4 章から構成されている。

「蒙養院章程及家庭教育法章程（以下章程と記す）」は、文字通り、蒙養院の教育と家庭教育法について定めたものである。章程の第一章は「蒙養家教合一章」で、その第一節には、「蒙養家教の主旨は蒙養院をもって家庭教育を補助する。家庭教育は女学を包括する」[63]と、蒙養院の教育機関としての性格が定義されている。つまり、蒙養院は単に保育を行う場所ではなく、家庭教育を補助する機能をもっている。そして、家庭教育は女子教育も含めている。したがって、この章程は保育（幼稚園）に関するものだけではなく、女子教育の内容も規定している。

前述したように、蒙養院に関する条例は、1900 年に日本で制定された「小学校令施行規則」を参照して作成された。しかし、「小学校令施行規則」の中では、家庭教育に関する内容が規定されていない。言い換えれば、家庭教育に関する内容は中国独自なものと言える。では、なぜ章程は家庭教育までを規定したのか、また女子教育を含む家庭教育は一体どのような教育であったのだろうか。以下、章程における家庭教育の定義を分析することで、章程の作成背景を明確にする。

章程の作成については、清末の文学者・教育家で京師大学堂の総教習であった呉汝綸の影響が強かったとされている[64]。彼は 1902 年、中央政府の命令を受け、日本に教育制度の視察に赴いた。呉は女子教育について、「女学（女子教育）は幼児を保育するためとはいえ、最も重要なものである。全国の女子に教育を施さなければ、幼児は良い気質が習得できなく

なる。蒙養（幼児保育）は、まさに国民教育の基礎なのである」[65]と述べ、女子教育の重要性を認めている。しかし、呉が支持した女子教育は、学校で行われるような近代的女子教育ではなく、家庭内で「賢母」を養成する教育であった。女学校を設立することに関して、呉は「弊害があり、批判が多く、断じて宜しくない」と述べている。つまり、呉は女性を学校に通わせることを望ましく思っていなかった。そのことは、呉が日本滞在時、研経会（学習院の研究者を中心に設立された漢学の研究団体）との間で行った筆談からうかがえる。研経会側は、次のことを忠告したのである[66]。

> 敝邦の明治七八年の交、西盛んに行われ、婦女子に至るも亦た民主の説を唱う。幸に狂欄を未だ倒れざるに廻らすを得たり。蓋し人の長を取らんと欲せば、則ち其の短も亦た防がざる可からず、是れ必至の勢なり。唯だ力めて後に取捨に失無きこと有るのみ。切に之を慎まんことを望む。

このように、中国の女性に西洋の学問を避けるよう勧めた理由としては、日本において女性が権利を主張するようになったことがあげられる。これを受けて、「蒙養院及家庭教育法章程」では、第二節で女子教育について、以下のように述べられている[67]。

> 第二節　各国には幼稚園があるが、3 歳から 7 歳までの児童を保育するところである。女子師範学生が保姆として子どもを教える。しかし、中国の場合、もし女学を設立すると弊害があり、批判が多く、断じて宜しくない。女学がないと、幼稚園も多く建てられない。そのため、外国幼稚園の制度を適宜に学び、この章程をつくる。

つまり、清朝政府はすでに外国に女子師範学校があることを認識していたが、儒教の正統性を維持するため、女性の学校を設置しない方針をとったのである。さらに、章程の第十節に以下のように規定されている[68]。

> 第十節　中国では「男女有別〔男性と女性の間に区別があり〕」、若い女性は決して家から出て、学校に行くことができない。それに、西洋の本を読むことができない。もし外国の習俗をみて、模倣したら、中国の伝統的な礼教に従わなくなる。ゆえに、女性は家庭で教育を受け、母や保姆から教育を受けることしかできない。

このように、伝統的な女性観「男女有別」の下では、女性は学校に通うことが禁止され、家庭で教育を受けるしかできなかった。そして、その家庭教育の内容については、以下のように規定されていた[69]。

> 第九節　保姆学堂は急に設けられないため、蒙養院も多く設立できない。子どもを教育

する場所は蒙養院だけでなく、家庭教育でも蒙養教育を行うことができる。家庭教育を行うには教科書が必要とされ、それゆえ各省の学堂によって『孝経』『四書』『女誡』『女訓』及び『教女遺規』などの本から、重要な内容を抽出し、図や解説を入れ、わかりやすい国定教科書を作成すべきである。さらに、外国の家庭教育の本を使ってもかまわない。例えば、中国の女性の道徳にふさわしい内容が書かれている下田歌子の『家政学』を使用してもよい。上述した本は全ての家に一冊ずつ配布すべきである。

以上のように、「蒙養院及家庭教育法章程」での「家庭教育」とは家庭内で、幼児に対する保育と、母（女性）に対する教育という二層の意味がある。そして、女性教育のための教科書が必要とされている。その教科書は政府から指定されており、内容は伝統的な女性の道徳を論じたもので、儒教主義の影響が強かった。さらに、外国の家庭教育の本として下田歌子の『家政学』（博文館、1893 年）も取り上げられた。『家政学』」の上巻では「家事経済、衣服、飲食、本邦料理、西洋料理」[70]、下巻では「住居、礼法、装飾、書簡、贈品、看病法、母の衛生および小児教養法、婢僕の使役」[71]などの内容が取り上げられている。これらの内容からわかるように、本書は「良妻賢母」の育成を目指した教育の教科書である。このように、家庭での女子教育は「良妻賢母」養成を目的とする教育であった。

しかし、蒙養院は幼児教育機関であり、幼児を保育する教師が必要であった。では、清末において、保育者の養成はどのように行われていたのだろうか。

３.「蒙養院及家庭教育法章程」（1904 年）の保姆養成に関する内容

章程は家庭教育について規定しただけでなく、保姆養成の制度も定めていた。章程の第七節は「外国の女子師範学堂には保姆講習科が置かれ、保姆養成を行う。中国では女子師範学生がいないため、育嬰堂と敬節堂に蒙養院を附設する」[72]と定められている。育嬰堂（乳児院）や敬節堂（身寄りのない婦人の収容施設）は、「奏定学堂章程」公布以前から、孤児や捨てられた子どもたちを収容する目的で設立された慈善施設であり、その中で子どもたちの養護を行っていたのは乳母であった。そして、こうした基盤が存在したため、蒙養院の附設後にも引き続き、乳母たちが幼児教育を担当することとなった。

では、これらの女性はどのようにして教員（保姆）として養成されたのだろうか。以下、日本の保姆養成制度と比較して、中国の保姆養成制度の特徴を明らかにする。

まず保姆の資格については、第六節に、「一年たつと、授業を受講して合格した乳媼は、保姆教習証明書（資格免許）を取得することが出来る。免許と奨励が地方官から出される。堂内、堂外の女性にかかわらず、保姆養成授業を受けた女性には、その証明書を発行する」[73]と、その資格の取得方法が定められていた。修業年限は 1 年であることがわかる。

それに対して、日本の「小学校令施行規則」の第 205 条では「幼稚園長及保姆ノ採用、解職ハ市町村立幼稚園ニ在リテハ府県知事之ヲ行ヒ私立幼稚園ニ在リテハ設立者ニ於テ府県知事ニ届出ツヘシ」[74]と規定し、また第 204 条では「幼稚園ニ於テ幼児ヲ保育スル者ヲ保姆

トス、保姆ハ女子ニシテ尋常小学校本科正教員又ハ准教員タルヘキ資格ヲ有スル者又ハ府県知事ノ免許ヲ得タル者タルヘシ」[75]と、保姆の採用方法や保姆の資格を規定していた。保姆の採用、解職は府県知事により管理されていることがわかる。この点については、日本からの影響を受けていることがわかる。

次に章程は教育内容について、以下のように規定している[76]。

> 第四節　省城に 50 人以上の乳媪がいる育嬰堂と各府県城に 30 人以上の乳媪がいる育嬰堂には蒙養院を設置すべきである。そこの乳媪が保姆として子どもを保育する。保育要旨と保育項目に従って保育活動をする。国定教科書は後で政府から配られる。乳媪の中に識字者がいる。これらの識字者が教科書を使って、他の乳媪を教える。当地で乳媪保姆になりたい女性は育嬰堂で授業を受けることができる。しかし、人数は 30 人以内で、人数が多すぎると乱雑になるからである。

この条項から、保姆養成課程の教授を担当するのは、専門知識をもっている教師ではなく、育嬰堂中の識字者であったことがわかる。教える内容は保育項目と「国定教科書」である。保育項目は「遊戯」、「歌謡」、「談話」、「工作」であり、日本の幼稚園の保育項目と同様であった。しかし、字が読めるだけで、実際に保育に関する知識を持っていない「識字者」は、教育内容を十分に理解するのは困難であったと考えられる。つまり、専門知識をもつ教員がいなかったため、保育者養成教育は実質的に実施することができなかった。

そして、「国定教科書」とは、各省の学堂によって『孝経』『四書』、『女誡』、『女訓』及び『教女遺規』などの書物から、重要な内容を抽出し、図や解説を入れたものであった[77]。これらの書物の内容は家庭教育の内容と同じ儒教的なもので、清朝政府が儒教思想を基盤として保姆養成を行っていたことがわかる。これも中国の章程の独自の内容である。

以上の考察結果をまとめると、章程が規定していた保姆養成に関する内容は、近代的な幼稚園教育の保育項目を取り入れたが、清末における儒教主義的性格もまた顕著に有するものであった。このように、近代的学校制度の一部として幼稚園の導入を試みる一方で、その保育者養成を担う機関は、中国の女性の社会的地位の低さの影響から、むしろ保守的なままに留まる、という矛盾が生じていたのである。そのため、1904 年に清政府が構想した保育者養成制度は、近代的学校制度としては不完全なものであったと言える。

４．保姆養成機関の創設と実態

（１）官立保姆養成機関―幼稚園の中に附設された保育科

次に、中国の保姆養成機関の実態について分析する。まず、官立保姆養成機関について、湖北幼稚園に附設された保育科を例に検討する。前述したように、1904 年 2 月に湖北省の武昌で開園した湖北幼稚園は、中国最初の官立幼稚園である。1903 年秋、湖北巡撫端方は張之洞の命令を受け、日本人教習 3 名（戸野みちゑ・丹雪枝・武井ハツ、図 5－1）を招聘

し、幼稚園の開設の準備をした。その際には「湖北幼稚園開弁章程」が戸野等の建議により作成された。章程の内容は幼稚園の編成や組織、保育項目などであった。第 22 条は、「保育科は幼稚園より先に設置すべき」[78]と定められている。つまり、幼稚園を開設するために、その教員の養成が先に行われたのである。

図 5－2　日本人教習と中国の子どもの写真

出典：「支那の児童と日本の女教師」『女学世界』1905 年 9 月、近代アジア教育史研究会『近代日本のアジア教育認識・資料篇［中国の部］』第 29 巻所収、龍渓書舎、2002 年、78 頁。

湖北幼稚園での保育科は女子速成保育科とも呼ばれていた。この保育科は中国史上初めての官立の保姆養成機関であり、15～30 歳の女性を教育対象とした。保育科の教育内容は保育の原理、方法や保育項目であった。何暁夏の研究によれば、「保育科が開設された後、若い女性 60、70 名ほどが入学した。日本の保姆が保育知識を教えていた。これは中国の初めての幼稚園教員養成の機関である」[79]とされている。

しかし、この最初の幼稚園教員養成機関は独立した教育機関ではなく、「湖北幼稚園開弁章程」の第21条には「幼稚園の中に保育科を附設する。学生は幼稚園で実際に練習を通して保育の仕方を学ぶ」[80]と記されている。このように、保育科は幼稚園に附設された形で作られたことがわかる。保姆養成機関が幼稚園に附設されていた理由としては、当時中国にはまだ封建思想が強く残っており、女性のために学校を作ることが難しかったという

背景があったためと考えられる。

さらに、保育科が幼稚園に附設されていても、女性が学校に通うことは非難された。当時の女性を取り巻く状況としては「街の人はみんな学校に行く若い女性を見に行く。たちまちのうちに、大騒ぎとなった」[81]という記述もあり、若い女性たちが学校に通うのは当時の人々にとって、非常に珍しい光景だった。それと同時に、家を守るべき若い女性が街に出るのは礼儀正しくないとされていた。前述したように、当時の中国では男女間での相違が非常に厳しく、年少の女子はいつも家にいて、家庭で女徳に関することのみを教えられ、外に出ることはできなかった。もし家を出ると、西洋書籍に接触したり、外国の習俗を学んだりして、父母、夫を蔑視する懸念があったためである。父母、夫の権威を守るため、女性を学校に通わせないことが家父長制社会の選択であった。張之洞も周囲から批判されたことで、1904年8月に次のような文書を告示した[82]。

> 湖北幼稚園は「蒙養院及家庭教育法章程」が発布される前に設置された。章程に従わずに、園内に女子学堂を設置した。そして、青年女性 6、70 人を集め、章程に違反していた。もし改正しなければ、他の女性はこれを見て学校に行きたいと考えるようになり、あまりにも悪影響が大きい。それゆえ、幼稚園内に設置された女学堂を直ちに撤廃する。

結果として、中国最初の幼稚園保姆養成機関は、外部からの圧力、特に儒教的な考えに起因する風習によって、設立者自身が廃止してしまった。つまり、「蒙養院及家庭教育法章程」が、保姆養成教育を育嬰堂と敬節堂でのみ行うと規定していたため、幼稚園に付設された最初の保姆養成機関は閉鎖に追い込まれた。以上の事例から 1900 年代初めには、中国はまだ儒教思想が強く影響を及ぼしていたことがわかる。

（２）民間保姆養成機関

では、民間における保姆養成機関はどのようなものだったのだろうか。中国初期の幼稚園をみると、設置主体者は清朝中央政府だけではなく、各地の先進的な官僚郷紳や、日本で学務視察経験をもつ知識人も参与していた[83]。そして、民間の有志により、専門的保姆養成機関が設けられていったのである。以下、幼稚園も設立した厳修により創設された民間保姆養成機関の実態を検討する。特に、日本からの影響を明らかにする。

前述したように、厳修は女子教育と幼児教育を重視し、1902 年に厳氏女塾を開設した。日本人の川本、山口、野崎[84]を招聘して、日本語、音楽、手工芸、織布、算術などの教授を始めた[85]。1905 年に、厳氏女子小学校を創立し、蒙養院と保姆講習所を併設した[86]。保姆講習所は蒙養院よりも先に設立され、保姆講習所の生徒は女塾の学生以外に、保育を学びたい女性を受け入れた。日本人教師の大野鈴子が朝、蒙養院で実習生に対する教授を行い、午後には保姆講習所で講義した。

大野が担当した教育の科目は保育方法、音楽、ピアノ、オルガン、体操、遊戯、手工であった[87]。大野は中国語を話せなかったため、日本で留学を経歴した厳修の長男厳智蠲が翻訳職を勤めた。英語、算術、生理、化学などの科目は、張伯苓やその他の南開学堂[88]の教員が担任した。このような学科課程を設置した理由は、大野が女子高等師範学校出身者であったためと考えられる。

女子高等師範学校の学科課程を確認すると、1891 年の本科課程は「倫理、教育、国語・漢文、英語、数学、地理・歴史、理科、家事、習字・図画、音楽、体操」[89]から構成されていた。そして、1898 年の保姆練習科の学科課程は「修身、教育（保育方法、実地保育）、理科、図画、音楽」[90]から構成されている。厳氏保姆講習所のうちの「音楽、体操、英語、算術、化学」は、女子高等師範学校の本科課程の「音楽、英語、数学、理科」といった学科課程構成と同様であった。また、厳氏保姆講習所の「保育方法、ピアノ、オルガン、遊戯と手工」は保姆練習科の学科課程の「教育（保育方法、実地保育）と音楽」と類似している。さらに、手工は恩物と関連していると推測できる。つまり、厳氏保姆講習所の学科課程は、日本の女子高等師範学校の本科と保姆練習科の学科課程を参考にして作成されたものであったと言えよう。

これに対して、1904 年に構想された官立保姆養成機関の教育内容は、保育項目と儒教的内容から構成される「国定教科書」以外にはなかった。民間保姆養成機関の方は、日本の女子高等師範学校の学科課程と類似していることがわかる。つまり、より専門性を備えたのは民間保姆養成機関の卒業生であった。

実際の保姆養成教育について、大野はまず五線譜を生徒に教えていた。そして、生徒の学習の程度に応じて、個別にオルガンやピアノを教え、卒業するまでには最低でも行進曲を弾くことができるように指導していた。設立初期は、大野自身がオルガンを弾いて、子どもに歌を教えていた。次第に、教えを受けた保姆講習所の生徒たちが子どもに歌を教えるようになった。大野は 1908 年に日本に帰国したが、彼女は 1905 年から 1908 年の 3 年の間に、20 名以上の保姆を養成した。養成された保姆は全員試験に合格し、卒業証書を手にした。卒業生は厳氏蒙養院、京師第一蒙養院、天津河北蒙養院、私立朝陽観蒙養院、厳氏女学、官立第二小学、官立第五小学などに就職したとされている[91]。

しかし、保姆講習所は大野が帰国した後、一旦中止され、その後に師範クラスが開かれた。学生たちは午前に授業を受け、午後は蒙養院で実習に取り組むことになった。授業を行う教師は以前と同様南開学堂の教員であった。この師範クラスは短期間設けられ、卒業生は７、８人程度であった。卒業生はほとんど幼稚園に就職し、まだ幼稚園教員が少ない時期に、養成された保姆が北京や天津の地域の幼稚園の発展に重要な役割を果たしたのである[92]。

このように、官立保姆養成機関に比べて、民間の方が保姆養成に重要な役割を果たしていた。そして、民間保姆養成機関の教育内容は日本から大きな影響を受けていたのであった。

次に、中国の保姆養成制度の成立について考察する。

第 4 節　中国の保姆養成機関の展開

１．中国における近代女子教育の成立

1907年3月、清政府学部（当時の日本の文部省に相当）は「女子小学堂章程」と「女子師範学堂章程」を発布した。従来、中国には官立の保姆養成機関が存在していなかった。この2つの女学堂章程によって、女子教育が正式に国家の教育体系の一部となり、官立女子学堂もこれ以降設立されるようになった[93]。保姆を養成するための専門機関が設けられ、幼児教育人材を養成することができるようになったのである。以下、まず保姆養成機関の設立背景を検討する。

前述したように、「蒙養院及家庭教育法章程」が頒布されていても、官立保姆養成機関は設立されず、民間保姆養成機関しか機能していなかった。この状況は、女子教育においても同様であった。1898 年に至り、維新変法派ら中国の資産階級がはじめての女子学校経正女学（のちに中国女学堂と改称）を上海に創設した。そして、1902 年に蔡元培が中心となっていた資産階級教育団体中国教育会が上海に、愛国女学を創設した。また、中国教育会は 1903 年、江蘇省同里にも明華女学を開いた。1904 年、貴州同盟会は貴陽で光懿女子小学校を設立し、李鐘珏は上海で女子中西医学校を創設した。1905 年、湯剣娥は上海で女子体操学校を創設した。そして、厳修は天津で厳氏女塾を開設した。

この時期はまた、女性の外国留学、とくに日本への留学が盛んであった。まず、実践女学校は 1905 年に中国女子留学生師範速成科と工芸速成科を開設し、中国の留学生を受け入れた。また、同年には、東亜女学校に中国女子留学生速成師範学堂が設置された。同じ 1905 年、孫文は東京で中国同盟会を結成し、東京は革命人の温床となった。孫文は「民権」「女性の権利」を訴え、日本にいる女子留学生にも影響を与えた。さらに、反清政府の民主革命の気運が強まる中で、その影響は中国まで広がり、中国の愛国女学では蔡元培らにより革命思想や爆弾の製造法も教授されるようになった[94]。

このように盛んになった私立女子学校の発展及び女性の間にも革命思想が広まる中で、清政府は民間女学校の民主化の傾向を鎮めるために、官立女学校の設立を推進しようとした。そこで、清政府は 1907 年 3 月、女子小学校と女子師範学校の制度、すなわち「女子小学堂章程」と「女子師範堂章程」を頒布した。「女子師範学堂章程」の「学科制度の女子師範学堂教育総要」では、その設置の目的が以下のように論じられている[95]。

> 中国の女徳は、歴代がそれを尊ぶ。およそ女性としての道、主婦としての道、母親としての道については教典や儒学者の本の中に沢山書かれている。今、女子師範生は先ずそれを勉強し、常に貞静、順良、慈淑、節約などの美徳に従い、中国従来の礼教を忘れず、社会の習俗を維持する。
>
> 家庭と国家は密接に関連している。家政がよければ国風も自然に隆盛する。その家政を正すには、まず女子が教育を受け、礼法を守ることを知る必要がある。また、女子教

育は国民教育の基本となる。なぜなら学堂の教育は最良の家庭教育によって補われることではじめて完璧なものとなるからである。そして、最良の家庭教育は賢母によるものであり、その賢母を求めるのは必ず完全な女学になる。女子師範教育者はこの主旨に基づき、教導に努めなければならない。

このように、清政府が女子学校を設ける目的は、儒教的な「礼法」に服従した良妻賢母的な女性の育成にあったことがわかる。女子教育においては、儒教徳目を女子学生に学ばせ、「道徳」あるいは「女徳」を重視していた。そして、1904 年の「蒙養院章程及び家庭教育法章程」で論じられている女子教育の意義と同様、その教育は「国民教育の基本」である家庭教育のために存在し、家庭教育の質を向上に向けて「良妻賢母」を育成するためのものであった。この時期、女子教育は依然として儒教文化に基づいており、家庭教育を補完するものとして見られていたことがわかる。

このため、女子師範学堂で生徒たちは厳しい管理下にあった。例えば、学堂には寮があり、生徒は寄宿が義務付けられ、自由に外出することは許されなかった。また、在籍中の生徒の結婚は禁止され、違反した場合は即座に除籍される規定も存在した[96]。このように、女子教育制度が成立したといっても、実際には女子の自由は制限されており、社会的な地位も低く位置付けられていた。換言すれば、近代女子教育は、中国の伝統的女性観との調整の所産であり、そうした女性観を色濃く残すものであり、伝統的な「女徳」が最優先され、専門性はその一段下に置かれていたのである。

２.「女子師範学堂章程」（1907 年）の保姆養成に関する内容

では、このような指導方針の下で、幼児教育のための教員養成制度はどのように設定されたのか。以下、「女子師範堂章程」の保姆養成に関する内容を分析することによって明らかにする。

まず、同章程では、女子師範学堂の宗旨について「女子小学堂の教習を養成し、幼児を保育する方法など家庭教育に裨益することを講習することを目的にする」[97]と、また、「女子師範生に女子小学堂の教科と蒙養院保育科の趣旨を教授し、そのため将来教習、保姆になれる」[98]と定められている。つまり、女子師範学堂の保姆養成課程（蒙養院保育科）は、独立した保姆養成機関で実施されるのではなく、女子小学校教員の養成に付随する形で展開されていた。このように、女子師範学堂は、女子小学堂及び幼児教育の教師を養成するための教育機関であり、家庭教育を視野に入れたものであったことがわかる。

そして、保姆養成課程については「女子師範学堂之学科目為修身教育国文歴史地理算学格致図画家事裁縫手芸音楽体操其音楽一科生徒中察有実在学習困難者可不課之」[99]と定められていることから明らかなように、女子師範学堂の科目は修身、教育、国文、歴史、地理、算学、格致、図画、家事、裁縫、手芸、音楽、体操であった。そして、もし音楽を学習することが困難な場合、その科目を課さないことができる。修業年限は4年とし、授業

日数は年間45週で毎週34時間となっている。それぞれの学科の時間配分は表5－6のようになっている。

表 5-6 女子師範学堂の学科課程表（1907 年）

	修身	教育	国文	歴史	地理	算学	格致	図画	家事	裁縫	手芸	音楽	体操	合計
第一年	2	3	4	2	2	4	2	2	2	4	4	2	1	34
第二年	2	3	4	2	2	4	2	2	2	4	4	2	1	34
第三年	2	3	4	2	2	3	2	2	2	4	4	2	2	34
第四年	2	15				2	2	1	1	3	4	2	2	34

出典：「女子師範学校章程」1907 年、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』、62 頁。

表 5－6 によれば、第一、二、三学年において授業の時間数に関して違いは見られないが、第四学年で教育の授業が 15 時間にまで増加している。その理由としては、実地教育練習の存在があげられる。女子師範学堂章程の学科要旨において、教育実習については「附属女子小学堂や蒙養院で児童指導、保育方法の実習を行う」[100]と規定している。それに加えて、「編制設備章第四」では、「女子師範学堂に女子小学堂と蒙養院を附属すべき、師範生徒は附属学校において実地練習することができる」[101]とされている。以上のことから、蒙養院は女子師範学堂に附設され、そこで実習が行われていたことがわかる。

そして、必修科目は修身から始められており、また国文、歴史などの科目が置かれて中国の文化について教授されるようになっていた。修身の内容については、「修身の目的は、女性の道徳的人格を培い、それを実践することである。まず、日頃の実践のために良い言動を紹介し、道徳と礼儀作法の大切さを教える。次に、身を修める方法、家庭を治める方法、国に対する義務を果たす方法を教える。また、修身の順序と規則を教える」[102]と規定されている。さらに、表 5－6 を見ると、裁縫、手芸の時間数も他の授業より多いことがわかる。つまり、女子学校の設立の目的は、専門的知識をもつ保姆を養成するというよりも、女性の徳性を涵養し、また裁縫、手芸などの手仕事や家庭保育のできる良妻賢母を育成することにあった。

これまで検討してきたように、当時の中国の教育制度は日本の制度を模倣して作られた。女子師範学堂章程も、韓韡によれば、日本の諸法制、すなわち 1886 年の「女子師範学科の学科目」、1897 年の「女子高等師範学校規程」、1901 年の「高等女学校令施行規則」、1903 年の「高等女学校教授要目」を参考にしたとされている[103]。特に、「女子師範学堂章程」と

「高等女学校令施行規則」の教授要旨を比較すると、以下の表 5－7 のようにまとめることができる。

表5-7　「女子師範学堂章程」と「高等女学校令施行規則」の対比表

	女子師範学堂章程（1907年）	高等女学校令施行規則（1901年）
	女子師範学堂之学科目為修身教育国文歴史地理算学格致図画家事裁縫手芸音楽体操其音楽一科生徒中察有実在学習困難者可不課之	高等女学校ノ学科目ハ修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、体操トス但シ修業年限ヲ短縮シタル学校ニ於テハ外国語ヲ欠ク 第一項ノ学科目ノ外随意科目トシテ教育、手芸ノ一科目又ハ二科目ヲ加フルコトヲ得
修身	一　修身 其要旨在涵養女子之德性，期於実践躬行。其教課程度，首宜徵引嘉言懿行，就生徒日用常習之故，示以道德之要領；次教以言容動作緒礼儀；次教以修己治家及対於倫類国家当尽之責任；次授以教授修身之次序法則。凡教修身之課本,務根據經訓並薈萃《列女傳》(漢劉向撰),《女誡》(漢曹大家撰),《女訓》(漢蔡　邕撰),《女孝經》(唐侯莫陳邈妻鄭氏撰),《家範》(宋司馬光撰),《内訓》(明仁孝文皇後撰),《閨範》(明呂坤撰),《温氏母訓》(明温璜録其母陸氏訓語),《女教經傳通纂》(任啓運撰),《教女遺規》(陳宏謀　撰),《女學》(藍鼎元),《婦學》(章學誠)等書,及外國女子修身書之不悖中國風教者,擷其精要,融會編成;且須分別淺深次序,附圖解説,令其易於明曉。	第二条　修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操シ中等以上ノ社会ニ於ケル女子ニ必要ナル品格ヲ具ヘシメンコトヲ期シ実践躬行ヲ勧奨スルヲ以テ要旨トス 修身ハ初ハ善言善行等ニ徵シ又生徒日常ノ行状ニ因ミテ道德ノ要領ヲ教示シ又作法ヲ授ケ進ミテハ稍ニ秩序ヲ整ヘテ自己、家族、社会及国家ニ対スル責務ヲ知ラシムヘシ
教育	二　教育　其要旨在使理會女子小學堂教育，蒙養院保育及家庭教育之旨趣法則，並修養為教育者之精神。其教課程程度先教以教育原理,使知心理學之大要,	第十四条 教育ハ教育ニ関スル普通ノ知識ヲ得シメ家庭教育ニ資スルヲ以テ要旨トス 教育ハ教育ノ理論ノ大要ヲ授クヘシ

	及男性女性之別,並使明解德育智体育之理；次教以家庭教育之法；次教以蒙養院保育之法；次教以小學堂一切教授管理訓練之法，並使知家庭教育與學堂教育之關系，次使於附屬女子小學堂及實地練習教授生徒及保育幼兒之法則	
国文	三　國文 其要旨在使能解普通之言語及文字,更能以文字自達其意,期於涵養趣味,有身心。 其教課程度,先講近時平易之文,再進講讀經史子集中雅馴之文,又時使作簡易而有實用之文,兼授文法之大要及習字,並授以教授國文之次序法則。	第三条　國語ハ普通ノ言語、文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文學上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智德ノ啓発スルヲ以テ要旨トス 国語ハ現時文章ヲ主トシテ講読セシメ進ミテハ近古ノ文章ニ及ホシ又實用簡易ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要及習字ヲ授クヘシ
歴史	四　歷史　其要旨在使知歷史上重要之事跡,省悟群治之變遷,文化之由來,及強弱興亡之故,正邪之分。 其教課程度,授中國古代至本朝之大事及外國歷史之大,並授以教授歷史之次序法則。	第五条 歷史 歷史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社会ノ変遷、文化ノ由来ヲ理会セシメ特ニ我国ノ発達ヲ詳ニシ国体ノ特異ナル所以ヲ明ニスルヲ以テ要旨トス 歷史ハ我國ノ國初ヨリ現時至ルマテノ重要ナル事歷ヲ授ケ兼テ外國歷史ノ大要ヲ授クヘシ
地理	五　地理　其要旨在使知地球形狀運動,並地球表面及人類生存之情狀,且使理會本國及外國國勢。 其教課程度,授地理總論、中國地理及與中國有重要關系之外國地理;兼授地文學大意，並授以教授地理之次序法則。	第六条　地理ハ地球ノ形状、運動竝ニ地球表面及人類生活ノ状態ヲ理会セシメ我国及諸外国ノ国勢ヲ知ラシムルヲ以テ要旨トス 地理ハ日本地理並ニ我國ト重要ノ関係アル諸外国ノ地理ノ大要ヲ知ラシメ兼テ地文ノ一班ヲ授クヘシ
算学	六　算学　其要旨在使習熟計算,適於日用生計,且練習其心思使進於細密精確。 其教課程度,授算術兼授珠算,次授代數初步及平面幾何初步,並授以教授算學之次序法則。	第七条　数学ハ数量ノ関係ヲ明ニシ計算ニ習熟セシメ兼テ生活上必要ナル事項ヲ知ラシメ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス 数学ハ算術ヲ授クヘッ又學校ノ修業年限ニ応シ代數ノ初步及平面幾何ノ初步ヲ授クルコトヲ得

格致（理科）	七　格致　其要旨在使知各種物質天然之形狀,交互之關系,及物質對於人生之關系,適於日用生計,有益於技藝職業。其教課程度,授以普通動植物之知識及生理衛生之大要,次授以普通物理化學,並授以教授格致之次序法則。	第八条 理科ハ天然物及自然ノ現象ニ関スル智識ヲ與ヘ其ノ法則竝ニ其ノ相互及人生ニ対スル関係ヲ理会セシメ兼テ日常ノ生活ニ資スルヲ以テ要旨トス 理科ハ重要ナル植物、動物、鉱物ニ関スル一般ノ智識、人体ノ構造、生理及衛生ノ大要竝=重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用、元素及化合物ニ関スル智識ヲ授クヘシ
図画	八　圖畫 其要旨在使精密觀察物體,能消其形象神情,兼養成其尚美之心性。 其教課程度,授寫生畫,隨加授臨本畫,且使時以己意畫之;更進授幾何畫之初步,並授以教授圖畫之次序法則。	第九条　図画ハ物体ヲ精密ニ観察シ正確且自由ニ之ヲ画クノ能ヲ得シメ意匠ヲ練リ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス 図画ハ自在畫トシ写生畫ヲ主ト臨畫ヲ加ヘ授ケ又時々自己考案ヲ以テ畫カシムヘシ 前項ノ外幾何畫ノ初歩授クルコトヲ得
家事	九　家事 其要旨在使能得整理家事之要領,兼養成其尚勤勉,務節儉,重秩序,喜周密,愛清潔之德性。 其教課程度,授衣食居處、看病育兒、家計簿記及關於整理家政之一切事項,並授以教授家事次序法則	第十条 家事整理上必要ナル智識ヲ得シメ兼テ勤勉、節倹、秩序、周密、清潔ヲ尚フノ念ヲ養フヲ以テ要旨トス 家事ハ衣食住、看病、育児、家計簿記其ノ他一家ノ整理、経済等ニ関スル事項ヲ授クヘシ
裁縫	十　裁縫　其要旨在使習得關於裁縫之知識技能,兼使之節約利用。 其教課程度,授普通衣類之裁法儲法及修繕之法,並授以教授裁縫之次序法則。	第十一条　裁縫ハ裁縫ニ関スル智識技能ヲ得シメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス 裁縫ハ普通ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方及繕ヒ方ヲ授クヘシ
手芸	十一　手藝 其要旨在學習適切於女子之手藝,並使其手指 習於巧致,性情習於勤勉,得補助家庭生計。 其教課程度,可就編織、組絲、裝盒、刺繡、造花等項酌擇其一項或數項授之。 此外各種圖樣, 凡有適切於女子之技藝者,均可酌量授之,並授以教授手藝之次序法則。	十五条　手芸ハ女子ニ適切ナル手藝ヲ習ハシメ指手ノ動作ヲ巧緻ナラシメ兼テ勤勉ヲ好 ム習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス 手芸ハ編物・組糸嚢物・刺繡・造花等土地ノ状況ニ適切ナルモノヲ授クヘシ

音楽	十二　音樂　其要旨在使感発其心誌,涵養其德性,凡選用或編制歌詞,必擇其有裨風教者。 其教課程度,授單音歌復音歌及常樂器之用法，並授以教授音樂之次序法則。	第十二条　音楽ハ音楽ニ関スル智識技能ヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情高潔ニシ兼テ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス 音楽ハ単音唱歌ヲ授又便宜輪唱歌及複音唱歌ヲ交ヘ樂器使用法ヲ授クヘシ
体操	十三　体操要旨在使身体各部均斉発育動作機敏、挙止厳粛使知尚協同守規律之有益其教課程度授普通体操及遊戯並授以教授体操之次序法則。	第十三条 体操ハ身体ノ各部ヲ均斉ニ発育セシメテ之ヲ強健ナラシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ容儀ヲ整ヘ精神ヲ快活ニシ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尚フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス 体操ハ普通体操及遊戯トシ普通体操於テハ矯正術、徒手体操、唖鈴体操ヲ授ケ又便宜球竿体操及豆嚢体操ヲ授クヘシ
外国語	なし。	第四条 外国語ハ普通ノ英語又佛語ヲ了解且之ヲ運用スルノ能ヲ得シメ兼テ智識ノ増進ニ資スルヲ以テ要旨トス 外国語ハ発音、綴字ヨリ始メ簡易ナル文章ノ読方、訳解、書取、作文ヲ授ケ進テハ普通ノ文章及ホシ又文法ノ大要、会話及習字ヲ授クヘシ

出典：「女子師範学校章程」1907年、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』、日本学術振興会。「高等女学校令施行規則」1901年、文部省教育調査部『高等女学校関係法令の沿革』1941年。

表 5－7 により、「女子師範学堂章程」で定められた教育内容は「修身教育国文歴史地理算学格致図画家事裁縫手芸音楽体操」となっており、「高等女学校令施行規則」の「修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、図画、家事、裁縫、音楽、体操」とほぼ一致し、日本からの影響を強く受けていたことがわかる。したがって、女子師範学堂は高等女学校と同様、中等教育レベルの教育機関に位置づけられる。

前述したように、民間保姆養成機関の科目は保育方法、音楽、ピアノ、オルガン、体操、遊戯、手工、英語、算術、生理、化学から成っていた[104]。官立の女子師範学堂と比較すると、民間保姆養成機関の方は「保育方法、ピアノ、オルガン、遊戯、手工」などの、幼児教育についての専門的な知識や実技科目が多いことがわかる。女子師範学堂は前述したように、独立した保姆養成機関ではなく、女子小学校教員の養成校でもあった。その中の保姆養成課程（蒙養院保育科）は、女子小学校教員の養成に付随する形で展開されていた。

「女子師範学堂章程」は基本的に「高等女学校令施行規則」を忠実に参照する形で作成されたが、両者の間には3つの相違点が存在していた。1つ目は、女子師範学堂では外国語が教えられていないことである。2つ目は、修身の内容には中国の伝統的な女徳教育に関する教科書、『女誡』『烈女伝』『女孝経』『女訓』『女児経』などが入れられていたことである。以上の2点から、清政府は保守的な態度をもって、外国語に触れず、中国の伝統的な女子教育の内容を維持しようとしていたと言える。

そして、その3つ目は、中国の「女子師範学堂章程」では、「教育（と手芸）」が必修科目にされたことである。しかし、「高等女学校令施行規則」において、「教育」と「手芸」は随意科目と設定されていた[105]。つまり、この項目に関しては、中国の「女子師範学堂章程」は「高等女学校令施行規則」を参照したとはいえない。

一方、日本の1892年の「尋常師範学校ノ学科及其程度」では、「尋常師範学校ノ女生徒二課スヘキ学科目ハ修身、教育、国語、漢文、歴史、地理、数学、理科、家事、習字、図画、音楽、体操」[106]と定められている。つまり、「教育」は尋常師範学校の必修科目になっている。そのため、「女子師範学堂章程」で「教育」を必修科目にしたことは、日本の師範学校関係の諸法制を参照したと考えられる。

「教育」の学科要旨を詳しく規定し、以下のように定めていた[107]。

> 教育の要旨は、女子小学堂教育、蒙養院保育、及び家庭教育の趣旨と法則を理解することによって、教育者としての精神を養うことである。その教授程度は、まず教育の原理を教えることで、心理学の要点、男女の区別を了解させ、並びに道徳教育、知能教育、体育教育の原理を理解させる；そして、家庭教育の方法を教える；さらに、蒙養院での保育方法を教える；また、小学校での指導、管理の方法を教授し、並びに家庭教育と学校教育の関係を理解させる；最後に、附属女子小学堂や蒙養院で児童指導、保育方法の実習を行わせる。

以上から、教育という科目によって、女子小学堂教育、蒙養院保育、及び家庭教育の趣旨と法則、教育原理、心理学、男女の区別、家庭保育法、蒙養院保育法、小学堂での指導、管理の方法、家庭教育と学校教育の関係が教えられることがわかる。(以上の各種類の下線は、「女子師範学堂章程」の教育の学科要旨と、次に検討する「高等女学校教授要目」とそれぞれ対応している部分である)。

そして、このような内容は、1903 年 3 月 9 日文部省訓令第二号「高等女学校教授要目」を参考にして作られたと考えられる。その規定は以下のようになる[108]。

> 教育　第四学年　毎週 2 時
> 緒論
> 心ノ状態

心ノ観察法、意識、注意、感覚、知覚、観念、記憶、想像、概念、言語ノ発達、断定、推理　感応、情緒、情操、衝動　本能、欲望、意志　知的及徳的陶冶　心身ノ関係、男児及女児、個性

教育

家庭教育、児童心体ノ養護、遊戯及手技、説話、命令賞罰

幼稚園保育、其ノ方法

学校教育　教授、訓練、家庭教育ト学校教育、家庭教育ト国家

下線で示したように、「女子師範学堂章程」の教育の学科要旨は、「高等女学校教授要目」をモデルにして制定されたことが確認できる。また、韓韡によれば、長谷川乙彦によって作成された教科書『新編女子用教育学』は、「高等女学校教授要目」を参考したとされている[109]。長谷川は同書の「序言」で、「文部省所定の教授要目に遵ひ、高等女学校の教育科用とせんことを主としたけれども、猶女子師範学校用又は女教員の講習用」[110]としても活用可能であると説明している。それに倣い、中国では翻訳された同書を教科書として女子師範学堂で使用していた。次に、その両教科書を対比して、中国の女子師範学堂用教科書の特徴を探る。

3. 女子師範学堂用教科書

長谷川乙彦の『新編女子用教育学』は覃壽恭によって翻訳され、『女子師範教育学』という書名となっている。では、覃の翻訳した『女子師範教育学』はどのような保姆養成に関する内容が含まれたのか、そしてどのような特徴をもっているのか。以下、『新編女子用教育学』と『女子師範教育学』の目次を対比して探る。表 5－8 は、両書の目次を対比したものである。

表 5-8　『女子師範教育学』と『新編女子用教育学』の目次対比表

覃壽恭『女子師範教育学』1906 年	長谷川乙彦『新編女子用教育学』1903 年
第一編　緒論	第一編　緒論
第一章　教育之意義	第一章　教育の意義
第二章　教育之必要	第二章　教育の必要
第三章　教育界限	第三章　教育の限界
第四章　教育之標準	第四章　教育の目的
第五章　教育者	第五章　教育者
第六章　教育之時期	第六章　教育の時期
第七章　教育学	第七章　教育学
第二編　心意状態	第二編　心意の状態

第一章　心之観察 第二章　心意状態之区別 第三章　意識 第四章　注意 第五章　感覚 第六章　知覚及直観 第七章　知覚之発達及教育 第八章　観念 第九章　記憶 第十章　想像 第十一章　概念 第十二章　言語之発達 第十三章　断定 第十四章　推理 第十五章　感情 第十六章　情緒 第十七章　情操 第十八章　意志及品性 第十九章　心身の関係 第二十章　個性	第一章　心の観察法 第二章　心意状態の区別 第三章　意識 第四章　注意 第五章　感覚 第六章　知覚及び直観 第七章　知覚の発達及び教育 第八章　観念 第九章　記憶 第十章　想像 第十一章　概念 第十二章　言語の発達 第十三章　断定 第十四章　推理 第十五章　感情 第十六章　情緒 第十七章　情操 第十八章　意志及品性 第十九章　心身の関係 第二十章　個性
第三編　家庭教育 第一章　家庭教育之要義 第二章　家庭教育之時期及方法 第三章　養育之要義 第一節　養護 第二節　運動 第三節　鍛錬 第四章　訓育之要義	第三編　家庭教育 第一章　家庭教育の要義 第二章　家庭教育の時期及方法第三章養護 第四章　運動 第五章　鍛錬 第六章　訓育
第四編　幼稚園保育 第一章　幼稚園之本旨 第二章　保育之方法	第四編　幼稚園保育 第一章　幼稚園の本旨 第二章　保育の方法
附編　幼稚園教育法 幼稚園図説 幼稚園手技一覧表 幼稚園恩物之作法図	
第五編　学校教育	第五編　学校教育

第一章　小学校之本旨	第一章　小学校の本旨
第二章　体育	第二章　体育
第三章　教育	第三章　教授
第四章　訓練	第四章　訓練
第五章　家庭教育與学校教育	第五章　家庭教育と学校教育と
第六章　家庭教育與国家	第六章　家庭教育と国家と

出典：覃壽恭『女子師範教育学』湖北新学界書局、1906 年。長谷川乙彦『新編女子用教育学』三松堂、1903 年。

以上の対比から、中国の『女子師範教育学』は基本的には、日本の『新編女子用教育学』を忠実に翻訳する形で作られたことがわかるが、「幼稚園教育法」が附編として付け加えられている。「幼稚園教育法」の付け加えられた理由としては、幼稚園に関する内容が少なかったことが考えられる。長谷川乙彦の『新編女子用教育学』では「幼稚園保育」が収録されたが、その分量は全体 165 頁のうち、8 頁しか占めていなかった。覃壽恭自身もこの点について、凡例で「原書には幼稚園の編が非常に簡単であったため、編訳者は塚本岩三郎の新書、幼稚園用手技図説を訳して補完させた」[111]と記していた。このように、中国の『女子師範教育学』における、保育者養成の教育に関する内容は、第四編の「幼稚園保育」と附編「幼稚園教育法　幼稚園手技図説」から成っている。次に、これらの内容について検討する。

まず、第四編の「幼稚園保育」は「第一章　幼稚園の本旨」と「第二章　保育の方法」から構成されている。幼稚園の本旨では、幼稚園が三歳より小学校に入学するまでの子どもを保育する場所であることを示し、幼稚園の目的を「幼児の心身を健全に発達させ、善良なる習慣を獲得させ、以て家庭教育を補完」[112]することと、簡単に紹介していた。また、保育の方法では、保育項目を「遊戯」「唱歌」「談話「手技」の 4 つに分けて、それぞれ簡潔に説明している。それらは基本的に、「奏定学堂章程」の中に定められていた蒙養院の保育内容と同様であり、例えば遊戯は、随意遊戯と共同遊戯があったことや、手技は恩物を中心として展開されることが含まれている。

そして、附編「幼稚園教育法　幼稚園手技図説」では、「幼稚園図説」、「幼稚園手技一覧表」と「幼稚園恩物之作法図」から構成されている。ここで、3 歳から 6 歳までの子どもは、年齢によって 3 から 4 歳は 3 等、4 から 5 歳は 2 等、5 から 6 歳は 1 等というように 3 つに区分されている[113]。そして、それぞれの年齢に応じて保育内容が異なることが明示されていた。附編「幼稚園教育法　幼稚園手技図説」で取り扱っていた内容は「手技」に限られており、恩物の方法について詳細に解説されていた。例えば、積み木は第一積み木から第四積み木まで組成され、第一積木は「正方体四つ。長方体四つ。正方体、即ち正立方体である。長方体、幅は正方体と同一、長さが 2 倍、厚さは半分」[114]というように、詳しく積み木の形状が描写されていた。また、面の大・中・小の違いを知ることで、縁の長さを比べて遊び、また積み上げすることで建築するといった遊び方が提示されている[115]。このように、恩物の

形状やその遊び方が詳しく紹介されており、翻訳者は保育実践での指導方法を重視していたことがわかる。そのため、同教科書を採用していた女子師範学堂では、主に恩物の使用方法の教育に力が入れられていた。

これらの女子師範生は卒業後、三年以内に女子小学堂あるいは蒙養院で勤務することが義務付けられており、勤務を拒否すれば、一切の在学期間の学費は学堂に返上することになっていた[116]。この制度により、清政府は教員を短期間で大量に養成することが可能になったのである。

最後に、以下の３点から、清朝末期の中国官立保姆養成機関（女子師範学堂）をキリスト教系保育者養成機関と比較し、それぞれの特徴を考察する。

第 1 に、保姆養成機関について、キリスト教系保育者養成機関は独立した教育機関であった。それに対して、中国官立保姆養成機関は独立したものではなく、女子師範学堂の一部であった。キリスト教系保育者養成機関に比較して、中国官立保姆養成機関の整備は遅れたと言えよう。

第 2 に、保姆養成機関のカリキュラムについて、キリスト教系保育者養成機関は基準化の動向が見られるが、まだ全国的に統一されたカリキュラムは設けられていなかった。各キリスト教系保育者養成機関では、それぞれ独自のカリキュラムが設けられていた。それに対して、中国官立保姆養成機関は最初から、「女子師範学堂章程」が制定され、統一されたカリキュラムが存在していた。

第 3 に、保姆養成機関の教育内容について、キリスト教系保育者養成機関は統一されていなかったが、基本的に保育の本質・目的に関する科目、保育の内容・方法に関する科目、保育実習に関する科目、宗教科目、教養科目が設けられていた。その中で、保育に関する内容は保育の本質・目的、保育の内容・方法、保育実習に細かく分けられ、保育の専門的知識が教えられていた。他方、中国官立保姆養成機関は女子中等教育レベルの内容、修身、教育、国文、歴史、地理、算学、格致、図画、家事、裁縫、手芸、音楽、体操が教授され、保育に関する内容は保育理論を含めず、恩物の使用方法が中心となっていた。すなわち、中国官立保姆養成機関の教育内容は実践的傾向が強かった。そして、「女徳」や「女は内を主とする」といった従来の中国の女子に対する教育内容が色濃く残されていた。

注

[1] 一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」1992 年、辻本雅史 監修、湯川嘉津美・荒川智 編著『論集現代日本の教育史 第 3 巻 幼児教育・障害児教育』所収、日本図書センター、2013 年、97 頁。

[2] 何京玉「中華民国期における保育者養成制度」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』第 55 号、2006 年、193 頁。

[3] 1919 年の「五・四運動」後、中国のナショナリズムの高まりにつれて、教会学校が批判

の対象となった。キリスト教保育者養成機関も、1920 年頃の反キリスト教運動の中で衰退していく。

[4] 楊玉珍は、当時のキリスト教宣教団体により創立された保育者養成機関は「少なくとも４ヶ所」あって、これらの保育者養成機関が「幼稚園の創立に一定の役割を果たした」と結論づけている。（楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」筑波大学博士学位論文、1992 年、151 頁。）

[5] 「奏定学堂章程」は 1904 年に発布され、中国における最初に実施された学制である。「奏定学堂章程」には幼児教育とその教員養成に関する「蒙養院及家庭教育法章程」も含まれている。（中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、93-94 頁。）

[6] この点について、一見真理子は、「当時日本留学生のなかに革命運動に身を投じる女学生もあったこと」から、「女子の学校教育は、清朝の支配体制のために避けるべきことが優先された」と指摘している（一見真理子「20 世紀初頭、海を渡った幼児教育―中国の場合―」太田素子・湯川嘉津美編著『幼児教育史研究の新地平　上巻　―近世・近代の子育てと幼児教育―』萌文書林、2021 年、214 頁）。

[7] 多賀秋五郎『中国教育史』岩崎書店、1955 年、148 頁。

[8] 同上、144 頁。

[9] この傾向は、当時の初等教育段階の教会学校の分布と一致している。多賀は「初等教育を行う教会学校は（中略＝引用者）産業的・政治的に重要な海港や長江沿岸、あるいは華北の平原に非常に多かった」と指摘している（同上、150 頁）。

[10] 外務省『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』1929 年、213 頁。

[11] 「基督教女子教育」1914 年、李楚才『帝国主義侵華教育史資料―教会教育―』教育科学出版社、1987 年、239 頁。

[12] “Baptist Conference on Education,” *The Chinese Recorder,* Vol.47, Issue3, Mar, 1916, p.200.

[13] 外務省、前掲書、145 頁。

[14] 阿部洋『中国教育史』日本図書センター、2006 年、149 頁。

[15] 同上。

[16] Nevada Martin, “The Present Outlook for the Kindergarten in China,” *Educational Review*, Vol.6, No.1, 1913, p.15.

[17] Ching Leung, “Program Making in a Chinese Kindergarten,” *Educational Review*, Vol.4, Issue10, Oct, 1911, p.10.

[18] “A Kindergarten Survey in China,” *Educational Review*, Oct, 1911, p.2.

[19] 加藤恭子「20 世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報（18)』、2015 年、76 頁。

[20] 多賀秋五郎、前掲書、145 頁。

[21] Burton Margaret E, *The Education of Women in China*, 1885, p.201.

[22] “A Kindergarten Survey in China”, *op.cit*., p.2.

[23] James Earl Russell, “Mrs. Lew Holds Important Post in China,” *Teachers College Record*, vol.17, p.307.

[24] Nevada Martin, “Soochow Kindergarten Training School,” *Woman's Work in the Far East*, 1912, p.157.

[25] Kiang Jitsung, “Mother Play,” *The National Review,* Vol.12, 1912, p.123.

[26] *Ibid*., pp.123-124.［］内引用者。

[27] *Ibid*.

[28] *Ibid*., p.156.

[29] その三大教会の一つ目はアメリカンボードである。後に会衆派教会（公理会）となり、最後に中華基督教会閩中協会と呼ばれた。二つ目はメソジスト教会であり、衛理公会とも

呼ばれる。三つ目は英国聖公会であり、英国にあるキリストの教会で、安立間会とも呼ばれる。三大教会は、いずれもアメリカやイギリスの教会の直轄で、彼らから直接資金を調達していた。（福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編　第五巻』福建人民出版社、2003 年、393 頁。）

[30] 林家溱「略憶福州協和幼稚師範学校」1965 年、福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編　第五巻』所収、福建人民出版社、2003 年、394 頁。

[31] Bertha H. Allen, *op.cit*., pp.84-85.

[32] 林家溱、前掲、395 頁。

[33] 同上。

[34] 日本の保育者養成学校の女学生たちも英語で授業を受けていた。例えば、桜井女学校幼稚保育科を卒業した学生は英語で卒業論文を書いていた。また、桜井女学校附属幼稚園では『母の歌と愛撫の歌』の中の遊戯歌を翻訳せずに、英語のリズミカルテンポのままで使用していた。（永井優美『近代日本保育者養成史の研究―キリスト教系保姆養成機関を中心に―』風間書房、2016 年、75 頁。）

[35] 日本における宣教師も主にアメリカで高等教育を受けていた。この点について、永井優美は「キリスト教系保姆養成機関における保姆養成がアメリカ人宣教師によって担われ」、「彼女らは母国で保姆養成を受け、教育経験を積んだ上で来日し、アメリカ基準の養成を行った」と述べている（永井優美、同上、353 頁）。

[36] Nevada Martin and Margarita Park, “Missionary News Kindergarten Association,” *The Chinese Recorder*, Vol.42, 1911, p.722.

[37] “The Central China Kindergarten Association,” *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.19.

[38] *Ibid*.

[39] マーティンはメソジスト派の一員であった。（“The Results from Questionnaires on the Kindergarten,” *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p. 6.）

[40] “Constitution of the Central China Kindergarten Association” *Educational Review*, Vol.4, Oct, 1911, p.21.

[41] “The Central China Kindergarten Association,” *op.cit*., p.19.

[42] *Ibid*.

[43] “An Appeal for Kindergartens in China,” *The Chinese Recorder*, Vol. 43, Oct, 1912, p.623.

[44] *Ibid*., p.621.

[45] Kate B. Hackney, “Fourth Annual Meeting of the Central China Kindergarten Association,” *Educational Review,* Vol.8, Oct, 1916, p. 327.

[46] *Ibid*.

[47] 永井優美『近代日本保育者養成史の研究』風間書房、2016 年、318 頁。

[48] 北野幸子「19・20 世紀転換期アメリカにおける保育の専門職化プロセス―国際幼稚園連盟(IKU)を中心に―」『中国四国教育学会　教育学研究紀要』第 45 巻第 1 部、1999 年、507 頁。

[49] 永井優美、前掲書、341 頁。

[50] 北野幸子、前掲、509 頁。

[51] “The Central China Kindergarten Association,” *op.cit*., p.19.

[52] *Ibid*.

[53] 北野幸子、前掲、509 頁。

[54] 中国の俗語「男主外，女主内」のことである。

[55] 末次玲子『二〇世紀中国女性史』青木書店、2009 年、４頁。

[56] 同上。

[57] 崔淑芬『中国女子教育史―古代から 1948 年まで―』中国書店、2007 年、21 頁。

[58] 鈴木由次郎『全訳漢文大系第九巻　易経　上』集英社、1974 年、539 頁。
家人、女正位乎内、男正位乎外。男女正、天地之大义也。家人有严君焉、父母之谓也。父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、妇妇、而家道正。正家而天下定矣。
[59] 「三従」は従うべき三つのことで、幼い時は父親に従い、嫁いだ後には夫に従い、年老いたら子どもに従うべきであるということ。「四徳」はいつもの生活で心がけるべき四つのことで、女性としての節操を守ることをいう婦徳、言葉遣いをいう婦言、身だしなみをいう婦容、家事をいう婦功のこと。
[60] 崔淑芬、前掲書、25 頁。
[61] 同上、38 頁。
[62] 原文：婦行第四。女有四行。一曰婦徳、二曰婦言、三曰婦容、四曰婦功。 夫云婦徳、不必才明絶異也。婦言不必弁口利辞也。婦容不必顔色美麗也。婦功不必技巧過人也。幽間貞静、守節整斉、行己有恥、動静有法、是謂婦徳。択辞而説、不道悪語、時然後言、不厭於人、是謂婦言。盥浣塵穢、服飾鮮潔、沐浴以時、身不垢辱、是謂婦容。専心紡績、不好戯笑、潔斎酒食、以奉賓客、是謂婦功。此四者、女人之大節、而不可乏無者也。然為之甚易。唯在存心耳。古人有言、仁遠乎哉、我欲仁而仁斯至矣。此之謂矣。列女伝第七十四「曹世叔妻」『後漢書』中華書局、1988 年、2789 頁。（訳文：崔淑芬「中国の女子教育思想と儒教」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』(25)、2014 年、165 頁。）
[63] 中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、93 頁。
[64] 董秋艶『近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究』、9 頁。
[65] 呉汝綸演述、大澤豊子速記「女子の教育に就て」『日本婦人』36 号、明治 35 年 10 月 25 日。
[66] 同上、51 頁。
[67] 「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」、中国学前教育史編写組、前掲書、93 頁。
[68] 同上、95 頁。
[69] 同上。
[70] 下田歌子『家政学　上』博文館、1893 年。
[71] 下田歌子『家政学　下』博文館、1893 年。
[72] 同上、94 頁。
[73] 同上。
[74] 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史　第四巻』竜吟社、1938 年、97 頁。
[75] 同上。
[76] 同上、93 頁。
[77] 同上、95 頁。
[78] 「湖北幼稚園開弁章程」中国学前教育史編写組、前掲書、105 頁。
[79] 何暁夏『簡明中国学前教育史』北京师范大学出版社、2014 年、120 頁。
[80] 陳元晖『中国近代教育史資料汇编』上海教育出版社、2007 年、9 頁。
[81] 同上、120 頁。
[82] 『張文襄公全集』105 巻、公犊二十。
[83] 一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」、前掲、91 頁。
[84] フルネーム不詳
[85] 楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」、1992 年、156 頁。
[86] 厳仁清「回忆祖父严修在天津创办的幼儿园」、中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』人民教育出版社、1989 年、111 頁。
[87] 同上。
[88] 張伯苓と厳修によって 1904 年に創設された。南開大学の前身。
[89]「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』1984 年、71 頁。

[90] 同上。
[91] 厳仁清、前掲書、112 頁。。
[92] 同上。
[93] 崔淑芬、前掲書、192 頁。
[94] 末次玲子、前掲書、22 頁。
[95]「女子師範学校章程」1907 年、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』日本学術振興会、460 頁。
[96] 同上、468 頁。
[97] 同上、460 頁。原文：以養成女子小学堂教習並講習保育幼児方法期於裨家計有益家庭教育為宗旨。
[98] 同上。原文：教授女师范生须副女子小学堂教科蒙养院保育科之旨趣使适合将来充当教习保姆之用。
[99] 同上。
[100] 同上、461 頁。
[101] 同上、462 頁。原文：女子师范学堂当附属女子小学堂及蒙养院一所以便师范生实地练习。
[102] 同上、461 頁。
[103] 韓韡「中国近代女子教育における日本受容」、名古屋大学博士論文、2014 年、41 頁。
[104] 同上、111 頁。
[105] 「高等女学校令施行規則」1901 年、文部省教育調査部『高等女学校関係法令の沿革』1941 年、22 頁。
[106] 大蔵省印刷局『官報』1892 年 07 月 11 日、109 頁。
[107] 「女子師範学校章程」1907 年、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』、461 頁。
[108] 「高等女学校教授要目」1903 年、文部省教育調査部、前掲書、72 頁。
[109] 韓韡「中国近代女子教育における日本受容」、名古屋大学博士論文、2014 年、41 頁。
[110] 長谷川乙彦『新編女子用教育学』三松堂、1903 年、1 頁。
[111] 覃壽恭『女子師範教育学』湖北新学界書局、1906 年、1 頁。
[112] 同上、55 頁。
[113] 同上、61 頁。
[114] 同上、68 頁。
[115] 同上、69 頁。
[116] 「女子師範学校章程」1907 年、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』、463 頁。

終章

本研究では全五章にわたって、20 世紀初頭中国における幼稚園教育の成立について、その背景と過程、制度的枠組み、さらには教育の実態の一端を考察してきた。終章では、課題ごとに考察結果をまとめる。個々の考察結果は本文で詳述したため、ここでは序章で示した検討課題、即ち①中国の伝統的な幼児教育、②中国における幼稚園創設の経緯とその理念の英米からの影響と日本からの影響、③清末の幼稚園の実態、④保育者養成機関の実態に即してまとめる。さらに、全体のまとめとして、プロテスタント宣教師によるキリスト教系幼稚園と清末政府と中国人資産階級（実業家）による「日本型」幼稚園に分けて、両者を比較し、その相違点を明確にする。

１．中国の伝統的な幼児教育

第一に、幼稚園が中国に導入される前、儒教社会という中国（主に清朝期）における子ども観について、男女別、そして階層別に検討した。

儒教社会において、男児はこの世にいない先祖の存続の証とみなされ、非常に大切な存在だと考えられる。子どもの最大の役目の1つは、家を継ぎ、家系を永続させることにあった。しかし、同じ男児であっても上層階級と下層階級では、家業が異なることから、その役目や育てられ方は大きく異なっていた。上層階級の男児は幼い頃から教育を施され、官吏登用試験という科挙試験に参加させられた。これは清代家族制度における学ぶことによって立身出世を目指す子ども像である。それに対して、下層階級の男児は、早くから労働の担い手となって一家の生計を補助的に支えることが重要であった。

次に、女児について見ると、上層階級の女児は、纏足の慣習によって家内に閉じ込められ、「親の所有物」「将来の他人の嫁」として「女徳」を身につけるための生活を送っていた。そこでは、徳はあっても自由は認められていなかった。下層階級の女児に関しては、望ましくない存在と認識され、誕生後に間引きされることも少なくなかった。そして、「もの」として売られ、富裕層の家で下女として使役させられることもあった。

以上のように、儒教社会の封建中国において、上層階級の男児、下層階級の男児、上層階級の女児、下層階級の女児の 4 類型の子どものうち、上層階級の男児と一部の下層階級の男児だけが、知的・訓育的教育を受けていた。それ以外の子どもたちは労働、農作業、家事に従事したり、「物」として使われ、学校に通う機会がなかった。

第二に、幼稚園が導入される以前、儒教社会の子ども観に基づいて、幼児期の子どもがどのような教育を受けていたかについてまとめる。清末以前の中国には、幼児の発達に合わせて考案された特別な教育機関、つまり幼稚園に相当するものはなかった。子どもは主に家庭で教育を受けていた。そのため、当時中国の幼児教育の主な形態は家庭教育であった。しかし、家庭教育が主流である中で、「蒙学」と呼ばれる私立教育機関（私塾、社学、義塾）でも蒙養教育が行われていた。このように、当時の幼児教育形態には、家庭教育と私立学校教

育の２つが認められる。両者の教育形態は互いに影響し合いながら、交錯していた。このような古代中国の特色のある伝統的な幼児教育は「蒙養教育」と名付けられていた[1]。蒙養教育とは、一般的には 7、8 歳から 15、16 歳までの子どもの教育を指すが、4、5 歳、5、6 歳の子どもの教育を指す場合もある。「蒙養教育」の目的は道徳的な資質を養う、教養の基礎を固める、子どもの性質を守るということにあり、とくに道徳と教養に関する目的は、それぞれ前述の祖先を祭る子ども像と、勉学によって立身出世する子ども像と対応する。以上の目的を実現するために、学校や家庭で道徳教育、知識教育、詩礼楽教育がなされていた。

祖先を祭る役割を担う子ども像に基づいて、先祖に「孝」を尽くすことが子どもに要求された。つまり、幼児期の教育は「孝」を中心とした道徳教育であった。そして、勉学によって立身出世する子ども像に基づき、知識教育が行われた。知識教育は基本的に、識字教育から始まる。『千字文』『百家姓』『三字経』は子どもに文字を教える教科書と使われた。それと同時に、常識、文化なども教えられていた。また、子どもに詩礼楽の教育が課せられた。礼楽についての教育は、本質的に、儒教社会の秩序維持を目的とする徳育的な側面をも有するものであった。

一方、上層階層の女児に対する教育を見ると、儒教社会において女性は「三従」しなければならない存在であったため、「女徳」が求められている。女児には独自の「女徳」教育が行われていた。

以上のような伝統的な幼児教育は、清政府設立された官立幼稚園だけではなく、民間幼稚園、さらにキリスト教系幼稚園にも大きな影響を与えることになった。

２．中国における幼稚園の創設の経緯とその理念：キリスト教団体の影響、日本の影響

中国では、1880 年代にキリスト教団体によって幼稚園が作られ、もう一方で 1904 年に最初の官立幼稚園である湖北幼稚園が日本の影響を受けて設立された。つまり、中国における幼稚園の創始は、総じて外国からの影響が大きいものであった。

まず、キリスト教系幼稚園の創設の背景に関連して、宣教師の中国における伝道活動をまとめると、以下の 4 段階に分けることができる[2]。

19 世紀初め、対外貿易や政治干渉の活発化に伴い、工業化の進んだ英米両国を中心に、プロテスタント系宣教会の中国進出が開始された。中国におけるプロテスタント・キリスト教史は、1807 年にロバート・モリソン（Robert Morrison 馬礼遜）の到来により始まり、第 1 期は 1807 年から 1860 年の北京条約までの準備期であり、また 1842 年の南京条約によって前半と後半に分かれる。第 2 期は 1860 年から 1900 年の北清事変までの教会建設期である。第 3 期は 1900 年から 1949 年の中華人民共和国成立までの教勢発展期である。第 3 期の初期は、外国宣教師によって伝道が行われ、教会が活発に学校を作る時代であった。中国人が主体的に活動するのは 1910 年代からとなる。そして、中華人民共和国成立の 1949 年から現在に至るまでの期間が第 4 期である。本研究では、幼稚園の内容に関して主に第 3

期の初期を考察時期とした。伝道・出版活動と中国の宗教、子ども認識についても考察したが、本文で詳述したのでここでは改めて言及しない。

この時期におけるキリスト教伝道上の問題点は、中国本土の宗教信仰との対立が避けられないことにあった。キリスト教を信仰する場合、「唯一の神」を信じなければならない。そのため、プロテスタント宣教師は儒教を否定し、純粋なキリスト教伝道を行うことを望んだが、18 世紀の中国においてキリスト教は外来宗教として禁止されていた。そのため、プロテスタント宣教師は「まず聖書の中国訳の完成までを、中国伝道に於ける第一段階の目標」とするような、漸進的な伝道方針をとっていた。つまり、文書伝道と教育伝道はプロテスタント宣教師が最初に取った手段であった。

幼稚園を含むキリスト教系学校の設立は、以下の 2 点と関係があると考えられる。1 点目は、伝道の難しさと結びついていた。イギリス帝国の拡張に伴ういくつかの不平等条約の締結により、中国内の教会の勢力も拡張していた。また、1860 年の内地伝道解禁によって教会と中国の民衆が頻繁に接触し、問題も増加していった。そうした中で、反キリスト教運動とその根底にある反キリスト教感情も高まり、外国人による伝道活動は列強の侵略行為と認識され、中国人の抵抗を受けた。こうした状況を受け、教育活動を通しての伝道が改めて重視され、学校教育はキリスト教の布教にとって最も重要な手段の 1 つになっていった。幼稚園もこうした布教手段の一環として設立された。

2 点目は、宣教師たちの慈悲の心と関連すると考えられる。宣教師たちは当時の中国の子どもの惨状を目にする中で、同情の念を抱き、中国人の子どもを困窮状況から救うため、子どもに福祉、さらに教育を提供しようと考えた。こうして、貧しい子どもたちのために幼稚園を作ることが構想された。宣教師たちは、孤児や貧しい子どもたちを受け入れ、養育、教育する施設として児童養護施設を設立した。これがキリスト教幼児教育の萌芽となった。

しかし、この時期のキリスト教系幼稚園は、独立の教育機関として存立していたわけではなかった。むしろ、これらの幼稚園は貧困層への援助活動の一環として、教会内の慈善組織の下に設立された機関にすぎなかった。

19 世紀後半になると宣教活動が活発化し、中国本土でのキリスト教の教育事業はピークを迎えた。この時期から、宣教師も子どもの教育事業として幼稚園を設けた。1877 年の第 1 回中国プロテスタント宣教師総会の後、教会教育の世俗化が進み、幼稚園の目的も純粋に宗教教育を施すことから、子どもの成長のために、その心身の発達を助長することに移り変わった。こうした流れの中で、キリスト教幼稚園がいくつか作られ、1902 年当時、キリスト教幼稚園が 6 園あったことが確認できる[3]。それらのキリスト教系幼稚園は独立の教育機関になり、教育の世俗化に伴って、教育対象も下層階級の子どもから上層階級の家庭の子どもへと変わった。

幼稚園が設立される際、女性宣教師が大きな役割を果たした。中国への女性宣教師の派遣の要因としては 3 点が考えられる。第 1 に、男性宣教師の家族の一員として中国へ渡ったことである。第 2 に、欧米の独身女性自身が自己実現のために海外での宣教活動を望んだ

ことである。第 3 に、中国の一般女性への伝道という観点から見た場合、中国の伝統女性観に対応するために、女性宣教師の方が男性宣教師よりもその任を遂行し易い状況下にあった、ということがあげられる。本研究では、二人の女性宣教師のライフストーリーから、キリスト教女性宣教師の訪中以前の学習歴を検討した。まず、1 人目はビューラ・ウルストン（Beulah Woolston）である。ビューラ・ウルストンと妹サラ・H・ウルストン（Sarah H. Woolston）は、アジアで最初のアメリカ・メソジスト女学校の創立者であり、毓英幼稚園の創設者である。生まれ故郷で予備教育を受けた後、妹であり家庭や仕事で生涯の仲間であったサラ・H・ウルストンと共に、デリー州ウィルミントンのウェスリアン女子カレッジ（Wesleyan Female College, at Wilmington）に進み、英語と古典の両学科を優秀な成績で卒業した。もう一人の女性宣教師は福州協和女子幼稚師範学校の初代校長アレン（Bertha H. Allen）である。アレンはカリフォルニア州パサデナで生まれ育ち、ポモナ大学（Pomona College）とロサンゼルス州師範学校（Los Angeles State Normal）の幼稚園コースを卒業した。

アレンと同じ時代の女性宣教師たちがアメリカで学んだ保育者養成課程は、フレーベルの幼稚園教育思想を重視したものであり、恩物の原理とその使用方法も保育者養成内容に含まれていった。その後、こうした教育を受けた女性宣教師たちは中国へ渡り、自分の学んだ知識を活かし、中国の幼児教育に影響を与えたのである。これら女性宣教師のフレーベル思想の受容についても、この部分で考察したが、この点については、日本を経由した中国におけるフレーベル受容と対比させる形で後にまとめて記す。

次に、「日本型」幼稚園の導入についての考察結果をまとめる。その導入に大きな役割を果たしたのは、①中国官員と実業家、②中国の女子留学生、③中国の幼稚園に派遣された日本人女性教員であった。

まず、①の中国人の 1903 年前後の日本視察における幼稚園教育の把握について見ると、彼らの視察記録は 14 通もあるが、本研究では幼稚園について詳述していた項文瑞と方燕年などの視察記録を検討した。そこでは、東京、神戸、大阪などの都市の幼稚園において、教員数、園児数、保育時間、施設設備、保育費、遊具、保育内容・活動など多岐にわたる事項が報告されている。幼稚園の施設などについて、視察者達は教室の広さ、机や椅子の寸法など施設設備の状況を記録し、教育環境に注目していた。そして、遊具の中でも特に恩物に着目し、恩物を通して保育していることを把握している。さらに、視察した保育項目は「訓話、行儀、手技、唱歌、遊戯」の 5 つにまとめることができ、その中で「唱歌」について多く記録されていることが明らかになった。視察者は唱歌の内容までを確認し、唱歌が幼児の性格に肯定的な影響をもたらすと理解した。以上のように、彼らは、幼稚園の教育は直接的に知識を与えるのではなく、唱歌や遊戯という方法、すなわち幼児の活動を通して発達を促すものだ、という特徴を理解していた。

また、幼稚園を視察する際に官員と実業家が関心を持った点及びその相違について記すと、官員と実業家の間では、視察の際に注目した部分が大きく異なっていたことが明らかに

なった。官員達は修身という規律や礼儀を教える教育内容に注目し、実業家達は自由な遊びを含んだ教育内容を重視していた。官員達は、中国の伝統的幼児教育思想の中で礼儀や道徳が重んじられていたことから、日本においても共通点に着目したと考えられる。それは後に制定された中国の学制の性格につながったと言える。

さらに言えば官員らには、幼稚園は小学校の基礎、いわゆる就学前の準備段階という認識があった。一方、実業家の張謇は、幼稚園は幼児の成長する場所、自由に遊べる場所という捉え方をした点が特徴的であった。しかし、張が1904年に中国で幼稚園を創設した際には、修身、読み書きといった伝統的な幼児教育を重視し、視察結果が必ずしも十分に反映されない面があったことにも留意したい。ここでは官員と実業家の間に着眼点の相違があったことを指摘するに留めたい。

次に、②の女子留学生の日本で受けた幼稚園保姆養成教育の実態については、実践女学校を例に検討した。1907年の時点では、中国女子留学生を受け入れる日本の女学校は8校あって、その中で実践女学校の留学生数は最も多かった。実践女学校は下田歌子の女子教育への重要性の認識や日清連携の理念の下で、1905年に附属中国女子留学生師範速成科と工芸速成科を設けた。これらの速成科における学科課程では、当時の日本における主要な保育者養成機関である女子高等師範学校の保姆練習科と同様、教育、理科、図画、音楽といった学科目が設けられていた。実践を卒業した女子留学生は幼児教育の知識を身につけ、帰国後、中国の幼稚園の設立に携わることになった。

さらに、③の中国の幼稚園に派遣された日本人女性教員の活動の実態とその影響についての考察結果をまとめると、まずその数としては、1903年から1910年までに中国で幼稚園事業に従事した日本人女性教員は合計27人であることが確認できた。これらの女性教員が活動していた地域は、湖北、湖南、江蘇に集中している。特に半数以上の勤務地は湖北と湖南であった。それは、張之洞が1889年から1907年まで湖広総督を務めたことと大きな関係があると考えられる。清政府官僚張之洞が清末の教育改革を主導したため、彼が管轄した湖南、湖北省には多くの教員が招聘され、そしていち早く湖北幼稚園が設立されたのであった。日本人女性教員は中国の幼児教育の成立初期に、中国人の専門性を備えた人材が育成されるまで、支えとなった。

これらの日本人女性教員の日本での学習歴を考察した結果、清漢語学講習所の他、東京女子師範学校（1890年に女子高等師範学校と改称）から多くの卒業生が中国に派遣されている。その幼稚園教員養成の学科課程を分析すると、中国へ派遣された教員はいずれもかなりの程度幼児教育に関する専門的な知識を身につけた人材であったことがわかる。また、1879年の東京女子師範学校保姆練習科入学者数は年に10人ほどしかいなかったため、幼児教育を学んだ人物は貴重な人材だったとも言える。したがって、保育に関する専門的な知識を持ち、実際の教育経験もある専門性が高い優秀な人材が、中国に雇われていたと結論づけることができる。そして、これらの日本人教師は自分の専門的な知識を活かして、中国の幼稚園の実践においても大きな役割を果たしたのである。

次に、フレーベル思想の受容について、日本経由の場合と宣教師たちの場合の違いに注目したい。まず日本経由のフレーベル教育思想の受容について記す。フレーベルが幼児教育のために開発した「恩物」は、1876 年にアメリカで開かれた万国博覧会経由で日本へ紹介された。その後、東京女子師範学校附属幼稚園の初代園長関信三が『幼稚園法二十遊嬉』(1879)を著し、幼稚園関係者の間に恩物の使い方を広めた。そして同書は 1903 年に、小俣規義によって中国の教育雑誌『教育世界』(第 46 号)に「幼稚園恩物図説」として翻訳、紹介された。しかし、『幼稚園法二十遊嬉』と「幼稚園恩物図説」は共に、恩物の形とその遊び方だけが述べられており、その背後にあるフレーベルの教育哲学、「神」を中心とした幼児教育思想については触れていなかった。この点について、楊玉珍も「清朝末期中国に伝わったフレーベルの恩物の理論は、日本の明治中期頃までの場合と同じように、フレーベルの恩物の技術的な側面にとどまっていたのである」[4]と評価している。このように、中国の幼稚園は日本のフレーベル主義幼稚園をモデルとして出発したとされるが、日本の幼稚園では恩物が教育遊具として用いられる傾向が強かったことから、日本を経由して中国に導入されたフレーベルの教育思想もまた、恩物を中心として受容されたと言えよう。

しかし、その一方、宣教師たちのフレーベル受容を見ると、宣教師たちは恩物以外の側面やフレーベルの宗教思想について触れており、彼らのフレーベル受容は恩物だけに焦点化されていたわけではなかった。キリスト教宣教師は、フレーベルの幼児教育理論について、①幼稚園の保育内容、②幼稚園の創設目的、③幼稚園の教師の資質と子ども理解、④神思想、を中心に受容していたことが明らかである。特段、その保育内容については、恩物、作業物による遊びと、物語、歌などを含む朝の会、体を動かす活動、自然との関わりから構成されているものとして受容された。フレーベルの幼児教育思想の中核をなす遊びについても、意義、種類、仕事との違いの側面から、その重要性について理解されている。しかし、恩物について触れている宣教師はほとんどいなかった。したがって、宣教師たちは、日本経由の恩物偏重の受容とは異なり、恩物を含むフレーベルの遊び論全体を受容していた、と結論付けることができる。すなわち、当時の中国には恩物を教育遊具としか見ないフレーベルと、恩物の奥に神の摂理を見出すフレーベルといった、2 種類の水準のフレーベル理解が存在していた。

第 3 章で幼児教育制度の発足を検討したが、1904 年に中国教育史上初の幼児教育に関する法令である「蒙養院及び家庭教育法章程」が頒布された。それは、日本の 1900 年の「小学校令施行規則」と類似しながらも、当時の中国の伝統的文化や国内状況の影響を受けて、独自性を含む規程となっていた。そして、この制度上の特徴、つまり従来の伝統的な文化の影響を強く受けていた側面は幼稚園での教育実践にも影響を及ぼした。

以上、キリスト教団体の影響の下のキリスト教系幼稚園、そして日本の影響の下の「日本型」幼稚園の、それぞれの創設の経緯とその理念について明らかにした。両者はそれぞれの意図をもって幼稚園を創設したため、2 種類の幼稚園の実態も後述するように、異なっていた。

３．清末の幼稚園の実態

本研究では、清末の幼稚園の実態について、キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園に分けて考察した。

まず、キリスト教系幼稚園の実態について、保育計画・保育内容・方法等を分析することによって、キリスト教系幼稚園の性格を考察した。キリスト教系幼稚園では長期的計画と短期的計画が立案され、またそれらの計画は子どもたちの発達段階を考慮した具体的な保育計画であった。その長期的計画は「自然」「家庭」「祭り」という３つのテーマから構成されており、いずれも子どもの生活と直接関わる内容である。計画案では子どもに実際の社会生活を見学させるだけではなく、「積み木や其他の材料」を使って、表現活動を通じて子どもたちに経験の意味を理解させるようとしていた。興味深い点は、キリスト教系幼稚園でも、保育計画には中国の伝統行事が組み込まれ、フレーベル主義保育と中国の伝統との融合がみられることである。また、キリスト教と関係する行事ではなく、子どもの身近な中国の伝統行事が重視されていた。

そして、保育内容としては、①遊具・作業具による遊戯と作業、②運動遊戯（歌を伴うもの、歌なしの競争、ボール遊び)、③自然との関わり、作業のひとつとしての栽培活動が行われていた。

キリスト教系幼稚園の特徴は、「遊び」が主な教育内容となっていることであり、特に恩物を使った遊戯と運動遊戯が両方実践された。前述したように、宣教師たちは恩物を特別視はせず、遊び論全体を受容していたが、実際幼稚園の実践では恩物が大いに使われている様子が記録され、保育内容として一定の比重を占めていた。それにしても、恩物を遊具として使わせる際、歌と関連させ、生活の中の事物を再現するなどの工夫がなされており、恩物の形式的な操作方法とは大きな違いがあった。

一方、中国人によって作られた「日本型」幼稚園の実態を検討したが、湖南官立蒙養院では「蒙養院及び家庭教育法章程」を基に、「行儀」「読方」「数方」の３項目を加え、さらに地方の特色のある教育内容を取り入れていた。そして、その中の「行儀」「読方」「数方」は日本からの影響を受けているだけでなく、中国の伝統的な幼児教育から大きな影響を受けている。要するに、湖南官立蒙養院は日本の幼稚園モデルを参照しながら、同時に儒教的な保育内容も取り入れ、小学校準備教育相当の教育を行っていた。

他の官立幼稚園も湖南官立蒙養院と同じく、「行儀」「読方」「数方」の３項目を付け加えることが多く、これらの幼稚園でも日本からの影響や中国の伝統的な幼児教育からの影響を確認することができる。以上のように、教育制度の近代化を目指した清政府は、幼児教育段階から系統的に近代的な人材を育成する目的で幼稚園教育制度を導入したが、儒教思想の影響から中国伝統文化に基づいた幼児教育も取り入れていた。いわば、「伝統に基づいた近代化」が行われていたのである。そのため、官立幼稚園教育の特徴は、日本の幼稚園をモデルにして、「学習」が主な教育内容になっていたことにある。それは、「小学校の基礎」「就学前の準備段階」としての性格を持っており、日本視察官員の認識にも表れているように、

修身などを重視した伝統的な儒教思想を強く帯びたものであった、と理解できる。また、恩物の使い方や手順が細かく定められ、日本の幼稚園同様、形式的な操作方法に頼る傾向にあった。

さらに、実業家張謇によって作られた幼稚園も、官立幼稚園と同じく、日本から大きく影響を受けながらも、修身、読み書きといった伝統的な幼児教育を取り入れていた。具体的に言うと、張謇は視察中、遊びを中心とした保育内容に注目し、遊びを保育内容にも設けていたが、遊びを幼稚園のメインとすることはなかった。その要因は、中国を支配してきた儒教と科挙制度と関係がある。儒教や科挙制度の下、中国の伝統的幼児教育は道徳教育（修身）や知識教育（読み書き）を中心となっていた。このような社会の中で、幼稚園の内容として、中国の伝統的幼児教育を切り離すことは難しかった。

以上述べたように、キリスト教系幼稚園では「遊び」を重視し、他方「日本型」幼稚園では「学習」を重視していたと言えるが、「日本型」幼稚園を視察したキリスト教宣教師も、そこにおいて「遊びの学校と『学習』の学校」の両方の機能が要求されていた、と記している。宣教師から見て、遊びの学校は幼稚園の本来の機能であることから、「学習」の幼稚園が存在することが注目のポイントになった。このように、中国の幼稚園には「小学校化」の傾向があるという特徴を、宣教師が十分認識していたのである。

その結果、キリスト教系幼稚園の中にも「学習」を取り入れるかどうかという問題が当時生じていた。そして、この問題に対する宣教師の答えは、園児の属する社会階層によって異なるというものであった。当時の中国の幼稚園は基本的には上層階級を対象にしており、園児の社会階層は中国の幼稚園へ「学習」を取り入れる理由の１つでもあった。上層階級の親たちは、子どもが勉強することによって立身出世することに期待を寄せ、上層階級の男児は幼い頃から教育を施され、官吏登用試験という科挙試験に参加させられた。これは清代家族制度以来の子ども像である。そのため、幼稚園が導入されても、完全に遊びを受け入れることができず、中国側の「日本型」幼稚園ではほとんど漢字の「読み書き」が教えられた。しかもこれは官立幼稚園でのみ見られた現象というわけではなく、実業家の創立した私立幼稚園でも「小学校」的な教育内容が取り入れられていた。つまり、幼稚園における「読み書き」の指導といった「学習」の内容は中国の伝統的家族制度の帰結であり、当時中国上層階級の親の要望によって実施されていた。そして、宣教師はこのような中国上層階級の親のニーズに注目をしていたのである。

このように、親の考えに合わせ、「識字」「算数」の保育項目が、それまで「遊び」を中心としたキリスト教系幼稚園においても行われていたのである。しかし、キリスト教系幼稚園では、教育方法を工夫し、遊びを通しての算数学習や物語を通しての文字学習が導入されていた。一方、「日本型」幼稚園はキリスト教系幼稚園から影響を受けていない。

以上、キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園の実態を対比的にまとめた。2 種類の幼稚園は、それぞれの特徴をもち、両者を合わせてみると、フレーベル幼稚園の中国での受容の相違が明らかになる。

４．保育者養成機関

中国における保育者養成は、幼稚園の導入と共に開始されている。また、保育者養成機関については、幼稚園の場合と同様にキリスト教系の機関と「日本型」の機関の 2 種類が存在していた。

当時はキリスト教系機関が中国の保育者養成教育を主導していたのであり、特に女性宣教師は幼稚園設立の他、保育者養成教育にも貢献した。中国の全体的な保育者養成制度が確立する以前にもかかわらず、キリスト教幼稚園の普及につれて保育者の需要も増加し、各地のキリスト教幼稚園が自分たちの手でそれぞれ保育者を養成し始めた。

キリスト教保育者養成機関の教科目は、蘇州幼稚園養成学校と福州協和幼稚師範学校の考察結果から、保育の本質・目的に関する科目、保育の内容・方法に関する科目、保育実習に関する科目、宗教科目、教養科目に分けることができる。その中で共通している科目は次の 4 項目である。

① 保育の本質・目的に関する科目：幼稚園原理、フレーベルの生涯、遊びと理論。
② 保育の内容・方法に関する科目：遊び、お絵かき、音楽、物語。
③ 宗教科目：聖書と旧約聖書の登場人物、ヨハネの福音書。
④ 教養科目

以下、キリスト教保育者養成機関の養成教育内容の特徴を挙げる。まず、フレーベルの教育思想が教授されたことである。蘇州幼稚園養成学校の卒業式では、卒業生キャンが『母の歌と愛撫の歌』を取り上げて 10 分間のトークを行っており、フレーベルの教育思想について学んだことがわかる。その内容から、キャンが、フレーベルの唱えた母親に対する教育の重要性、遊びの思想、さらには恩物を使った子どもの自発的遊びについて理解していたことが明らかになる。

次に、保育に関する専門的な科目と宗教、教養科目が講じられていた。その中で、保育に関する専門的な科目は大きな比重を占めている。また、教養科目については、理系と文系に分かれている。当時まだ統一されたカリキュラムは存在せず、それぞれの教派が重視している素養は異なっていた。

最後に、これら養成機関における教育内容の設定は、女性宣教師の訪中以前の学習歴と関係があると考えられる。例えば、福州協和幼稚師範学校で設定されていた教育内容は、同校の校長アレンの学習歴と近似している。

創設当初、女性宣教師個人の力だけではなく、幼稚園協会もキリスト教系保育者養成に大きな役割を果たした。その一例として、華中幼稚園協会をあげることができる。華中幼稚園協会は各教派の保育者養成の基準を統一した。入学資格を高校卒業に、修業年限を 2 年間と設定するなどして、保育者の専門性を確保したのであった。また、華中幼稚園協会は保育者養成を牽引する教員を確保することを勧告した。さらに、華中幼稚園協会は国際幼稚園連盟へ加盟し、それにより他の国の幼稚園とその教員養成機関の情報の取得が可能になった。他国の幼稚園事業と比較して、中国の幼稚園を改善し、より効果的な教育を提供することが

できるようになったのである。この時から、宣教の手段にすぎなかった教育、特に幼児教育は独立した専門事業としての性格を帯び始めた。いわば、宣教師らによる萌芽的な教育活動は、独立事業として開花期へと移行したのである。

清末の保姆養成教育について、制度面として「蒙養院及び家庭教育法章程」と「奏定女子師範学堂章程」という 2 つの法規の内容を検証した。1904 年には「奏定学堂章程」が制定され、中国の近代学校教育制度が始まった。「奏定学堂章程」の内容の 1 つに「蒙養院及び家庭教育法章程」がある。「蒙養院及び家庭教育法章程」の冒頭では、蒙養院は単に保育を行う場所ではなく、家庭教育を補助する機能を持っていると説明されている。また、家庭教育は女子教育も含んでおり、その内容を見ると、「良妻賢母」を養成するための教育であったことがわかる。

「蒙養院章程及家庭教育法章程」が規定していた保姆養成に関する内容は、近代的な幼稚園教育の保育項目を取り入れたが、清末における儒教主義的性格もまた顕著に有するものであった。このように、近代的学校制度の一部として、幼稚園の導入を試みる一方で、その保育者養成を担う機関は中国の女性の社会的地位の低さの影響から、むしろ保守的なままに留まる、という矛盾が生じていたのである。そのため、1904 年に清政府が構想した保育者養成制度は、近代的学校制度としては不完全なものであった。

さらに 1907 年 3 月、清政府学部（当時の日本の文科省相当）は「女子小学堂章程」と「女子師範学堂章程」を発布した。この 2 つの女学堂章程によって、女子教育が正式に国家の教育体系の一部となり、中国において官立女子学堂が開かれる契機となった。また、保姆を養成するための機関、女子師範学堂が建てられ、幼児教育人材を養成することが可能となった。しかし、女子教育制度が成立したといっても、実際には女子の自由は制限されており、社会的な地位も低く位置付けられていた。換言すれば、近代女子教育は、中国の伝統的女性観との調整の所産であり、そうした女性観を色濃く残すものであり、伝統的な「女徳」が最優先され、専門性はその一段下に置かれていた。

女子師範学堂で使われた教科書は、覃壽恭によって日本の長谷川乙彦著『新編女子用教育学』から翻訳された、『女子師範教育学』であった。そこで、「幼稚園教育法」が附編として付け加えられている。附編に恩物の形状やその遊び方が詳しく紹介されており、翻訳者は保育実践での指導方法を重視していたことがわかる。そのため、同教科書を採用していた女子師範学堂では、主に恩物の使用方法の教育に力が入れられていた。

一方、民間保姆養成機関もこの時期（20 世紀初頭）に設立され、官立の女子師範学堂と比較すると、民間保姆養成機関の方は「保育方法、ピアノ、オルガン、遊戯、手工」などの、幼児教育についての専門的な知識や実技の習得のための科目が多いことがわかる。つまり、より専門性を備えていたのは民間保姆養成機関の卒業生であった。女子師範学堂は独立した保姆養成機関ではなく、女子小学校教員の養成校でもあった。その中の保姆養成課程（蒙養院保育科）は、女子小学校教員の養成に付随する形で展開されていた。

最後に、清朝末期の中国官立保姆養成機関（女子師範学堂）をキリスト教系保育者養成機

関と比較し、それぞれの特徴として 3 点指摘できる。

第 1 に、保姆養成機関について、キリスト教系保育者養成機関は独立した教育機関であった。それに対して、中国官立保姆養成機関は独立したものではなく、女子師範学堂の一部であった。このように、当時のキリスト教系保育者養成機関に比較して、中国官立保姆養成機関の整備は遅れていた。

第 2 に、保姆養成機関のカリキュラムについて、キリスト教系保育者養成機関は基準化の動向が見られるが、まだ全国的に統一されたカリキュラムは設けられていなかった。各キリスト教系保育者養成機関では、それぞれ独自のカリキュラムが設けられていた。それに対して、中国官立保姆養成機関は最初から、「女子師範学堂章程」が制定され、統一されたカリキュラムが存在していた。

第 3 に、保姆養成機関の教育内容について、キリスト教系保育者養成機関は統一されていなかったが、基本的に保育の本質・目的に関する科目、保育の内容・方法に関する科目、保育実習に関する科目、宗教科目、教養科目が設けられていた。その中で、保育に関する内容は保育の本質・目的、保育の内容・方法、保育実習に細かく分けられ、保育の専門的知識が教えられていた。他方、中国官立保姆養成機関は女子中等教育レベルの内容、修身、教育、国文、歴史、地理、算学、格致、図画、家事、裁縫、手芸、音楽、体操が教授され、保育に関する内容は保育理論を含めず、恩物の使用方法が中心となっていた。すなわち、中国官立保姆養成機関の教育内容は実践的傾向が強かった。そして、「女徳」や「女は内を主とする」といった従来の中国の女子に対する教育内容が色濃く残されていた。

以上、キリスト教系の保育者養成機関と「日本型」の保姆養成機関について検討した。保育者養成機関で教えられた教育内容は、幼稚園の教育内容を影響すると考えられる。2 種類の保育者養成機関の特徴を明らかにすることで、中国の幼稚園教育の特徴がより明白になった。

以上、本研究では 20 世紀初頭中国における幼稚園教育の成立について、その背景と過程、制度的枠組み、さらには教育の実態の一端を考察してきた。

本研究を通して指摘できる点は、この時期の中国における幼稚園の成立の特質として、一方ではプロテスタント宣教師によるキリスト教系幼稚園の成立の流れがあり、他方では清末政府と中国人資産階級（実業家）による「日本型」幼稚園の成立の流れ、という 2 つの流れが並立していたことにあると考える。最後に、この 2 つの流れを比較して終章を終えることにしたい。比較項目は成立時期、性格、対象児、フレーベル教育思想の受容、教育内容、法的整備とし、以下の表にまとめた。

表終１　キリスト教系幼稚園と「日本型」幼稚園の対比表

	キリスト教系幼稚園	「日本型」幼稚園
成立時期	1902 年に、6 園が開園	1903 年の湖北幼稚園からスタート
性格	福祉施設から教育機関の転換	小学校の準備教育機関
対象児	初期は貧困家庭の子ども。1900 年代に入ると、対象が上層階級の家庭の子ども	当初から上層階級の子ども
フレーベル教育思想の受容	教育哲学思想や神思想を含めたフレーベルの教育理論を全面的に理解	恩物の技術的側面の受容
教育内容の特徴	生活行事と「遊び」を重視した教育内容が中心	「学習」が中心
法的整備	なし	1904 年「蒙養院及び家庭教育法章程」

まず、その成立時期について見ると、キリスト教系幼稚園は 1902 年に、既に 6 園が開園されている。それに対して、「日本型」幼稚園は 1903 年の湖北幼稚園の設立から本格的な動きが始まり、キリスト教系幼稚園の成立の方が早かったことがわかる。

次に、性格については、キリスト教系幼稚園は福祉施設から教育機関への転換があり、それに対して、「日本型」幼稚園は最初から小学校の準備教育機関の性格をもっていた。

また、対象児を見ると、キリスト教系幼稚園は、慈善事業から始まったため、初期の対象児は貧困家庭の子どもであった。1900 年代に入ると、キリスト教育の世俗化に伴い、その対象が上層階級の家庭の子どもになった。それに対して「日本型」幼稚園は、清政府が近代学校制度の一部として導入したものであり、上層階級の「蒙養教育」の影響を受け、幼稚園も上層階級に向けて設立された。そのため、対象児は当初から上層階級の子どもであった。

また、フレーベル教育思想の受容については、キリスト教宣教師は、教育哲学思想や神思想を含めたフレーベルの教育理論をほぼ全面的に認識していた。恩物についての受容もその操作方法に留まらず、遊び論全体を受容していた。それに対して、清政府は日本の幼稚園をモデルにしたものの、日本の幼稚園教育では恩物の操作が注目されていたため、中国においてもフレーベルの恩物の技術的側面の受容に留まることとなった。

さらに、実態（教育内容）の特徴として、キリスト教系幼稚園はフレーベル幼稚園の生活行事と「遊び」を重視した教育内容が中心となっていた。恩物を遊具として使わせる際にも、歌と結合させ、生活の中の事物を再現するなどの工夫がなされており、恩物の形式的な操作方法とは大きな違いがあったのである。それに対して、「日本型」幼稚園は日本の幼稚園をモデルにして、修身などを重視した伝統的な儒教思想を強く帯びながら、「学習」が主な教

育内容になっていた。また、恩物の使用方法や手順が細かく定められ、形式的な操作方法に頼る傾向にあった。

法的整備について述べると、キリスト教系幼稚園には統一された法規がなく、各教派の幼稚園にカリキュラムや管理を任せる状態にあった。それに対して、清政府は 1904 年に「蒙養院及び家庭教育法章程」を頒布し、幼稚園の教育内容や設備などは全国統一の基準によって定めていた。

最後に、今後の課題について述べたい。第一に、本研究内で達成が困難だった点としては、キリスト教系幼稚園及びキリスト教系保育者養成機関の実態に関する資料が少ないことから、福建省及び江蘇省での実態を限定的に検討せざるを得なかったことがある。今後は、中国の他地域の資料調査・収集に努め、キリスト教系幼稚園及び保育者養成機関の実態について、更なる研究を行いたい。

第二に、本研究を踏まえての発展的研究としては、考察対象の時期を民国期まで広げて、①民国政府の幼児教育政策がどのような過程を経て作成されたのか、②1922 年の「壬戌学制」の頒布後の幼稚園の普及状況、また③実際に幼稚園教育を受けた子どもの階層や家庭について検討したい。

第三に、中国の保育園「託児所」の現状を踏まえ、幼稚園と保育所の二元化問題も考察したい。

注

[1] 何暁夏『簡明中国学前教育史』、北京師範大学出版社、2014 年、44 頁。
[2] 佐藤尚子『中国ミッションスクールの研究』、龍渓書舎、2010 年、18 頁。
[3] 林楽知（ヤング・アレン）『五大洲女塾通考』第十集下巻、美華書局、1903 年、35 頁。
[4] 楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」1992 年、186 頁。

引用・参考文献一覧

※引用文献以外に参考にした文献も含む。

※中国語・日本語・英語文献を含むため、項目ごとに発行年順に並べた。

１．【資料】

◇教育史資料（出版年順）

中国基督教教育調査会『中華基督教教育事業』（1922 年）。

多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』（日本学術振興会、1972 年）。

李楚才『帝国主義侵華教育史資料―教会教育』（教育科学出版社、1987 年）。

中国学前教育史編写組『中国学前教育資料選』（人民教育出版社、1989 年）。

「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」

「湖北幼稚園開弁章程」

「湖南蒙養院教課説略」

厳仁清「回憶祖父厳修在天津創弁的幼儿園」

朱有瓛編『中国近代学制史料　第四辑』（華東師範大学出版社、1993 年）。

福建省地方志編纂委員会『福建省志・教育志』（方志出版社、1998 年）。

王寶平編『晩清中国人日本考察記集成 教育考察記』（杭州大学出版社、1999 年）。

項文瑞『遊日本学校筆記』1903 年

方燕年『瀛州観学記』1903 年

張謇『癸卯東游日記』1903 年

王景禧『日遊筆記』1904 年

漳州市地方志編纂委員会『漳州市志』（中国社会科学出版社、1999 年）。

莆田市地方志編纂委員会『莆田市志（巻 33）』（方志出版社、2001 年）。

福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編　第五巻』（福建人民出版社、2003 年）。

厦門市地方志編纂委員会『厦门市志（第四册）』（方志出版社、2004 年）。

佐藤尚子等編『中国近現代教育文献資料集　第 10 巻』（日本図書センター、2006 年）。

陳元晖『中国近代教育史資料汇编』（上海教育出版社、2007 年）。

李桂林、戚名誘、銭曼倩編『中国近代教育史资料汇编（普通教育）』（上海教育出版社、2007 年版）。

◇日本の法令関係(出版年順)

教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史　第四巻』（竜吟社、1938 年）。

外務省『欧米人ノ支那ニ於ケル主ナル文化事業』（1929 年）。

文部省教育調査部『高等女学校関係法令の沿革』（1941 年）。

◇教育家著作(出版年順)

下田歌子『家政学　上』(博文館、1893 年)。

下田歌子『家政学　下』(博文館、1893 年)。

張之洞『劝学篇· 外篇』遊学第二（1898 年)。

林楽知（ヤング・アレン)『五大洲女塾通考』第十集下巻（美華書局、1903 年)。

故下田校長先生伝記編纂所『下田歌子先生伝』(1943 年)。

舒新城『我和教育：三十五年教育生活史（1893-1928)』(中華書局出版、1945 年)。

フレーベル著、岩崎次男訳『人間の教育 1』(明治図書出版、1960 年)。

フレーベル著、岩崎次男訳『人間の教育 2』(明治図書出版、1960 年)。

王独清著　田中謙二訳『長安城中の少年　清末封建家庭に生れて』(平凡社、1965 年)。

小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集 第五巻』(玉川大学出版部、1981 年)。

李来栄「我的童年」(『科学家的童年（二)』新蕾出版社、1983 年)。

黄明同・呉熙釗『康有為早期遺稿述評』(中山大学出版社、1988 年)。

J. Ronge and B. Ronge, *A Practical Guide to the English Kindergarten*, Thoemmes Press, 1994.

張謇研究センター南通市図書館編『張謇全集 4 巻』(江蘇古籍出版社、1994 年)。

張謇研究センター南通市図書館編『張謇全集 6 巻』(江蘇古籍出版社、1994 年)。

陳鶴琴『我的半生』1941 年（陳秀雲編『陳鶴琴全集（第六巻)』江蘇教育出版社、2008 年)。

◇雑誌

・英語雑誌（出版年順）

The Chinese Recorder and Missionary Journal

Editor, “Introductory,” Jan-Feb, 1874.

Crofoot Rev J W, “A Chinese Kindergarten,” Nov, 1904.

Arnold Foster and A. S. Mann, “Educational Department,” Vol.37, Apr, 1906.

M.M.F, “our book table,” Aug, 1907.

“Arrivals,” Vol.41, Issue12, Dec, 1910.

“Kindergarten Work,” Aug, 1911.

Nevada Martin and Margarita Park, “Missionary News Kindergarten Association,” Vol.42, 1911.

“An Appeal for Kindergartens in China,” Vol.43, Oct, 1912.

Educational Review

Hannah C. Woodhull, “A Partial Report of the Kindergarten Work in Fubkien Province,” Vol.2, Aug, 1909.

“A Kindergarten Survey in China,” Vol.4, Oct, 1911.

"Constitution of the Central China Kindergarten Association," Vol.4, Oct, 1911.
Ching Leung, "Program Making in a Chinese Kindergarten," Vol.4, No.10, 1911.
Grack, "Teaching character in the kindergarten," Vol.4, Oct, 1911.
"The Central China Kindergarten Association," Vol.4, Oct, 1911.
"The Results from Questionnaires on the Kindergarten," Vol.4, Oct, 1911.
"Constitution of the Central China Kindergarten Association," Vol.4, Oct, 1911.
L. Pearl Boggs, "A Modem Interpretation of Froebel's Educational Theory," Vol.4, Oct, 1911.
Mary Sia, "Play And its Meaning," Vol.4, Oct, 1911.
Nevada Martin, "The Present Outlook for the Kindergarten in China," Vol.6, No.1, 1913.
Kate B. Hackney, "Fourth Annual Meeting of the Central China Kindergarten Association," Vol.8, Oct, 1916.

Woman's Board of Missions

Bertha H. Allen, "Union Work in Foochow Kindergarten and Training Class," *Life and Light for Woman*, Vol.149, 1919.

Teachers College Record

James Earl Russell, "Mrs. Lew Holds Important Post in China," Vol.17.

Woman's Work in the Far East

Nevada Martin, "Soochow Kindergarten Training School," 1912.

The National Review

Kiang Jitsung, "Mother Play," Vol.12, 1912.

The Missionary Herald

"Personnel of the Boards," July, 1938.

・中国語雑誌(出版年順)

秀耀春「養蒙正軌下　福若伯訓蒙法」『万国公報』122 巻、上海墨海書局、1899 年。
呉汝綸演述、大澤豊子速記「女子の教育に就て」『日本婦人』36 号、1902 年 10 月。
「日本実践女学校附属中国女子留学生師範工芸速成科規則」『東方雑誌』第 2 巻第 6 期、東方雑誌社、1905 年。

・日本語雑誌

戸野美知恵「清国経験談」国民教育学会『日本之小学教師』7 巻 80 号、1905 年 8 月。
「清国の婦人と子ども」『婦人と子ども』10 巻 6 号、フレーベル会、1910 年。
楊芳「参観蘇州慕家花園幼稚園記」『婦女雑誌』第 3 巻第 3 号、1917 年。
ピービー「幼稚園の見学」『ランバス女学院報』第 1 号、1932 年。

2.【著書】

・日本語書籍（出版年順）

多賀秋五郎『中国教育史』（岩崎書店、1955 年）。
さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版社、1960 年）。
中村義「洋務運動と改良主義」(『岩波講座世界歴史』第 22 巻、近代九「帝国主義時代」、岩波書店、1969 年)。
舒新城著・阿部洋訳『中国教育近代化論』（明治図書、1972 年）。
山本澄子『中国キリスト教史研究』（東京大学出版会、1972 年）。
梅根悟監修、斎藤秋男編著『世界教育史大系 4 中国教育史』（講談社、1975 年）。
文部省『幼稚園教育百年史』（ひかりのくに、1979 年）。
荘司雅子『フレーベル「人間教育」入門』（明治図書、1983 年）。
阿部洋「解放前の中国の幼児教育」(『世界の幼児教育 1　アジア』日本らいぶらり　1983 年)。
加地伸行『世界子どもの歴史 9　中国』（第一法規、1984 年）。
荘司雅子『フレーベルの教育学』（玉川大学出版部、1984 年）。
平塚益徳著、平塚博士記念事業会『平塚益徳著作集Ⅱ中国近代教育史』（教育開発研究所、1985 年）。
阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990 年）。
吉田寅「中国」日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』（日本キリスト教団出版局、1991 年）。
一見真理子「中国の子どもと遊び」（下山田裕彦・結城敏也 編著『遊びの思想 ： 遊び理解と人間形成 』川島書店、1991 年）。
文部省『学制百二十年史』（ぎょうせい、1992 年）。
阿部洋『中国近代学校史研究―清末における近代学校制度の成立過程―』（福村出版、1993 年）。
岩崎次男『幼児保育制度の発展と保育者養成』（玉川大学出版部、1995 年）。
汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院、1998 年）。
湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』（風間書房、2001 年）。
阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（龍渓書舎、2002 年）。
橋川喜美代『保育形態論の変遷』（春風社、2003 年）。
小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師　上巻』（キリスト新聞社、2003 年）。
柿岡玲子『明治後期幼稚園保育の展開過程』（風間書房、2005 年）。
崔淑芬『中国女子教育史―古代から 1948 年まで―』（中国書店、2007 年）。
末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009 年）。
佐藤尚子『中国ミッションスクールの研究』（龍渓書舎、2010 年）。
胡学亮『近世中日両国の民衆教育に関する比較研究―両国民衆教育普及の相違とその要

因の考察を中心に―』（早稲田大学出版部、2010 年）。
中村五六・和田實『幼児教育法』、1908 年（岡田正章監修「明治保育文献集」第九巻、2011 年）。
一見真理子「日中教育文化交流史の一断面―近代幼児教育の導入と受容をめぐって―」（『論集現代日本の教育史　3　幼児教育・障害児教育』、日本図書センター、2013 年）。
白川蓉子『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究―「遊び」と「作業」をとおしての学び―』（風間書房、2014 年）。
永井優美『近代日本保育者養成史の研究―キリスト教系保姆養成機関を中心に―』（風間書房、2016 年）。
石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷曄介・渡辺祐子『はじめての中国キリスト教史』（かんよう出版、2021 年）。
一見真理子「20 世紀初頭、海を渡った幼児教育―中国の場合―」（太田素子・湯川嘉津美編著『幼児教育史研究の新地平　上巻　―近世・近代の子育てと幼児教育―』萌文書林、2021 年）。
湯川次義『戦後教育改革と女性の大学教育の成立―共学別学の並立と特性教育の行方―』（早稲田大学出版部、2022 年）
熊田凡子『日本におけるキリスト教保育思想の継承―立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って―』（教文館、2022 年）。

・英文書籍（出版年順）

Mateer, “The Relation of Protestant Missions to Education,” *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China*, Presbyterian Mission Press, 1878.
Burton Margaret E, *The Education of Women in China*, 1885.
Annie Ryder Gracey, *Eminent Missionary Women*, Eaton & Mains, 1898.
Gerald H. Anderson, *Biographical Dictionary of Christian Missions*, Macmillan Reference USA, 1998.
Kenneth Latourette, *A History of Christian Missions in China*, Gorgias Press, 2009.
Eliza a Robert Morrison, *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison*, Vol.1, 2018.

・中国語書籍（出版年順）

顧長声『伝教師与近代中国』（上海人民出版社、1981 年）。
費正清『剣橋中国晩清史（1800-1911 年上卷）』（中国社会科学出版社、1993 年）。
劉海峯『福建教育史』（福建教育出版社、1996 年）。
何曉夏、史静寰『教会学校与中国教育近代化』(広東教育出版社、1996 年)。
熊秉真『童年憶往：中国孩子的歴史』（麦田出版、2000 年）。
王曉秋『近代中日関係史研究』（中国社会科学出版社、1997 年）。朱峰『基督教与近代中

国女子高等教育』（福建教育出版社、2002 年）。
杨宏雨『困顿与求索―20 世纪中国教育变迁的回顾与反思―』（学林出版社、2005 年）。
陳姃湲『東アジアの良妻賢母論』（勁草書房、2006 年）。
陳学恂編『中国教育史研究· 宋元分卷』（華東師範大学出版社、2009 年）。
陳学恂編『中国教育史研究・明清分卷』（華東師範大学出版社、2009 年）。
陳明霞『近代福建教会学校教育研究』（人民出版社、2012 年）。
何暁夏『簡明中国学前教育史』（北京師範大学出版社、2014 年）。
Jane Hunter、著李娟訳『優雅的福音』（三聯書店、2014 年）。
吴義雄『在宗教与世俗之间―新教伝教士在华南沿海的早期活动（1807～1851）―』（社会科学文献出版社、2022 年）。

3. **【論文】（出版年順）**

岩崎次男「幼稚園成立期のドイツの幼児学校にかんする若干の研究」（『埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）』第 23 集、1974 年）。
阿部洋･蔭山雅博･稲葉継雄「東アジアの教育近代化に果たした日本人の役割」（『日本比較教育学会紀要』、1982 年）。
木山徹哉「『解放』前中国における子ども観とその変革過程―1920 年代を中心にして―」（『日本の教育史学』27 巻、1984 年）。
全玟楽「子ども観に関する比較教育文化的考察：近世（李朝，江戸時代）儒者の子どもの遊びに対する見解を中心に」（『大阪市立大学教育学論集』16 号、1990 年）。
湯川嘉津美「二十恩物の系譜―明治初期における恩物受容をめぐって―」（『日本保育学会大会研究論文集』32-33、1990 年）。
龔書森「中国的宗教・儒教・道教」（『関西学院大学神学研究』40 号、1993 年）。
清水稔「中国留学生と日本の近代」（『佛教大学総合研究所紀要』1995 (1)、佛教大学総合研究所、1995 年）。
志賀智江「明治・大正期におけるキリスト教主義保育者養成」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第 4 巻、1996 年）。
荘司泰弘「日本へのフレーベル遊具伝達の誤り」（『人間教育の研究』第 9 号、1996 年）。
北野幸子「19・20 世紀転換期アメリカにおける保育の専門職化プロセス―国際幼稚園連盟(IKU)を中心に―」（『中国四国教育学会　教育学研究紀要』第 45 巻第 1 部、1999 年）。
酒井玲子「明治期におけるフレーベル教育論の考察」（『北星論集（文）』 第 38 号 2001 年）。
孫邦華「『萬國公報』對西方近代教育理論的介紹」（『澳門理工學報』總第 13 期第 7 卷第 1 期、2004 年）。
何京玉「清朝末期における幼稚園教員養成制度―『奏定学堂章程』及び『奏定女子師範学堂章程』の検討を中心に―」（『教育学研究紀要』51(1)、 中国四国教育学会、2005 年）。

潘静「近代中国におけるキリスト教宣教会の幼児教育活動―上海地区を中心に―」(『日本の教育史学』48 巻、2005 年)。
何京玉「中華民国期における保育者養成制度」(『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』第 55 号、2006 年)。
崔淑芬「近代中国における教会女子学校」(『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』(3)筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要編集委員会編 2008 年)。
余英時「中国人の死生観―儒教の伝統を中心に―」(『死生学研究』9 号、2008 年)。
一見真理子「中国における子ども, 子ども観, 子どもの権利」シンポジウム「世界における子ども文化の位置づけ」(『比較教育学研究 19』、1993 年)。
小玉亮子「幼児教育をめぐるポリティクス:国民国家・階層・ジェンダー」(『教育社会学研究 88(0)』、2011 年)。
徐亦猛「儒教とキリスト教―孝行観念についての考察―」(『アジア・キリスト教・多元性』第 9 号、現代キリスト教思想研究会、2011 年)。
西小路勝子「子どもに寄り添う保育実践の黎明―大阪市立愛珠幼稚園の保育記録(明治 28～40 年)からの論考―」(『保育学研究』49(1)、2011 年)。
権明愛、上垣内伸子「戸野みちゑと中国初期の幼稚園教育」(『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』第 9 巻、2011 年)。
崔淑芬「中国の女子教育思想と儒教」(『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 25 号』、2014 年)。
呉倩「20 世紀初頭における商務印書館の教科書と日本」(『アジア文化研究 別冊』(20)国際基督教大学アジア文化研究所編、2014 年)。
加藤恭子「20 世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」(『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報 (18)』、2015 年)。
韓韡「清末における下田歌子著『新選家政学』の 翻訳・出版について」(『言葉と文化』15、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、2014 年)。
史偉明「晩清女伝教士在華差伝与中国女性启蒙」(『江西師範大学学報』(哲学社会科学版)第 49 巻第 2 期、2016 年)。
石井紀子「女性宣教師と女子教育」(『立教アメリカン・スタディーズ』 2017 年)。
荘司泰弘「フレーベルのキンダーガルテンと自然保育―自然をガイドラインにした保育―」(『自然保育学研究 』1 (1)、自然保育学会、2018 年)。

4. **【博士論文】(出版年順)**

楊玉珍「中国における幼稚園教育の導入と展開―清朝末期から民国期まで―」(筑波大学博士論文、1992 年)。
渡辺祐子『近代中国におけるプロテスタント伝道 :「反発」と「受容」の諸相』(東京外国語大学博士論文、2006 年)。

金子嘉秀『明治後期の幼稚園におけるフレーベル主義をめぐる保育実践の変容に関する研究』（広島大学博士論文、2014 年）。
董秋艶『近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究』（九州大学博士論文、2014 年）。
韓韡「中国近代女子教育における日本受容」（名古屋大学博士論文、2014 年）。
姜華「高等女学校における良妻賢母教育の成立と展開―教育理念・修身教科書・学校生活の総合的研究―」（早稲田大学博士論文、2016 年）。
劉雯『東アジアにおける華人社会とキリスト教ネットワークに関する研究』（兵庫県立大学博士論文、2017 年）。

5.【その他】

・古典(出版年順)

宇野精一『新釈漢文大系 3　小学』（明治書院、1965 年）。
鈴木由次郎『全訳漢文大系第九巻　易経　上』（集英社、1974 年）。
今井清、鈴木隆一『礼記　中』（集英社、1977 年）。
今井清、鈴木隆一『礼記　下』（集英社、1977 年）。
陸世儀『論小学』（王雪梅編『蒙学要義』、山西教育出版社、1991 年）
貝塚茂樹訳注『論語』（中央公論社、1995 年）。
吉川幸次郎訳『論語』（筑摩書房、1971 年）。

・教科書(出版年順)

長谷川乙彦『新編女子用教育学』（三松堂、1903 年）。
覃壽恭『女子師範教育学』（湖北新学界書局、1906 年）。
蒋維喬・莊俞『最新国文教科書』（第二册）（商務印書館、1908 年）。

・学校沿革史(出版年順)

State Normal School Los Angeles Bulletin of Information, California State Printing Office, 1916.
Los Angeles State Normal School Bulletin, California State Printing Office, 1914.
実践女子学園八十年史編纂委員会『実践女子学園八十年史』（実践女子学園、1981 年）。
「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』（「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会、1984 年）。
実践女子学園一〇〇年史編纂委員会『実践女子学園一〇〇年史』（実践女子学園、2001 年）。

20 世紀初頭中国における幼児教育史年表（1840 年～1918 年）

年　月	中国の社会の変化・政府の政策	中国の教育界の動き（幼児教育）	キリスト教団体の活動	日本の教育の動き
1840 年 6 月 ～ 1842 年 8 月	第一次アヘン戦争、イギリス、南京条約締結		広州、福州、厦門、寧波、上海の五つの開港地で教会学校を設立	
1856 年 10 月 ～ 1860 年 10 月	第二次アヘン戦争（アロー戦争）		中国内地へ宣教、教会学校を開設	
1859 年			ウルストン姉妹、教師養成のための女子寄宿学校と児童養護施設（乳児院）を福州に設立	
1861 年～1895 年	洋務運動開始			
1867 年			『教務雑誌』の前身発行	
1874 年			福州で毓英女子寄宿学校附属保生堂幼稚園設立	
1875 年				東京女子師範学校設立
1876 年 11 月				東京女子師範学校附属幼稚園（日本の最初の公立幼稚園）開園
1877 年			第 1 回中国プロテスタント宣教師総会開設、教育の世俗化が進む	
1878 年				東京女子師範学校保姆練習科設置
1879 年				関信三、『幼稚園法

				二十遊嬉』出版
1890 年				東京女子師範学校、女子高等師範学校と改称。
1896 年				女子高等師範学校に幼稚園保姆練習科設置
1898 年	康有為、梁啓超ら資産階級維新派による戊戌変法（百日維新）制定 張之洞『勧学篇』出版		厦門に懐徳幼稚園設立	
1899 年				幼稚園保育及設備規定制定
1900 年 6 月	義和団事件			
8 月				小学校令施行規則制定
1901 年	清末新政			高等女学校令施行規則制定
1902 年		呉汝綸の日本視察 項文瑞『遊日本学校筆記』出版 欽定学堂章程の頒布	キリスト教幼稚園は 6 ヶ所あり、児童数は 194 人確認（『五大洲女塾通考』）	
1903 年		張謇『癸卯東游日記』出版 王景禧『日遊筆記』出版	小俣規義訳、「幼稚園恩物図説」（原著 :関信三『幼稚園法二十遊嬉』）出版	長谷川乙彦、『新編女子用教育学』出版
9 月		湖北幼稚園（中国最初の官立幼稚園）開園		日本人教員 3 名、戸野美知恵、丹雪枝、武井ハツの中国派遣
1904 年 1 月		「奏定学堂章程」「蒙養院及び家庭教育法章程」の頒布		

1905 年	科挙制度廃止	湖南蒙養院及び天津厳氏蒙養院設立		実践女学校、附属中国女子留学生師範速成科と工芸速成科開設 佐藤操子、春山雪子の湖南省官立蒙養院への派遣
1906 年		覃壽恭、『女子師範教育学』(原著 :長谷川乙彦『新編女子用教育学』) 出版		
1907 年		「女子小学堂章程」と「女子師範学堂章程」の頒布 全国第一次教育統計実施	雑誌 *Educational Review* 上海で創刊	
1911 年			華中幼稚園協会成立	
1910 年			蘇州幼稚園養成学校設立	
1912年	中華民国成立		ジー・ツウイーン、ザン・ツンメ、キャン・ジツン、蘇州幼稚園養成学校を卒業	
1914年			福州協和幼稚師範学校設立	
1915年			アレン、ロサンゼルス州立師範学校の幼稚園科の幼稚園教員養成コースを修了	
1918年			アレン、福州協和女子幼稚師範学校の校長就任	

謝辞

本研究に取り組み、学位論文をまとめるまでには、多くの方々の温かいご支援とご指導、そしてご配慮を賜りましたことを、深く感謝申し上げます。

特に、日本語表現に始まり、論文の書き方や研究のまとめ方、そして、ひたむきに研究に向き合う態度に至るまで、多岐にわたるアドバイスとご指導を賜りました、早稲田大学名誉教授の湯川次義先生には、言葉では表しきれないほどの感謝を捧げます。湯川先生は、教育史の初学者である筆者を温かく研究室に迎えてくださりました。ゼミの中では、湯川先生のご慧眼と専門知識からは多くを学ばせていただきました。また、筆者が日本語を母国語としていないこともあり、博士論文の執筆には困難を伴いましたが、湯川先生には、ご多忙中にもかかわらず筆者の論文を幾度となくご精読いただくとともに、きめ細やかな校正指導をしていただきました。さらに、長時間にわたるディスカッションや対面・Zoom ミーティングを通じて、筆者の研究を導いていただいたことにつきましても、心から感謝しています。学位論文の提出期限に追われる中で、心配と不安を覚えることもありましたが、湯川先生からの激励と支えのおかげで、論文執筆に前向きに取り組むことができました。先生との出会いがなければ、この学位論文の完成は実現できなかったと思っています。心よりの感謝と尊敬の意を表します。

加えまして、本論文の主査を快くお引き受けいただいた、早稲田大学教育・総合科学学術院教授の藤井千春先生にも深く感謝申し上げます。藤井先生には、博士課程 1 年生の複合履修の時からゼミに参加させていただき、湯川先生がご退職された際には、快く藤井ゼミに受け入れていただきました。教育哲学及び教育実践について研究する方々の発表や、それに対する先生のご指導を拝聴することができ、教育史とは異なった角度から教育について考える貴重な機会になりました。

さらに、本論文の副査としてご協力いただいた早稲田大学教育・総合科学学術院教授の三上敦史先生と、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所の客員研究員である一見真理子先生にも感謝申し上げます。三上敦史先生には、論文の表現に関する多くの貴重なコメントと有益なアドバイスをいただきました。一見真理子先生にはお忙しいスケジュールの中、論文を丁寧にお読みいただき、専門家としての見地から中国の幼児教育に関する貴重なご意見を提供していただきました。一見先生のご研究には、今回の研究を含め、常に刺激をいただいています。先生方の手厚いご指導に重ねてお礼を申し上げます。

また、ゼミの大先輩であり、職場の上司でもいらっしゃる淑徳大学の江津和也先生、保育実習指導の先生方には格別のご配慮をいただきました。心よりお礼を申し上げます。そのうえ、ご多用中にもかかわらず、文章の校正や論理構成の検討を行い、様々な助言・励ましのお言葉を与えてくださった、湯川ゼミの先輩の方々、愛知みずほ大学の梅本大介先生、有明教育芸術短期大学の山本剛先生、貞静学園短期大学の姜華先生、早稲田大学大学史資料センター・早稲田大学大学非常勤講師の雨宮和輝先生、上越教育大学学校教員養成・研修高度化

センターの長谷川鷹士先生、加えて、湯川ゼミの同期兼元小田原短期大学の阿部アサミ先生、藤井ゼミの同期で、早稲田大学教育・総合科学学術院助手の定方太希先生にも深く感謝を申し上げます。

そして、幼児教育に関して多くを学ばせていただいた白梅学園大学名誉教授の松本園子先生、ムクロジの会の先生方に感謝を申し上げます。また、出身大学の厦門大学外文学院の郭穎先生にも常に励ましのお言葉をいただきました。誠にありがとうございました。

最後に、ここに至るまでの間、筆者の成長を温かく見守り、経済的にも精神的にも筆者を支え励まし続けてくれた父の聶星と母の万暁蘭に心からの感謝を捧げます。

2023 年 9 月

聶晶晶